

京都大学構内遺跡調査研究年報

2013年度

京都大学文化財総合研究センター

卷首図版



京都大学吉田南構内A N21区 吉田二本松 8号墳出土の埴輪

京都大学構内遺跡調査研究年報

2013年度

京都大学文化財総合研究センター

序

本年報は、2013年度に文化財総合研究センターがおこなった、京都大学構内に残る遺跡の発掘調査のうち整理の終了したものについて、その成果をまとめたものである。本年度は、発掘調査の件数が9件と例年になく多く、前年度から継続しておこなった資料整理2件とあわせて多忙な年度となった。整理が終了し、ここに報告する6件の発掘調査は、北部構内、本部構内、吉田南構内、医学部構内がいずれも1件、病院構内が2件であり、吉田キャンパス全域にわたる報告となっている。とりわけ注目される成果として、吉田南構内の調査で、古墳時代中期の方形墳が2基見付き、古墳を画する溝から円筒埴輪や形象埴輪が多数見つかったこと、本部構内の調査で、地表下3m近い深さから鬼界アカホヤ火山灰を含む地層が発見されたことがあげられる。こうした成果以外にも、先史時代から近世にいたる多様な遺跡が見つかり、鴨東の地域史を明らかにするうえで重要な資料となっている。ご高覧いただき、ご批評いただければ幸いである。

京都大学吉田キャンパスは、ほぼその全域が周知の埋蔵文化財包蔵地となっており、当センターでは、その調査・分析から保存・活用に至るまで、総合的な研究を実践している。当センターの前身である埋蔵文化財研究センターの時代から数えると、すでに35年以上にわたって100,000㎡におよぶ埋蔵文化財の調査を実施している。これに伴ない、膨大な発掘情報が蓄積され、またそうした情報を利用した研究成果も積み重ねてきた。

発掘情報は、調査時の現地説明会やホームページ、尊攘堂での資料展示などを通して、一般の人に広く知ってもらえるように努めており、本年報もその一端を担っている。これに加えて、本年2月18日～4月19日まで、本学総合博物館と連携して「文化財発掘－京大キャンパス出土の埴輪－」という特別展を総合博物館で開催している。発掘情報とそれにもとづく研究成果を広く社会に発信し、地域における文化財の研究・活用を先導していく試みの一環である。総合大学としての利点を生かして、調査・研究面だけでなく、文化財の活用という面でも、学内各研究科・研究所のご協力をお願いしたい。

学内におけるこうした発掘調査を円滑に進めるにあたっては、施設部をはじめとした関連部局からの多大なご協力が不可欠である。関係各位に厚くお礼申し上げますとともに、今後ともご支援ご協力をお願い申し上げます次第である。

2015年3月

京都大学文化財総合研究センター長
吉川真司

例 言

- 1 本年報は、京都大学構内で2013年4月1日から2014年3月31日までに発掘、整理作業をおこなった埋蔵文化財調査と保存の報告、および京都大学文化財総合研究センターにおける研究成果をまとめたものである。
- 2 国土座標にしたがって一辺50mの方形の地区割りをして、遺跡の位置を表示した。
- 3 層位と遺構の位置については、国土座標第Ⅵ座標系（日本測地系、 $x = -108,000$
 $y = -20,000$ ）が（ $X = 2,000$ $Y = 2,000$ ）となる京都大学構内座標により表示した。
- 4 遺構の略号は、奈良文化財研究所の方式にしたがって、井戸：SE，土坑：SKのように表示し、各調査ごとに通し番号を1から付した。
- 5 遺物には、遺跡の調査名を示すローマ数字と、調査ごとの通し番号を1から付した。この遺物番号は、本文、実測図、写真を通じて表示を統一した。
Ⅰ：京都大学吉田南構内AN21区の発掘調査
Ⅱ：京都大学病院構内AF17区の発掘調査
Ⅲ：京都大学病院構内AH13区の発掘調査
Ⅳ：自家発電設備設置にかかわる発掘調査および立合調査
（例 Ⅰ1：京都大学吉田南構内AN21区出土遺物1番）
- 6 原則として、遺物の実測図は縮尺1/4、遺物の写真は約1/2に統一した。他の縮尺のもの、それぞれに縮尺を明記した。
- 7 参考文献は、本文中に〔著者名 発表年〕の形式で表わし、巻末に一括した。
- 8 古代・中世土師器の型式分類は、とくにことわりがない場合、『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ』（1981年）にしたがっている。
- 9 本文の執筆者名は各章の初めに列記した。また、遺物の撮影は、それぞれ報告者が担当した。なお、巻首図版、図版17、図版18（I40）、図版19～24は寿福滋氏の撮影写真を使用させていただいた。
- 10 編集は、内記理が担当し、千葉豊、伊藤淳史、富井眞、笹川尚紀、磯谷敦子、柴垣理恵子、長尾玲、藤森良祐が協力した。

京都大学構内遺跡調査研究年報 2013年度

目 次

第1章	2013年度京都大学構内遺跡調査の概要	1
1	調査の経過	1
2	調査の成果	2
第2章	京都大学吉田南構内A N21区の発掘調査	5
1	調査の概要	5
2	層 位	6
3	縄文時代の遺跡	10
4	弥生時代の遺跡	13
5	古墳時代～古代の遺跡	25
6	中世の遺跡	56
7	近世の遺跡	112
8	小 結	114
第3章	京都大学病院構内A F17区の発掘調査	123
1	調査の概要	123
2	層 位	124
3	近世・近代の遺構と遺物	129
4	小 結	153
第4章	京都大学病院構内A H13区の発掘調査	157
1	調査の概要	157
2	層 位	158
3	遺 構	158
4	出土遺物	170
5	小 結	202

第5章 自家発電設備設置にかかわる発掘調査および立合調査	203
1 本部構内A Z30区の発掘調査	203
2 医学部構内における調査	209
3 北部構内B A28区の発掘調査	221
4 北部構内の立合調査	226
参 考 文 献	227
京都大学構内遺跡調査要項	231
報 告 書 抄 録	240
図 版	巻末

図 版 目 次

巻首図版 京都大学吉田南構内A N21区 吉田二本松8号墳出土の埴輪

図版 1 京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点

図版 2 京都大学吉田南構内A N21区

1 暗茶褐色砂質土掘削後の全景（東から）

2 灰色粘質土掘削後の全景（東から）

図版 3 京都大学吉田南構内A N21区

1 黄色砂除去後の全景（東から） 2 茶褐色土掘削後の全景（北から）

図版 4 京都大学吉田南構内A N21区

1 中世遺構埋土の堆積層の乱れ（北から）

2 南壁東辺の地層変形（南から）

3 黄色砂下部の弥生土器出土状況（北から）

4 調査区西南辺の噴砂（南から）

5 調査区東南辺の噴砂と地層変形（東から）

6 調査区西壁の地層変形（東から）

図版 5 京都大学吉田南構内A N21区

1 S X48（南から）

2 方形周溝墓の弥生土器出土状況（南西から）

3 方形周溝墓の弥生土器出土状況（北から）

4 方形周溝墓の弥生土器出土状況（北から）

5 S D15の弥生土器出土状況（南西から）

6 東南隅の弥生土器出土状況（北から）

図版 6 京都大学吉田南構内A N21区

1 8号墳の検出状況（東から）

2 8号墳東周溝の埴輪出土状況（北から）

3 8号墳南周溝の埴輪出土状況（東から）

図版 7 京都大学吉田南構内A N21区

1 8号墳東周溝の遺物出土状況（西から）

2 8号墳東周溝の遺物出土状況（北から）

- 3 8号墳東周溝の遺物出土状況（西から）
- 4 8号墳東周溝の遺物出土状況（北から）
- 5 8号墳南周溝の赤色顔料出土状況（西から）
- 6 8号墳南周溝の遺物出土状況（西から）

図版8 京都大学吉田南構内A N21区

- 1 8号墳東周溝の断面（北から）
- 2 8号墳南周溝の家形埴輪出土状況（北から）
- 3 8号墳南周溝の家形埴輪出土状況（北から）
- 4 8号墳南周溝の円筒埴輪出土状況（北から）
- 5 8号墳東周溝南辺の埴輪出土状況（南から）
- 6 8号墳東周溝の円筒埴輪出土状況（東から）

図版9 京都大学吉田南構内A N21区

- 1 9号墳の検出状況（東から）
- 2 9号墳北周溝の層位（東から）
- 3 9号墳北周溝の遺物出土状況（南から）
- 4 9号墳北周溝の遺物出土状況（北から）
- 5 9号墳北周溝の遺物出土状況（南から）
- 6 9号墳北周溝の遺物出土状況（南から）

図版10 京都大学吉田南構内A N21区

- 1 井戸S E 11（南西から）
- 2 土器溜S X 46（東から）
- 3 溝S D 2（北から）
- 4 井戸S E 1（西から）
- 5 井戸S E 7（東から）
- 6 土器溜S X 1（北から）

図版11 京都大学吉田南構内A N21区

- 1 土器溜S X 2（南から）
- 2 土器溜S X 11（西から）
- 3 土器溜S X 30（西から）
- 4 土器溜S X 36（南から）
- 5 陶器溜S X 17（南から）
- 6 陶器溜S X 20（西から）

図版12 京都大学吉田南構内A N21区

- 1 土器溜S X 28（北から）
- 2 土器溜S X 34（西から）
- 3 土器溜S X 41（東から）

- 図版13 京都大学吉田南構内A N21区
 1 陶器溜S X10 (南から) 2 S X13埋甕・土器溜 (南から)
 3 S X13埋甕 (東から)
- 図版14 京都大学吉田南構内A N21区
 1 S X13埋甕・石敷 (東から) 2 集石S X21 (西から)
- 図版15 京都大学吉田南構内A N21区
 縄文土器
- 図版16 京都大学吉田南構内A N21区
 弥生土器
- 図版17 京都大学吉田南構内A N21区
 8号墳出土土器 (1)
- 図版18 京都大学吉田南構内A N21区
 8号墳出土土器 (2)
- 図版19 京都大学吉田南構内A N21区
 8号墳出土埴輪 (1)
- 図版20 京都大学吉田南構内A N21区
 8号墳出土埴輪 (2)
- 図版21 京都大学吉田南構内A N21区
 8号墳出土埴輪 (3)
- 図版22 京都大学吉田南構内A N21区
 8号墳出土埴輪 (4)
- 図版23 京都大学吉田南構内A N21区
 1 8号墳出土埴輪 (5) 2 8号墳円筒埴輪細部
- 図版24 京都大学吉田南構内A N21区
 8号墳形象埴輪細部
- 図版25 京都大学吉田南構内A N21区
 9号墳出土土器
- 図版26 京都大学吉田南構内A N21区
 8・9号墳出土鉄器

- 図版27 京都大学吉田南構内A N21区
S E 9 出土遺物, S E 7 出土遺物
- 図版28 京都大学吉田南構内A N21区
S X24出土遺物, 茶褐色土落ち込み出土遺物, 茶褐色土出土遺物
- 図版29 京都大学吉田南構内A N21区
軒丸瓦
- 図版30 京都大学吉田南構内A N21区
軒丸瓦, 軒平瓦
- 図版31 京都大学病院構内A F17区
1 表土除去後全景 (北から) 2 X=870東西畔の層位 (南から)
3 黒灰色土Ⅱ掘削後全景 (北から) 4 溝S D128 (西から)
5 井戸S E 1 (北から) 6 土坑S E 2 (東から)
- 図版32 京都大学病院構内A F17区
1 井戸S E 3 (北から) 2 井戸S E 3出土の木桶 (南から)
3 胞衣壺S X 3・4 (東から) 4 井戸S E 8 (西から)
5 瓦溜S X13 (東から) 6 土器溜S X11 (北から)
- 図版33 京都大学病院構内A H13区
1 灰褐色土上面, 調査区全景 (北から)
2 淡褐色土上面, 調査区全景 (北から)
- 図版34 京都大学病院構内A H13区
1 S R 1 上層, S D 3 上層掘削後 (東から)
2 S F 2 石列・S F 3 (東から)
3 S D27検出状況 (西から)
- 図版35 京都大学病院構内A H13区
1 井戸S E 1 (東から) 2 井戸S E 1 細部 (東から)
3 野壺S E 2 (南から) 4 溝S D 1・S D 2 (南から)
5 溝S D 5 下層上面の集石 6 水路S R 1 南旧盛土基底部集石
- 図版36 京都大学病院構内A H13区
道路S F 2 出土遺物

図版37 京都大学本部構内A Z 30区

- 1 黒褐色土上面（東から） 2 集石S X 1（東から）

図版38 京都大学医学部構内A O 20区

- 1 調査区北半掘りあげ後全景（西から）
2 調査区南半掘りあげ後全景（西から）
3 S E 1 底面柱穴検出状況（北から）
4 S E 2 井筒確認状況（北から）
5 調査区北壁集石S X 1（南から）
6 調査区北壁土器溜S X 2（南から）

図版39 京都大学北部構内B A 28区

- 1 東調査区，表土掘削後全景（西から）
2 西調査区，表土掘削後全景（東から）
3 西調査区，黄砂上面検出の集石（西から）
4 西調査区，黄砂掘削後全景（東から）
5 東調査区出土遺物・西調査区出土遺物

挿 図 目 次

吉田南構内A N21区の発掘調査	(第3次取り上げ時) ……………41
図1 調査区西壁の層位……………7	図20 9号墳北周溝の遺物出土状況と 層位……………44
図2 調査区南壁の層位……………8	図21 8号墳出土遺物……………46
図3 暗茶褐色砂質土掘削後の平面…11	図22 8号墳出土人物埴輪……………48
図4 灰色粘質土掘削後の平面…………12	図23 8号墳出土馬形埴輪……………49
図5 縄文時代の土器……………14	図24 8号墳出土家形埴輪……………51
図6 黄色砂除去後の旧地形……………15	図25 8号墳出土家形埴輪と円筒埴輪 ……………52
図7 黄色砂上面の弥生～古代の遺構 ……………17	図26 8号墳出土円筒埴輪……………54
図8 方形周溝墓の弥生土器出土状況 ……………18	図27 9号墳出土遺物……………55
図9 溝SD15の弥生土器出土状況…19	図28 中世の遺構……………57
図10 弥生時代前期の土器と前期末 ～中期初頭の土器……………22	図29 SX13埋甕および石敷……………61
図11 弥生時代中期の土器(1)……………24	図30 SX13埋甕および土器溜……………62
図12 弥生時代中期の土器(2)……………26	図31 SD4出土遺物……………65
図13 8号墳の周溝の層位……………28	図32 SE9, SE11出土遺物……………66
図14 8号墳東周溝の須恵器蓋杯の 出土状況……………30	図33 SK1, SK2, SK3, SK10, SK11出土遺物……………67
図15 8号墳南周溝の赤色顔料と 土師器の出土状況……………32	図34 SX4, SX42, SX43, SX44 出土遺物, SX46出土遺物(1)…68
図16 8号墳南周溝の土師器の出土状況 ……………32	図35 SX46出土遺物(2), SX45出土遺物……………69
図17 8号墳南周溝の埴輪の分布 (第1次取り上げ時) ……………34	図36 SD2出土遺物……………71
図18 8号墳南周溝の埴輪の分布 (第2次取り上げ時) ……………38	図37 SD6, SD7, SD10, SD11, SD12出土遺物……………72
図19 8号墳南周溝の埴輪の分布	図38 SE1木枠内, SE1石組内, SE1掘形, SE7木枠内, SE7石組内,

	S E 7 掘形出土遺物……………73	図58 錢貨(1) ……………103
図39	S K 5, S K 7, S K 9 出土遺物 ……………75	図59 錢貨(2) ……………105
図40	S X 1 出土遺物, S X 2 出土遺物(1)……………77	図60 錢貨(3) ……………106
図41	S X 2 出土遺物(2), S X 3, S X 5, S X 6 出土遺物……………79	図61 軒丸瓦 ……………108
図42	S X 11, S X 22, S X 23出土遺物……………80	図62 軒平瓦 ……………109
図43	S X 28, S X 30出土遺物……………82	図63 丸瓦・塼 ……………110
図44	S X 32, S X 34出土遺物……………83	図64 平瓦 ……………111
図45	S X 36, S X 37, S X 41出土遺物 ……………85	図65 近世の遺構 ……………113
図46	S X 10, S X 12, S X 15出土遺物 ……………86	図66 近世の印 ……………114
図47	S X 17出土遺物, S X 20出土遺物(1)……………87	
図48	S X 20出土遺物(2), S X 35出土遺物……………89	病院構内 A F 17区の発掘調査
図49	S X 24出土遺物……………90	図67 調査区東西畔 (X = 870) の層位 ……………125
図50	S X 13石敷, S X 13土師器溜出土 遺物, S X 13埋甕……………91	図68 調査区東西畔 (X = 860) の層位 ……………126
図51	S X 21, S X 14, S X 40出土遺物 ……………93	図69 黒褐色土掘削中・黒灰色土 I 掘削 後の検出遺構 ……………130
図52	ピット出土遺物……………95	図70 黒褐色土・黒灰色土 II 掘削後の 検出遺構 ……………131
図53	茶褐色土落ち込み出土遺物(1)…97	図71 淡褐色土掘削後の検出遺構 …134
図54	茶褐色土落ち込み出土遺物(2)…98	図72 S D 128出土遺物(1)……………138
図55	茶褐色土落ち込み出土遺物(3)…99	図73 S D 128出土遺物(2)……………139
図56	茶褐色土出土遺物(1) ……………101	図74 S E 1, S E 2 出土遺物 ……141
図57	茶褐色土出土遺物(2) ……………102	図75 S E 3 出土遺物 ……………143
		図76 S E 9, S X 1, S X 1 周辺, S X 2, S X 3, S X 4, S X 6, S K 8, S K 9 出土遺物 ……145
		図77 S E 8, S X 13, S K 1, S K 4 出土遺物 ……………147
		図78 S X 11, 砂礫上面,

黒灰色土出土遺物	149	図100 S X 1 出土遺物(1)	191
図79 近世遺構出土瓦	151	図101 S X 1 出土遺物(2)	192
病院構内 A H 13 区の発掘調査			
図80 調査区南北畦の層位	159	図102 S X 1 出土遺物(3), S K 2, S E 1 出土遺物	193
図81 I 期(古段階)の遺構	161	図103 砂礫, 灰褐色砂質土出土遺物, 淡褐色土出土遺物(1)	195
図82 I 期(新段階)の遺構	162	図104 淡褐色土出土遺物(2), 淡褐色土上面, 灰褐色土, 灰褐色土上面出土遺物	196
図83 II 期の遺構	165	図105 黒褐色土出土遺物	197
図84 III 期の遺構	167	図106 瓦類(1)	198
図85 井戸 S E 1	169	図107 瓦類(2)	199
図86 S F 2 出土遺物(1)	171	図108 土製品(1)	200
図87 S F 2 出土遺物(2), S D 26 出土遺物	172	図109 土製品(2)	201
図88 S F 3, S E 6, S E 7 出土遺物	173	本部構内 A Z 30 区の発掘調査	
図89 S R 1 北盛土出土遺物	175	図110 調査区南東部東西畔(上)および 北西部北壁(下)の層位	204
図90 S R 1 南旧盛土, S R 1 南旧盛土 出土遺物	177	図111 中世の遺構	296
図91 S R 1 埋土出土遺物(1)	178	図112 黒色土, 茶褐色土, 茶褐色土落ち込み, 灰褐色土, 表土・攪乱出土遺物	207
図92 S R 1 埋土出土遺物(2)	179	医学部構内における調査	
図93 S D 3 上層, S D 3 上層, S D 3 上面出土遺物	182	図113 医学部・病院構内 関連調査地点の位置	210
図94 S D 5 下層, S D 5 上層, S D 13, S X 3 出土遺物	183	図114 G 9 地点北壁の層位	212
図95 S X 2 出土遺物(1)	185	図115 調査区検出の遺構	213
図96 S X 2 出土遺物(2)	186	図116 縄文土器, 古代の土師器, 古代の須恵器, 緑釉陶器	215
図97 S X 2 出土遺物(3)	187		
図98 S X 2 出土遺物(4)	188		
図99 S X 2 出土遺物(5), S D 1, S D 2 出土遺物	189		

図117	S E 1 出土遺物	216
図118	S E 2, S D 1, S P 4, S P 6, S X 2 出土遺物	217
図119	茶褐色土出土遺物	218

北部構内 B A 28 区の発掘調査

図120	調査区の位置	221
------	--------	-----

図121	層 位	222
図122	検出遺構	223
図123	出土遺物	225

北部構内の立合調査

図124	422地点, 423地点の柱状層位	226
------	-------------------	-----

表 目 次

表 1	京都大学構内遺跡の おもな調査	232
-----	--------------------	-----

京都大学構内遺跡調査研究年報 2013年度

- 第1章 2013年度京都大学構内遺跡調査の概要
- 第2章 京都大学吉田南構内 A N 21 区の発掘調査
- 第3章 京都大学病院構内 A F 17 区の発掘調査
- 第4章 京都大学病院構内 A H 13 区の発掘調査
- 第5章 自家発電設備設置にかかわる発掘調査および立合調査

第1章 2013年度京都大学構内遺跡調査の概要

吉川真司 千葉 豊 内記 理

1 調査の経過

京都大学文化財総合研究センターは、吉田キャンパスおよび附属施設の敷地内における建物の新営やそのほかの掘削工事に際し、予定地の埋蔵文化財調査を、既知の遺跡との関係や過去の調査結果により、発掘・試掘・立合にわけて実施している。2013年度には、以下のように発掘調査9件、立合調査21件を実施した（括弧内は図版1および表1の地点番号）。

発掘調査	自家発電設備新営（本部構内A Z 30区）	（第5章，図版1 - 397）
	総合先端基盤研究棟新営（病院構内A H13区）	（第4章，図版1 - 398）
	京都大学（中央）学生寄宿舍吉田寮新棟新営（吉田南構内A M21区）	（整理中，図版1 - 399）
	自家発電設備新営（医学部構内A O20区）	（第5章，図版1 - 400）
	京都大学学生集会所新営（吉田南構内A M21区）	（整理中，図版1 - 401）
	自家発電設備新営（北部構内B F 32区）	（整理中，図版1 - 402）
	自家発電設備新営（本部構内A T 21区）	（整理中，図版1 - 403）
	国際科学イノベーション拠点施設新営（本部構内A U 28区）	（整理中，図版1 - 404）
	自家発電設備新営（北部構内B A 28区）	（第5章，図版1 - 405）
立合調査	自家発電設備等設置工事（学術情報メディア北館）（本部構内A Z 30区）	（第1章，図版1 - 406）
	国際科学イノベーション機械設備工事（本部構内A V 27区）	（第1章，図版1 - 407）
	国際科学イノベーション電気設備工事（本部構内A U 27区）	（第1章，図版1 - 408）
	総合研究棟（旧医学部F棟）改修その他工事（医学部構内A P 20区）	（第1章，図版1 - 409）
	学術情報メディアセンター北館改修電気設備工事（本部構内A Y 30区）	（第1章，図版1 - 410）
	総合研究棟（旧総合解剖センター）改修その他工事（医学部構内A P 20区）	（第1章，図版1 - 411）
	自家発電設備新営（医学部構内A L 17区）	（第5章，図版1 - 412）
	自家発電設備新営（医学部構内A N 17区）	（第5章，図版1 - 413）
	高圧受変動設備等工事（北部構内B G 36区）	（第1章，図版1 - 414）
	給水センター・薬草園等移設工事（病院構内A I 12区）	（第1章，図版1 - 415）
	吉田食堂厨房排水除害施設にかかわる工事（吉田南構内A P 21区）	（第1章，図版1 - 416）

2013年度京都大学構内遺跡調査の概要

高圧受変動設備等工事（北部構内B K30区）	（第1章, 図版1 - 417）
自家発電設備新営（医学部構内A M20区）	（第5章, 図版1 - 418）
自家発電設備新営（病院構内A G11区）	（第5章, 図版1 - 419）
自家発電設備新営（病院構内A J14区）	（第5章, 図版1 - 420）
合宿型研修施設（Ⅱ期）新営その他工事（医学部構内A P16区）	（第1章, 図版1 - 421）
自家発電設備新営（北部構内B G32区）	（第5章, 図版1 - 422）
自家発電設備新営（北部構内B B30区）	（第5章, 図版1 - 423）
自家発電設備新営（医学部構内A P20区）	（第5章, 図版1 - 424）
屋外污水管改修工事（医学部構内A P17区）	（第1章, 図版1 - 425）
本部構内街灯工事（本部構内A Z30区）	（第1章, 図版1 - 426）
資料整理 国際人材交流拠点新営（吉田南構内A N21区）	（第2章, 図版1 - 378）
総合高度先端医療病棟新営（病院構内A F17区）	（第3章, 図版1 - 385）

2 調査の成果

前節で掲げた調査のうち、2013年度に整理を終えたものについて、その成果を略述する。なお、吉田南構内A N21区、病院構内A F17区、病院構内A H13区の発掘調査については、それぞれ第2章～第4章において、また、本部構内A Z30区、医学部構内A O20区、北部構内B A28区の発掘調査については、第5章において、その成果を詳述しているので参照されたい。

吉田南構内A N21区 調査地点は、吉田南構内の西南部にあり、吉田二本松町遺跡に含まれる。白川扇状地の西縁部に立地する。調査の結果、時代ごとに以下のことが明らかになった。まず、縄文時代については、晩期中葉の土器1個体分の破片集中部が確認された。また、弥生時代については、中期後半の方形周溝墓1基が検出された。そして、古墳時代については、埴輪をともなう古墳を含む、中期の方形墳2基が見つかった。また、中世については、南北にはしる溝群・井戸・水溜・土坑・埋甕・土器溜・陶器溜・石室の可能性のある集石などが検出された。そして、近世については、農作業にかかわる杭群が確認された。

本調査で特筆すべき点は、今回検出された古墳時代の8号墳が、これまでに周辺で見つかった7基の方形墳に比べて、規模が大きい点である。多数の埴輪が出土した点にも注目される。朝顔形埴輪を含む多数の円筒埴輪のほか、人物埴輪・馬形埴輪・家形埴輪の各1点からなる形象埴輪が見つかった。他の古墳とは、明らかに位置づけが異なることがみてとれよう。

調査の成果

もう1点注目すべき点は、中世の遺物の出土状況である。中世1期の、水溜と考えられる遺構S E 9からは、めずらしい物品である華南三彩盤が出土した。また、多数の遺構から乙訓地域で産出された土師器がみつかった。一方、中世2期の土器溜には、土師器のなかに、灯火のためのものが少なくとも1つは含まれていた。夜間に飲食がおこなわれ、終了とともに飲食に用いられた土師器がまとめて廃棄されたと想定される。中世の吉田地域には、多数の貴族の邸宅が営まれていたと考えられる。今回の調査地点にも、いずれかの貴族の邸宅が存在していた可能性が高い。

病院構内A F 17区 調査地点は、病院東構内の西南隅に位置し、聖護院川原町遺跡に含まれる。調査の結果、調査区の半分程度が攪乱されていたことがわかった。また、調査の最中に、汚染土壌がみつかったが、その除去作業により失われた情報も多い。しかし、東北辺と西辺では、近世後半の遺物包含層が2枚残存することが確認された。そこからは、畑境の段差・区画溝・井戸・鋤溝・杭群などが検出された。中世以前の遺物包含層は残存していなかったが、混礫砂層やシルト層から、まれに中世や古代の土器片がみつかった。本調査地点は、鎌倉時代までは、後背湿地のような淀んだ水域だったようである。中世末期になると、湿地の干拓化が進められ、耕作地が形成されたようである。そして、近世には安定的な環境下で、田畑が営まれた。ただし、調査区西辺においては、近世後半から明治初期にかけての石組み井戸等の居住域を想像させる遺構や土器溜などが確認された。埧塙の破片や、赤色の顔料にかかわる金属水銀が出土した点を考えあわせると、本調査地点が、19世紀に富岡鉄斎が描いた絵図にあらわれる画家・小田海仙の居住域の縁辺部に相当する可能性が高い。

病院構内A H 13区 調査地点は、病院西構内に位置し、聖護院川原町遺跡に含まれる。鴨川から約200mの地点である。調査の結果、近世の水路・道路・溝・小穴などが検出された。また、近世の土器・陶磁器類を中心に、多量の遺物が出土した。本調査の成果のなかで、重要な点は2点ある。1点目は、近世における聖護院村と吉田村の境界のあり方が、時代とともに変化したことが明らかになった点である。まず、17世紀前半に境界を示す道路が設置された。そして、17世紀後半には、水路が構築された。18世紀中頃までには、道路の位置が水路の北側に移された。19世紀中葉頃には、洪水によって水路が埋まったと考えられる。もう1点は、幕末期に、本調査地点が整地された可能性が高いことが示された点である。幕末にこの地点に設置された練兵場とのかかわりが想定される。

自家発電設備新営にかかわる調査 本年度には、大学構内の14地点で自家発電設備の

設置が計画され、発掘調査と立合調査がおこなわれた。以下に、発掘調査された地点のなかで、とくに重要な知見をもたらした地点について略述する。

本部構内A Z30区の調査地点は、本部構内の東北部に位置し、吉田本町遺跡に含まれる。縄文時代から江戸時代にかけての遺物が出土した。特筆すべき点は、層位のなかで、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）の堆積が確認されたことである。また、火山灰層よりも古い土層からは、1点の土器片が出土した。縄文時代早期の遺物である可能性が高い。

医学部構内A O20区の調査地点は、医学部構内の東辺に位置し、吉田橋町遺跡に含まれる。表土の直下で、黄褐色粘土層の上面が検出され、遺物包含層の多くが削平されていた状況が明らかになった。しかし、調査地点の北半では、中世の井戸状の遺構などの深い掘込みの下部が残存していた。本調査地点の南方にある134・248地点や、北方にある74地点で確認された、砂や粘土を採取した遺構とみられる不定形の掘込みは、本調査地点では検出されなかった。中世後半の土器類を中心に、縄文時代から中世にかけての遺物が出土した。

北部構内B A28区の調査地点は、北部構内の西南隅に位置し、北白川追分町遺跡の西端にあたる。調査の結果、周辺の調査地点でも確認されていた、弥生前期の地表面が改めて確認された。また、北方の208地点で検出されていた平安時代以前に遡る流路の南延長が検出された。最も重要な点は、幕末期の土地利用について明らかになったことである。208地点の南端では、土佐藩邸の堀跡がみつかったが、そのすぐ南にある本調査地点では、耕土層の広がり確認された。これはつまり、当時、藩邸の堀と今出川通りの間に耕作地が広がっていたことを示す。出土遺物は、ほとんどが近世の土器・陶磁器であった。

京都大学構内における立合調査 発掘調査以外にも、本年度は多数の立合調査がおこなわれた。それぞれの地点で、各時期の遺物包含層の広がり確認された。なかでも、病院構内A I12区（415地点）で確認された近世の道路・溝は、東方の398地点で検出されたものの延長と考えられ、重要である。また、吉田南構内A P21区（416地点）では、平安時代～室町時代を中心とする時期の包含層が良好に遺存しており、溝とみられる落込みや陶器甕の一括出土など、多数の遺物が出土した。古墳時代の方墳や平安時代の梵鐘鑄造遺構をはじめ、各時期の遺構が濃密に確認されている111地点に西接する位置にあたり、密度の濃い遺構群が西方にも広がっている状況があらためて確認されたといえる。

第2章 京都大学吉田南構内AN21区の発掘調査

富井 眞 笹川尚紀 伊藤淳史

1 調査の概要

本調査区は、京都大学吉田南構内の西南部に位置し、白川扇状地の西縁部に立地する（図版1-378）。そして吉田二本松町遺跡に含まれる。この地点に国際交流会館の新設が計画されたため、周辺地点の既往の調査成果を勘案して、建設予定地の発掘調査を2011年5月16日～11月16日に実施した。調査面積は1700㎡である。

近接する地点では、縄文時代に関しては、7・261地点で高野川の側方浸食を受けた段差の西側で早期や後期の土器がまとまって出土しており、西方の248地点では、その浸食を免れた前期頃の流路も確認されている。弥生時代に関しては、220・261地点で前期の水田や中期の方形周溝墓が検出されており、古墳時代については、111・220・322地点で中期の方形墳が検出されている。古代では、奈良時代については220地点で掘立柱建物や井戸が、平安時代について111・220地点で梵鐘鑄造遺構が、それぞれ見ついている。そして中世以降は活動が著しく、91・220・261地点では鎌倉・室町時代の大溝、土器溜や石室や墓や井戸などが多数確認されているほか、西方の134・248地点では、室町時代の土取穴群が広がっている。近世になると、道路や道沿いの野壺・井戸に区切られるように東西方向の杭列群が展開して田畑が広がっていたことがわかっている。また、1991年3月に実施された地中レーダー探査によって、本調査区内の西辺に南北方向の大溝が存在する可能性が指摘されている。

調査の結果、近世の活動痕跡としては、農作業に関わる杭群を確認した。中世については、南北にはしる溝群や埋甕のほか、多数の土器溜や集石が見つかった。古代については、遺物もほとんど出土しなかったが、弥生時代～古墳時代では、埴輪をともなう古墳を含む古墳中期の方形墳2基と、弥生中期後半の方形周溝墓1基を検出した。また、弥生前期末中期初頭の土石流堆積物の下層では、縄文時代晩期中葉の土器1個体分の破片集中部を確認した。出土遺物は、整理箱220箱を数え、そのうちの8割は中世の土師器・陶磁器で、約2割が埴輪である。

本章は、第4節（2）を伊藤、第6節と第8節（4）を笹川、そのほかを富井が執筆し、全体を富井が調整した。

2 層 位

本調査区は、掘削前には標高52.6m前後のテニスコートだったので、層位的に攪乱は少ないと期待された(図1・2)。表土(第1層)の厚さは、東部では30cm程度だが、西部では50cmを超える。表土下には、近世・近代の遺物を包含する灰褐色土(第2層)が全面に広がる。層厚は、東部では20cm前後で、西部で30cmを超える。調査区東部から表土の重機掘削を始めたときに、第2層にも近代の遺物を包含していることを確認したために、その下位の第3層(茶褐色土)上面近くまで重機による機械掘削を進めた。図1の南壁断面では、重機掘削分を第2 a層、人為掘削分を第2 b層としている。

第3層は、調査区中央から東にかけては、40cm前後まで残存しており、およそ2段階に分けて掘削した。中世の遺物包含層で、13~14世紀の遺物を多く含むが、それ以降の遺物は細片でもほとんど見られない。上部と下部では出土遺物の年代に違いは認められないが、土質としては、上部に比べると下部は砂質で色調も暗い。中世の溝SD2以西となるY=2085辺りから西では、遺構の埋土以外には実質的に残っておらず、第2層直下で弥生時代の前期末~中期初頭の土石流堆積層の上面が露呈した。

茶褐色土の包含層や遺構埋土には、第5層(黄色砂)との層理面も貫いて、液状化を示すと思われる薄微な皺状の堆積の乱れを確認できることがある(図版4-1)。また、調査区東南部では、下面が下位の層序と同様に波打つ部分をわずかに確認できる(同4-2)。以上は、中世に地層変形をともなう地震があったことを物語る。

第4層は、包含層としては広がらない黒褐色~暗茶褐色ないし黄灰褐色を呈する砂質土。弥生時代から古代にかけての遺構埋土が相当するが、古代の遺物はほとんど出土しない。第4 a~4 g層は、古墳の周溝埋土で、これらについては第5節(1)で詳述する。第4 h~4 j層は弥生土器を包含する黒褐色~黄灰色の粗砂質土。

第5層は、弥生時代の前期末~中期初頭の土石流堆積物である黄色砂。最下部の粘土ないしシルト(第5 f層)から、細砂(第5 e層)、そして粗砂(第5 c層)へと上方粗粒化している。部分的には、細砂の上位で再びシルト(第5 d層)になっている。残りのよい部分では、上面の標高が52.0mを超えたり、層厚も1 m程度に達したりするが、西側以外では層厚50cm程度の残存である。また、条痕地の甕が第5 e層から(図版4-3)、櫛描文の壺形土器が第5 f層上面で、それぞれ出土している。なお、西辺では最上部がわずかに土壌化してかなり硬化したシルト質ないし砂質の部分もあるが(第5 b・5 a層)、

層 位

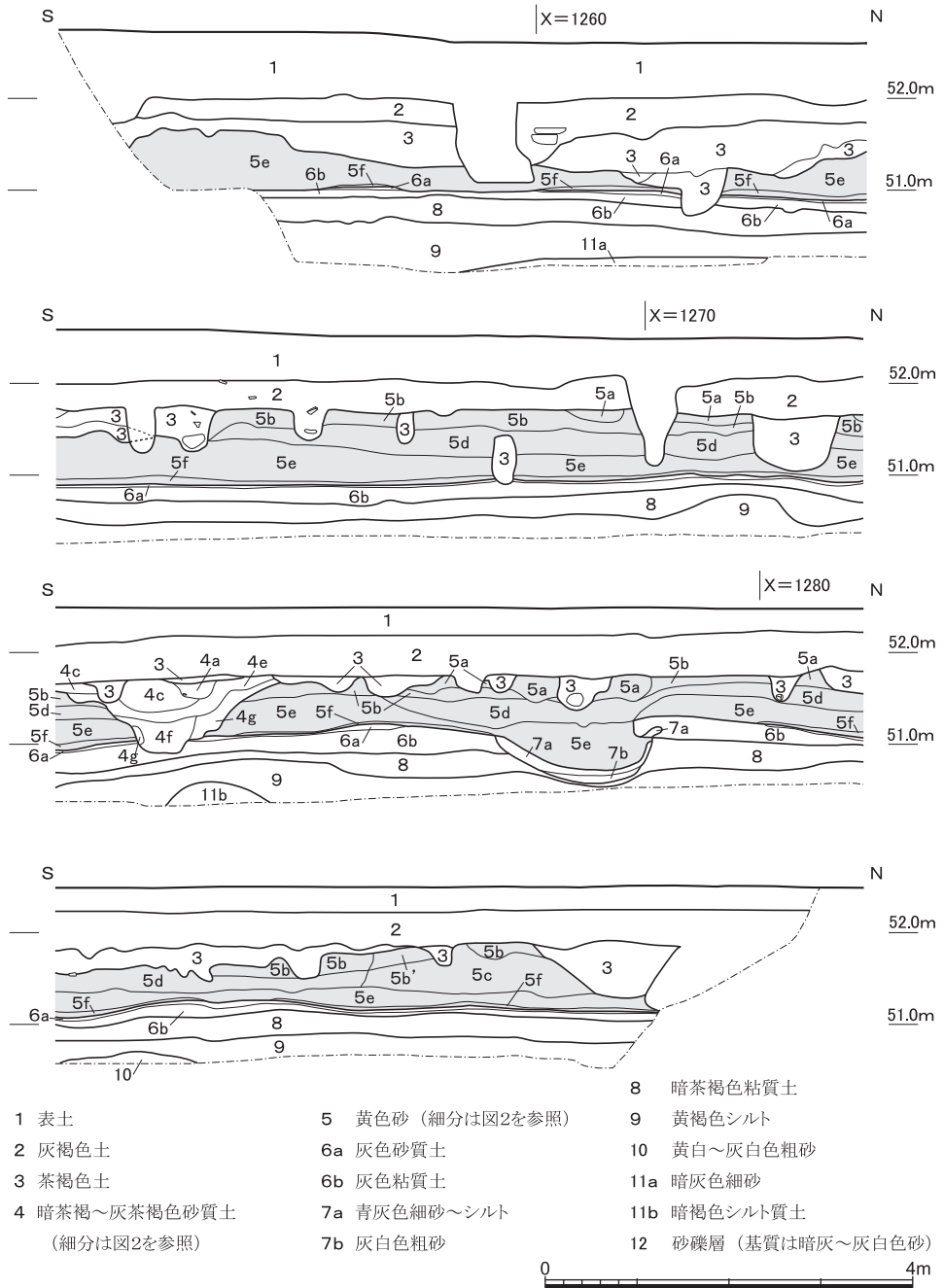


図1 調査区西壁の層位 縮尺1/80

京都大学吉田南構内A N21区の発掘調査

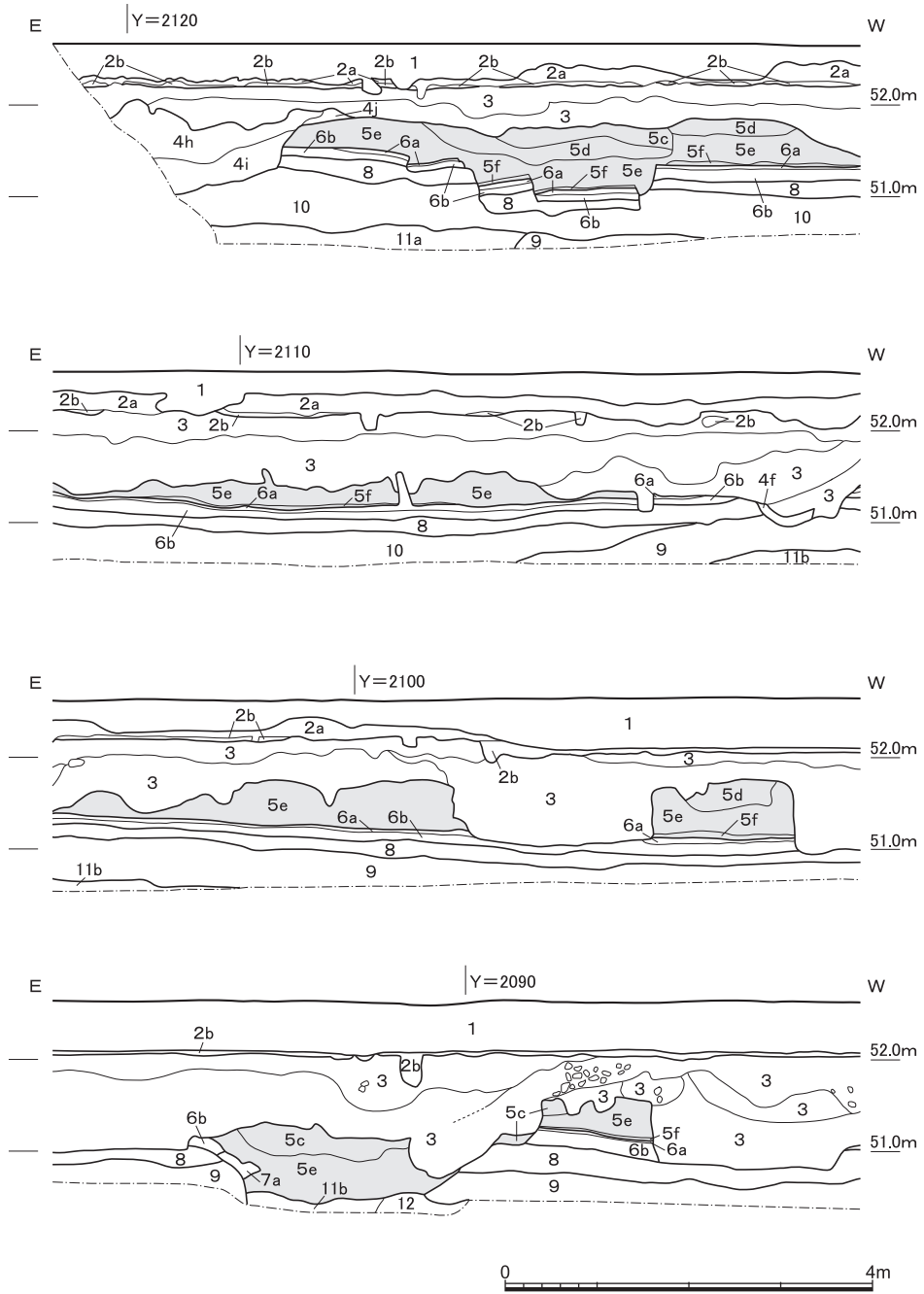


図2 調査区南壁の層位 縮尺1/80

層 位

第4層とは色調と硬さで識別できる。

第5層の下位には、灰色を呈する砂質土（第6 a層）および粘質土（第6 b層）が調査区全面に分布する。第6層の厚さは、上位の砂質土は5 cm前後だが、下位の粘質土は東辺で10cm程度、西辺では30cmにまで達する部分もある。断面では分層できるが、面的調査時には分離が困難で、合わせて第6層として掘削した。篋描き多条沈線文を特徴とする弥生前期末までの、あまり摩滅していない土器片を包含する。調査区中央および西北辺では第5層掘削後に、自然流路が検出され、その底面ないし縁部には、おもに青灰色を呈するシルト～細砂（第7 a層）が堆積しており、摩滅していない弥生前期の土器を包含する。この青灰色シルト～細砂と灰色粘質土の関係は、調査区中央の自然流路（大流路）では、前

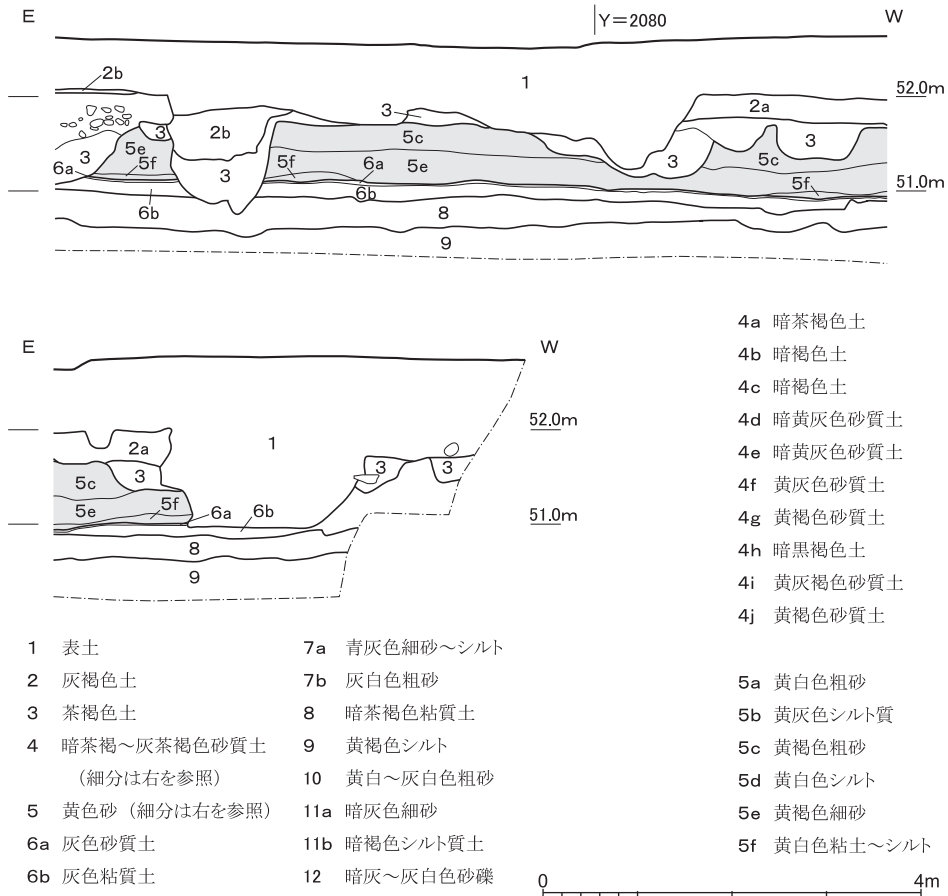


図2 つづき

者が下位に堆積していることを観察できるが、西北辺のSR2では、両者の境界は不明瞭で後者が下位に堆積しているように見える部分もある。いずれにしても、灰色粘質土の母体は、流路があふれて調査区全面に堆積した細粒物であることがわかる。

第6b層の直下には、暗茶褐色砂質土（第8層）が層厚20～30cmで調査区全域に広く分布する。人為掘削をおこなえたのはこの層までで、あまり摩滅していない縄文後期中葉の一乗寺K式の破片や晩期後半の滋賀里IV式までの遺物を包含する。暗茶褐色砂質土の下位は、広く黄褐色のシルト～細砂（第9層）が分布する。西側ほど堆積が厚く、西南部では、層厚が1m近くにまで達する。

第9層の下位には、調査区西辺や東壁際で、黄白色～灰白色の粗砂（第10層）を確認できるが、その粗砂には、暗茶褐色砂質土の上下などで噴砂のように液状化した部分を確認できるところがある（図版4-4・5）。調査区南辺では、灰白色粗砂（第10層）の下位に暗灰色細砂（第11a層）が堆積し、部分的には土壌化している（第11b層）。調査区東南部では、この第10・11a層が黄褐色シルトに陥入するような状況を見せるので、この暗灰色細砂も液状化していると判断できよう。この2つの層については、もとの堆積は、北東の220地点SR10に対応する可能性が高く、東接する261地点の第12・19層をもたせた縄文後晩期の白川系流路の溢流堆積と思われる〔伊藤1999a, 千葉・阪口2005〕。

中央南辺では、第9層の下位に、暗灰色から灰白色の粗砂を基質として頁岩を中心に拳大のサイズまでの堆積岩を多く含む砂礫層（第12層）が確認でき、調査区中央で検出した大流路底面以深では、層厚が20cm以上であることがわかった。包含する礫種には堆積岩も多いので、高野川系の堆積物と判断できる。261地点第26層に対応すると思われる。

3 縄文時代の遺跡

(1) 遺構（図版2・4・5, 図3・4）

SX48 暗茶褐色砂質土（第8層）の掘削中に、調査区東辺で土器破片が比較的まとまって出土した（図3）。残存率が3割程度の同一個体と思われる篠原式の深鉢（I2）で構成される。直径1mほどの広がりの中で、立位の破片もあったが、全体を包括するような明瞭な落ち込みは見られなかった。また、大破片の下には、多少黒ずんだ部分があったが、平面的にも立面的にも明確な輪郭をもたなかった（図版5-1）。黄色砂（第5層）より下位の層準では、このSX48で遺物の原位置取り上げを実施している。

地層変形と噴砂 人為的な遺構ではないが、黄褐色シルト（第9層）の上面では調査

縄文時代の遺跡

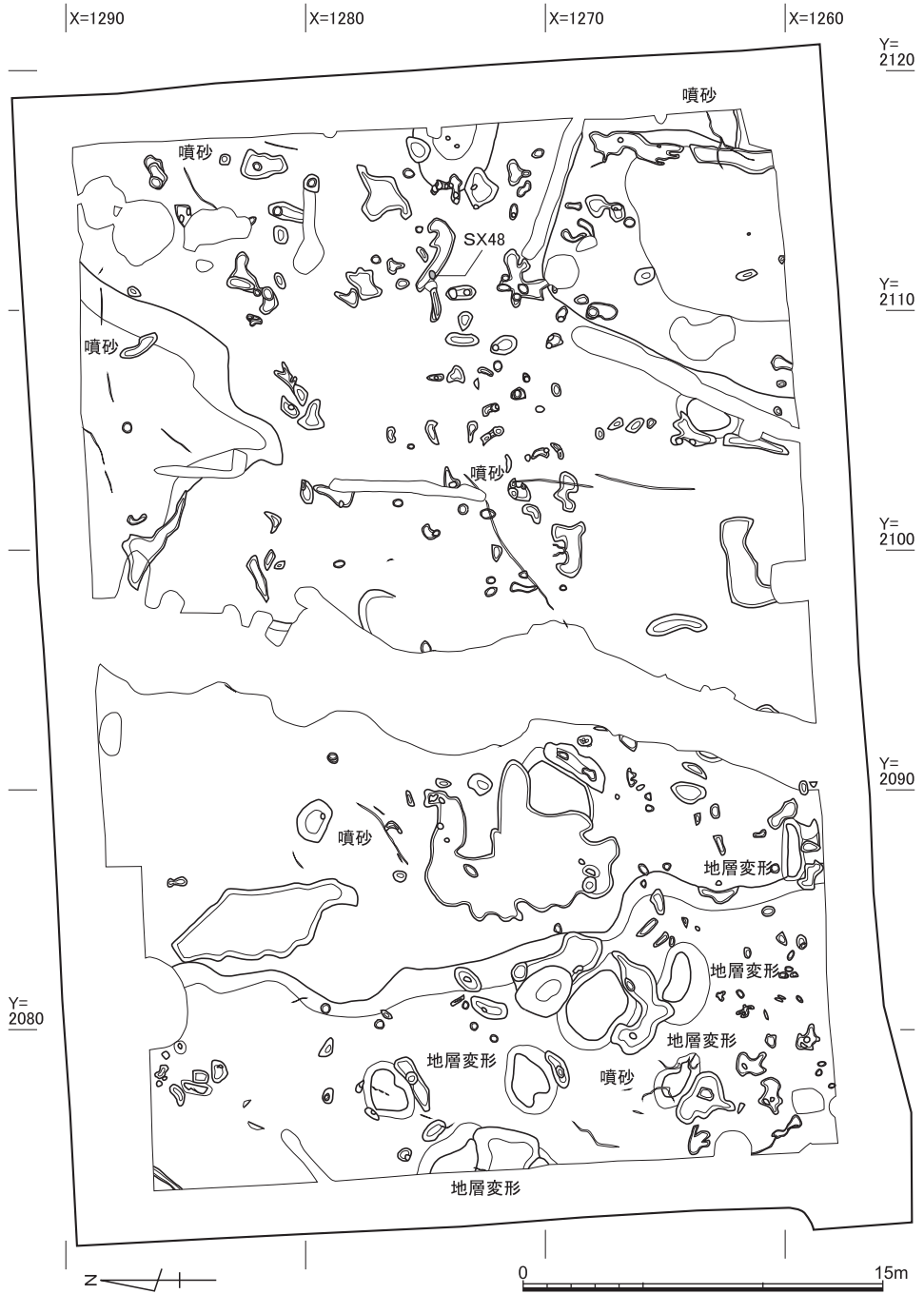


図3 暗茶褐色砂質土掘削後の平面 縮尺1/300

京都大学吉田南構内A N21区の発掘調査

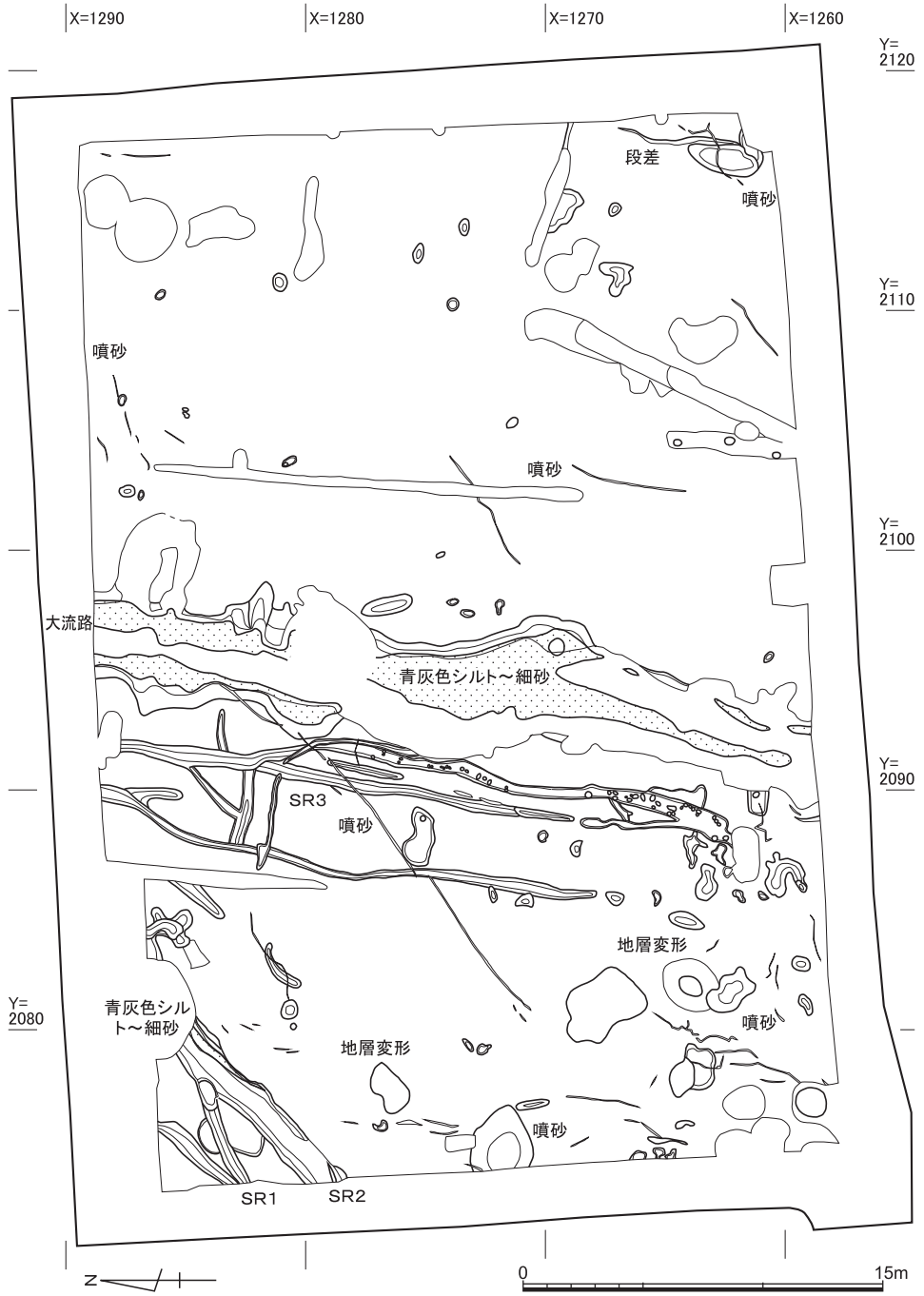


図4 灰色粘質土掘削後の平面 縮尺1/300

弥生時代の遺跡

区西辺で、直径3m前後までのドーナツ状のくぼみを数カ所検出し、またその周辺には多数の埴砂も検出できた(図版4-4, 図4)。ドーナツ状のくぼみには、西壁で断面を観察できるものがあり、中央の隆起部が下層でも対応する事を確認できたので(図版4-6)、地震による地層変形と判断している。もっとも、埴砂は、第6層(灰色粘質~砂質土)の上面でも下面でも数条を確認できるほか、ドーナツ状のくぼみに対応する第6層上面の緩い傾斜も西壁で確認できる部分があるので、この地震は縄文時代のものではない。

(2) 遺物(図版15, 図5)

縄文土器は50点以上出土したが、多くは細片で、5cm前後の破片でも摩滅したものが多。時的には、ケズリが特徴的な晩期の破片が目立つが、それ以外でも、北白川上層式3期と思われる磨消縄文の胴部破片や一乗寺K式と思われる破片が出土している。

I1~I3は、およその法量のわかる土器。I1は、内外面ナデ調整の無文土器で、灰色粘質~砂質土(第6層)から出土した。器形や口縁端部の特徴から、後期のものと思われる。I2は、SX48の晩期中葉の篠原式。口唇を押し引き状にわずかに刻む。I3は、調査区中央北辺の暗茶褐色砂質土(第8層)から出土した、水鳥ないしホラ貝に似た器形と思われる土器で、上半と下半とを継ぎ合わせた成形。外面は丁寧に平滑に調整し、長軸両端に抉り込みによる文様をもつ。長石などの混和材も精良で器表面がざらつく砂質の胎土は西日本後期末の凹線文土器にも類似するが、器形も加味し、東方からの搬入品と推測する。しかし、北陸や東日本にも類例を確認できていない。文樣的には後期末から晩期中葉、器形的には後期後半以降と考える。なお、I3aは俯瞰とその断面のみ図化した。

I4は、口縁の1段目が無文で縄文部が浮帯気味になっている磨消縄文意匠の一乗寺K式の口縁部で、暗茶褐色砂質土から出土した。ほとんど摩滅していない。I5は、口唇にも刻みをもつ刻目突帯文土器。滋賀里IV式で、暗茶褐色砂質土から出土した。I6は、少し摩滅した縄文晩期後葉の滋賀里Vの肩部で、灰色の粘質~砂質土から出土した。

4 弥生時代の遺跡

(1) 遺構(図版3~5, 図6~9)

前期末中期初頭の旧地表面 黄色砂に覆われていた灰色の砂質~粘質土(第6a・b層)の上面は、調査区全体で30cm程度の比高差で南西方向に傾斜していると言えるが、基本的には高低差の非常に乏しいかなり平坦な地形である(図版3-1, 図6)。

この旧地表面では、調査区中央に幅3mをはかる南北方向の自然流路を検出した(大流

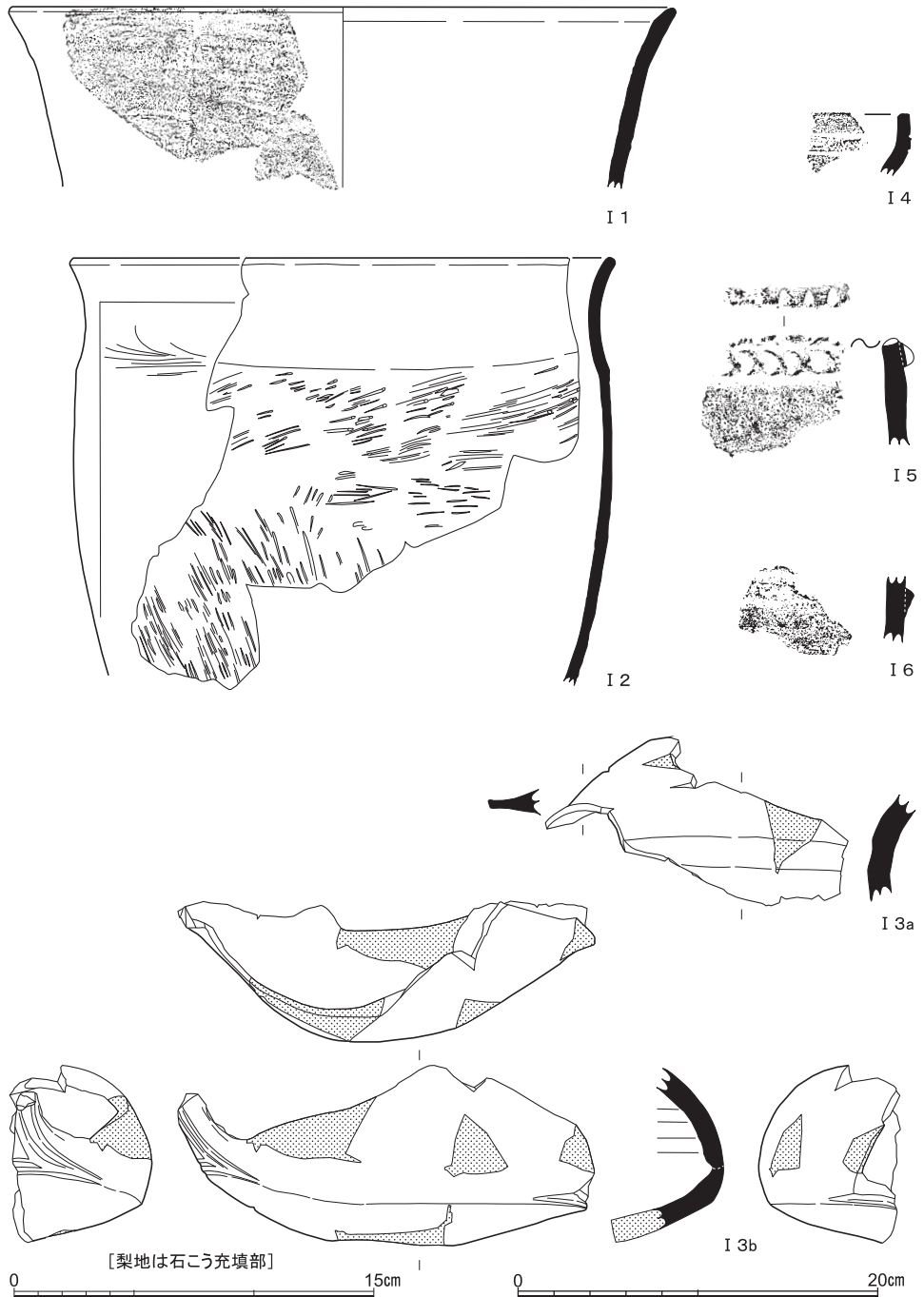


図5 縄文時代の土器 (I 1・I 4後期, I 2・I 5・I 6晩期, I 3後晩期) I 4～I 6は縮尺1/3

弥生時代の遺跡

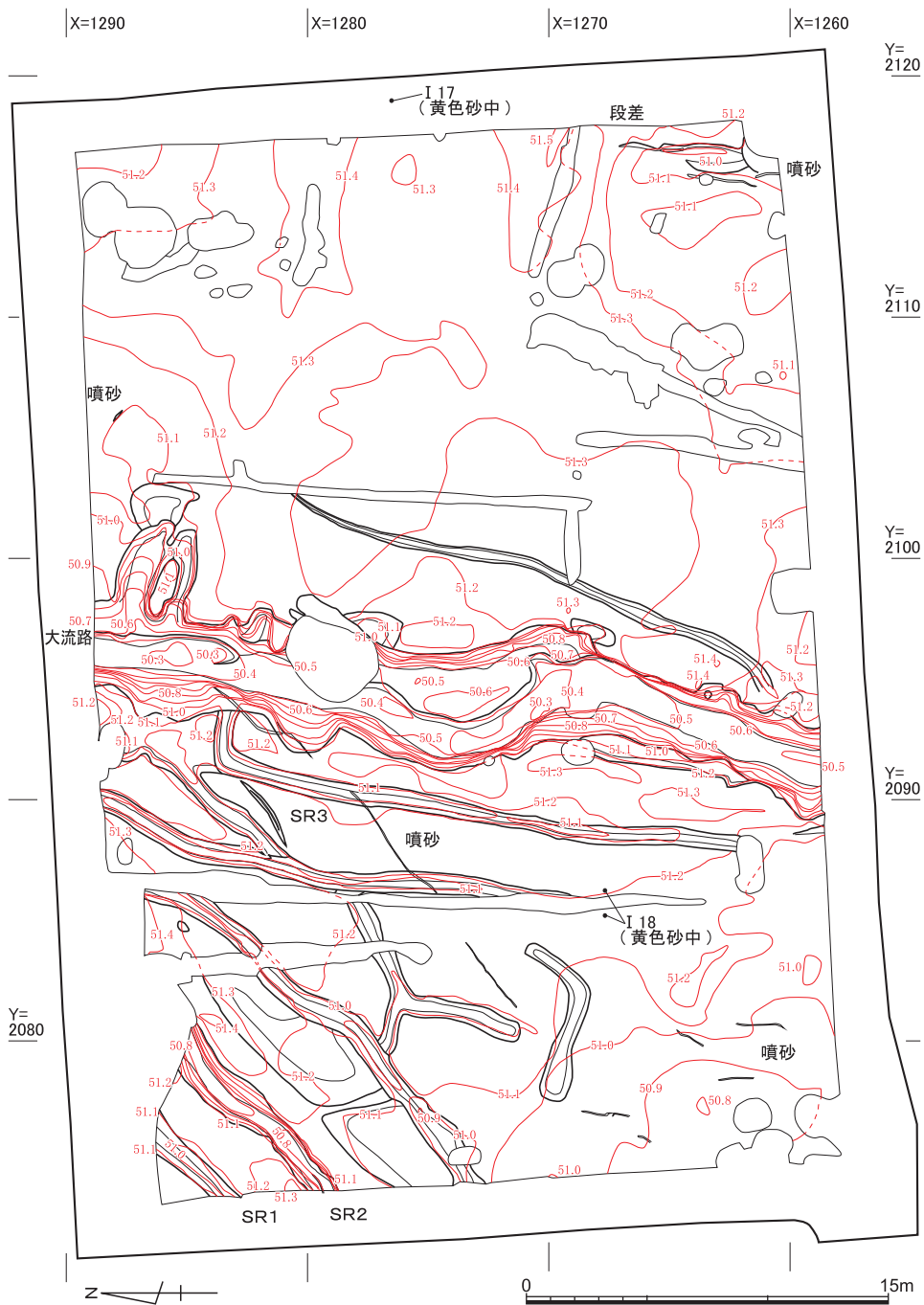


図6 黄色砂除去後の旧地形 縮尺1/300

路)。北接する220地点で調査区中央付近を北北東から南南西の方向で検出された流路(220地点S R 4)の下流部と考えられる。220地点S R 4と同様に、南南西方向に枝状に細く分岐する部分(S R 3など)を有する。埋積の状況は、砂層からそのまま黄色砂へと移行しているの、土石流直前にも流路だったと思われる。縁に堆積した、第6 b層の母体となる粘土の供給に寄与した堆積物と考えられる青灰色の細砂やシルト(第7 a層)と、底面の砂層(第12層上部)からは、弥生前期までの土器が出土する。

また、調査区西北部では、おもに北東から南西方面へはしる3~4条の流路(S R 2ほか)を確認した。これらの流路も、220地点S R 4から南西方向に分岐したものの延長と思われる。埋土は、最下部に灰白色粗砂(第7 b層)も認められるが、主体は黄色砂で、側壁には第7 a層が堆積する。もっとも、S R 2は、第6 b層の上位に第7 a層が堆積する部分もあることから(図1)、大流路よりも出現が後出的な流路だと思われる。ただし、包含遺物は同様で、弥生土器が含まれる。なお、上面が旧地表となっている灰色の砂質土・粘質土や、自然流路の内部の青灰色シルト・粘質土に包含される、細片を含めて総計50点前後の弥生前期の土器では、ほとんど摩滅していないものも多い。

地層変形と噴砂 調査区西辺および東南部で、噴砂を確認した。また、調査区東南辺で検出した、北北東から南南西にかけてはしる50cm近い段差辺りでも、すぐ西側や直下でも液状化を確認しており(図版4-5)、この段差はさらに中世の包含層にも影響を与えていることが南壁断面で確認できるので(図版4-2)、これらは後世の地震による地層変形と判断する。暗茶褐色砂質土(第8層)の上面の地層変形と同一原因かもしれない。

中期の方形周溝墓 土石流堆積物の上位では、調査区西北部で古墳時代の方形墳(8号墳)に切られる一辺約8mの方形周溝墓を検出した(図7)。主体部は残存しない。当初は、8号墳と中世の溝S D 2の間で土坑S K 6と判断した遺構と、その南方で中世の土坑の底面近くで確認した壺の出土地点を別個の遺構と認識して掘削したが、8号墳の調査後に精査して、元の形状の西半を中心に全体の規模をうかがうに十分な周溝を確認した。埋土は、暗黄灰色~暗灰色の粗砂質土(第4 i層)。西側周溝の南端からは把手を備えた台付水差(I 19)が、当初は土坑S K 6と認識していた北側の周溝の中央付近からは近江系と思われる甕(I 20)が、そして南側周溝の中央付近からは伊勢系と思われる壺(I 21)が、それぞれ出土した(図8)。いずれも第IV様式。供献土器と判断する〔深澤1996〕。

I 19は、口縁が溝の長軸におよそ平行して北西方面を向いた横位で、胴上半部の把手側が上面を向いて出土した(図版5-2)。把手本体は口縁のすぐ北西側で出土した。重厚

弥生時代の遺跡

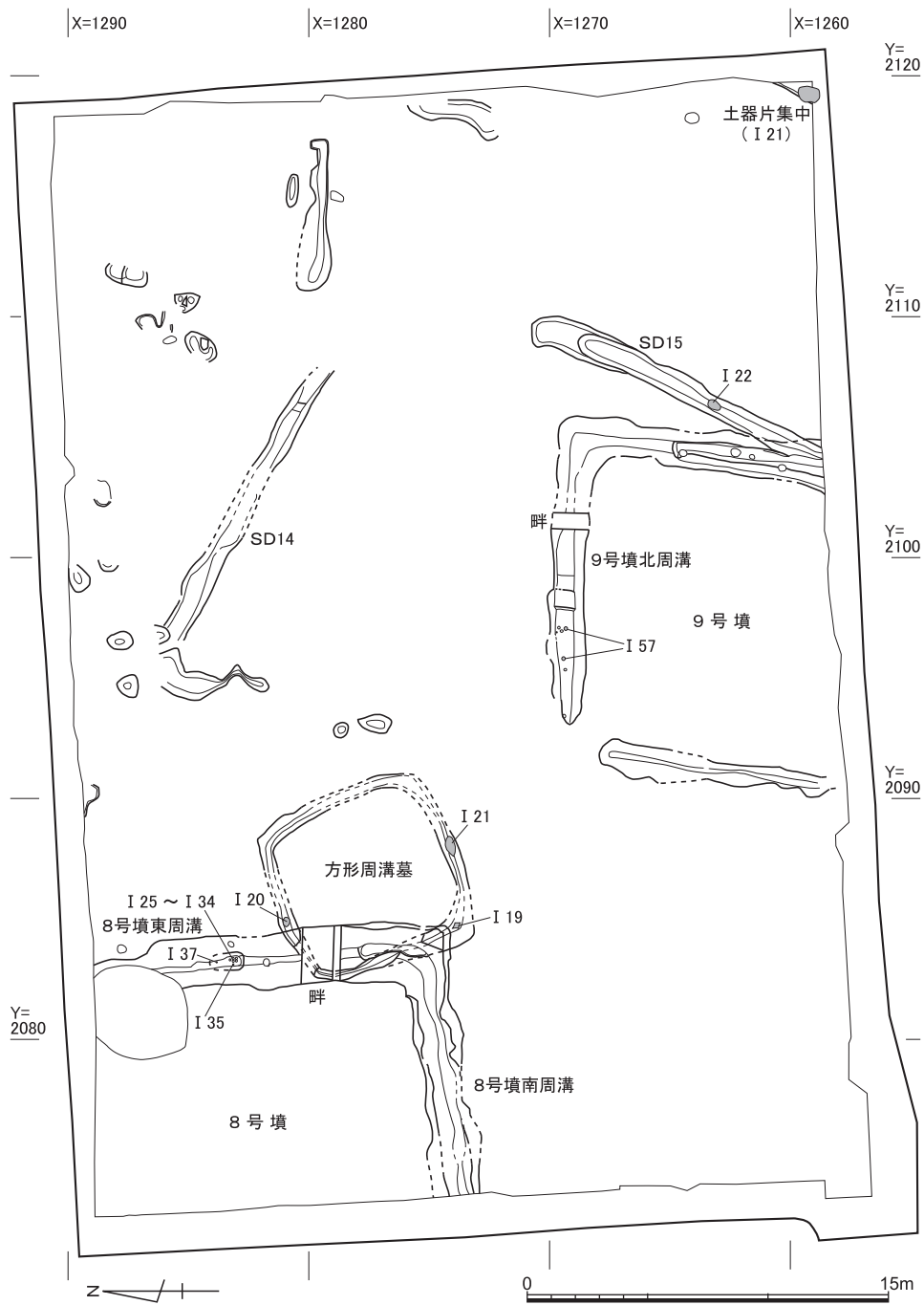


図7 黄色砂上面の弥生～古墳遺構 縮尺1/300

京都大学吉田南構内A N21区の発掘調査

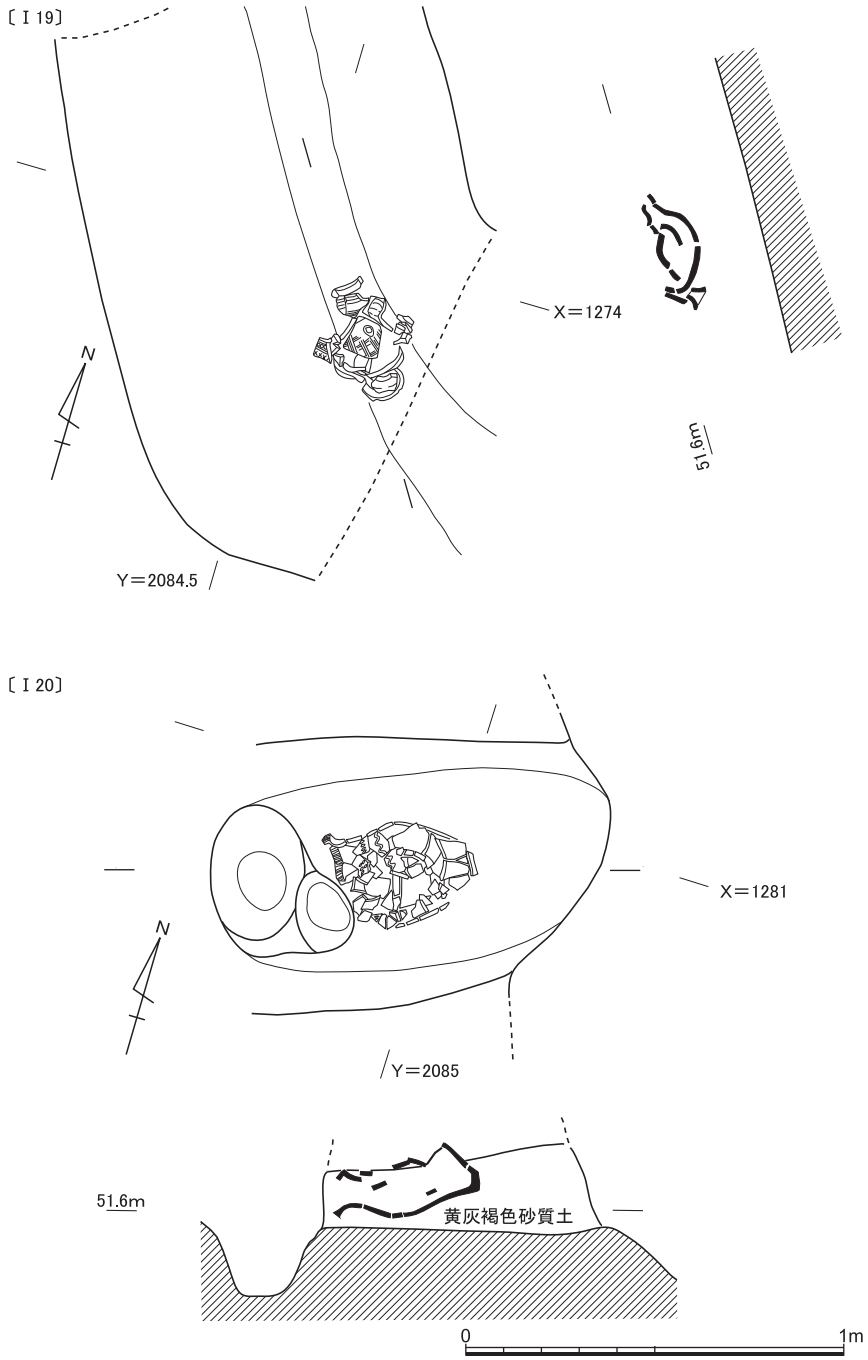


図8 方形周溝墓の弥生土器出土状況 縮尺1/20

弥生時代の遺跡

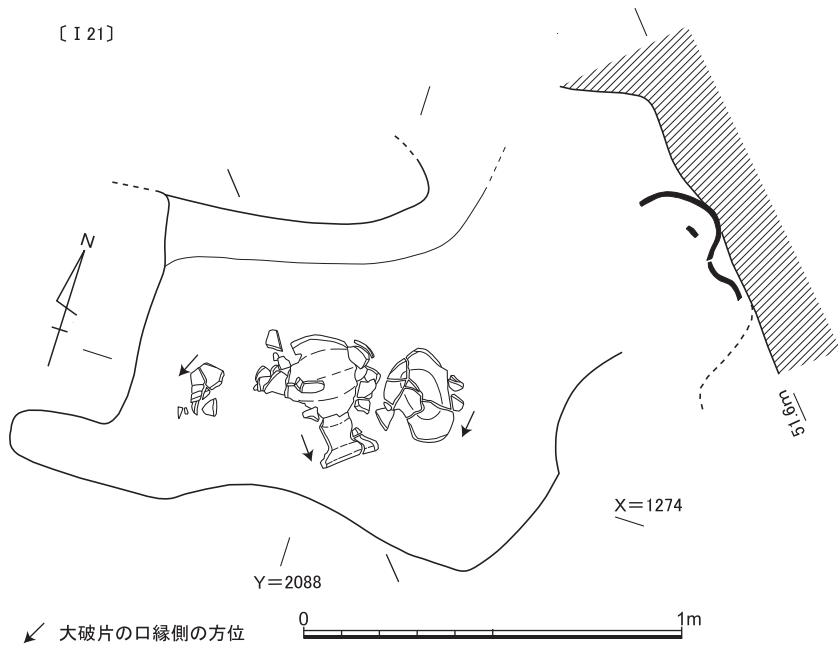


図8 つづき

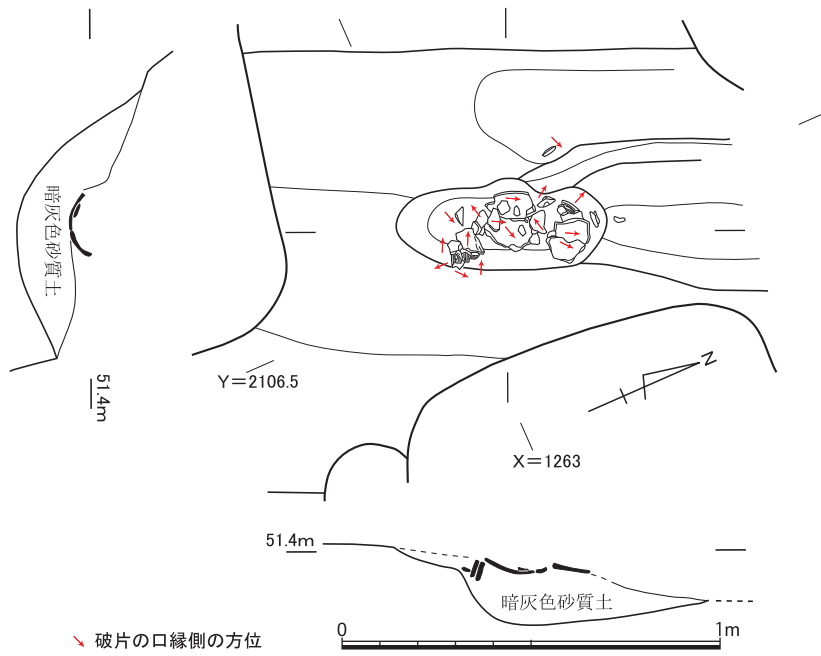


図9 溝S D 15の弥生土器出土状況 縮尺1/20

な台部は底部との接合部から剝離した状態で、両部の正位時の中軸線は直線にならない。以上から、正位から北西側へ倒れたのではなく、不安定ながらも把手を上向きにして横位に据えられた可能性が高い。なお、把手のほぼ真裏側の胴下半部に焼成後の穿孔がある。

I 20は、口縁の一部は中世に破損を被っているが、口縁が溝の長軸におよそ平行して南西方面を向いて横位で出土した（図版5-3）。有文だが器面の特定箇所正面にある意匠ではなく、また穿孔部や明瞭な黒斑もない。上面側の最大径付近に蜘蛛の巣状の割れを確認でき、その中心近くの破片は下面近くまで落ち込んでいる。胴上部と同様に非常に薄いつくりの胴下部は、土が充満していたが底裏面が周溝底面とほぼ直交する。

I 21は、口縁が溝の長軸に関わらずに南東方面を向いて横倒しの状態で出土したが、上部を中世に破壊されその破片が並ぶように出土したので（図版5-4）、原位置を保ってはいないと思われる。底部付近からその破壊された胴部にかけて黒斑を認められる。

中期の溝と土器辺集中部 土石流堆積物の上位では、溝と土器片の集積も検出した。調査区東南部では、北東から南西へはしる溝S D15を検出し、そこから第Ⅲ様式の1個体分の短頸壺の破片（I 22）がまとまって出土した（図版5-5、図9）。埋土は暗灰色砂質土。方形周溝墓の一辺かと思ひ溝の遠端を精査したが、折れは見つからなかったので、溝と判断している。残りのもっともよい部分では、口縁は北東を向いて出土したが、その下位の底部破片は口縁部よりも北東から出土しているほか、それらからやや離れて出土する破片もあった。したがって、破損後に二次的に移動していると思われる。

調査区東南隅では、暗黒褐色土から暗灰褐色砂質土（第4 h・4 i層）にかけて、第Ⅲ様式の壺の破片が散漫な状態で出土した（I 23）。調査区壁面にも破片が残っていたので、できるだけ回収したが、破片の分布の中心は調査区外と思われる（図版5-6）。

土石流 黄色砂（第5層）からは、調査区東壁中央付近の最下部に近いシルト（第5 f層）では胴部の残りのよい壺が（I 17）、調査区西辺の中世の溝S D2の側面の細砂（第5 e層）では同一個体と思われる甕の複数の大型破片（I 18）が、それぞれ出土した（図版4-3、図6）。ともに、第Ⅱ様式（中期）の特徴をもつが、表面がほとんど摩滅しておらず、土石流堆積の上部から掘り込まれた痕跡も認められない。また、I 18の口縁部破片には、立位で出土したものもある。こうしたことから、この2個体はこの近辺から土石流によってもたらされたと考えたい。すなわち、土石流の堆積年代は前期末というよりも中期初頭とみなすべきであろう。ただし、直下の旧地表面では、京大構内やその近辺のこれまでの調査で、中期とみなし得る個体は出土していない。

(2) 遺物 (図版16, 図10~12)

弥生前期の土器 (I 7~I 16) I 7~I 13が壺の口縁部や頸部付近, I 14~I 16は甕の頸部付近。頸部には複数条の篋描沈線文が認められ, また, 壺の口縁部も大きく外反するような特徴を示していることから, 第I様式でも新段階に位置づけられる。

弥生前期末~中期初頭ごろの土器 (I 17・I 18) 壺と甕がある。いずれも特異な要素をもつことから, 以下にやや詳しく説明しておく。

I 17の壺は, 口縁部と胴部の約半分を欠失しているが, ほかはほぼ全周する。底部と胴部以上では中心軸が若干ずれており, 胴部の最大径は26cm。くびれの少ない太い頸部をもつ器形で, この頸部のみには篋描文が施されている。櫛原体は5本単位のものともみられ, 残存する2帯のうち, 全体が観察できる下段のものは, 2条を重ねて幅を広くした複帯構成となっている。胴部は, 上半が浅く幅広い横位の篋磨き, 下半は縦位の刷毛調整が残される。中央付近に輪郭不鮮明な10cm大程度の黒斑が認められる。総じて器壁は厚いが, 底部はとくに分厚く突出する形状をとっており, 外面を横位に強く撫でつけている。施文に櫛を用いていることから, 中期に下る時期のものと判断されるが, 手法が稚拙であり, また厚い器壁や篋磨き主体の仕上げなど, 前期の特徴を色濃くとどめており, 限りなく前期に近い時期のものと評価すべきと考える。

I 18の甕は, 互いに接合しない口縁部と胴部の大破片があるが, 特徴が類似することから同一個体とみて, 図上で器形を復元した。口縁はゆるやかに大きく外反し, 面を持たない端部に, 丸みを帯びたD字状を基調とする小さな篋刻みを施している。胴部破片の湾曲度合いから, 最大径は24~25cm程度になるものとみられ, 頸部がわずかにくびれる器形になるものと想定した。頸部付近は横位の, 胴部以下は斜位の条痕調整で, 3~4条単位程度の板状原体による浅くべったりとしたものである。胴部外面は煤の付着が著しく, 黒変している。内面は全面が撫で調整で平滑にされ, そのほかの調整痕を認めない。山城地域の前期~中期には類例の無い資料で, 縄文晩期の深鉢を彷彿とさせる器形であるが, 口縁端部の篋刻みは弥生時代に下るとみるべき特徴を示している。

弥生前期遠賀川式の甕形土器は, 中期の大和・山城・近江地域などでは, 文様を失って刷毛調整を基調とした「大和形甕」と呼ばれる地域の特徴を示すものへと大きく変化していくことが知られている。大和地域においては, その過渡期にみられるもののうち, 口縁部の屈曲が緩やかな, 浅い刷毛調整のみで無文化している甕を, 定型化する以前の「初期大和形甕」と評価し, 大和Ⅱ-1様式の指標としている〔大和弥生文化の会編2003

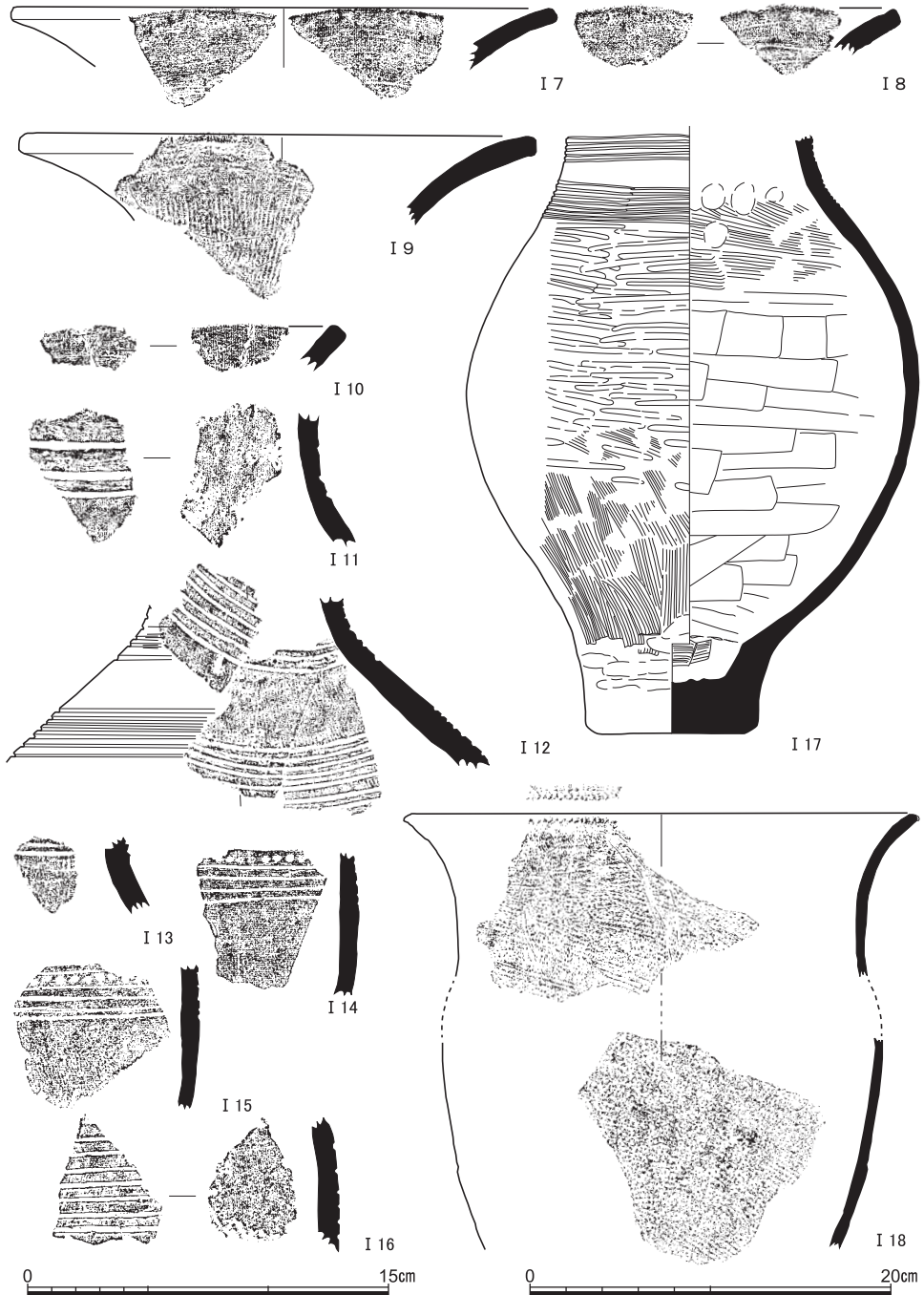


図10 弥生時代前期の土器と前期末～中期初頭の土器（前期：I 7～I 9・I 13・I 14流路内砂礫，I 10・I 11・I 15青灰色細砂，I 12・I 16灰色粘質土出土，前期末～中期初頭：I 17・I 18黄色砂出土） I 17・I 18以外は縮尺1/3

pp.69-73]。この I 18についても、外面の調整手法が大和地域とは異なるものの、山城地域における前-中期間の過渡期に生じた製品と評価できる可能性がある。条痕状の調整については、地理的位置を反映して、伊勢湾地方などとの影響関係が考慮されよう。なお、大和Ⅱ-1様式は、大和地域においては櫛描文出現前の段階であり、周辺地域においては前期新段階とされる時期に並行すると位置づけられている。したがって、仮に本例の前述の想定が正しいとすれば、山城地域における前期末の製品であると評価することもできる。ただいづれにせよ、類品の増加を待つ必要があろう。

以上の I 17・I 18は、黄色砂中からの出土であり、その時期的評価は、土石流発生時期の特定に大きく影響する。同じ吉田南構内のAR24区(288地点)では、黄砂上面で、I 17に類似した器形の篋描文壺の一括出土があり〔伊藤ほか2006 図102-II 358など〕、土石流が弥生前期末に限定できる可能性が示唆されている。しかし今回の I 17については、櫛描文施文という中期に下る特徴を示すことから、その評価を重視するならば、発生時期も少し下らせて考えておく必要が生じよう。

弥生中期中葉～後葉の土器 (I 19～I 24) 方形周溝墓に供献されたとみられるほぼ完形に復元可能な一群 (I 19～I 21) と、それとは遊離した溝などから出土の個体 (I 22・I 23) があり、前者は凹線文手法の盛期である中期後葉(第Ⅳ様式)、後者は凹線文出現前段階の中期中葉(第Ⅲ様式)に位置づけられる。

I 19の水差しは、底部に別造りの脚台を付す。台部との接合後に、底部内面の凹みを埋めるように円盤状の粘土を充填していたとみられるが、破損して円盤部のみ剝離している。把手は、穿孔して差し込む手法で接着する。外面は、櫛描の蓮縄文・直線文・斜格子文に円形の刺突文を組み合わせた文様を施す。なお円形刺突は、∩形に割った工具を複数回刺突して○形とする煩雑な技法を用いている。胴部下半は横位・縦位の刷毛調整である。

I 20は受け口状の口縁を呈する甕。器高36cmを越える大形品であるが、頸部以下の器壁は底部に至るまで非常に薄くほぼ均一である。外面上半に櫛歯の軽いタッチの刺突列2帯と波状文が施され、下半は流れるように縦位刷毛調整を重ねる。内面は、口縁から頸部にかけては横位の刷毛調整、それ以下縦位・横位の撫で調整が丁寧なほどこされる。これらの調整区分は製作の単位をおおむね反映しているようで、境目に粘土紐接合痕が観察できる。使用にともなう痕跡は全く観察されない。金雲母を多く含んだ、精良な胎土である。近江系と呼ばれている器形や文様の特徴を有する個体だが、胎土や色調に搬入品と明らかに指摘できるような特異さは無い。

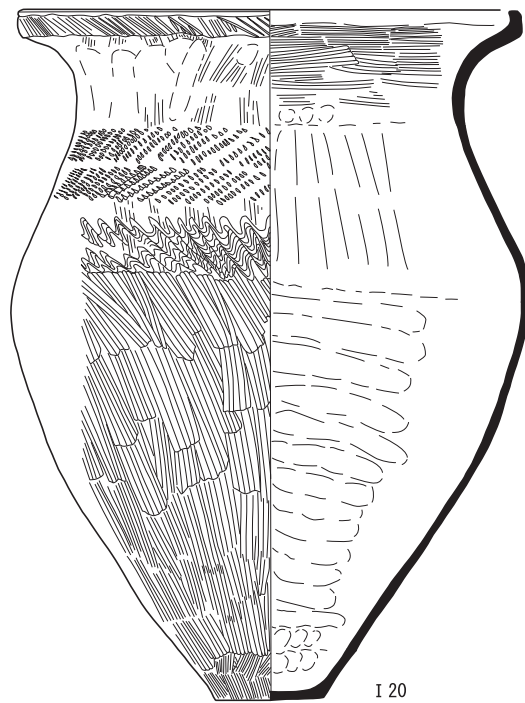
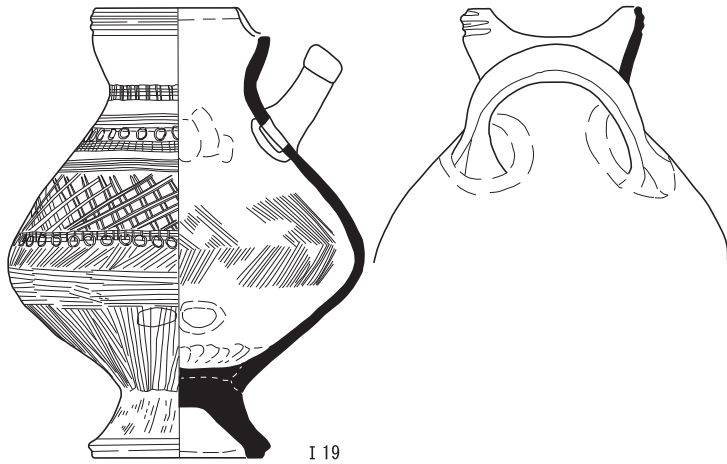


図11 弥生時代中期の土器(1) (I 19・I 20方形周溝墓出土)

古墳時代～古代の遺跡

I 21は口縁が受け口状を呈する壺。胴部は丸みを帯びた算盤玉形を呈する。底部は焼成後に穿孔されたとみられ、円形に欠失する。内外両面とも刷毛調整を基本とし、口縁部の凹線以外、無文である。山城地域をはじめとして近畿地方では主体とならない器形であり、伊勢湾地方西岸部に特徴的な壺に類似しているといえる。

I 22は短頸壺。口縁部は短く強く外反し、内面に、大和形甕に類似する粗い横位の刷毛調整を施す。頸部のくびれ部に蓋用の穴とみられる2孔を穿つ。外面全面を縦位に篋磨き調整しており、片側におおきな黒斑を有する。底部はドーナツ状に凹んでおり、凹んだ部分に葉脈状の圧痕を認める。

I 23は広口壺の口縁部と胴部下半。特徴が共通であるので同一個体として図上復元した。口縁部周辺は強く横撫でし、それ以外は全面刷毛調整。わずかに残る底部には葉脈状の圧痕がある。

I 24は古墳周溝に混入していた、甕頸部付近の小破片。口縁にかけて直角に近く外折するものとみられ、器壁は薄く、外面に叩きと縦位の刷毛が認められる。中期後葉の甕とみられ、本来は方形周溝墓にもなったものだったのであろう。

以上の中期の土器群は、先述したように出土遺構に対応して時期的に2群に大別されるが、空間的にみても、淀川水系を中心とする近畿地方西部的な特徴を示す土器（II 19・II 22～II 24）と、近畿東部の近江地域～伊勢湾地方にかけての特徴がうかがえる土器（II 20・II 21）の双方が含まれている。山城地域の中でも東縁部という遺跡の所在位置を如実に反映する様相と言え、興味深い。

5 古墳時代～古代の遺跡

(1) 遺 構（図版3・6～9、図7・13～20）

弥生中期初頭の土石流堆積物の上位では（図7）、調査区の中央北辺から東辺にかけて、第4層を埋土とする数基の小規模な落ち込みと溝SD14を確認している。前者では時期を確定できる遺物を包含していなかった。また後者では、古代の須恵器と9～10世紀の緑釉陶器の破片を包含していたにすぎない。

しかし古墳時代に関しては、調査区の西北部隅と中央南辺で、方形墳の周溝を1基ずつ検出した。本調査区は、これまで7基の方形墳が検出されている吉田二本松古墳群の一角を占めるので、それぞれ吉田二本松8号墳、同9号墳と呼ぶことにする。以下、8号墳および9号墳について説明する。

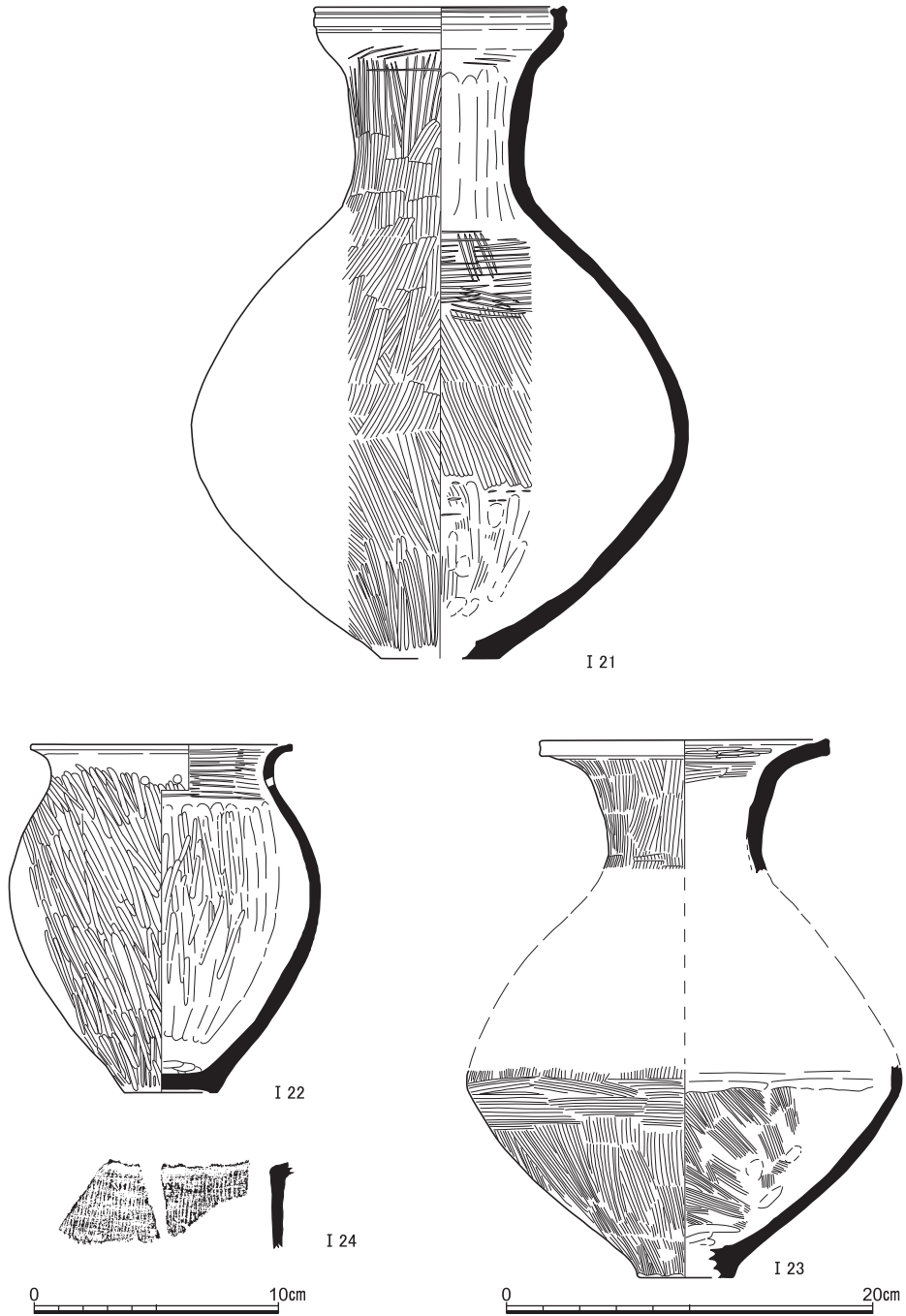


図12 弥生時代中期の土器(2) (I 21方形周溝墓, I 22 S D 15, I 23暗黒褐色砂質土, I 24 8号墳東周溝出土) I 24のみ縮尺1/3

(i) 吉田二本松 8 号墳

調査区西北部で、黄色砂の上面で暗褐色土を埋土とする東の周溝と南の周溝を検出した(図版 6-1)。確認面の標高は、高いところでは 52.1m をはかる。周溝に囲まれた内側には、暗褐色土を埋土とする掘り込みは認められず、また古墳時代の遺物のみを包含する土坑なども認められなかったため、墳丘も主体部も削平されたと判断する。周溝の一边は 13m 以上に達し、覆土中に多量の埴輪片が包含されていた。東周溝は北辺で中世の井戸 S E 1 に深く広く切られるほかは、後世の破壊を免れている部分が広い。南周溝は、中世の土坑 S K 4 などによって底面以深まで破壊されている部分も目立つが、中世の溝 S D 4 などのように、周溝埋土の上部までの破壊にとどまるものもある。

周溝の埋土 周溝の底面は先史時代の遺物包含層にまで達し、確認面からの深さは 1m 前後になる。周溝埋土は(図 13)、上層は暗茶褐色土～暗褐色土で、包含される花崗岩粒はサイズが大きく含有率も高い(第 4 a～第 4 c 層)。埴輪のほとんどはこの層群から出土した。また埴輪は、東周溝では墳丘側から堆積したことが断面観察でよくわかったが(図版 8-1)、面的に掘り下げる時には、どちらの周溝でも墳丘側から落ち込むような分布的傾向を認識しづらかった。

中層は暗黄灰色砂質土。包含される花崗岩粒は、サイズが小さくなる傾向にあり、含有率は高くなるが、粒径が数 mm 程度に達するものの含有率はやや下がる(第 4 d～第 4 e 層)。東周溝では、墳丘側に粒度の大きいものが目立つ(第 4 d 層)。なお、第 4 d 層と第 4 e 層とでは、堆積の先後関係を決めがたい。埴輪はほとんど出土しない。

下層は黄灰色砂質土で、花崗岩粒の比率が相当に高くなるが、粒径数 mm 程度のものはほとんど含まれない(第 4 f～第 4 g 層)。下層の標高では、地山の黄色砂が粒径の小さい第 5 e 層であることを反映していると思われる。第 4 f 層と第 4 g 層とでは、色調が異なり、後者がより黄色砂に近い黄褐色を呈するが、内容物にはほとんど違いはない。中層と第 4 g 層とでは色調変化は明瞭ではない。また花崗岩粒の違いは地山となる黄色砂の上方粗粒化を反映しているとみなせたことに加え、埴輪の出土量にも大きな変化がなかったため、中層と下層を一体のものとして掘削した。

中・下層からは埴輪はほとんど出土しないので、墳丘に樹立されていた埴輪は、周溝が 50cm 程度埋まるまでは、ほとんど破損していなかったかもしれない。しかし、出土した埴輪は、多くを占める焼成の良い橙色を呈する個体を見れば、器表面は口縁部から底部まで風化が目立つようなことはない。第 4 f 層から中層にかけては、上層よりも土壌化してい

京都大学吉田南構内A N21区の発掘調査

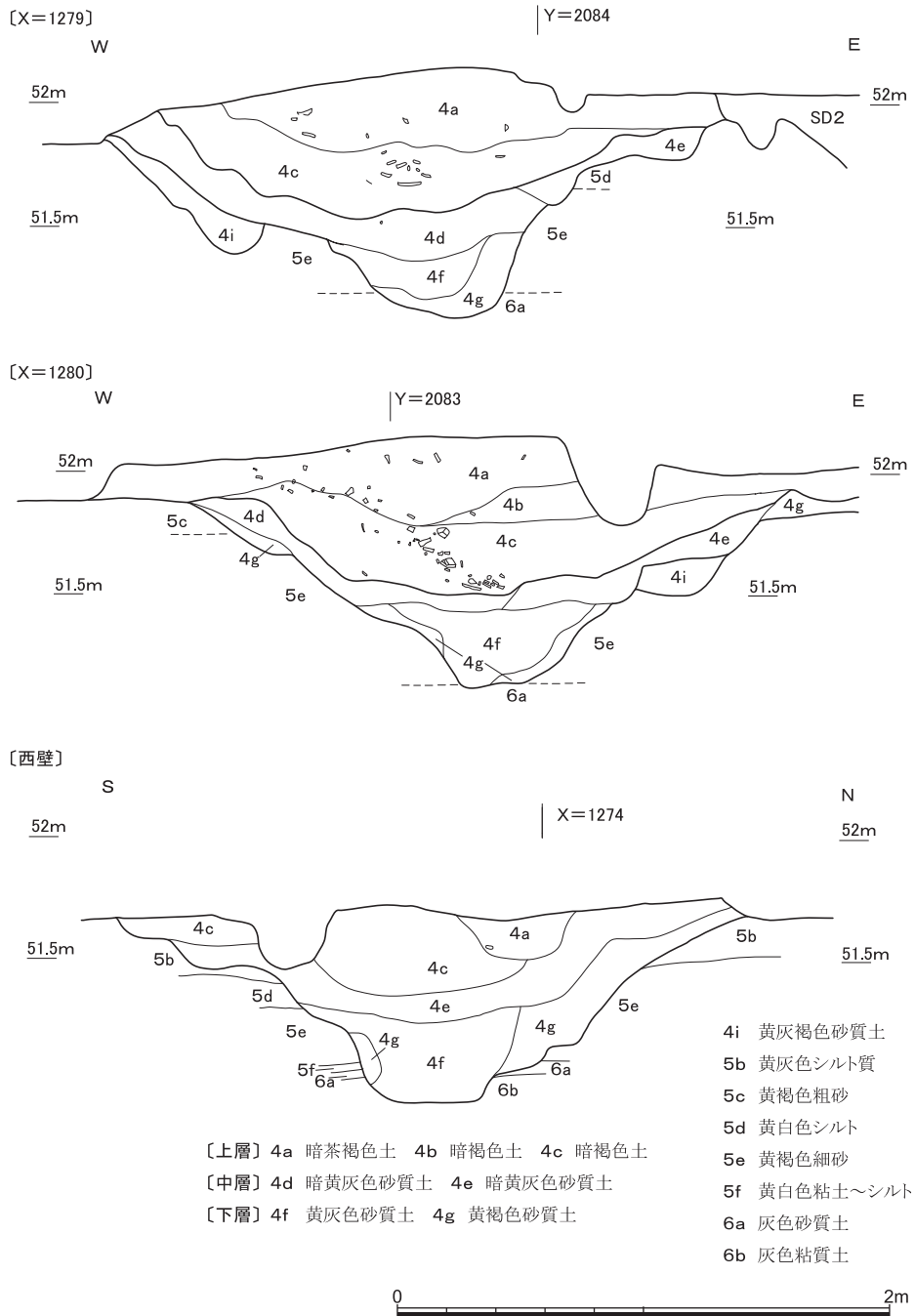


図13 8号墳の周溝の層位 縮尺1/30

ないが、上方に向かって土壌化傾向にあるわけでもない。なお、埋土中には、第4 g層のように、第5層に由来する黄色砂が主体となる地層はあるが、水成堆積を物語るラミナの確認できる砂層はまったく存在しない。また、葺石はなかったと言える。

東周溝 北端は調査区外にあると思われるが、調査区内では13mを発掘できた。上層群では、上半（第4 a・4 b層）からは少量の埴輪の出土にとどまるが、下半（第4 c層）からは、接合する須恵器甕の小破片2点と、1個体分の摩滅した土師器甕（I 36）の細片約30点とともに、多量の埴輪片が出土した（図版6-2）。埴輪片は、墳丘側から流れ込んだような状況を断面から読み取れる（図版8-1）。黄灰色砂質土からは遺物はほとんど出土せず、数点ずつの埴輪の細片と弥生土器の細片にとどまる。

底面付近では、須恵器の蓋杯と壺、そして鉄製刀子が出土した。周溝埋土の中・下層の掘削時にも、これらの遺物の確認時にも、掘り方を確認できなかったが、掘削後に須恵器蓋杯から南に約50cmの部分で、底面がわずかに北側に落ちるのを確認できた。須恵器蓋杯は、ホームベース状に並んで5組出土した（図版7-1・2、図14）。北の1組は（I 25とI 26）、略方形をなすほかの4組の南北中軸線より数cm東へずれている。およそ方形をなす4組は、集合の中心に向かってわずかに傾く。また東北の1組は（I 29とI 30）、蓋が少し持ち上がっているとともに、下の杯身がほかの3組よりやや北東に外れている。この東北の1組の内部には、土が充満しておりその中からは、少し曲がった針状の鉄製品（I 36）と、それと同一個体の可能性のある短い針状鉄製品が見つかった。この1組以外からは、内容物は見つかっていない。西南の1組（I 31とI 32）の下の杯身には、「へ」字状のヘラ記号と思われる浅い刻線があり、それは北北西を向いていた。5組のうち、北の1組と、西北の1組（I 27とI 28）は、蓋と身の天地が逆転している。

この5組の蓋杯の5cm上位で西側の2組より20cmほど西方からは、口縁が西側（＝墳丘側）を向いて横倒しになった状態で須恵器壺（I 35）が出土している（図版7-3、図7）。この壺は、底部のわずかなひずみと口縁の厚みゆえか、正位ではなく横位で安定する。また蓋杯の50cmほど北方からは、先端が南を指し刃部が東を向いた状態で鉄製刀子（I 37）が出土している（図版7-4、図7）。

南周溝 西端は調査区外にあり、調査区内では10mを発掘できた。上層群の上半（第4 a層）からは、すべて接合する1個体分の甕の体部破片6点が、後述するエリア8でも出土したが（I 41）、埴輪の出土量は少ない。下半の第4 c層に埴輪は集中する（図版6-3）。黄灰色砂質土からは遺物はほとんど出土せず、埴輪の細片数点にとどまる。

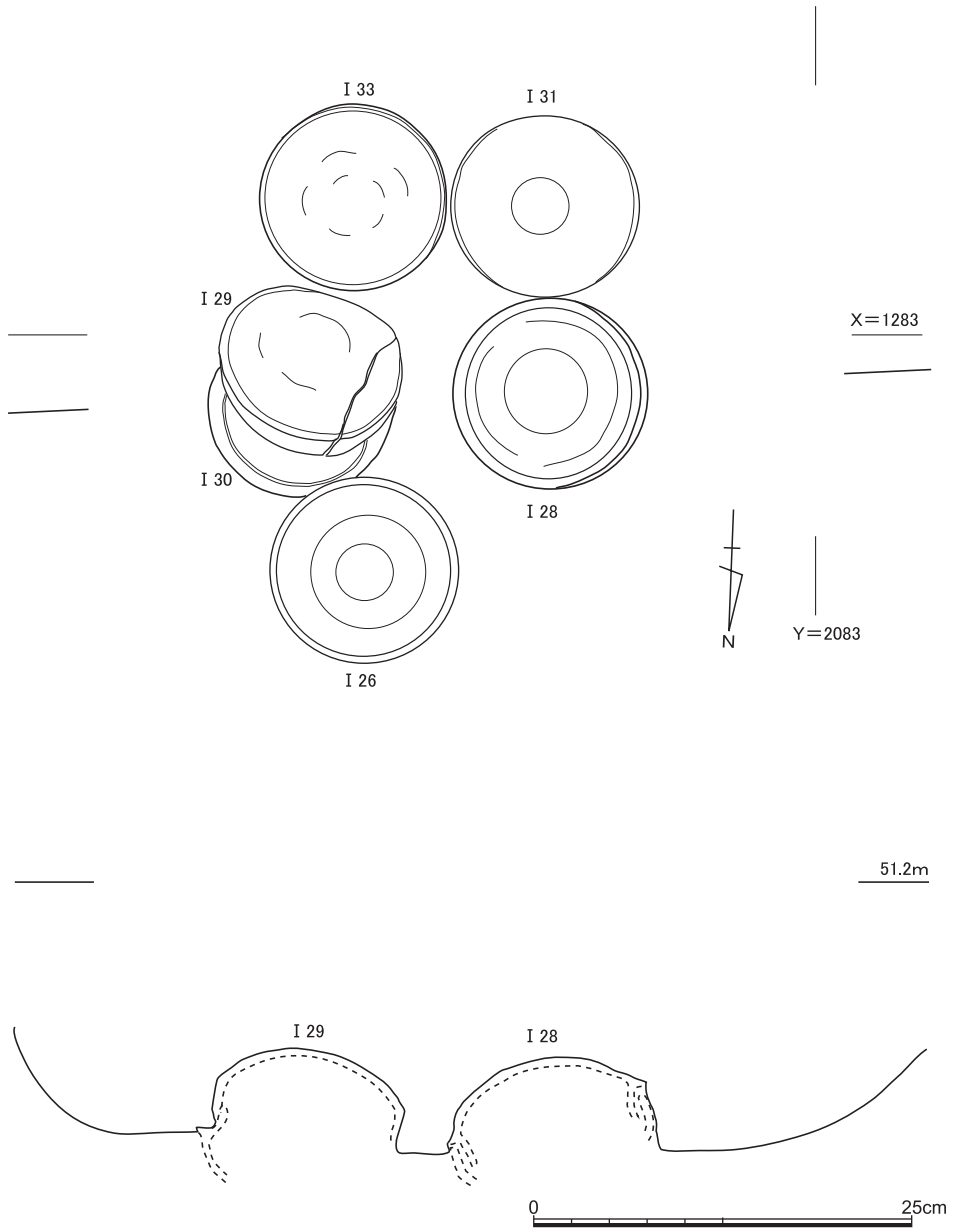


図14 8号墳東周溝の須恵器蓋杯の出土状況 縮尺1/5

底面付近では、2個体分の土師器と赤色顔料が出土した。赤色顔料は、おもに西半で、砂質の埋土になじむような状態で、小銭～人頭大くらいまでの集中部を数カ所認めた。もっとも西で確認した人頭大のまとまりは、西の縁をSK4に切られる（図版7-5）。この人頭大のまとまりの下部からは、内外面や破断面に赤色顔料が付着している甕の胴部破片6点が出土し（図15）、いずれも接合した。この甕の分布の西縁は、中世の土坑SK4の範囲に収まるようで、破片の多数はその埋土に含まれていた（I37）。

もう一個体の壺は、中央よりやや東側で、多くの破片が内面を上向けに出土した（図版7-6、図16）。下位に赤色顔料のまとまりのある破片でも破断面に顔料は付着していない。頸部以下は9割以上を回収できたが、口縁部で回収できたのは口径の3分の1を占める大破片2点のみである（I38）。復元すると、底部破片の縁を割れの起点と判断でき、そこは出土時に西方を向いていたが、その上部に位置する口縁部2片は、離れた東側で口縁を西に向けて出土している。以上から、割れてからの二次的移動があったと思われる。

埴輪の包含状況と回収方法 2辺の周溝から出土した埴輪には、朝顔形を含めた多数の円筒埴輪のほかに、人物埴輪と馬形埴輪と家形埴輪の各1点から成る形象埴輪がある（1）。多くの破片は、南周溝では標高51.5～51.7m、東周溝では51.5～51.8mで出土した。形象埴輪も出土した南周溝では、実測図を描きながらおもだった破片約900点に番号を付して取り上げ、円筒埴輪のみが出土した東周溝では、おもだった破片約1800点に番号を付して光波測量で取り上げた。番号を付すことのできなかつた破片は、包含密度に応じて2～3mの範囲を一つのエリアとして、エリア別に回収した。東周溝では、北縁から2.5mがエリア1、さらに2.5m分がエリア2、そこから断面観察畔までの4mは2分してエリア3および4、幅2mの畔をエリア5、畔から南の2mをエリア6とした。東南隅の約3m四方をエリア7として、そこから西へ、2mごとにエリア8、9、10、そして最後に西縁までの3mをエリア11とした。これらのエリアでは、原則的にエリア内をさらに2分して約1m単位ごとに回収したが、東南隅は遺物が少なかったので（図版8-5）、エリア7については全体で一まとまりとした。

東周溝（エリア1～7）では、各エリアについて、周溝の立ち上がりのラインを明確に確定するまでと確定した後との2回に分けて掘削した。およそ、第4a層が1回目で第4b・4c層が2回目に相当する。南周溝（エリア8～11）では、既に周溝の肩が検出できていたので、エリア別の掘削は1回で、実質的に第4c層が相当する。

こうして回収した埴輪片は、破片の大小を問わなければ総計で1万点を超えると思われる

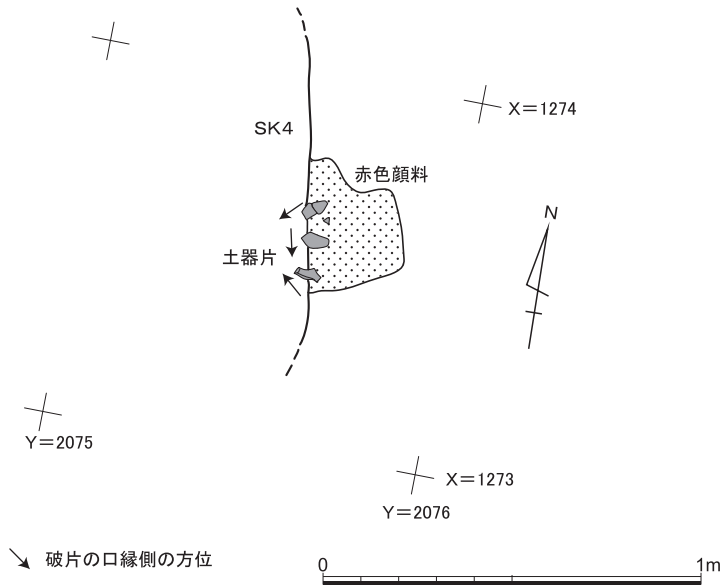


図15 8号墳南周溝の赤色顔料と土師器の出土状況 縮尺1/20

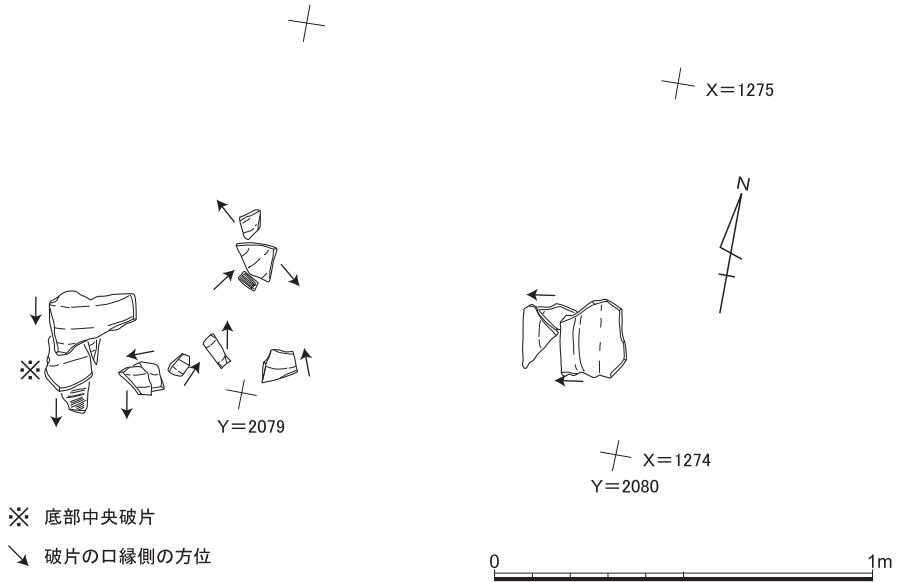


図16 8号墳南周溝の土師器の出土状況 縮尺1/20

るが、破片の大半は10cm四方に満たない（図版6-2・3）。出土する部位に偏りはなく、口縁部も底部も出土する。器表面は、焼成の悪いものでは内外面も破断面も摩滅しているが、橙色を呈する焼成の良好なものはほとんど摩滅していない。なお、周溝の内側および外側でも、周溝からおよそ10mの範囲内にある後世の包含層や遺構埋土からも、円筒埴輪の破片は出土したが、数十点にとどまる。

南周溝の埴輪 形象埴輪、朝顔形円筒埴輪（以下、「朝顔形埴輪」）、普通円筒埴輪（以下、「円筒埴輪」）が出土した（図17～19）。人物埴輪（I42）と馬形埴輪（I43）の破片は、おもに西辺のエリア10西半から出土し、破片の分布域がほぼ重なる。細かく見れば、およそ馬の破片は、人の破片よりも東側で出土する傾向があることに加え、左後脚の破片のいくつかは、人物の破片分布域より少し離れて東側のエリア10東半から出土する。エリア11からは左手綱の剝離破片しか出土しない。人物では、左半身側の破片のいくつかは、手綱破片を除く馬の破片分布域よりも西側のエリア11から出土している。さらには、人物の方が馬よりもいくぶん下位から出土する。したがって、人物は、形態面だけでなく出土状況面でも、馬の引き手を右手で持つ馬子と判断できよう。そして両者は、墳丘外側の南方でなく、北方ないし西方を向いて樹立されていた可能性が高い。

家形埴輪（I44）は、東辺のおもにエリア8から出土した。墳丘の外側から周溝に向かって、斜めに反転し、図24のC面を北ないし上に向けながら、三角形の入母屋破風のあたりから多少の勢いを得て突っ込み潰れたかの状態だった（図版8-2・3）。すなわち、C面の左下部の破片のまとまりは、墳丘内側の北東方向に巴投げされたような状態で出土し、またB面の破片は、他の3面より細片が多く、より西方で出土する傾向にある。

朝顔形埴輪を含め、円筒埴輪は、両方の周溝から出土しているが、3条突帯と確認できる小ぶりの円筒埴輪の破片は、東溝からは出土せず、南溝でも形象埴輪の分布域におよそ重なって出土する。それらのおもな破片分布域は、I46はエリア9～10で、I47はエリア10～11である。3条突帯のものはこのほかに少なくとも1個体あり、そのおもな破片分布域もエリア9なので、いずれも基本的に家形埴輪より西からの出土である。

I45は、家形埴輪の東のエリア7西半で、周溝よりもやや外側東方から、口縁を西方に向けて、軽く放られて潰れたかの状態で出土した（図版8-4）。すなわち、上面側の破片が、対向すべき接地側の破片よりも北西方向に飛び出しているものが目立つほか、底部にも、巴投げに近い状態で西方に勢いがついて飛び出た大型破片がある。なお、口縁部の刻線と穿孔で構成される記号は、墳丘外側、すなわち南側を向いていた。

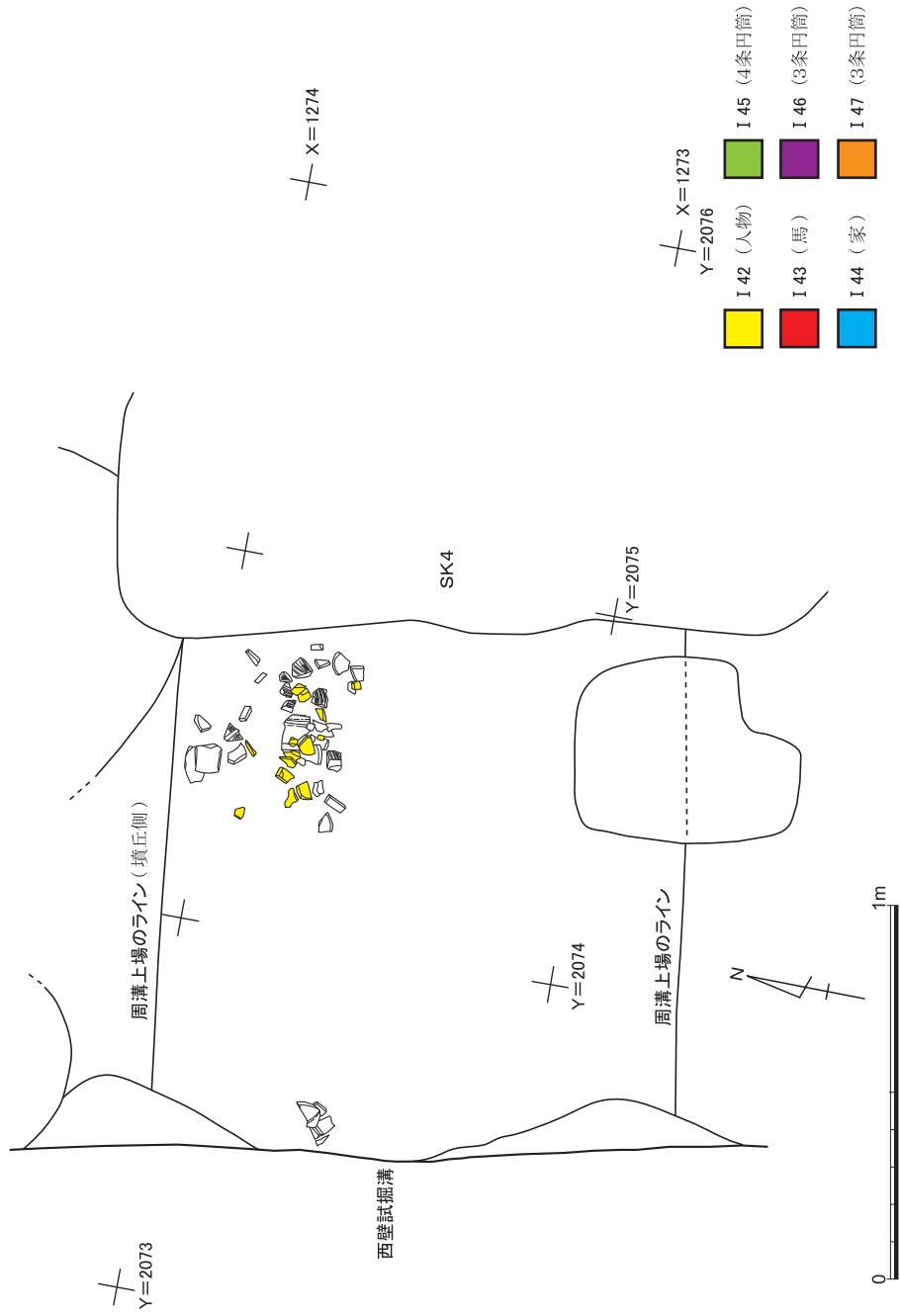


図17 8号墳南周溝の埴輪の分布 (第1次取り上げ時) 縮尺1/20

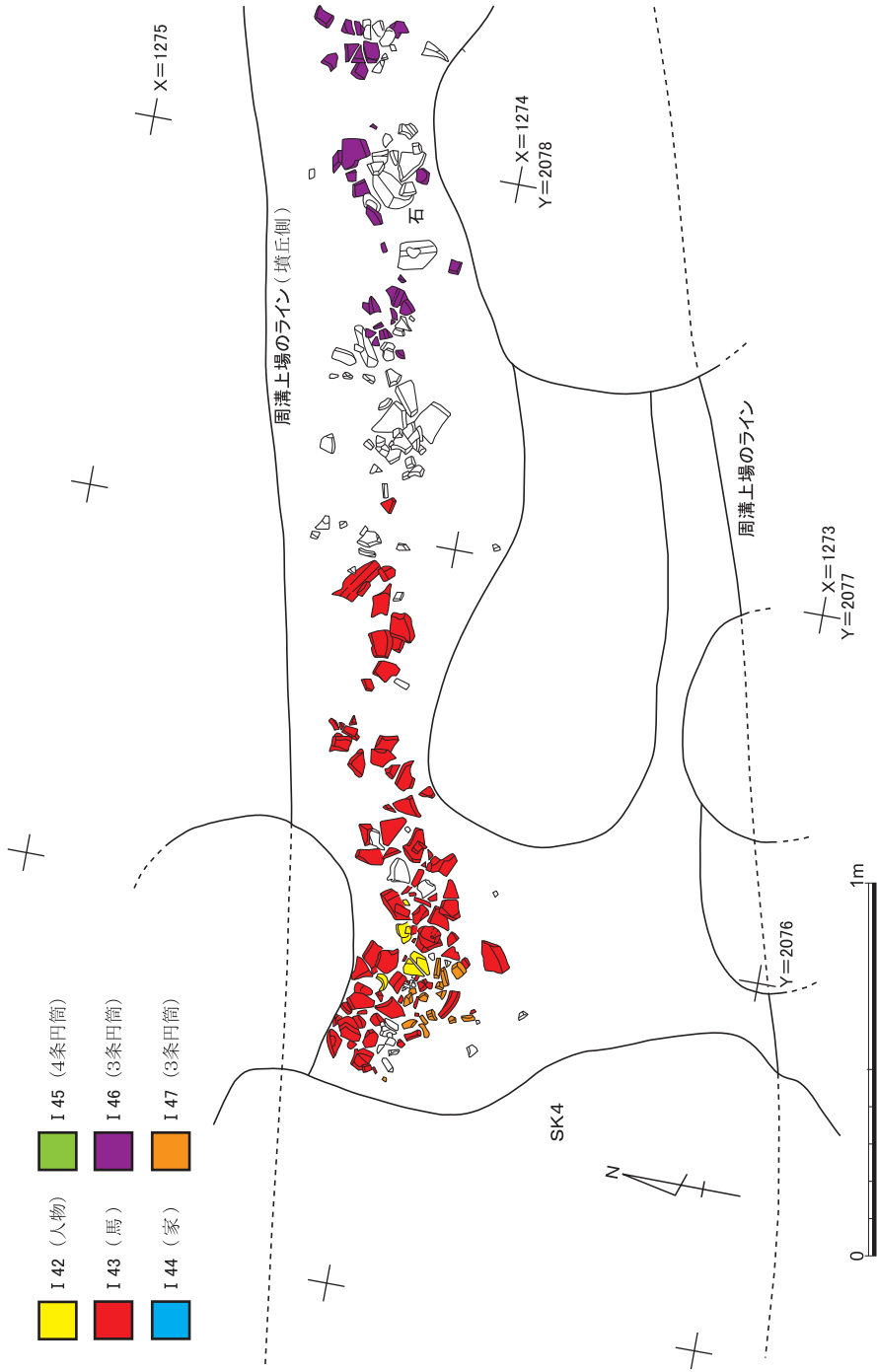


図17 つづき

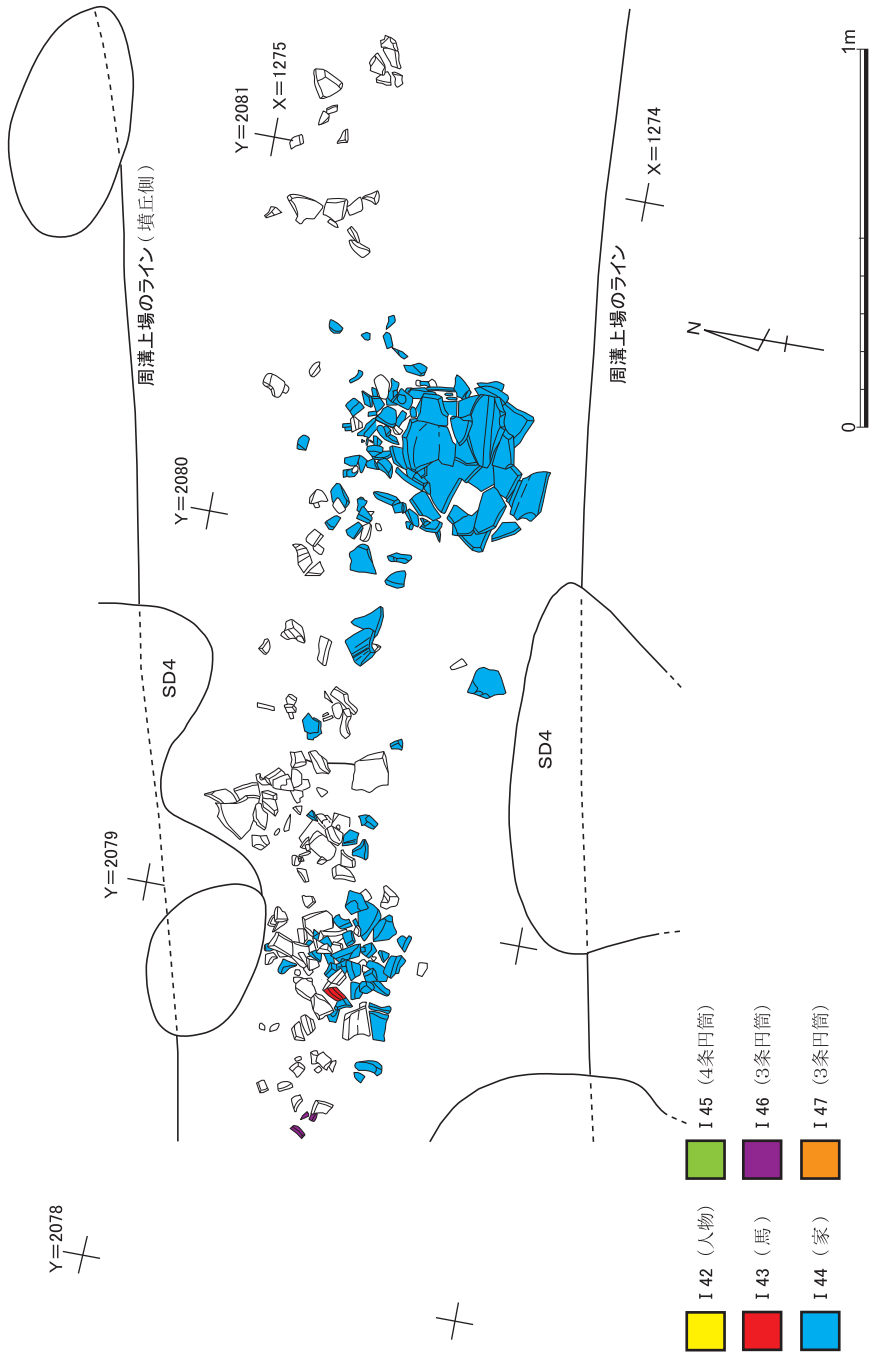


図17 つづき

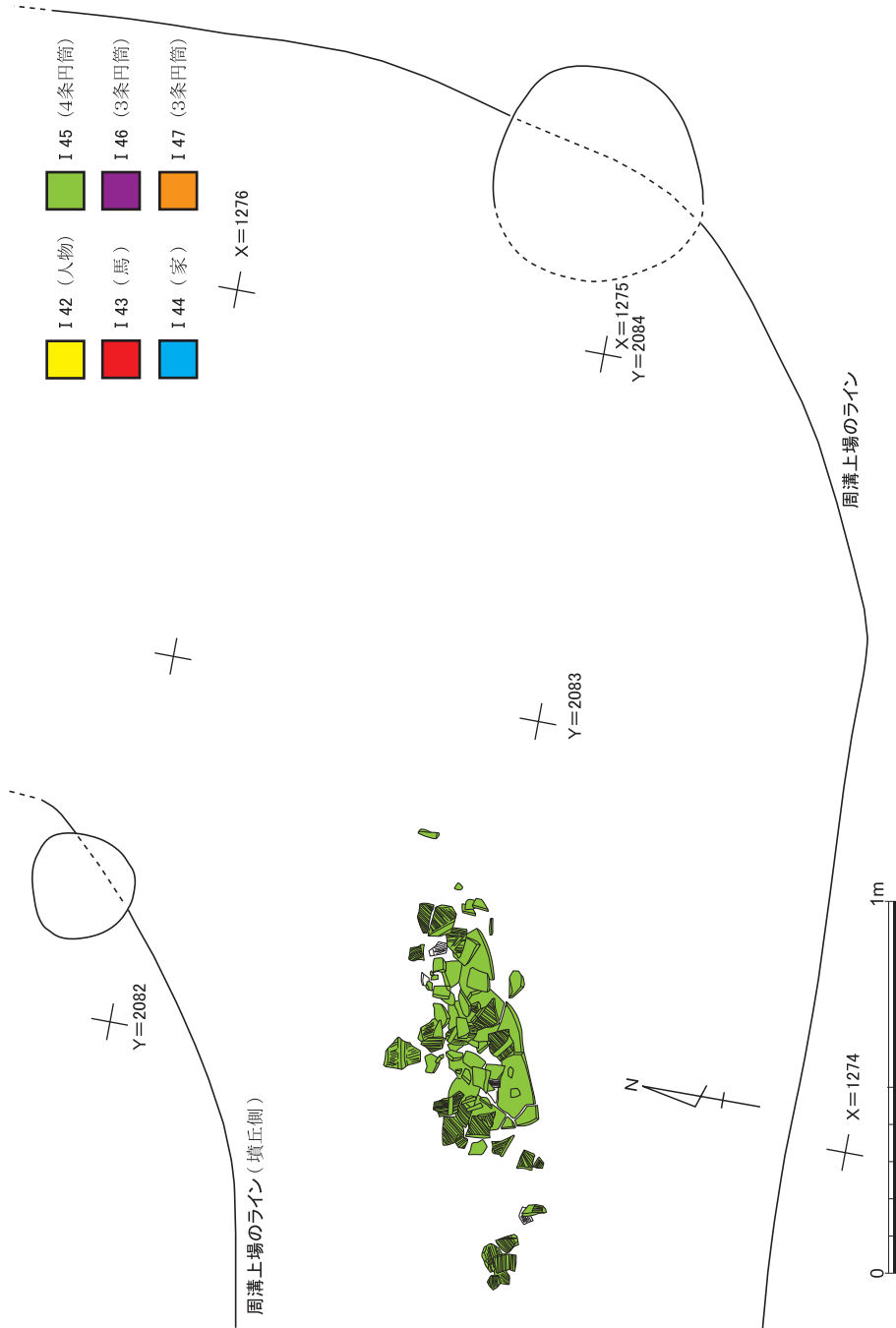


図17 つづき

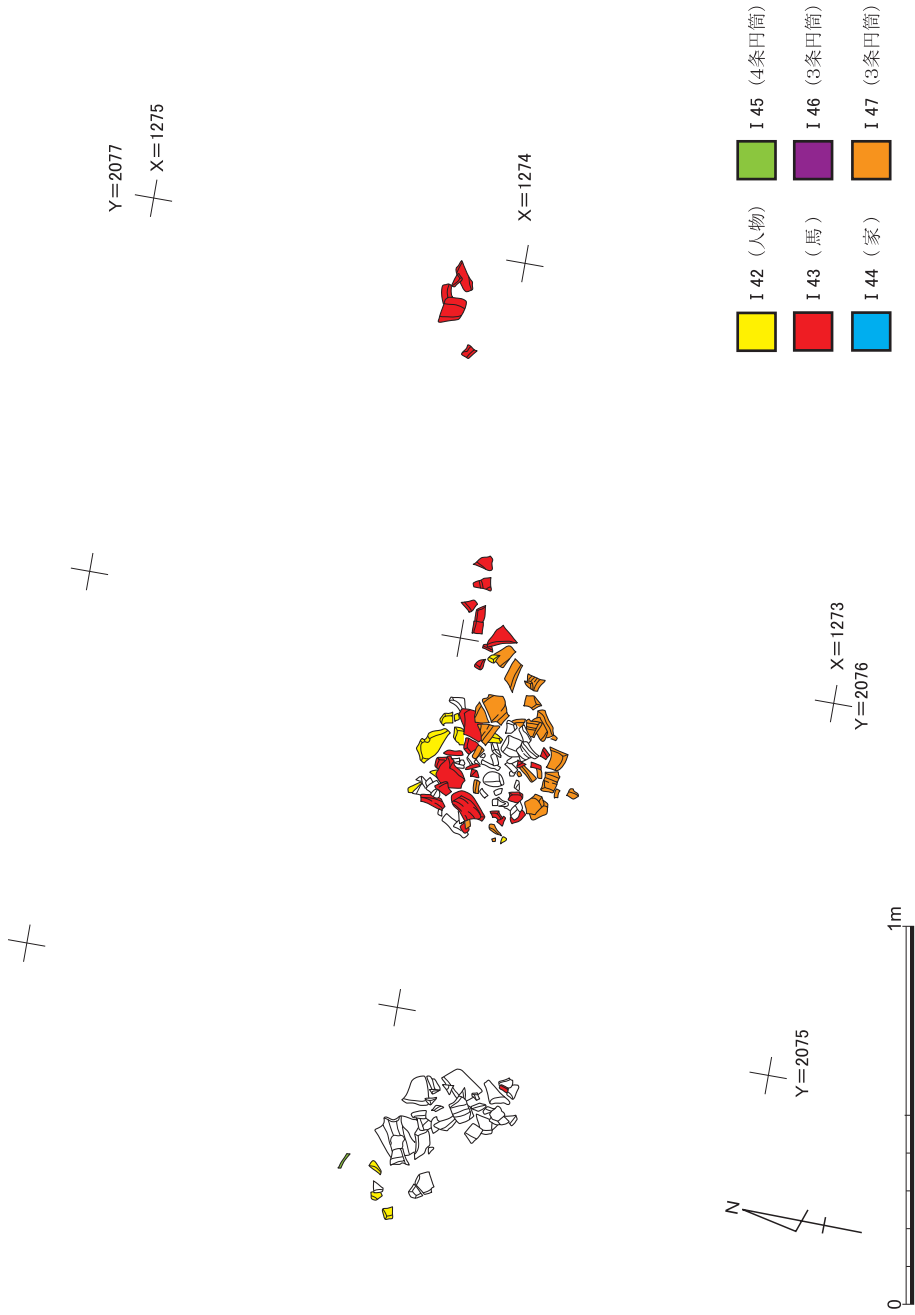


図18 8号墳南周溝の車輪の分布 (第2次取り上げ時) 縮尺1/20

古墳時代～古代の遺跡



図18 つづき



図18 つづき

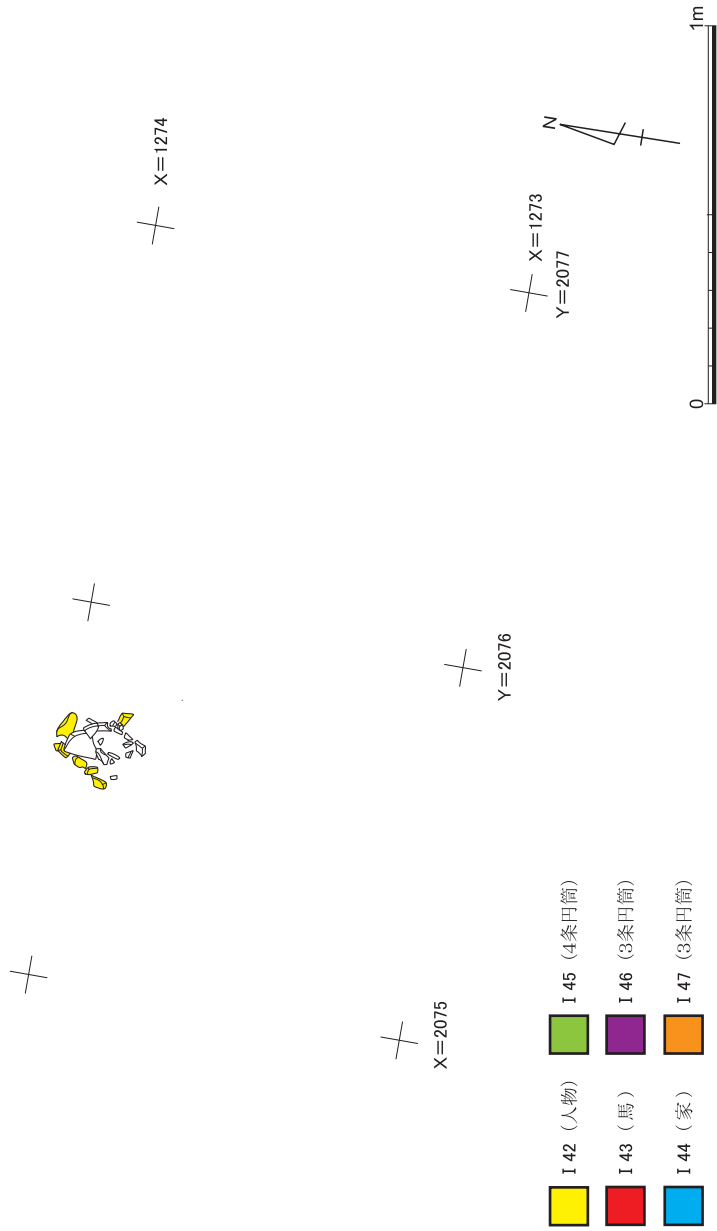


図19 8号墳南周溝の直輪の分布 (第3次取り上げ時) 縮尺1/20

南周溝ではこのほかにも、朝顔形埴輪の破片分布域がエリア7～8、8～10、11のそれぞれにあり、3個体は存在する。また、円筒埴輪も突帯が4条と思われるものの破片分布域が、エリア8～9で焼成の悪いものを含み2個体前後分、エリア9～10でも2個体前後分、エリア10～11で4個体前後分、それぞれある。以上、10m分を調査した南周溝では、3個体の形象埴輪、3個体の朝顔形埴輪、12個体前後の円筒埴輪、合計18個体前後の埴輪の出土を確認できる。

東周溝の埴輪 形象埴輪の破片は確認できない。13m分を調査し、円筒埴輪と朝顔形埴輪の破片が19個体分以上出土しているのを確認できた。南北で4m以上に達する分布域をもつことが破片の接合関係から確かめられた個体もあるが、現段階では南周溝から出土した個体と同一個体とみなせる破片は確認できていない。

I 48は、エリア4で、北東に向いた口縁が底部より少し高い位置で、その場で押し潰れたような状態で出土した(図版8-6)。すなわち、縦方向に器体を半截されたような、雨樋のような形状で出土している接地側の破片に対して、対向すべき位置にある上面側の破片は、ほとんどがその雨樋状空間内におさまって出土していることが、接合後の各破片の原位置情報からわかった。ただし、上面側の破片はその場で潰れたままの状態を保ってはいなかったようで、もとの形状時の口縁側を北に向けて出土した破片が多いわけではない。なお、口縁部の刻線と穿孔で構成される記号は、接地面に位置していた。

I 49は、エリア4・5から出土した破片を主体に接合しているが、破片分布域の南北間距離は4mを超える。I 50の朝顔形埴輪ではおもに、口縁側の外反部のまともはエリア3に、体部のまともはエリア4に、そして底部のまともはエリア3～4に、それぞれ認められる。周溝内に堆積するまでに、すでに少なくとも2つの部分に別れていたことが推測される。I 51は、5条突帯と思われる円筒埴輪で、口縁部側のまともはおもにエリア4だが、下半部から底部にかけてはエリア3～6にいたるので破片分布域の南北間距離は4mを超える。

このほかに東周溝には、エリア1～6までで少なくとも15個体前後の破片が群在する。その中には、エリア3におもな破片分布域をもつ朝顔形埴輪や、エリア4におもな破片分布域をもつ5条突帯の可能性のある円筒埴輪、エリア5におもな破片分布域をもつ4条突帯で3段に透かし孔をもつ円筒埴輪、エリア5南半～7におもな分布域をもつ焼成の悪い円筒埴輪も含まれる。焼成のあまり良くない破片は、おもにエリア5～7に4個体前後が分布するほか、エリア1にも1個体前後ある。なお、3条突帯の個体は確認できない。

(ii) 吉田二本松9号墳

中央南辺で、黄色砂の上面で南の辺を除く3辺の周溝を検出した(図版9-1, 図7)。検出面の標高は、高いところで51.8mをはかる(図20)。8号墳と同様に、周溝の内側に古墳時代の遺構を認められなかったので、主体部は削平されたと判断する。周溝は、中世以降に破壊を受けている箇所もあり、また東周溝と西周溝の南端を確認していないが、一辺の規模は13mと推定できる。周溝の深さは確認面から70cmほどで、底面は先史時代の遺物包含層にまで達する。埋土は、8号墳と同質で、上半は黒褐色～茶褐色土で花崗岩粒はサイズが大きく(第4a・4c層)、下半は黄灰色砂質土で(第4d・4e・4f層)、花崗岩粒は上半に比べてサイズが小さく含有率も低い傾向にある(図版9-2)。埴輪は出土せず、葦石もなかったと思われる。北の周溝の中央付近には、底面から40cmほど高くなっている渡り土手があり、上面で幅60cm、底部で幅130cmを測る。

遺物の出土状況 北の周溝で5点の遺物が出土した(I52～I56)。渡り土手の約1m西側の周溝底面近くから、北側から順に、須恵器の杯身(I53)と大型の甕(I54)、そして鉄製U字形刃先(I56)の3点が出土した(図版9-3)。下場はいずれも標高51.3m前後でほとんど変わらない。杯身は完形で割れていないが、甕は口縁の約半分を欠き出土時には頸部にかすかな割れ目が入っていた。杯身は、周溝北壁に接するほど偏った位置にあり、正位よりは30度ほど北側に傾いて出土した。甕は、その南東から、穿孔部を地面に向けて80度ほど南側に傾いたほぼ横位の状態で出土した。ともに、形状に照らして、その傾きを保持したままでは安定して自立するのは困難である。鋏ないし鋤の刃先と思われる鉄器は、甕の南西、周溝中軸付近で、刃先を東に向けて30度ほど北側に傾いた状態で、図27の正面を上に向けて出土した。柄の痕跡は確認できなかったので、装着していたか否かは不明である。

これらの約2m西の周溝底面の中軸付近からは、橙色を呈する小型の土師器壺が(I52)、70度ほど傾いて口縁を南西に向けて出土した(図版9-4)。下場の標高は51.3m。この傾きでは、自立可能ではあるが、甚だ不安定である。外面の唯一わずかに黒化した部分が地面を向いていたが、その内面側も、対応するように、内面で唯一わずかに黒化した部分だったので、埋没の過程で変色したのかもしれない。

さらに約2m西の周溝底面で中軸よりやや北で、別の鉄製U字形刃先が(I57)、刃先を南東方に向け、図27の正面を上に向けて出土した(図版9-5)。下場は51.3mより数cm高い。これ以外のものとは異なって、ほとんど傾いていない。後世の攪乱のすぐ際から

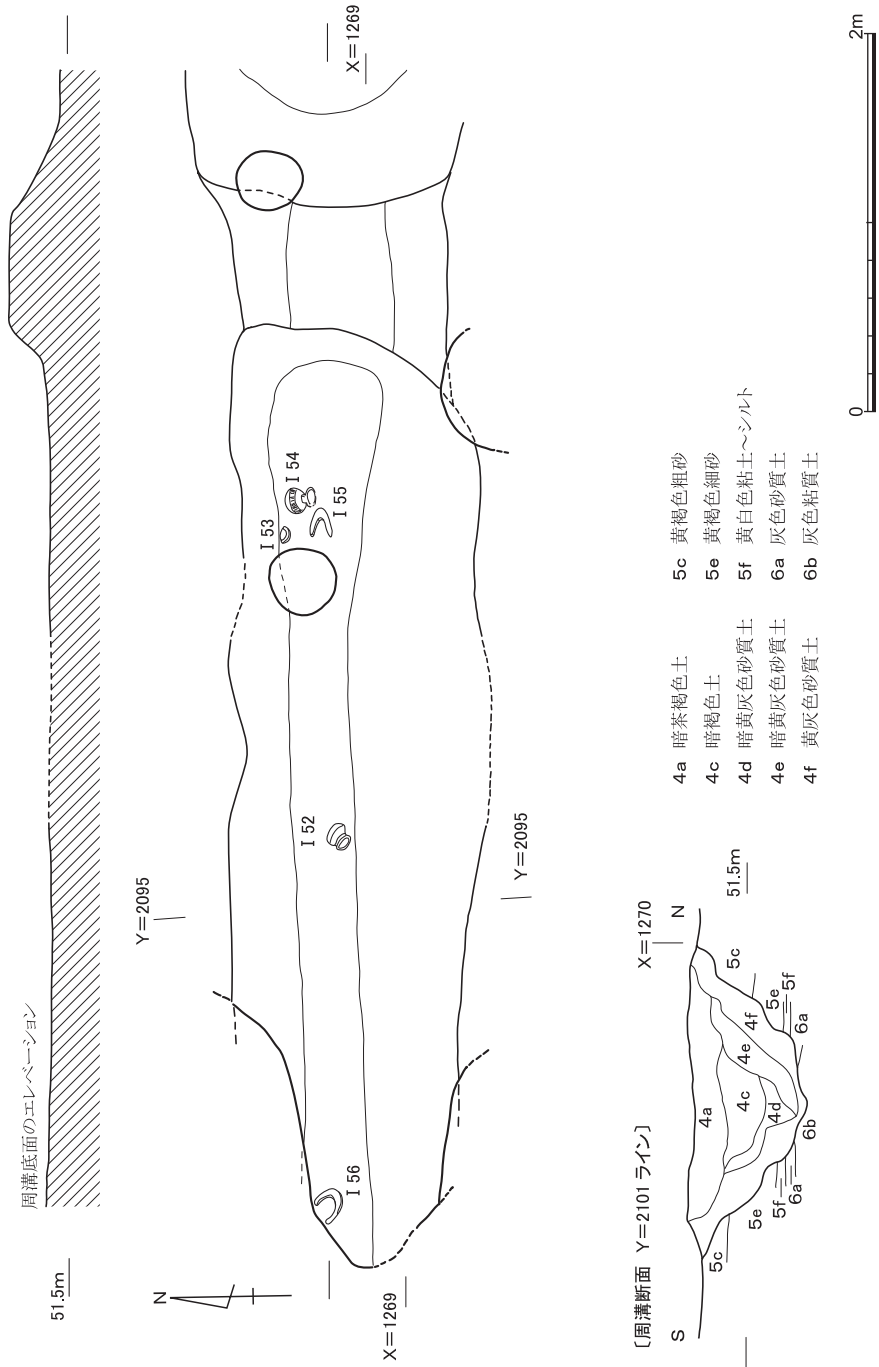


図20 9号墳北周溝の遺物出土状況と層位 縮尺1/40

の出土なので、柄を装着していたかは不明だが、装着して原位置を保っていたとすれば、鋤の場合には、北壁に斜めに引っかからないほどに短い柄だったことになる。

このほか、北の周溝からは、渡り土手の上面よりも標高がやや高い埋土上部で、破片になった1個体分の甕が出土した(I57)。1m以上離れた破片が接合している(図版9-6, 図7)。東側から出土した穿孔部を含む縦半分の体部は、穿孔部がおよそ天を向く方向で出土した。その破片は出土時の下側半分が、おそらく東方向上部からの圧力によって、その場で割れていたが、近くに石などの出土は確認できていない。この部分の6破片も含め、接合できた合計15破片では、破断面の縁辺に摩滅が認められる破片が目立つ。なお、西の周溝と東の周溝からは、遺物が出土していない。

(2) 遺物 (図版17~26, 図21~図27)

古墳時代の遺物は、8号墳と9号墳に帰属する遺物のほかには、後世の地層からの、須恵器杯蓋や5世紀前半の家形埴輪と思われる埴輪の細片で、合計でも数点にとどまる。

8号墳出土遺物 (I25~I51) I25~I34は、東周溝底面付近から並んで出土した5組の須恵器蓋坏。I25・I26は北の1組で、以下、I27・I28は西北、I29・I30は東北、I31・I32は西南、I33・I34は東南の組。I29以外は割れていない。外面の回転篋削りはいずれも時計回り。I32は「へ」字形の浅い刻線がある。工具が不慮に当たった可能性はあるが、直線的でないのでヘラ記号と思われる。これら5組の須恵器蓋坏は、坏身の口縁立ち上がりや、蓋の口縁部にある程度の変異はあるものの、いずれも、稜はシャープで、法量を考慮すれば、陶邑編年〔田辺1981〕のTK23・47に相当しよう。

I35は、これら5組の須恵器の直上やや西方から出土した須恵器壺。胴部上半にはカキ目が施され、肩部には自然釉がかかる。口縁は厚手な作りで、底部は、内面に指頭と思われる圧痕が確認できるが、外面はナデ調整で仕上げられている。I36は、I30に充満していた土を洗浄した時に確認された針状鉄製品で、部分的に折れ曲がっていると思われる。このほかに、図示していないが長さ10mm弱のものも、同じ蓋杯の内部から出土している。I37は鉄製刀子。刃先は折れている。茎の片面に繊維の残存を認められる。I38は埴輪片と共に出土した土師器甕の細片。最大3cm四方前後の細片約30点が出土したが、すべての破片がやや摩滅している。法量と全体の器形は不明。頸部内面と胴部外面に刷毛目が認められるが、口縁部の内外面とくびれ部以下の胴部内面は撫で調整。

I39~I41は南周溝からの出土。I39・I40は底面付近から出土した土師器。I39は、甕の底部から胴下半部で、内面は撫で、外面は左上がりの刷毛目。約30点の破片が回収

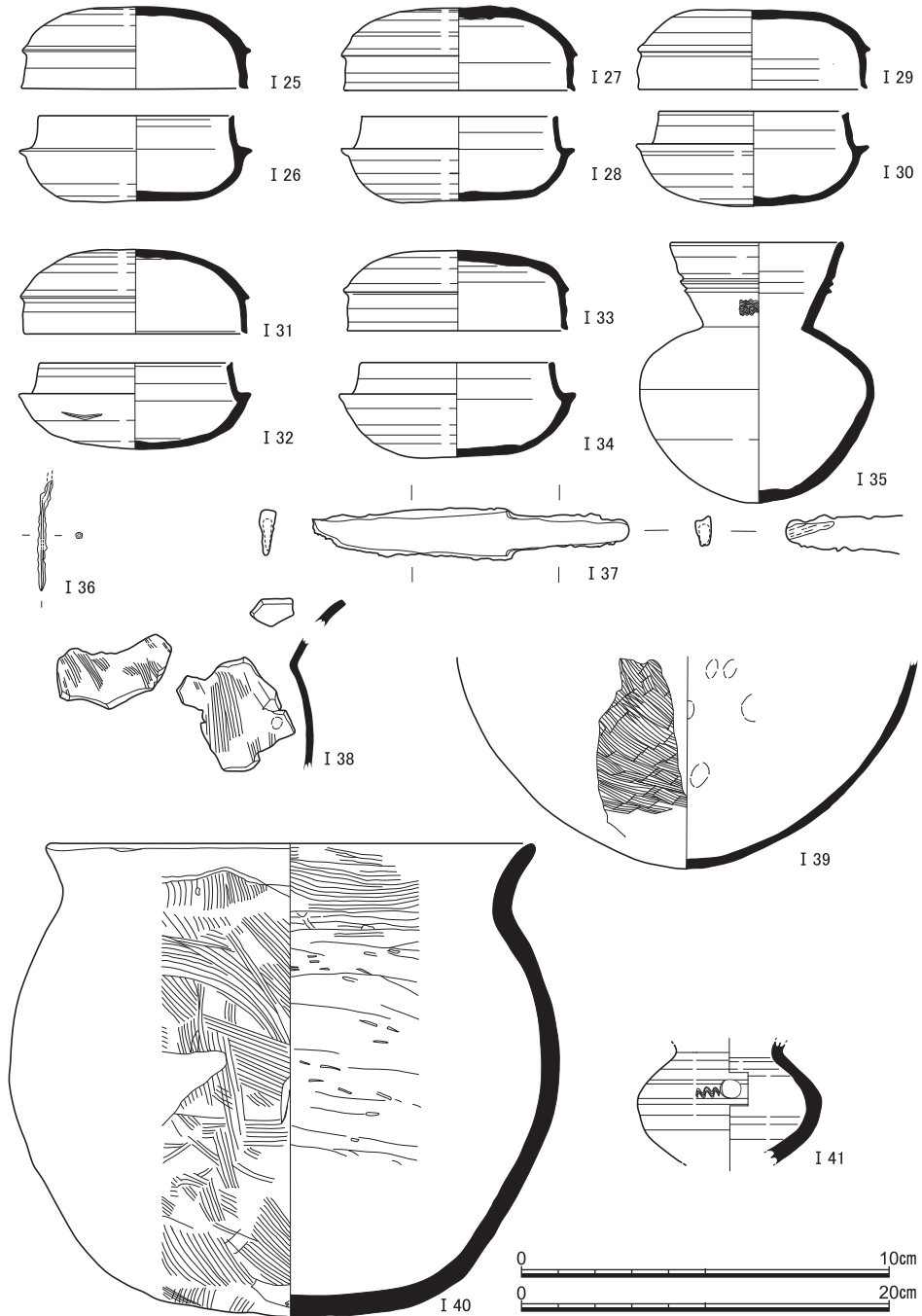


図21 8号墳出土遺物 (I 25~I 35, I 41須恵器, I 36・I 37鉄器, I 38~I 40土師器)
I 36・I 37のみ縮尺1/2

され、ほとんどが接合する。内外面だけでなく破断面にも赤色顔料が付着している破片もある。6点は赤色顔料の下部から出土しているが、そのほかは中世の土坑SK4から出土した。I40は壺。外面は、頸部から底部に不定方向の刷毛目を持つが、口縁部は刷毛目を撫で消して仕上げている。朱色を呈する内面は、胴部はケズリで頸部から口縁にかけては刷毛目を認め得る。I41は南周溝の埋土上層から出土した須恵器甕。肩部に自然釉がかかる。底部外面の叩き痕は明瞭で、この甕も陶邑編年のTK23と思われる。このほかに東周溝埋土上層からは、図示していないが、接合する須恵器甕の小破片2点が近接して出土した。外面は格子目叩きだが、内面は青海波文が撫で消されている。

I42～I51は埴輪。この10個体を含め、すべての埴輪は黒斑をもたない。I42～I47は南周溝からの出土で、I42～I44は形象埴輪。I42は人物埴輪で、両腕の形状と出土状況から、馬子と判断できる。残存部で高さは36.9cm。頭頂部は平坦で中心は開放して成形している。両脇腹と両目の穿孔は成形後の削り抜きによる。馬の引き手をもつ格好になっている右手の指先は、器表面が剥離している。I42の破片は、白桃色が基調で、焼成はあまり良くなく、内面や外面が剥離しているものが多い。全体の3割前後は復元できるが、同様の焼成で内面や外面が剥離している未接合の小破片は多い。底部までは接合しないが、焼成や刷毛目のよく似た、円筒埴輪の底部と同様の形の底部破片は、おもな破片分布域からも出土している。また、裾部の可能性のある破片も認められる。

I43は馬形埴輪。残存高55.3cmで、焼成は良く、色調はおもに下半部が橙色を基調とし、上半部は黄白色を基調とする。尻尾や耳は欠損部が多いが、全体で少なくとも6割前後の破片は回収できた。胴体や脚は板巻きの成形で、腰上面の尻繫連結部の穿孔と、両目および腹面の穿孔は、成形後の削り抜きによる。f字形鏡板と剣菱形杏葉、面繫と尻繫は浮帯状に表現するが、鐙は線刻で表現し、鞍褥は刺突を連ねた文様となっている。線刻は鞍橋にも認められる。また、口も線刻で表現する。刷毛目は実測図では一面での表記にとどめたが、前脚の後側と腹面以外は全面に細かい刷毛目を認められる。なお、f字形鏡板と剣菱形杏葉の組合せは、周溝の上層や下層から出土する須恵器の年代観に矛盾しない。

I44は家形埴輪。器高は67.0cmで、焼成は良く、色調は淡橙色を基調とする。9割以上の破片を回収しているが、人や馬と異なり大型破片も多い。器体は板を角筒状に積み上げる成形と思われる。外面は、全面におもに縦方向の細かい刷毛目を認められるが、屋根の上半部の破風板間は横方向の刷毛目である。入母屋の突き出た破風板は、B面は台形だがその対向面は三角形である。なお、断面図は屋根の上半とそれ以下とで合成した。

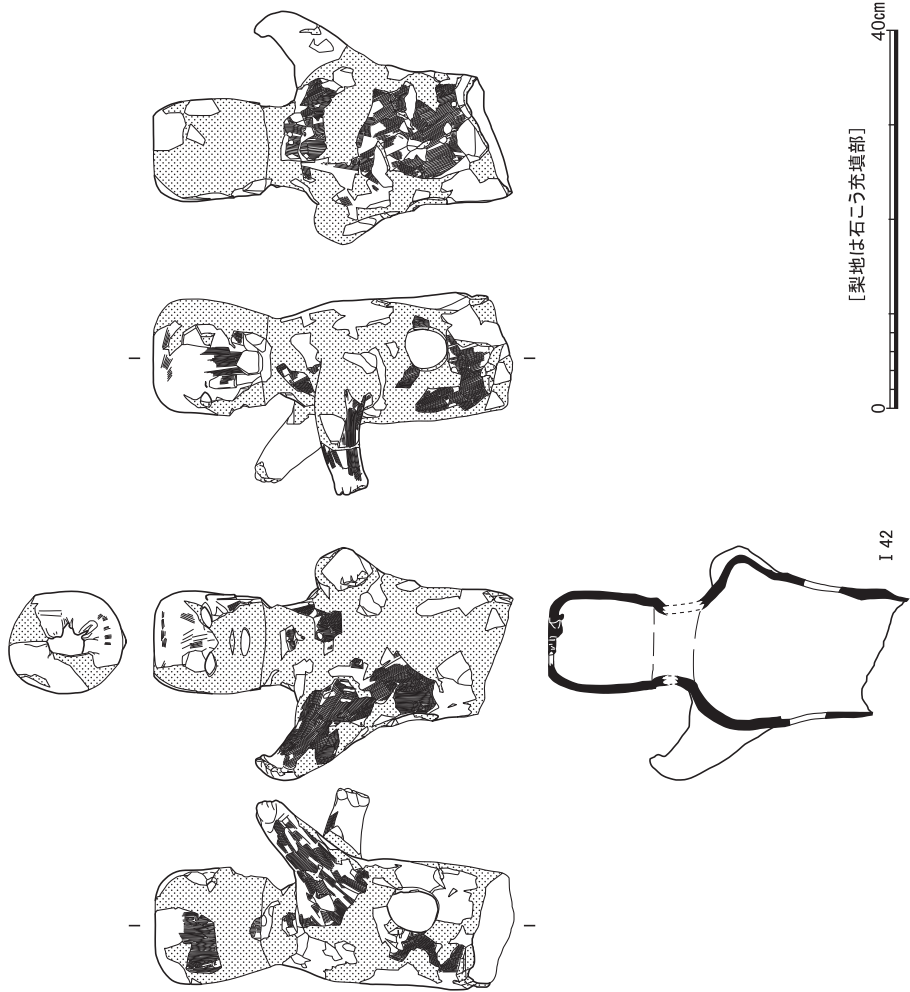


図22 8号墳出土人物埴輪 縮尺1/8

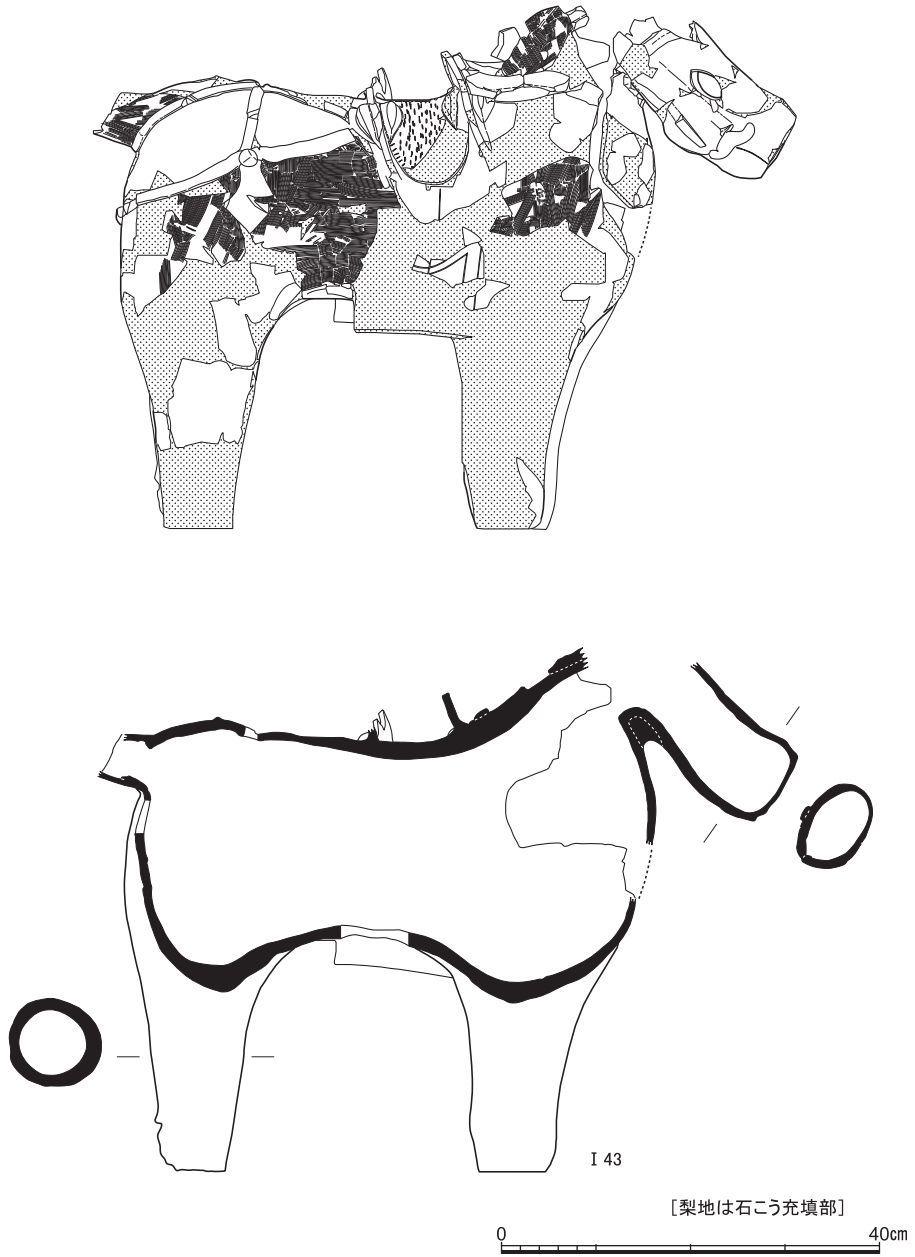


図23 8号墳出土馬形埴輪 縮尺1/8

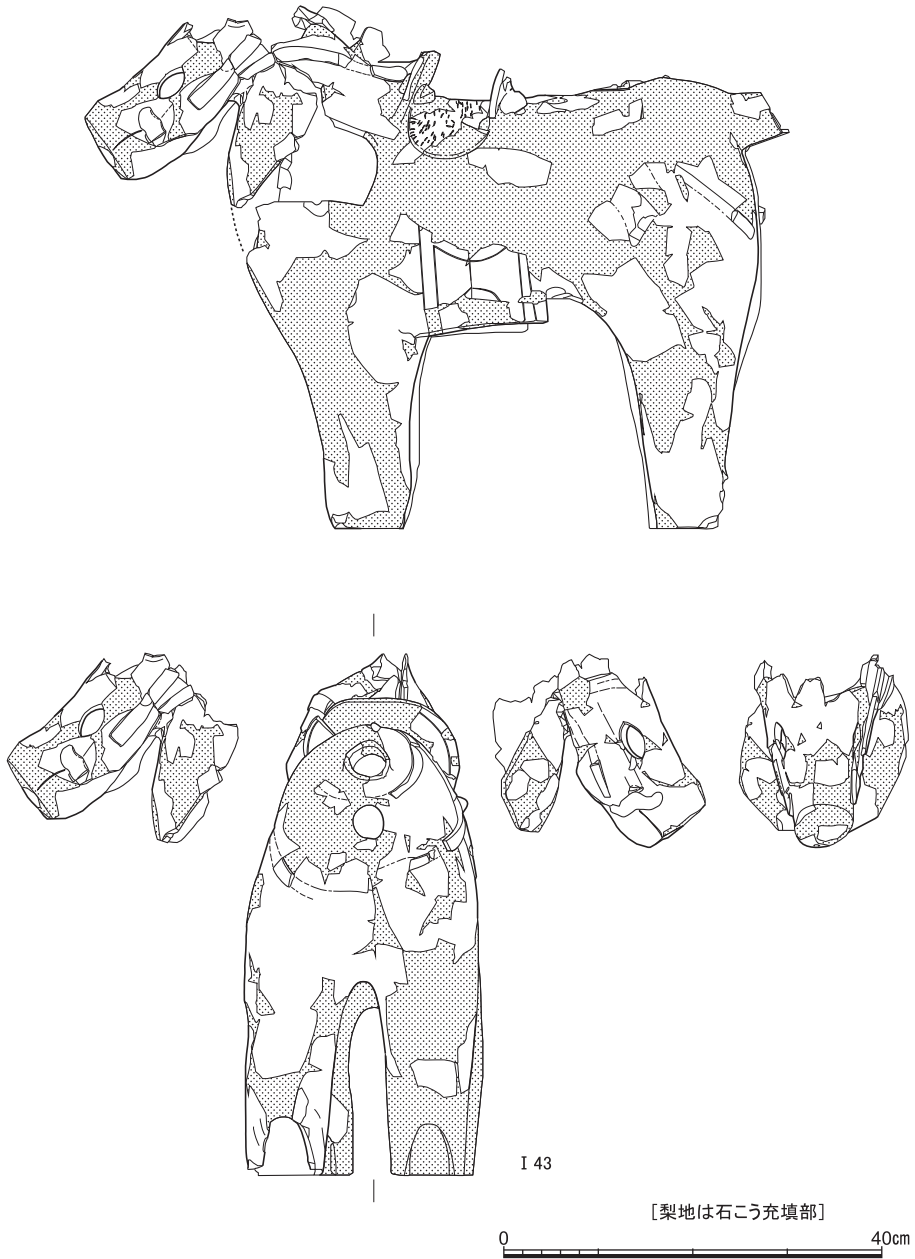


図23 つづき

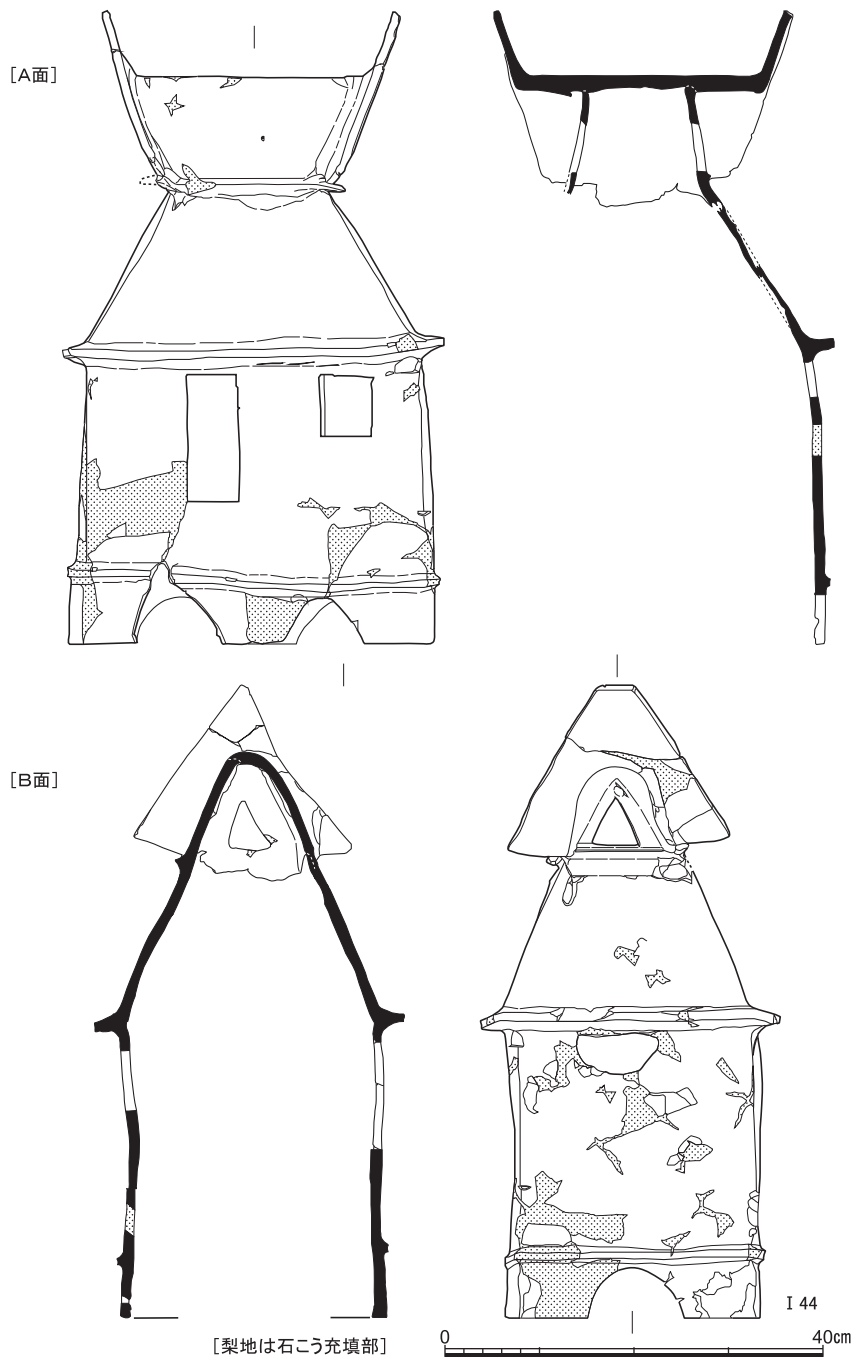


図24 8号墳出土家形埴輪 縮尺1/8

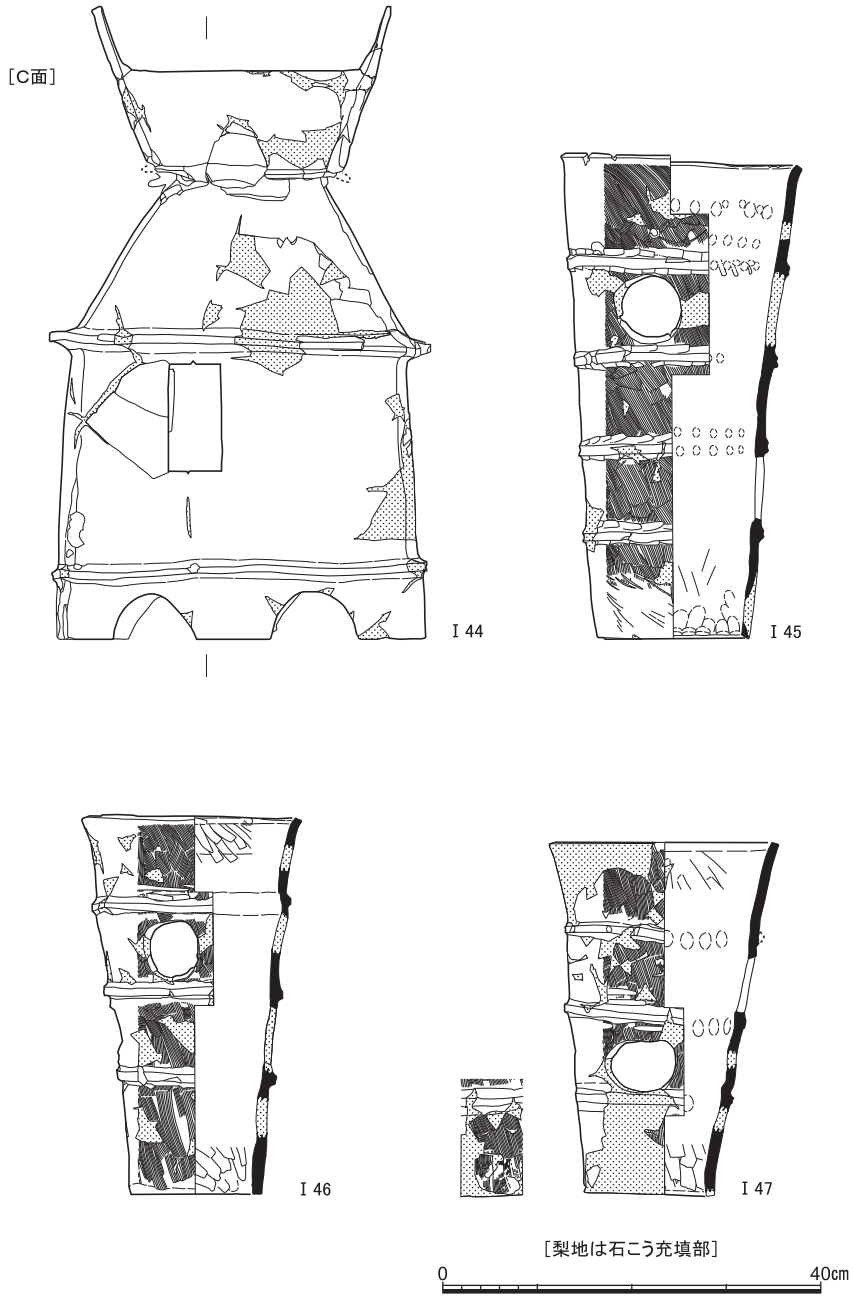


図25 8号墳出土家形埴輪と円筒埴輪（I 44家形埴輪，I 45～I 47円筒埴輪）縮尺1/8

I 45～I 47は円筒埴輪。I 45は、4条突帯で、器高51.5cmをはかる。最上段に穿孔と刻線による記号をもつ。外面の左上がりの刷毛目はストロークが10cm弱で、底部は整形の当て具痕に切られる。内面は外面刷毛目調整時に当てたと思われる指頭の圧痕が巡るが、底部は整形時に当てたと思われる指の長い圧痕が巡る。I 46・I 47は、突帯が3条で、最上段に記号をもたずに口縁がやや強く開き、器高は前者が40.0cmで後者は37.5cmをはかる。形象埴輪の近くでのみ出土する点で、他の円筒埴輪とは扱いが異なると言える。製作技術的にも出土地点的にも近い関係にあるので一括して特徴を詳述しておく。

外面の刷毛目は、視覚的に左上がりを基調とするが、口縁から15cm辺りまでは右上がりも珍しくない。底部では、鉛直方向も目立ち、そこでの単位は最大で25mm幅を認める。刷毛目は下端まで良く残り、底部接地面に被さるようなストロークも確認でき、また、底部側への砂粒の動きも散見できる。内面は、水分が多い段階の、視覚的に左上がりのナデだが、口縁は乾いた段階で、口唇を3本指でまたぐようなヨコナデ。また、口縁から15cm辺りには内傾接合痕を確認できる。突帯の裏側内面には指頭サイズのくぼみがめぐる。突帯を3本指で押さえながら撫でる時に内側からあてがったものであろう。底部の接地面は数mmのへこみがあばた状に認められ、粒径5mmの角のある花崗岩粒が半分ほど埋まっている箇所がある。こうした特徴から、正位で内傾接合で粘土帯を積み上げて成形し、器面に付く砂粒を容易に払えるくらいに乾燥してから、粗粒の離れ砂の上に正位に置き、底部整形せずに口縁を端面取りしながら整形したと思われる。なお、透かし孔については、I 47はI 46と異なって歪んだ円形を呈する。

I 48～I 51は東周溝からの出土。I 48・I 49は4条突帯の円筒埴輪で、器高52.5cmのI 48は、最上段に穿孔と刻線による記号を、最下段に半截竹管状工具による記号を、それぞれもつ。I 49は器高47.5cm。製作技術的にはI 45と同様である。I 51は突帯が5条以上の円筒埴輪。残存長で、49.5cm。4段目と5段目の透かしのあり方から、5条突帯と思われる。最上段には穿孔と刻線による記号を確認できる。刷毛目の外観は櫛歯状ではないので、ほかの個体とは容易に識別できる。この刷毛目をもつ個体は、同じ出土エリアからのもう1個体にとどまる。I 50は朝顔形円筒埴輪で、器高は57.5cm。おもな色調は黄褐色を呈し、焼成はあまり良くない。この個体の刷毛目の外観も、櫛歯状にはなるもののほかの個体とは異なるので、識別は容易で、類似した刷毛目の個体は出土していない。

8号墳からは、図示した10個体のほか、朝顔形埴輪が4個体は出土し、円筒埴輪は23個体前後出土している。形象埴輪と同様の細かい刷毛目を確認できるのは、焼成の良くない

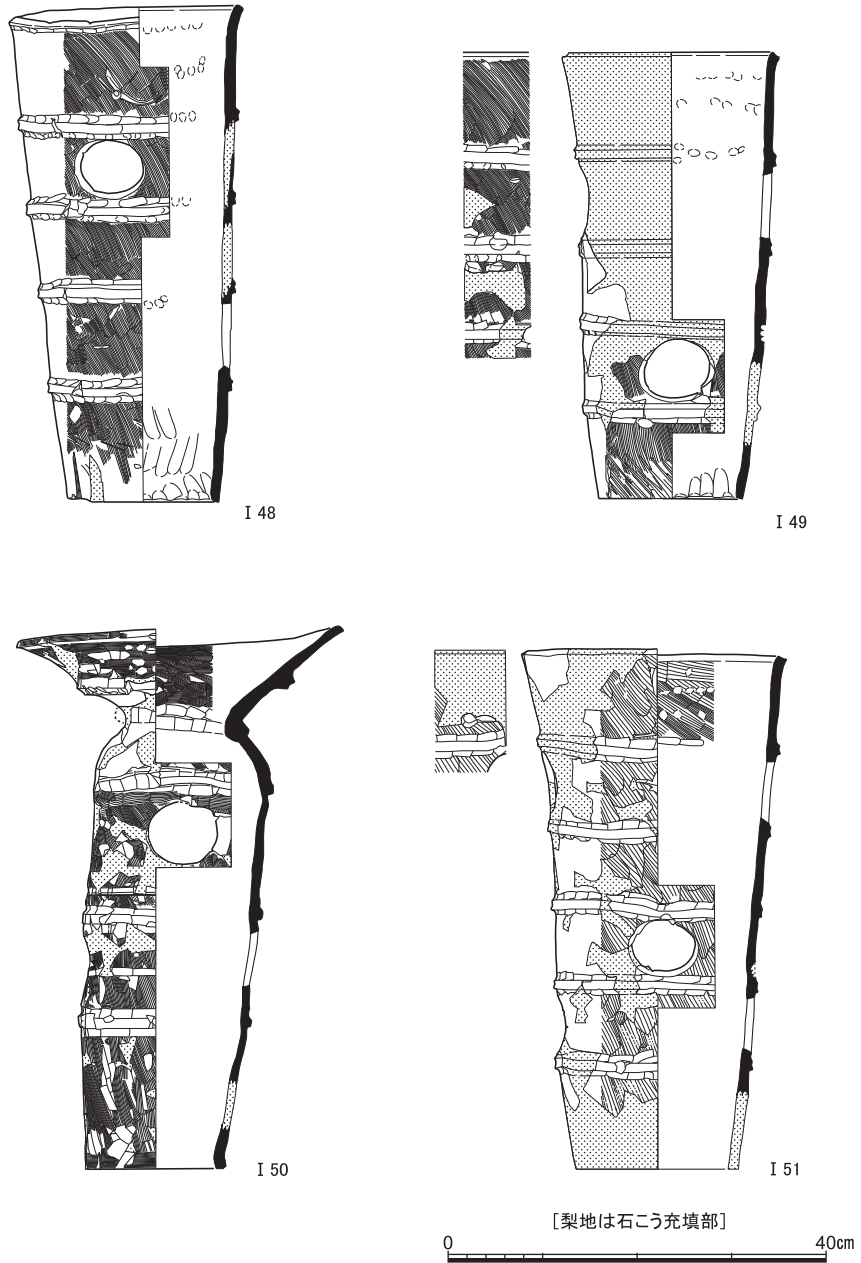


図26 8号墳出土円筒埴輪（I 48・I 48・I 51円筒埴輪，I 50朝顔形埴輪）縮尺1/8

個体に限られるようである。穿孔と刻線による記号は、円筒埴輪では3条突帯のものにはみられず、朝顔形埴輪では、I 50にはみられないがそのほかの個体にはくびれ部の直下の段に確認できる例が複数ある。また、放射状の割れを確認できる個体も複数あり、その中には、収れん部の内面側に器表面の剝離があるものも含まれる。

9号墳出土遺物（I 52～I 57） I 52～I 56は北周溝の底面近くから出土した。単独で出土したI 52は、橙色を呈する土師器の小壺。手づくね成形のような粗雑な作りで、内外全面を撫でつけ、口縁部のみが回転撫で。I 53は、I 54・I 55とともに出土した須恵器杯身。回転篋削りは時計回りで、稜はシャープ。TK 23・47と見られる。I 54は須恵器の大型の甕。口縁は、出土時に西側だったおよそ半分を欠き、残存する口縁もおもに内側からの連続小剝離を被っている。底部は、撫でて仕上げているがかすかに叩きを認められる。肩部にはほぼ全面に自然釉がかかる。I 55・I 56は、鉄製U字形刃先。ともに、断面は上端部が横V字形で中央部はY字形である。周溝の西辺から単独で出土したI 56は、左右非対称で、一方の刃部側縁が大きく減っている。使用によるものだろう。I 57は、北周溝の埋土から出土した須恵器甕。I 54と同様に口縁端部をつまみ上げ、肩部に自然釉がかかる。底部の外面に叩き痕、内面に指頭圧痕を確認できる。TK 23と見られる。

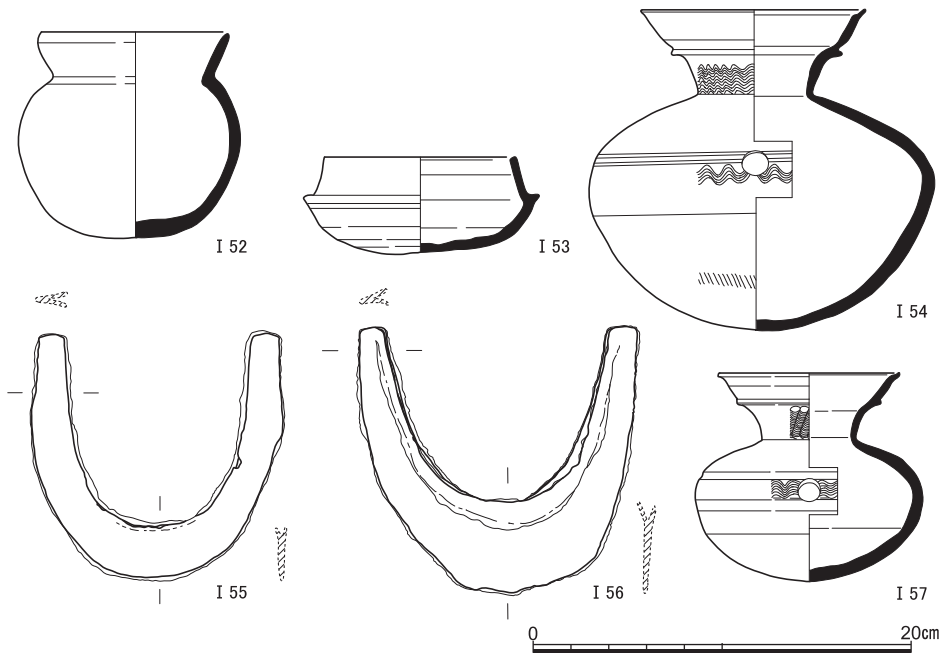


図27 9号墳出土遺物（I 52土師器，I 53・I 54・I 57須恵器，I 55・I 56鉄器）

6 中世の遺跡

(1) 1期の遺構 (図版3-2, 図28)

中世の遺構にかんしては、1期と2期にわけて説明していく。ちなみに、1期は1段撫で手法D類、2期は1段撫で手法E類が主体を占める時期となり、前者は13世紀代、後者は14世紀代におおむね相当する。

溝 SD4は調査区西辺、Y=2080のすぐ西側をはしる南北溝。北端は井戸SE1・東西溝SD3によって切られ、南端は調査区外へと続いている。X=1274付近より南側が落ち込んでおり、もっとも深いところで0.7m弱をかぞえる。一方、その北側はもっとも浅いところで0.1m弱となっている。

SD5はSD4の西側に位置する溝で、真北より約20°西に振れている。南端の深さは約0.4mであって、そこから北に向かってだんだんと浅くなっている。

井戸など 調査区南西隅では、集石SX21の下部にSE9が確認された。掘形は径1.5mほどの円形を呈し、検出面からの深さは約0.9mをはかる。水溜として用いられたと考えておきたい。底部外面に墨書を有する華南三彩盤が1点出土しており、注目される。

SE9から3mほど南東のところにSE12がみつかった。SE8によってその南端が破壊されている。円形のくぼみの部分が存し、検出面からの深さは0.7mとなる。これもまた水溜であった可能性を指摘しておきたい。

調査区北東隅には、SE11が検出された(図版10-1)。当初、不整形の輪郭が認められ、その内側を掘り進めていくと、深さ0.4mのあたりで灰色粘質土がひろがっていた。ただし、その中央付近で径1mほどの円形の部分が残し、そこからおよそ2.2mの深さのところまで掘り終えた。底部の標高は48.78mをはかる。素掘りの井戸とみなしてよからう。

土坑 出土遺物から、SK1~3, SK10・11がこの時期に属する土坑と考えられる。それらのうち、SK10はSE11のほぼ北側に位置する隅丸方形の土坑。検出面からの深さは約0.5mをかぞえる。

土器溜 調査区中央からやや東よりのSX4, そのほぼ北側に近距離で確認された調査区北端のSX42~44, 調査区中央南辺のSX46(図版10-2)がこの時期の土器溜に相当する。これらのうち、SX46からの土師器の出土量が多かった。

遺物溜 調査区中央のあたりから検出されたSX45は、土師器・須恵器・青磁・石鍋の破片がかたまっていた。D₆類の土師器皿1点が確認されているので、この時期のも

中世の遺跡



図28 中世の遺構 縮尺1/300

のであると推測しておきたい。

(2) 2期の遺構 (図版3-2, 図28)

溝 調査区の西から, S D 2・8・6・7・10の南北溝, 調査区南東部のS D 11・12の東西溝が検出された。S D 8をのぞく南北溝はいずれも北端・南端ともに調査区外へと続いている。

S D 2は検出面から底の部分までは北辺で約1.2m, 南辺で約0.7mをはかる深い溝となる。ただし, 調査区北端から中央付近にかけて, その東側に0.8~1.2m, 西側に0.8~1.4mの幅の浅いくぼみがひろがっていた (図版10-3)。なお, 東側の浅くへこんでいる部分から, S D 8が確認されている。

S D 10は断面がV字形を呈する溝。検出面からの深さは, 北辺で約0.9m, 中央付近で約0.8m, 南辺で約0.3mと, 北から南に向かってだんだんと浅くなっている。出土した土師器のうち, 残りのよいものはD類が中心となる。ただし, E類の土師器皿の破片も多くみうけられた。

なお, 本調査区の北に所在する220地点から, Y=2100に沿って, 北端・南端とも調査区外にのびる南北溝S D 5がみつまっている。断面がすどいV字形で, 室町時代中期(15世紀)のものであるとされる〔伊藤1999a〕。S D 10はこのS D 5に接続する可能性が存しているといえる。しかしながら, 220地点のS D 5の南端はY=2100のすぐ西側に位置しており, 結局のところ, S D 10とは直線的にはつながらない。したがって, 別個の溝であるとも推測され, いずれが妥当かは後日の調査をまたなければなるまい。

井戸 調査区北西隅のS E 1, 中央あたりのS E 7がこの時期のものに相当する。

S E 1は円形の石組井戸で, 掘形は径約4mの大きな円形を呈する。石組は高さが3mほど残存していた (図版10-4)。井筒の下部には2段の方形木枠が確認され, その下からは水を溜める桶を設置していたと思われる円形のくぼみが検出された。そのうちからE₁類の土師器皿1点が出土している。井戸底の標高は46.32mである。

S E 7も同じく円形の石組井戸で, 長軸約3.5m, 短軸約2.5mの楕円形の掘形をもつ (図版10-5)。その埋土よりE₃類の土師器皿などがみつまっている。井筒の下部から2段の方形木枠が検出され, その下には曲物をおいていたとみられる円形の水溜がともなっていた。井戸底の標高は47.76mをはかる。

土坑 調査区中央南壁際のS K 5, 南東部のS K 7~9がこの時期のものにあた

る。

S K 5は方形の竪穴状の土坑で、調査区外へと続いている。深さは約0.6mをはかる。その埋土には赤褐色を呈する粘土のかたまりが多く含まれていた。

S K 7は円形の土坑で、検出面からの深さは0.3mほどとなる。拳大の石が詰められており、そのあいだから常滑焼および備前焼の甕の破片がとりあげられた。少なくとも2個体分が認められる。

S K 8は不整形の土坑で、深さは約0.4mをはかる。その埋土からはあわせて61枚の銭貨が出土した。4つの文字がわかるものは55枚で、その内容は唐銭である開元通宝が5枚、古くは至道元宝、新しくは政和通宝の計20種類の北宋銭が50枚となる。

S K 9は楕円形の土坑で、検出面からの深さは0.5mほどとなる。その埋土には拳大の石がまばらに含まれていた。

土器溜 調査区北西部のS X 1, 中央北辺のS X 2・22・28(図版12-1), 中央南端のS X 3, 中央付近のS X 5・6・32, 東辺のS X 11(図版11-2), 中央やや西寄りのS X 23・30(図版11-3), 南東部のS X 34(図版12-2)・36(図版11-4)・37, 北東部のS X 41(図版12-3)が相当する。

S X 1およびS X 36は、土師器皿が重ねおかれた状態で検出された(図版10-6・11-4)。また、S X 2にかんしては、当初ひろがっていた土師器(図版11-1)をとりあげていくと、最終的には平面が東西約0.7m、南北約1.5mの長方形の範囲で、深さが約0.4mのところまで土師器がつまっていたのが確認された。

陶器溜 調査区南東部のS X 9・10・12・15・16・17(図版11-5)・18・20・35および南西部のS X 31が属する。いずれも常滑焼ないしは備前焼の甕の破片がかたまっていた。けれども、完形に復元することはすべてかなわなかった。口縁部の破片などから、S X 9・12・15~18・31・35には1個体分、S X 10には2個体分(図版13-1), S X 20には3個体分(図版11-6)が少なくとも含まれていることが知られる。先に述べたS K 7出土遺物、以下に説明するS X 13の埋甕などもあわせて、南東部に甕の出土が多いことは、邸宅の存していたことをうかがわせ、すこぶる興味深い。

遺物溜 調査区中央北端に位置するS X 24は、土師器・陶器・瓦器・青磁などの遺物や礫がひろい範囲にわたってかたまっていた。

埋甕など 埋甕およびその周辺の石敷などをS X 13とした。

掘形が楕円形の穴を作り、東寄りに常滑焼の甕を正しい位置にすえて、そのまわりに土

を入れている。甕は全体にわたって割れ目が生じていた（図版13-3，図30）。甕の西および南西で、口縁から0.2mほど下のところに、E類の土師器皿の破片を主体とする土器溜が確認された（図版13-2，図30）。甕の口縁直上には焼土がひろがっており、それをとりのぞくと甕をかこむように礫が検出された（図版14-1，図29）。埋甕と石敷とは一体的にもうけられた蓋然性が高い。なお、橙褐色のかたまりとなる焼土は、甕のなかの茶褐色粘質土・灰茶褐色砂質土のうちにも混ざっているのが認められた。

埋甕の底部直下から9枚の銭貨が見つまっている。4つの文字がわかるものは3枚で、北宋銭である皇宋通宝・元豊通宝・元祐通宝となる。甕の底部にも割れ目がみうけられ、それら銭貨はもともとその内部底面にあったとも考えられる。換言すると、裂け目から外部に出た可能性も残されているといえる。それゆえに、埋甕は渡来銭を貯わえるために用いられたものであったとも想定されるものの、はっきりとした根拠を提示することができず、残念ながらその使われ方は未詳とせざるをえない。

ちなみに、本調査区の東隣に位置する261地点の北西隅から、常滑焼の甕を正位で埋めたS X38が検出されている。ただし、その時期にかんしては、甕の型式をふまえ、13世紀前半であると解されている〔千葉・阪口2005〕。

集 石 調査区南西隅からS X21が確認された（図版14-2）。

東端では、石がほぼ南北に一列にならべられている。その石の大部分は長軸が20cm、短軸が10cmほどのものとなって、長軸が東西方向にすえられている。そうした石列の途中からは、拳大から幼児頭大の石が積みあげられているのがみうけられた。その深さは、上段の石の上面から下段の石の下面まで約0.5mとなる。一方、南西部分には、拳大から幼児頭大ほどの石がかたまっており、西から東に向かって低くなっている。南西隅の石の上面から、その北東に1.5mくらいはなれて位置する石の上面までの深さが約0.3mをはかる。

本調査区の東に接する261地点からは、S X26・35・60というこの時期の3基の石室が検出されている。石室にかんしては、「地面を掘りくぼめ、四周に礫を壁状に配置した遺構」であると説明されている〔千葉・阪口2005〕。

S X21は長方形の掘形を呈していた可能性が高く、石が重ねおかれている点をも考えあわせると、石室であったのではないかと推察される。そうであるならば、中央付近に散在している石は、四方の石積からくずれ落ちたものということになろう。その範囲は南北が4mほど、東西が3m強になるかと思われる。

図28に示したもののうち、調査区南東部のS X14・19・38、中央やや南側のS X27、東

中世の遺跡

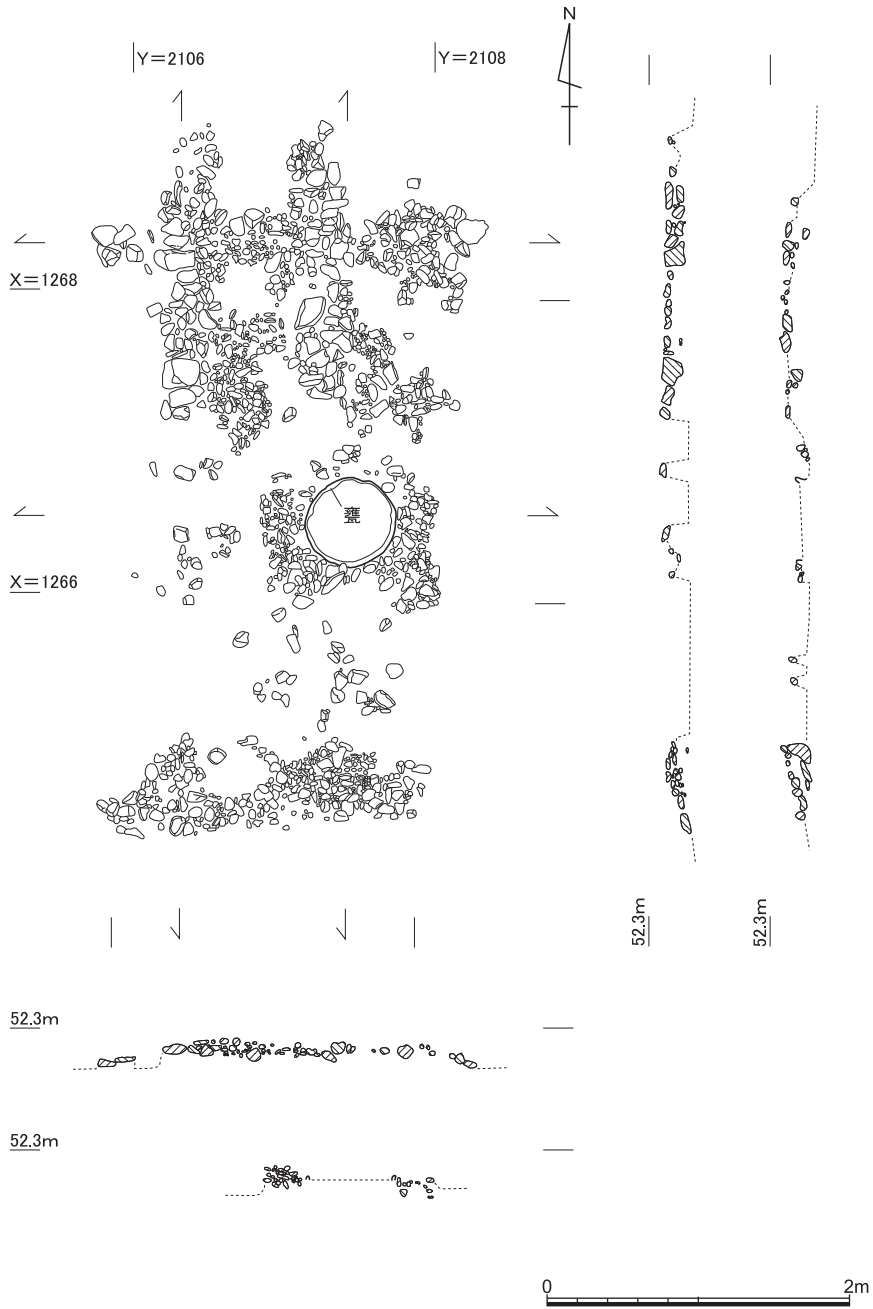


図29 S X13埋甕および石敷 縮尺1/50

京都大学吉田南構内A N21区の発掘調査

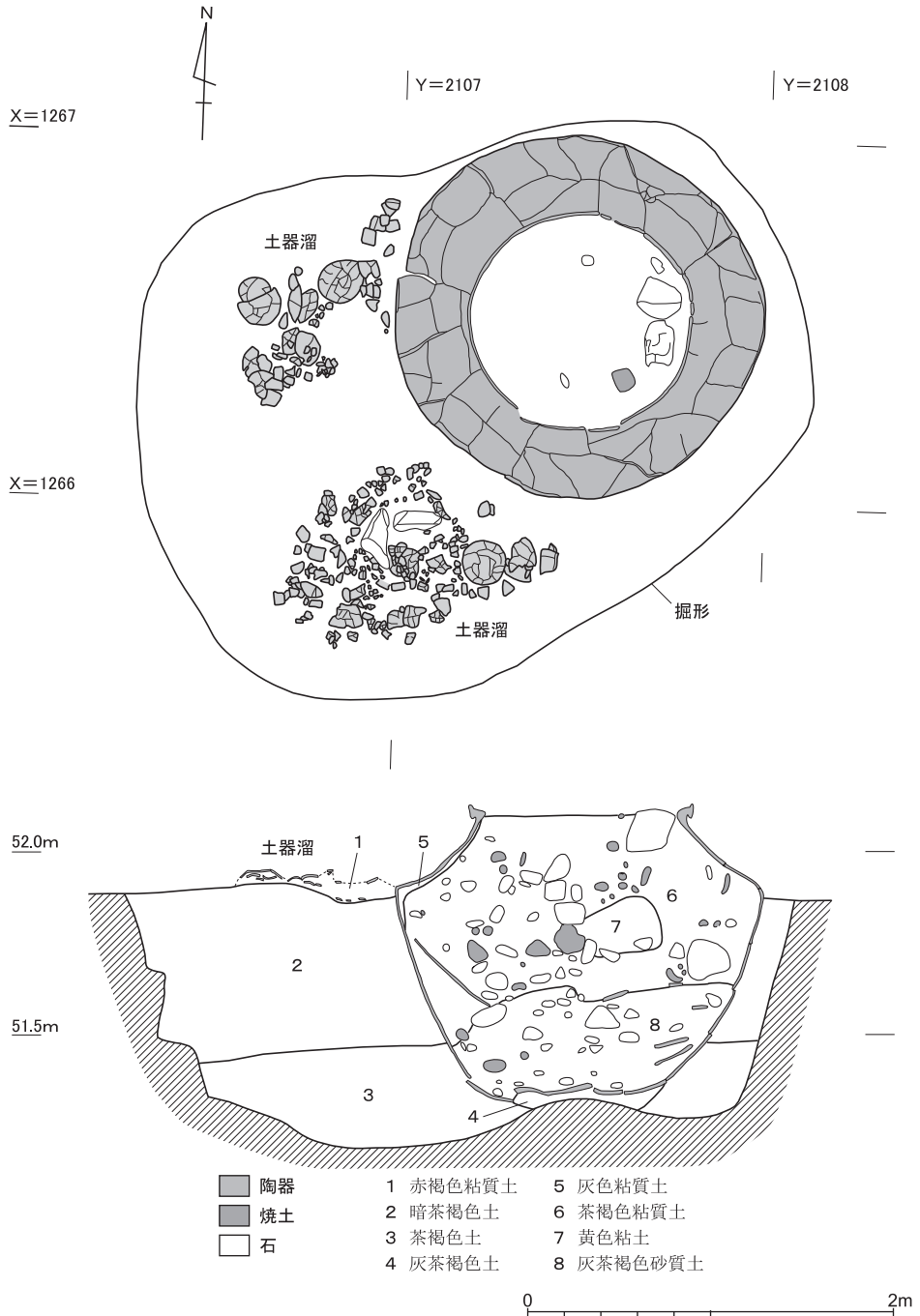


図30 S X 13埋甕および土器溜 縮尺1/20

端中央付近のS X40が集石となる。S X27がいつ作られたのか判然としないものの、それ以外のものは、出土遺物にもとづくと、この時期に属すると考えられる。

本調査区では、S D 2の南1/3くらいの上部において南北に細長くおかれたものなど、多くの集石がみついている。けれども、それらの大半は時期を分明にすることができず、かつ図示すると雑然となってしまうので、割愛することにした。

(3) 1期の遺構の遺物（図版27、図31～35）

S D 4 出土遺物（I 58～I 82） I 58～I 63は土師器小皿。I 58～I 60はD₂類、I 61はD₃類、I 62・I 63はD₆類。I 64～I 74は土師器皿。I 64は2段撫で手法のC₅類、I 65～I 67は乙訓在地形、I 68はD₂類、I 69はD₃類、I 70は乙訓在地形、I 71・I 72はD₅類、I 73・I 74はD₆類。乙訓在地形の土師器皿は、口縁部外面に1段の横撫でをほどこし、その端部をやや外反させる〔京都市埋文研2004 a pp.164-65〕。I 75は灰白色を呈する土師器皿。体部外面には回転篋削り、底部外面には回転糸切りの痕跡が認められる。

I 76～I 79は瓦器鍋。いずれも口縁部が2段に屈曲し、端部に面をもつ。I 80は瓦器盤。口縁端部が内側にやや出ている。I 81は灰色を呈する須恵器すり鉢。口縁端部が上方に伸び気味となる。I 82は青白磁の合子蓋。

S E 9 出土遺物（I 83～I 100） I 83～I 88は土師器小皿。I 83は乙訓在地形、I 84～I 87はD₂類、I 88はD₆類。I 89・I 90はD₂類の土師器皿。I 91～I 93は白色系の土師器小椀。I 94～I 96は白色系の土師器椀。I 97は土師器羽釜。口縁部外面には横撫でをほどこし、端部を外側に丸く折り曲げている。鋳部から下の部分に煤が付着している。

I 98は灰白色を呈する須恵器すり鉢。体部は厚みを減らしながら直線的に斜め上方に伸び、口縁部は玉縁状に肥厚している。底部外面に回転糸切り痕が認められる。

I 99は華南三彩盤。口径は推定33cm、器高は8.7cmとなる。体部内外面および口縁部内外面には緑釉が、底部内面には緑釉とともに褐釉・黄釉がかけられている。底部外面は露胎で、浅黄橙色を呈する。体部内面下半には2条の沈線がめぐり、底部内面には1本の花が刻まれているものと思われる。体部は丸みをおび、口縁端部は玉縁状となる。13世紀末から14世紀初頭ごろに作られたと考えられる。

底部外面には、中央に近いところに2文字、端のあたりに2文字の墨書が確認される。前者の1文字目は「福」、後者の1文字目は「升」の可能性が高い。

I 100は青磁椀。オリーブ黄色を呈し、底部外面を露胎とする。

S E 11 出土遺物（I 101～I 103） I 101は「て」字状口縁手法のB₂類、I 102・I

103はC₃類の土師器皿。

S K 1 出土遺物 (I 104～ I 106) I 104はD₂類の土師器小皿。 I 105・ I 106は白色系の土師器椀。前者の口縁部分には「、」の墨痕が認められる。

S K 2 出土遺物 (I 107・ I 108) I 107はD₄類の土師器小皿。 I 108はD₃類の土師器皿。

S K 3 出土遺物 (I 109～ I 118) I 109～ I 112はD₃類の土師器皿。 I 113～ I 115はC₅類, I 116～ I 118はD₃類の土師器皿。

S K 10 出土遺物 (I 119～ I 135) I 119～ I 121はC₃類, I 122はD₅類の土師器小皿。 I 123はC₃類, I 124・ I 125はC₅類の土師器皿。 I 124には口縁端部に煤がわずかに付着している。

I 126～ I 130は瓦器小椀。いずれも口縁内端部に段をもつ大和型で, 口径・器高はほぼ同じとなる。口縁部外面に横撫で, 体部内面に圏線磨きがほどこされている。高台は断面三角形の低いもので, いずれも貼り付けられている。第Ⅲ段階E型式に相当し, 13世紀末ごろに作られたと考えられる〔森島2005〕。

I 131～ I 135は山茶椀。 I 131・ I 132は小椀で, 口縁部がわずかに外反する。 I 132は内面に自然釉が付着している。 I 135もまた小椀で, 器壁が厚い。内面に自然釉が付着し, 底部外面に糸切り痕が認められる。 I 133・ I 134は小皿で, 底部外面に糸切り痕が残る。

S K 11 出土遺物 (I 136・ I 137) I 136・ I 137は乙訓在地形の土師器皿。

S X 4 出土遺物 (I 138～ I 140) I 138・ I 139はD₃類, I 140はD₄類の土師器小皿。

S X 42 出土遺物 (I 141～ I 143) I 141・ I 142は乙訓在地形の土師器皿。 I 143は土師器受皿。

S X 43 出土遺物 (I 144～ I 149) I 144はD₂類, I 145はD₆類の土師器小皿。 I 146・ I 147は乙訓在地形, I 148・ I 149はD₅類の土師器皿。

S X 44 出土遺物 (I 150～ I 154) I 150・ I 151は乙訓在地形の土師器小皿。 I 152～ I 154は乙訓在地形の土師器皿。

S X 46 出土遺物 (I 155～ I 200) 口縁部が1/6以上残る土師器をひろいだしたところ, C類・D類の皿が140点存し, そのうち小皿が97点, 受皿が2点含まれていた。それらのうちから19点をとりあげて図に掲げた。

I 155～ I 159はC₃類, I 160～ I 162はC₄類, I 163～ I 165はC₅類, I 166～ I 168はD₂類, I 169～ I 175はD₃類, I 176・ I 177はD₅類, I 178・ I 179はD₆類の土師器小皿。

中世の遺跡

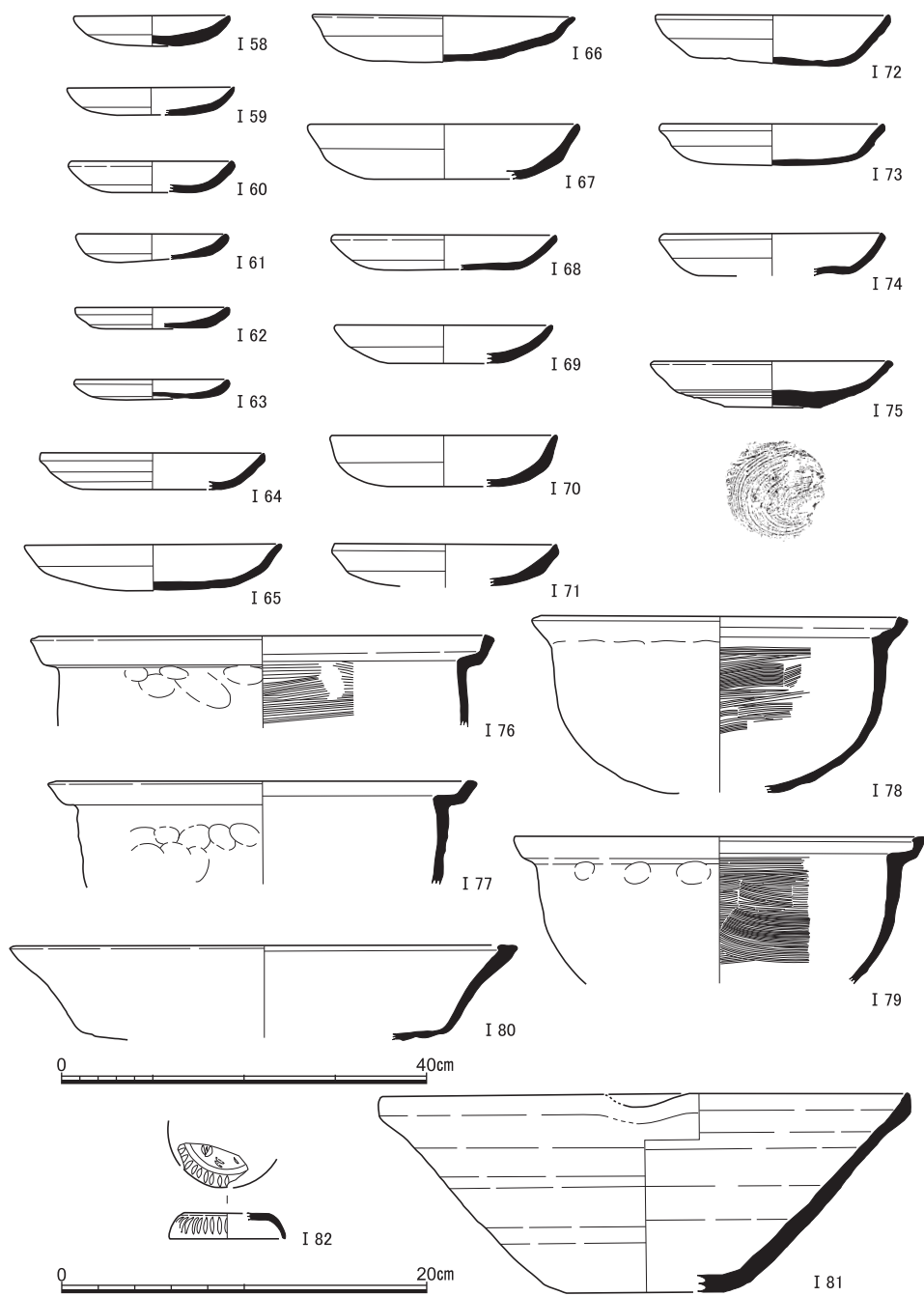


図31 S D 4 出土遺物 (I 58 ~ I 75 土師器, I 76 ~ I 80 瓦器, I 81 須恵器, I 82 青白磁) I 80 縮尺 1/8

京都大学吉田南構内A N21区の発掘調査

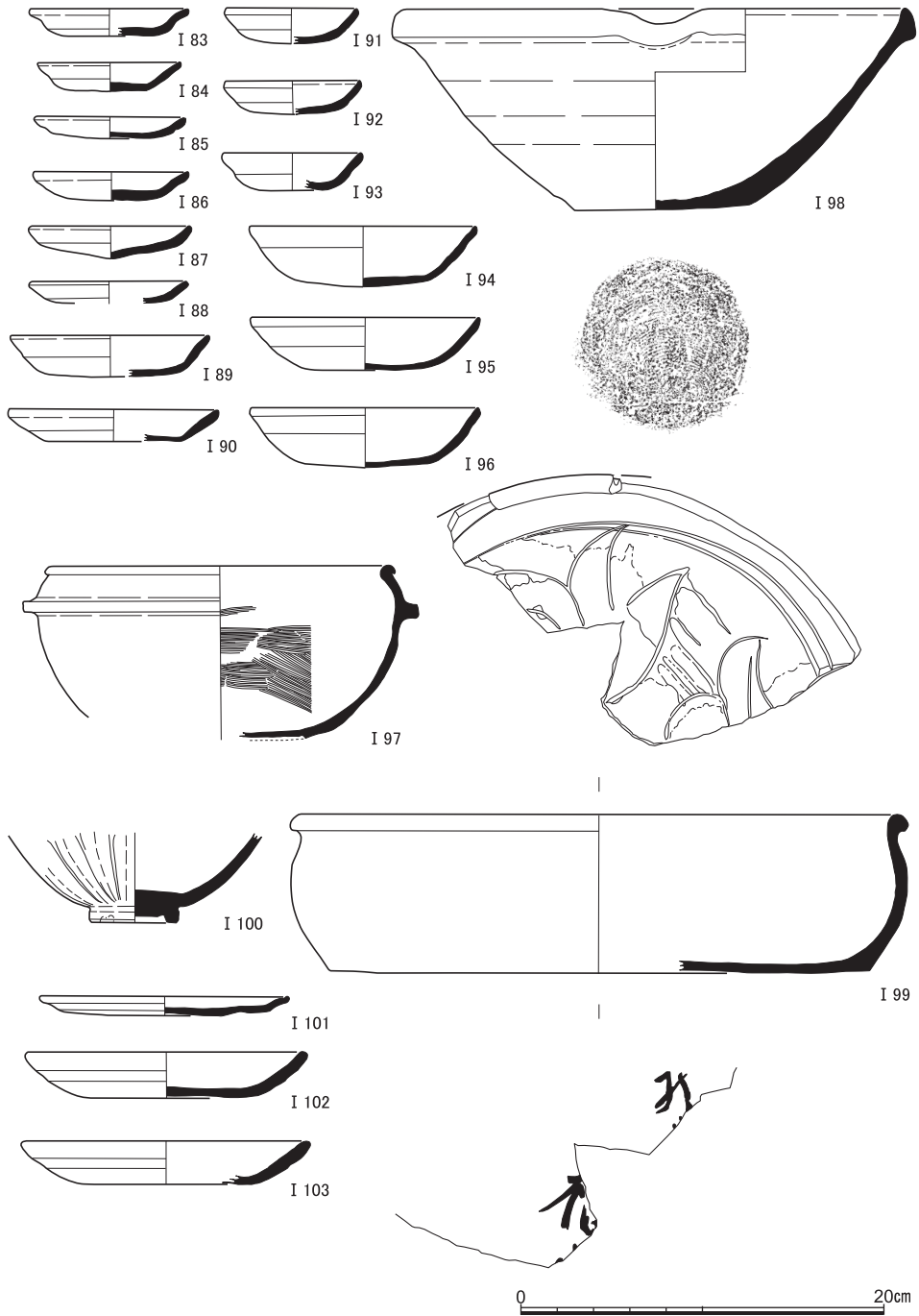


図32 SE 9 出土遺物 (I 83~I 97土師器, I 98須恵器, I 99華南三彩, I 100青磁), SE 11出土遺物 (I 101~I 103土師器)

中世の遺跡

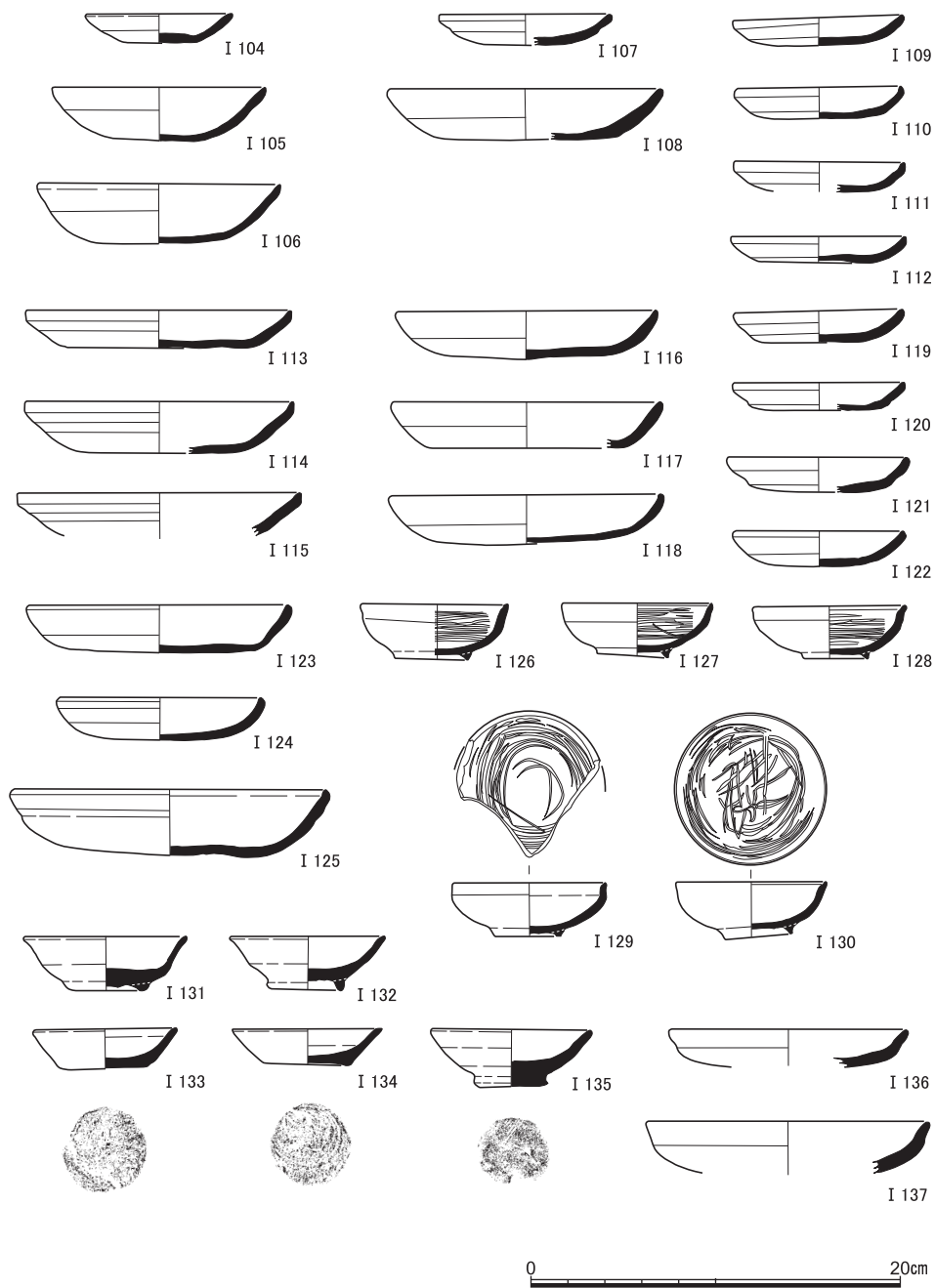


図33 S K 1出土遺物 (I 104~ I 106土師器), S K 2出土遺物 (I 107・I 108土師器), S K 3出土遺物 (I 109~ I 118土師器), S K10出土遺物 (I 119~ I 125土師器, I 126~ I 130瓦器, I 131~ I 135山茶椀), S K11出土遺物 (I 136・I 137土師器)

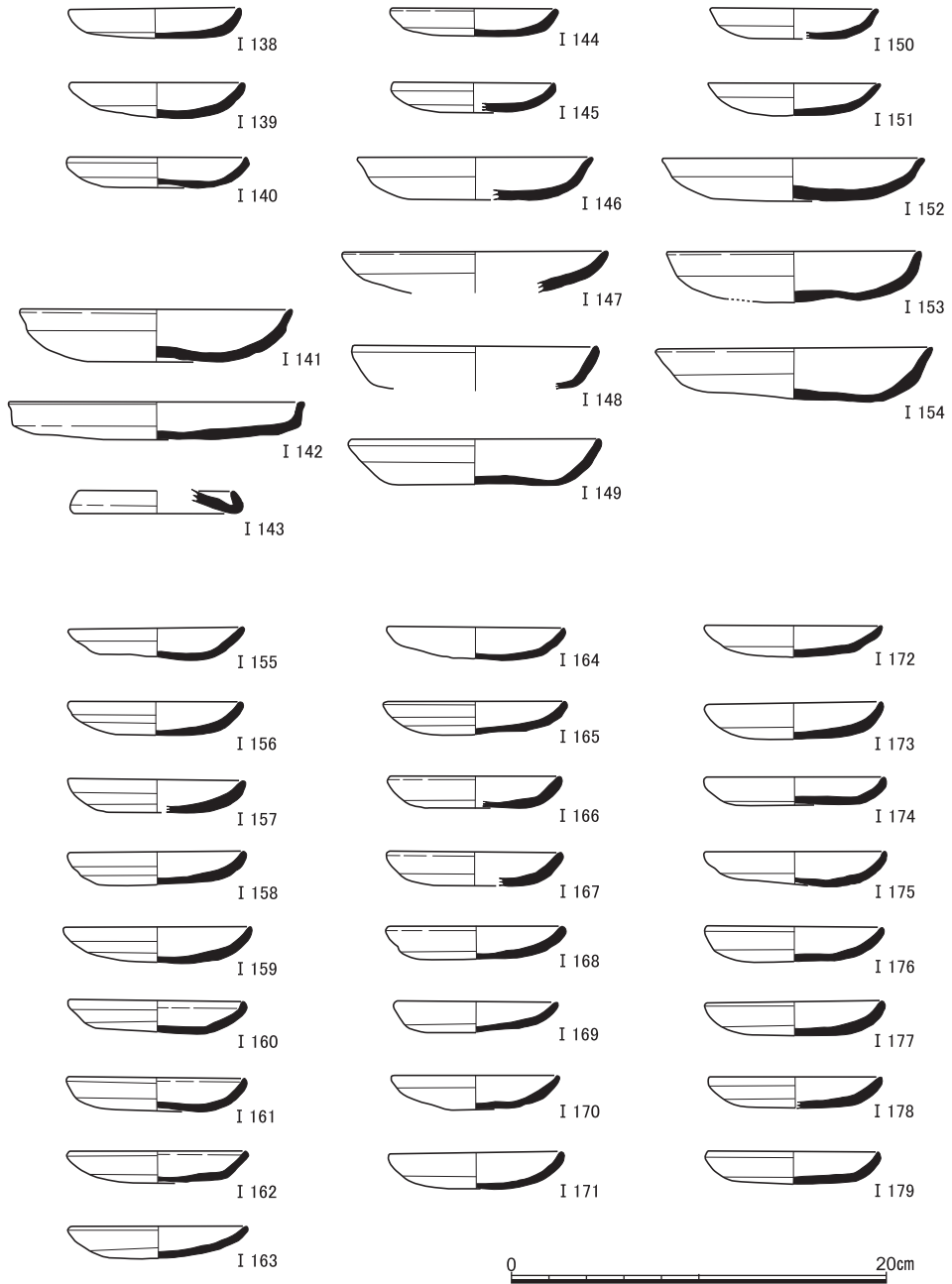


図34 S X 4 出土遺物 (I 138~ I 140土師器), S X42出土遺物 (I 141~ I 143土師器), S X43出土遺物 (I 144~ I 149土師器), S X44出土遺物 (I 150~ I 154土師器), S X46出土遺物(1) (I 155~ I 179土師器)

中世の遺跡

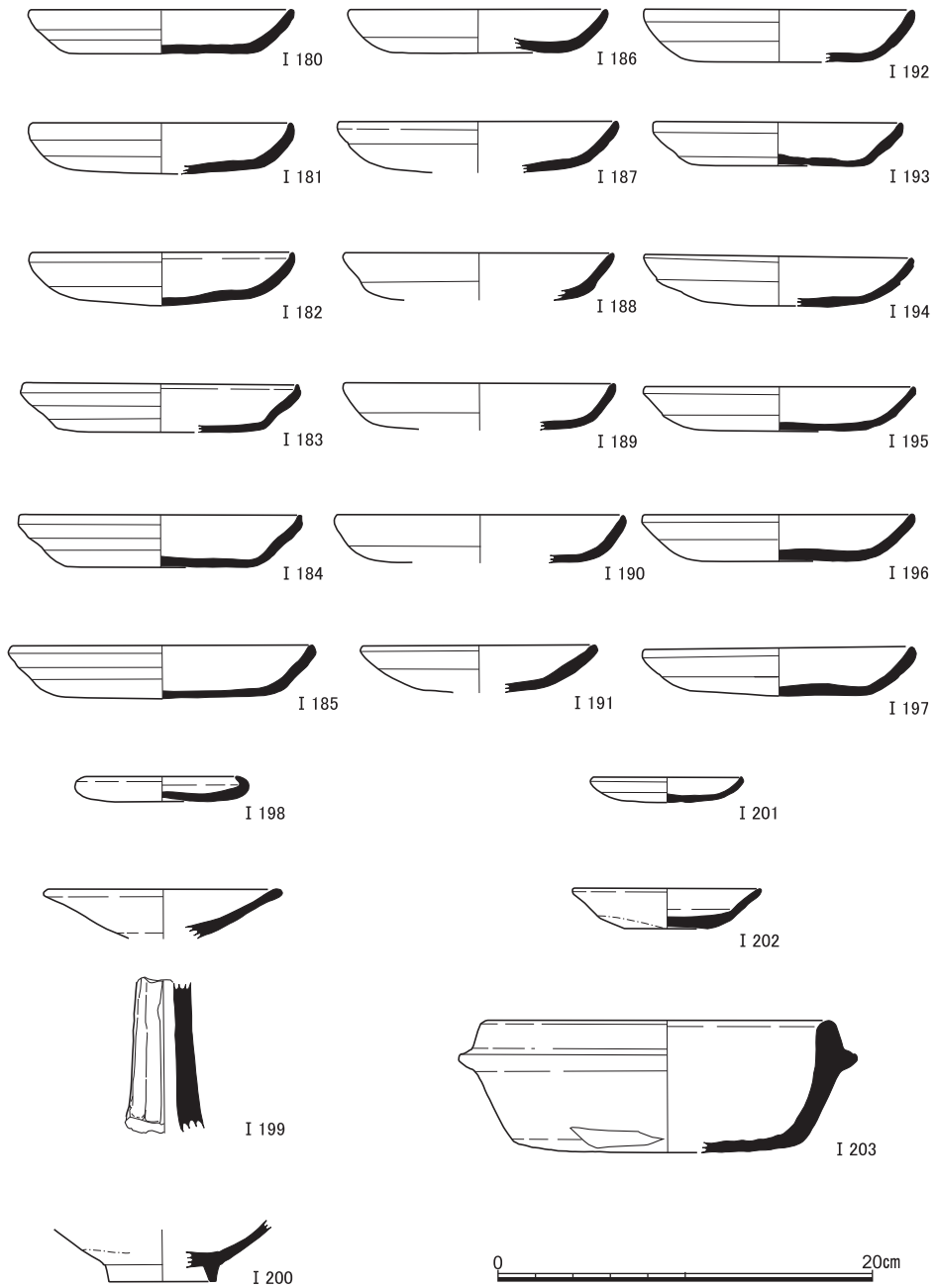


図35 S X46出土遺物(2) (I 180~ I 199土師器, I 200白磁), S X45出土遺物 (I 201土師器, I 202青磁, I 203石鍋)

I 180・I 181はC₃類, I 182はC₄類, I 183～I 185はC₅類, I 186・I 187はD₂類, I 188～I 190はD₃類, I 191・I 192はD₄類, I 193～I 197はD₅類の土師器皿。I 198は土師器受皿。I 199は灰白色を呈する土師器高杯の杯部および脚部。

I 200は白磁底部片。体部下端から底部外面を露胎とし, 見込みには蛇の目釉剥ぎが認められる。

S X45出土遺物 (I 201～I 203) I 201はD₆類の土師器小皿。I 202は青磁皿。灰白色の釉がかかり, 体部下半のなかばおよび底部外面を露胎とする。体部中位で屈曲し, 口縁端部は丸みをもつ。I 203は石鍋。口縁部のすぐ下に削りだしによる鏝がめぐり, 外面には煤が厚く付着している。底部において部分的に切りとった形跡がみうけられる。

(4) 2期の遺構の遺物(図版27・28, 図36～52)

S D 2出土遺物 (I 204～I 221) I 204・I 205はD₄類, I 206はD₆類, I 207はE₃類の土師器皿。I 208は白色系の土師器くぼみ底小椀。I 209は土師器羽釜。外面に煤が付着している。I 210は瓦器鍋。口縁端部を尖らせて仕上げている。I 211は瓦器羽釜。口縁部が長く伸び, 端部に面をもつ。

I 212は灰白色を呈する須恵器杯身。I 213は灰色を呈する須恵器すり鉢。底部に円形の孔があげられている。I 214は陶器底部片。外面に糸切り痕がみうけられる。I 215～I 217は青磁底部片。I 215は底部外面, I 216は畳付, I 217は底部内外面を露胎とする。I 218は白磁底部片。I 219は白磁の合子蓋。I 220は浅黄橙色, I 221は灰褐色を呈する砥石。

S D 6出土遺物(I 222～I 228) I 222・I 223はE₁類の土師器小皿。I 224はE₂類, I 225・I 226はE₃類の土師器皿。I 227・I 228は白色系の土師器椀。

S D 7出土遺物 (I 229～I 232) I 229はE₂類, I 230はE₃類の土師器皿・小皿。I 231は土師器羽釜。口縁部は内側に折れ, その端部を玉縁状に仕上げている。外面に煤が付着している。I 232は青磁底部片。高台の内側を露胎とする。

S D 10出土遺物 (I 233～I 251) I 233・I 236は乙訓在地形, I 234はD₂類, I 235はD₃類, I 237はD₅類, I 238・I 239はD₆類の土師器小皿。I 239の見込みには, 指で撫でた痕跡が明瞭に認められる。I 240はC₅類, I 241・I 242は乙訓在地形, I 243はD₂類, I 244はD₃類, I 245はD₄類, I 246・I 247はD₅類, I 248はD₆類の土師器皿。I 249は白色系の土師器くぼみ底小椀。I 250は土師器受皿。

I 251は須恵器皿。輪高台を貼り付け, 口縁部が外反ぎみに長く立ちあがる。外面に自然釉が付着している。

中世の遺跡

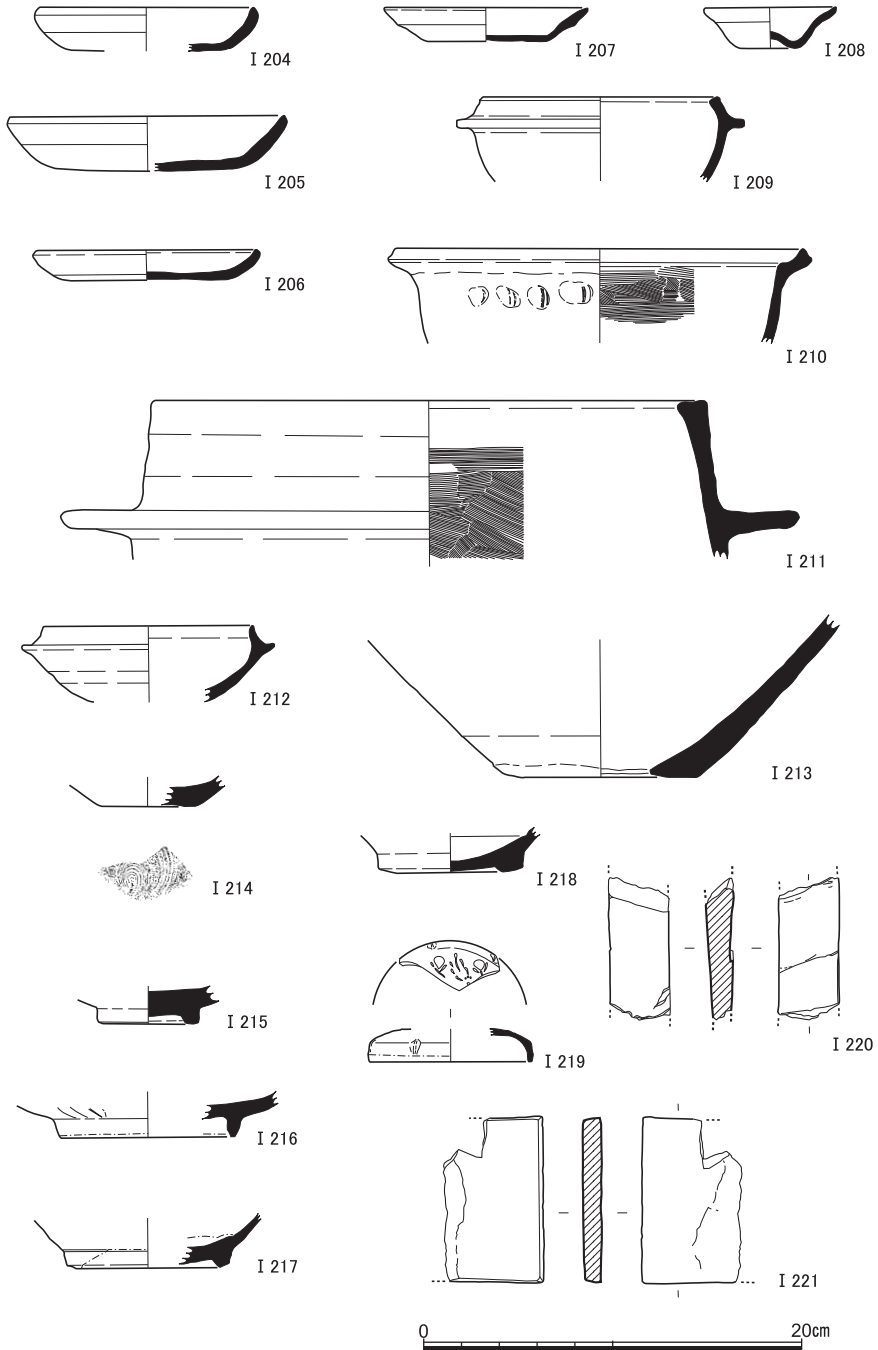


図36 S D 2 出土遺物 (I 204 ~ I 209 土師器, I 210 · I 211 瓦器, I 212 · I 213 須恵器, I 214 陶器, I 215 ~ I 217 青磁, I 218 · I 219 白磁, I 220 · I 221 砥石)

京都大学吉田南構内A N21区の発掘調査

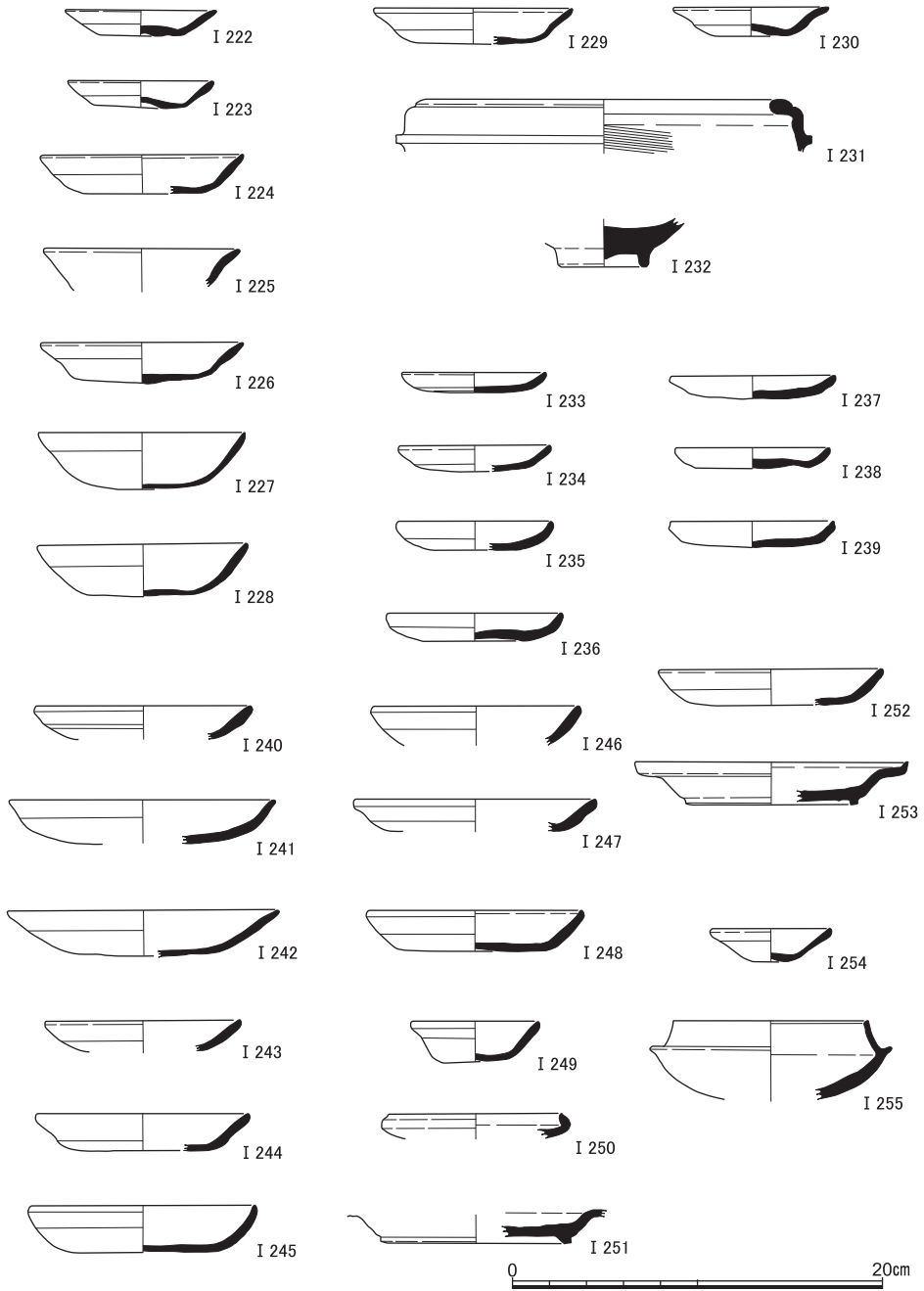


図37 S D 6出土遺物 (I 222~ I 228土師器), S D 7出土遺物 (I 229~ I 231土師器, I 232青磁), S D 10出土遺物 (I 233~ I 250土師器, I 251須恵器), S D 11出土遺物 (I 252土師器, I 253須恵器), S D 12出土遺物 (I 254土師器, I 255須恵器)

中世の遺跡

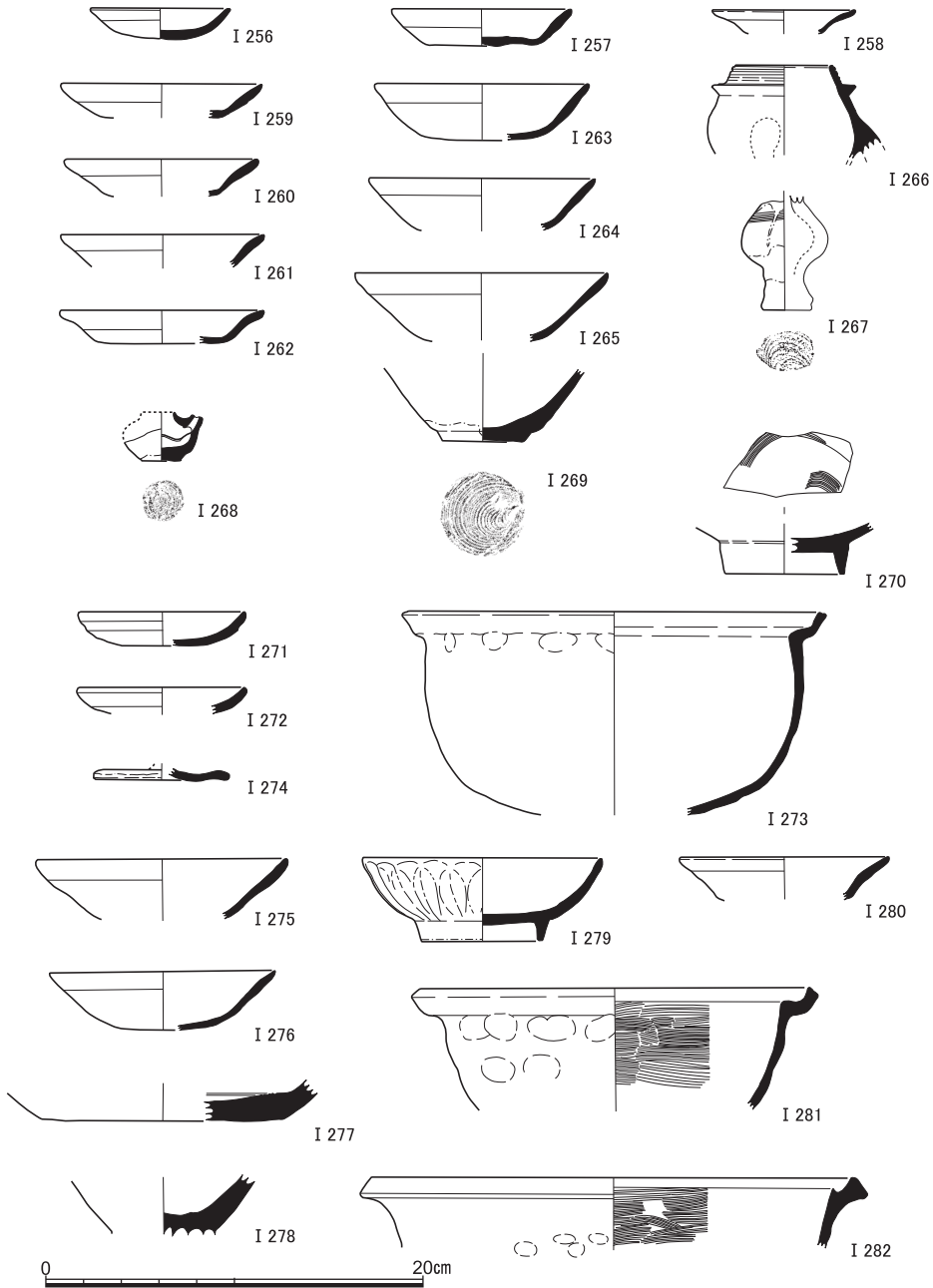


図38 S E 1 木柵内出土遺物 (I 256~I 258土師器), S E 1 石組内出土遺物 (I 259~I 265土師器, I 266瓦器, I 267~I 269古瀬戸, I 270白磁), S E 1 掘形出土遺物 (I 271・I 272土師器, I 273瓦器, I 274陶器), S E 7 木柵内出土遺物 (I 275土師器), S E 7 石組内出土遺物 (I 276土師器, I 277・I 278古瀬戸, I 279青磁), S E 7 掘形出土遺物 (I 280土師器, I 281・I 282瓦器)

S D 11出土遺物 (I 252・I 253) I 252はE₁類の土師器皿。I 253は須恵器皿。口縁部が外反ぎみに長く立ちあがり、その端部をつまみあげている。外面に自然釉が付着している。

S D 12出土遺物 (I 254・I 255) I 254は白色系の土師器くぼみ底小椀。I 255は灰色を呈する須恵器杯身。

S E 1 出土遺物 (I 256～I 274) I 256・I 257はE₁類の土師器小皿・皿。I 258はE₃類の土師器小皿。以上は木柵内の埋土から出土。

I 259はE₁類、I 260～I 262はE₃類の土師器皿。I 263～I 265は白色系の土師器椀。I 266はミニチュアの瓦器脚付き羽釜。口縁部外面に沈線が3条めぐっている。I 267は古瀬戸前期様式の花び類 (I a類 (小型仏花瓶) [藤澤2007])。底部外面に糸切り痕がみうけられる。I 268は古瀬戸中期様式の水筒。注口の部分を貼り付け、穴を貫通させている。灰釉を漬け掛けしており、体部外面下端から底部外面にかけて露胎とする。底部外面に糸切り痕が認められる。I 269は古瀬戸の底部片。体部外面下端から底部外面にかけて露胎とする。なお、その部分には煤が付着している。底部外面に回転糸切り痕がみうけられる。I 270は白磁椀の底部片。高台は高く直立し、その先端から内側にかけて露胎とする。底部内面に櫛目文を有する。以上は石組内の埋土から出土。

I 271はC₃類、I 272はD₆類の土師器小皿。I 273は瓦器鍋。口縁部が2段に屈曲し、端部に面をもつ。体部内面の刷毛調整はほとんど認められない。I 274は陶器の蓋。オモテ面に暗赤褐色の釉をほどこす。以上は掘形埋土から出土。

S E 7 出土遺物 (I 275～I 282) I 275は、木柵内の埋土から出土した白色系の土師器椀。

I 276は白色系の土師器椀。I 277は古瀬戸の折縁深皿の底部片。見込みに轆轤を用いた櫛描きによる同心円文の一部がみうけられる。I 278は古瀬戸の底部片。底部内面の中心部分の周縁がわずかにくぼんでいる。底部外面を露胎とする。I 279はほぼ完形の青磁小椀。体部外面に幅の細い鎚蓮弁文を有する。高台は高く、その断面は尖り気味となる。薄萌葱色の釉を全面にほどこしたのち、高台端部のそれを掻きとっている。露胎部分は橙色を発する。胎土は緻密で、灰白色を呈している。以上は石組内の埋土から出土。

I 280はE₃類の土師器皿。I 281・I 282は瓦器鍋。前者は口縁部が2段に屈曲し、端部に面をもつ。後者は口縁端部を尖らせて仕上げている。以上は掘形埋土から出土。

S K 5 出土遺物 (I 283～I 286) I 283は瓦器鍋。I 284は須恵器甕の底部片。I

中世の遺跡

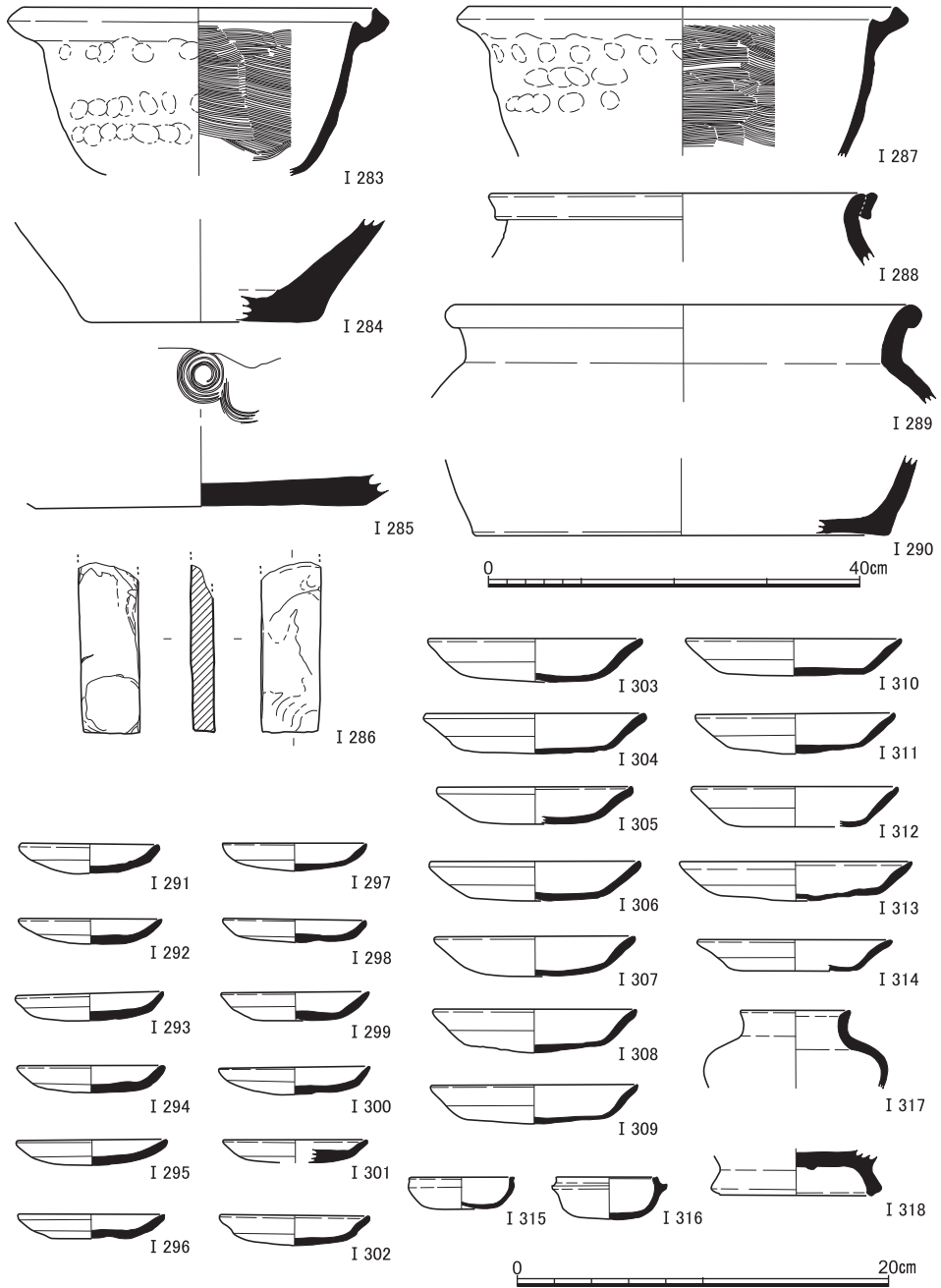


図39 S K 5 出土遺物 (I 283瓦器, I 284須恵器, I 285古瀬戸, I 286砥石), S K 7 出土遺物 (I 287瓦器, I 288常滑, I 289備前, I 290陶器), S K 9 出土遺物 (I 291~I 316土師器, I 317瓦器, I 318灰釉系陶器) I 288~I 290縮尺1/8

285は古瀬戸の折縁深皿の底部片。底部内面の灰釉は刷毛によって塗られており、その中央には轆轤を用いた櫛描きの同心円文が認められる。I 286は灰白色を呈する砥石。

S K 7 出土遺物 (I 287～I 290) I 287は瓦器鍋。口縁端部を尖らせて仕上げている。I 288は常滑焼の甕。口縁部には縁帯が成形され、横撫でによって調整がほどこされている。I 289は備前焼の甕。口縁部を外側に折り曲げ、小さな玉縁を作っている。14世紀初頭から中葉ごろのものともみなされる〔重根2005〕。I 290は外面が茶褐色を呈する陶器底部片。その色からすると、備前焼の可能性が高いと思われる。外面は刷毛目によって最終調整がほどこされている。

S K 9 出土遺物 (I 291～I 318) S K 9の埋土からは多くの土師器が出土している。口縁部が1/6以上残るものはあわせて118点で、そのうちD類・E類の小皿・皿は53点と57点、白色系の碗は8点をかぞえる。それらのなかから24点をえらんで図に示した。

I 291～I 295はD₂類、I 296はD₆類、I 297～I 300はE₁類、I 301・I 302はE₂類の土師器小皿。I 294は見込みに指で撫でた痕跡が明瞭にみうけられる。I 303はD₂類、I 304はD₅類、I 305・I 306はD₆類、I 307～I 310はE₁類、I 311～I 313はE₂類、I 314はE₃類の土師器皿。I 315はミニチュアの土師器碗。I 316はミニチュアの土師器羽釜。口縁部外面には横撫でをほどこし、面をもつその端部には1条の沈線がめぐっている。鏝部は貼り付けられており、横撫でによって整えられている。I 317は瓦器壺。口径6.0cm、胴部最大10cmをはかる。口縁端部に面取りをほどこす。I 318は灰釉系陶器の底部片。高台は高く、その先端が内側にやや曲がっている。

S X 1 出土遺物 (I 319～I 331) I 319・I 320はE₁類の土師器小皿。前者の見込みには指で撫でた痕跡がはっきりとみうけられる。I 321はE₂類、I 322はE₃類の土師器皿。I 323～I 328は白色系の土師器くぼみ底小碗。I 329～I 331は白色系の土師器碗。

S X 2 出土遺物 (I 332～I 393) S X 2からは土師器が少なからず出土している。口縁部が1/6以上残るものはあわせて231点で、そのうちE類の小皿・皿が35点・109点、白色系のくぼみ底小碗・碗が24点・63点となる。それらのなかから完形を保っていたものおよび完形に接合できたものをとりあげて図に掲げた。

I 332～I 346はE₁類、I 347はE₃類の土師器小皿。I 339・I 340・I 342・I 346は見込みに指で撫でた痕跡が認められる。また、I 332は底部内面から体部内面の一部にかけて、I 336は内面全体に煤が付着する。I 348～I 362はE₁類、I 363～I 367はE₃類の土師器皿。I 354・I 362は見込みに指で押さえた痕跡がみうけられる。I 368～I 377は白色系の土師

中世の遺跡

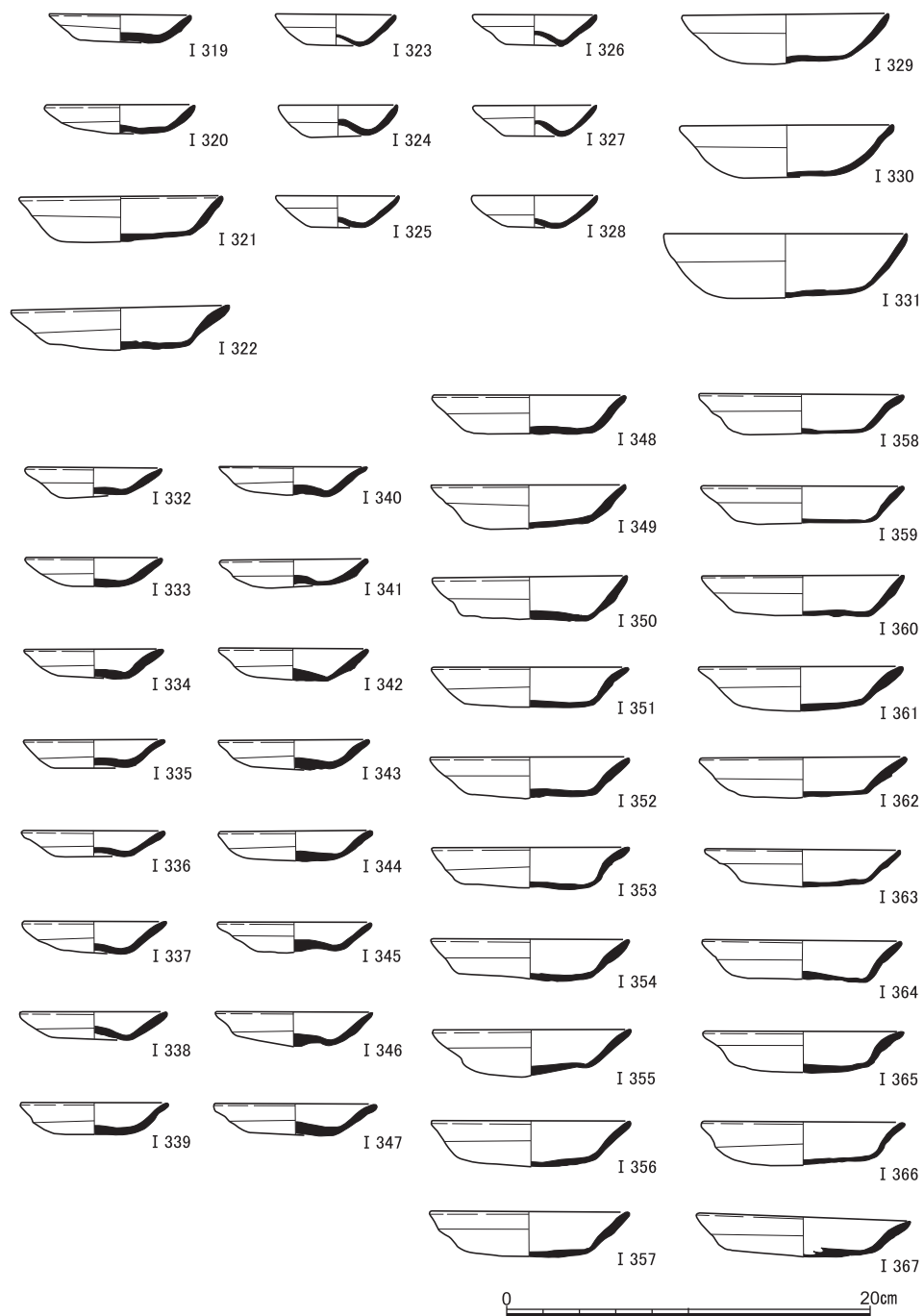


図40 S X 1 出土遺物 (I 319~ I 331土師器), S X 2 出土遺物(1) (I 332~ I 367土師器)

器くぼみ底小椀。I 370・I 373は口縁端部をつまみあげている。I 378～I 393は白色系の土師器椀。I 379・I 381・I 385・I 387・I 390は口縁端部をつまみあげている。

S X 3 出土遺物 (I 394～I 402) I 394・I 395はE₁類, I 396はE₂類の土師器小皿。I 395は口縁端部の2ヵ所に煤が付着している。I 397～I 401はE₃類の土師器皿。I 402は白色系の土師器椀。

S X 5 出土遺物(I 403～I 410) I 403～I 407はE₁類, I 408はE₃類の土師器小皿。I 403は見込みに指で撫でた痕跡がはっきりと認められる。I 409はE₁類の土師器皿。I 410は白磁小壺。胴部下半に文様がみうけられる。

S X 6 出土遺物 (I 411～I 418) I 411～I 414はE₁類の土師器小皿。I 415・I 416はE₂類の土師器皿。I 417は白色系の土師器くぼみ底小椀。I 418は白色系の土師器椀。両者はともに口縁端部をつまみあげている。

S X 11 出土遺物 (I 419～I 427) S X 11から出土した土師器のうち、口縁部が1/6以上残るものはあわせて51点で、そのうちE類の皿が33点、白色系のくぼみ底小椀・椀が6点・12点をかぞえる。それらのなかから12点をひろいあげて図に示した。

I 419はE₁類, I 420～I 422はE₃類の土師器皿。I 419は口縁端部の大半に煤が付着している。I 423～I 425は白色系の土師器くぼみ底小椀。I 426・I 427は白色系の土師器椀。I 426は口縁端部をつまみあげている。

S X 22 出土遺物 (I 428～I 437) I 428～I 430はE₁類, I 431はE₃類の土師器皿。I 428は見込みに指で押さえた痕跡が明瞭に認められる。I 429は口縁端部にわずかに, I 430はその四半分に煤が付着している。I 432は白色系の土師器くぼみ底小椀。I 433～I 435は白色系の土師器椀。I 434は口縁部内面から見込みにかけて、幅3 cmほどの煤が付着している。I 435は口縁端部をつまみあげている。

I 436は瓦器風炉の体部片。その上方には窓が開けられているのが確認される。また、2条の凸帯がめぐらされ、そのあいだに珠文、その下に断面三角形の連子がほどこされている。I 437は古瀬戸の底部片。中期様式の折縁深皿であろう。体部外面の灰釉は刷毛塗りされている。見込みに轆轤を用いた櫛描きによる同心円文の一部が認められる。

S X 23 出土遺物(I 438～I 447) I 438はE₁類の土師器小皿。I 439・I 440はE₁類, I 441・I 442はE₃類の土師器皿。I 443は白色系の土師器くぼみ底小椀。I 444～I 446は白色系の土師器椀。I 447は土師器羽釜。口縁部が内側に傾き、その端部は外側に折り曲げられている。鏝部は貼り付けられ、横撫でで仕上げられている。

中世の遺跡

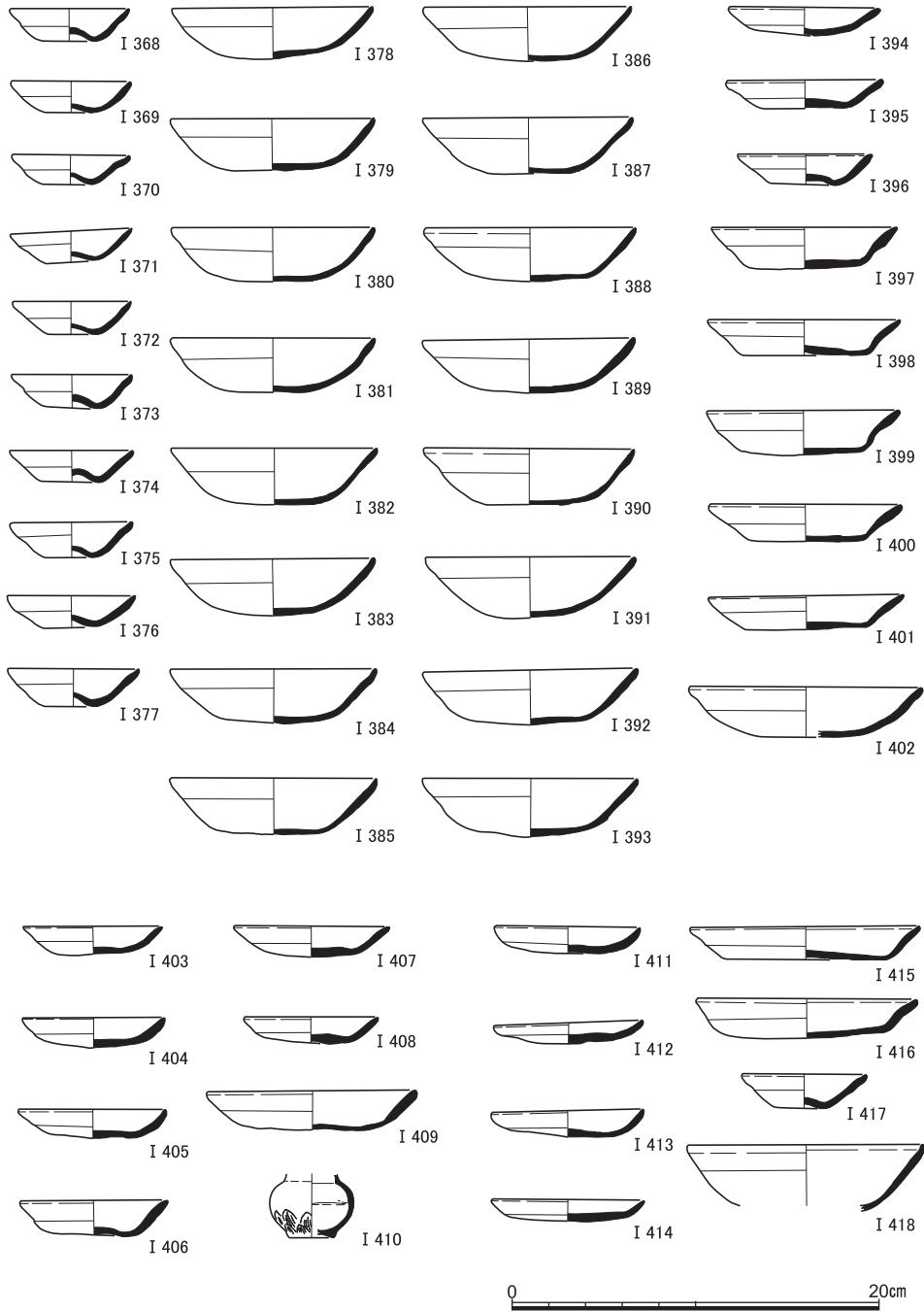


図41 S X 2 出土遺物(2) (I 368~ I 393土師器), S X 3 出土遺物 (I 394~ I 402土師器), S X 5 出土遺物 (I 403~ I 409土師器, I 410白磁), S X 6 出土遺物 (I 411~ I 418土師器)

京都大学吉田南構内A N21区の発掘調査

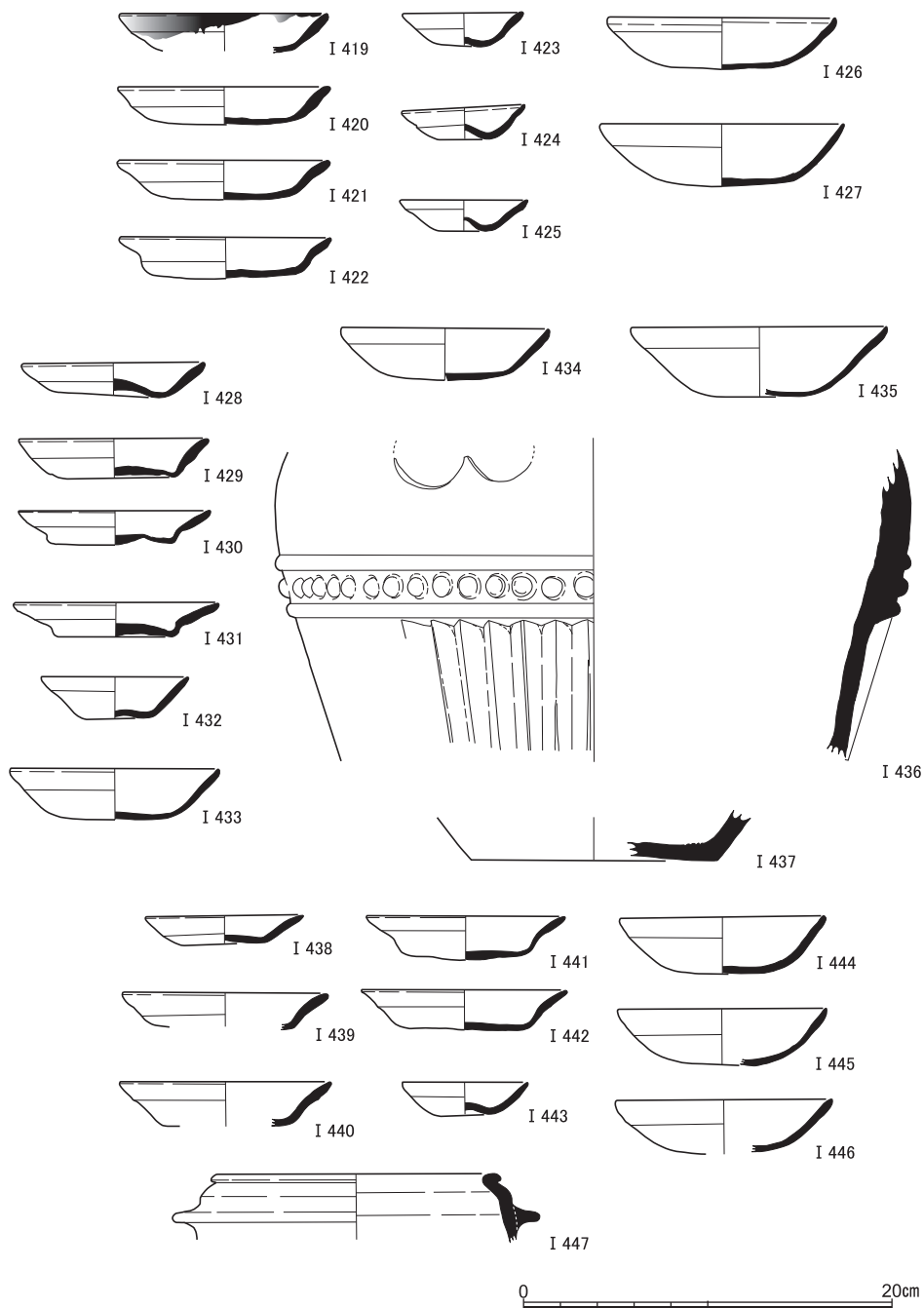


図42 S X11出土遺物 (I 419~ I 427土師器), S X22出土遺物 (I 428~ I 435土師器, I 436瓦器, I 437古瀬戸), S X23出土遺物 (I 438~ I 447土師器)

中世の遺跡

S X 28出土遺物 (I 448～ I 468) S X 28から出土した土師器のうち、口縁部が1/6以上残るものはあわせて55点で、そのうちE類の小皿・皿が7点・21点、白色系のくぼみ底小椀・椀が8点・19点となる。それらのなかか21点をえらんで図に掲げた。

I 448・I 449はE₁類、I 450はE₃類の土師器小皿。I 451～I 453はE₁類、I 454はE₂類、I 455はE₃類の土師器皿。I 456～I 461は白色系の土師器くぼみ底小椀。I 457は口縁端部をつまみあげている。I 462～I 468は白色系の土師器椀。

S X 30出土遺物 (I 469～ I 495) S X 30から出土した土師器のうち、口縁部が1/6以上残るものはあわせて111点で、そのうちE類の小皿・皿が9点・50点、白色系のくぼみ底小椀・椀が13点・39点をかぞえる。それらのなかから27点をとりあげて図に示した。

I 469～I 472はE₁類の土師器皿。I 470は口縁端部の約2/3に煤が付着する。I 471は底部中央に直径3mmほどの孔が存している。I 473～I 478はE₁類、I 479～I 481はE₃類の土師器皿。I 478は口縁端部の大半および口縁部から体部内外面の半分くらいに煤が付着する。I 482～I 487は白色系の土師器くぼみ底小椀。I 488～I 495は白色系の土師器椀。

S X 32出土遺物 (I 496～ I 502) I 496～I 500はE₁類の土師器小皿。I 501は白色系の土師器小椀。I 502はにぶい橙色を呈する土師器。口縁端部は面をもち、その中央は浅くくぼんでいる。外面には指で押さえた痕跡が認められ、内面には横撫でがほどこされている。

S X 34出土遺物 (I 503～ I 543) S X 34から出土した土師器のうち、口縁部が1/6以上残るものはあわせて180点で、そのうちE類の小皿・皿が22点・119点、白色系の小椀・くぼみ底小椀・椀が4点・5点・30点となる。それらのなかから41点をひろいあげて図に掲げた。

I 503・I 504はE₁類、I 505～I 512はE₂類、I 513はE₃類の土師器小皿。I 514～I 516はE₁類、I 517～I 520はE₂類、I 521～I 528はE₃類の土師器皿。I 529・I 530は白色系の土師器小椀。I 531～I 534は白色系の土師器くぼみ底小椀。I 535～I 543は白色系の土師器椀。

S X 36出土遺物 (I 544～ I 547) I 544はE₁類の土師器小皿。I 545はE₁類、I 546はE₂類の土師器皿。I 547は白色系の土師器椀。

S X 37出土遺物 (I 548～ I 554) I 548・I 549はE₁類の土師器小皿。I 550はE₁類、I 551はE₃類の土師器皿。I 552は白色系の土師器小椀。I 553は白色系の土師器くぼみ底小椀。口縁端部をつまみあげている。I 554は白色系の土師器椀。

京都大学吉田南構内A N21区の発掘調査

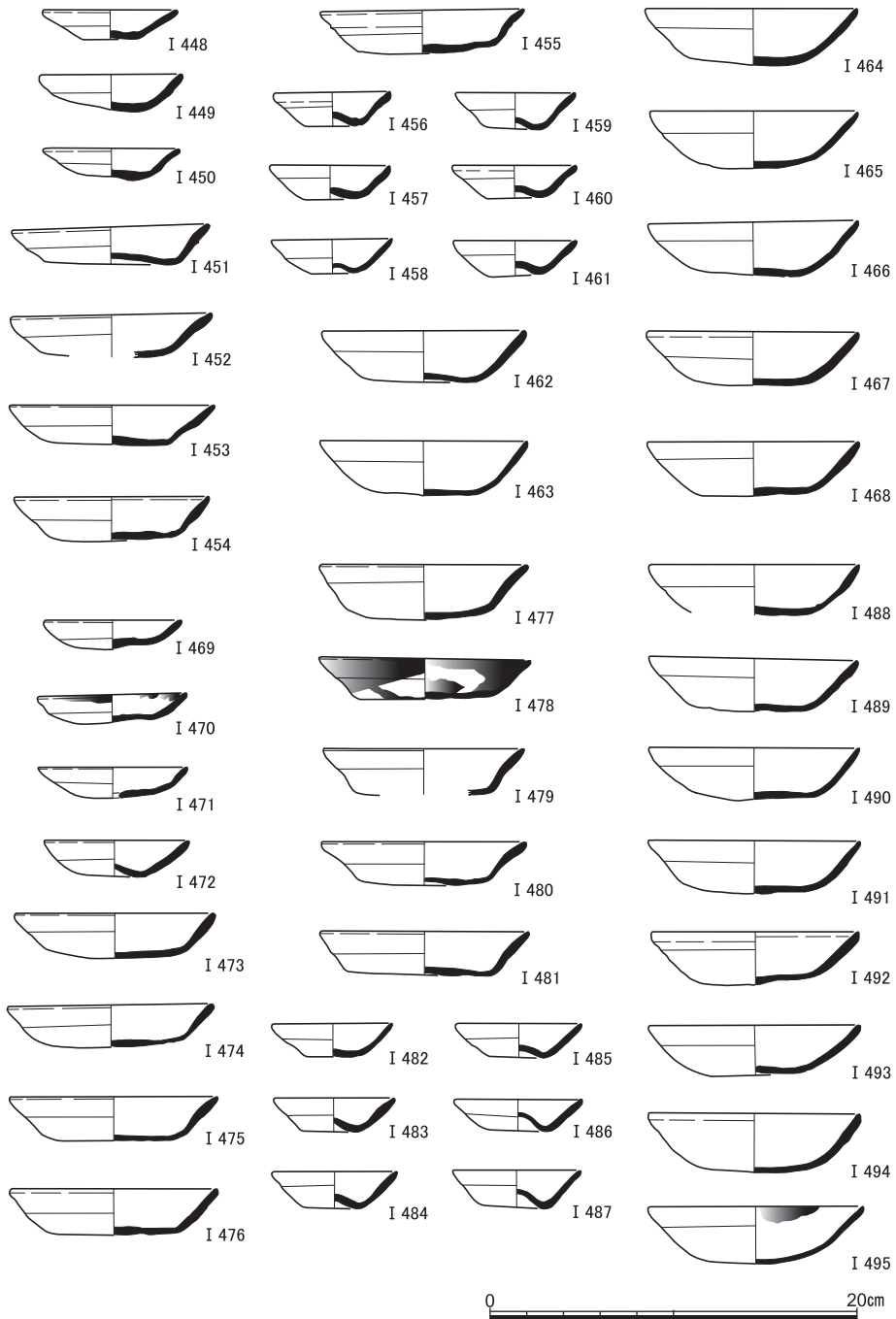


図43 S X28出土遺物 (I 448~ I 468土師器), S X30出土遺物 (I 469~ I 495土師器)

中世の遺跡

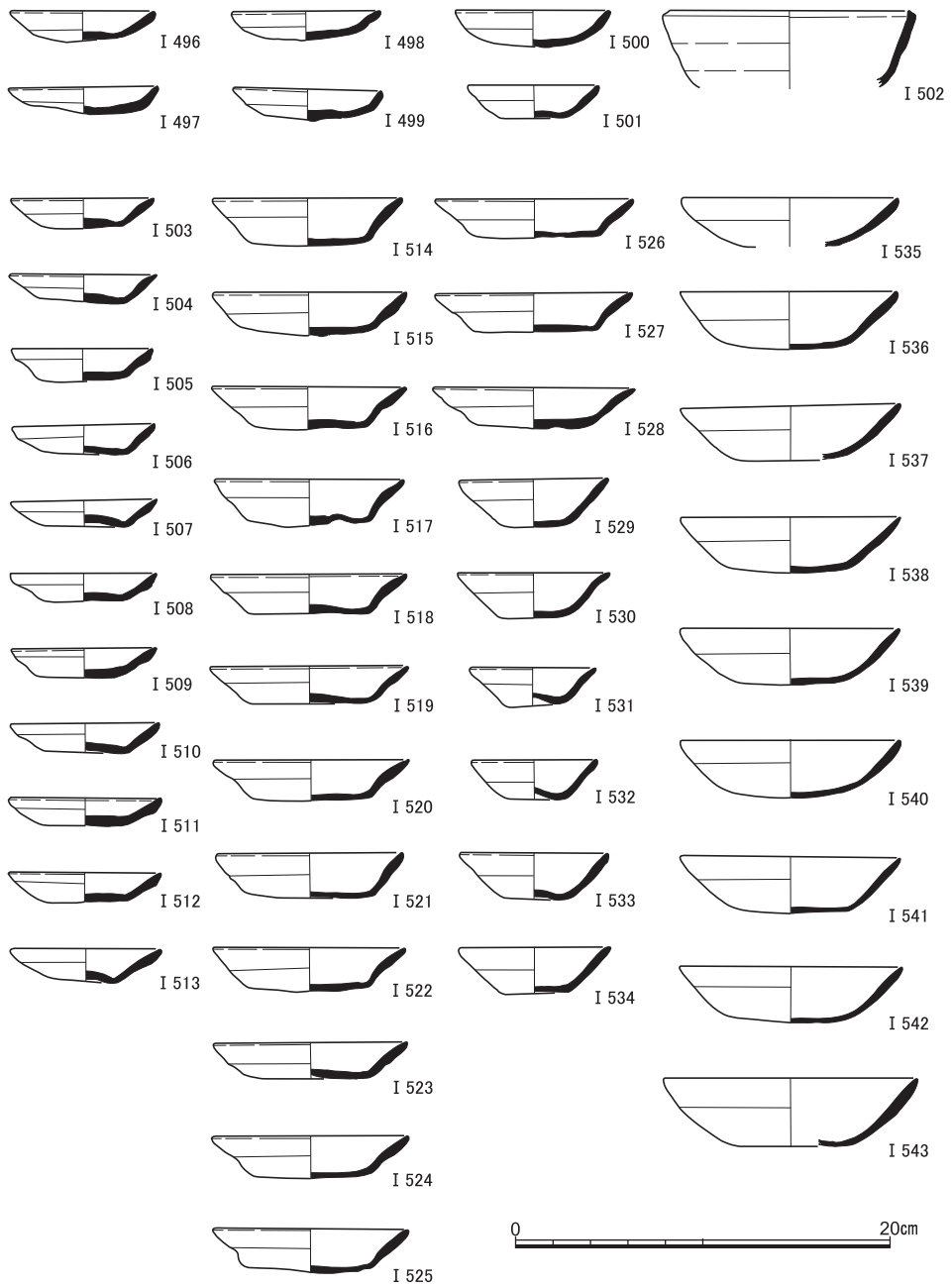


図44 S X32出土遺物 (I 496~ I 502土師器), S X34出土遺物 (I 503~ I 543土師器)

なお、この遺構には、直線と思われる墨書が外面に7本認められる横4cm、縦2cmほどのE類の土師器皿の体部片が含まれていた。

S X41出土遺物（I 555～I 576） S X41から出土した土師器のうち、口縁部が1/6以上残るものはあわせて67点で、そのうちE類の小皿・皿が21点・24点、白色系のくぼみ底小椀・椀が2点・19点、受皿が1点をかぞえる。それらのなかから18点をえらんで図に示した。

I 555～I 558はE₁類、I 559はE₂類、I 560はE₃類の土師器小皿。I 556は口縁端部の大半、I 558はそこにわずかに煤が付着している。I 561はE₁類、I 562～I 564はE₂類、I 565はE₃類の土師器皿。I 566・I 567は白色系の土師器小椀。I 568～I 571は白色系の土師器椀。I 572は土師器受皿。

I 573は瓦器椀。口径は13cm、器高は4cmほどとなる。体部内面には圏線状の篋磨きがまばらにほどこされ、見込みにはジグザグ状の暗文が認められる。樟葉型Ⅲ-3期のものに相当しよう。I 574は瓦器鍋。口縁部が2段に屈曲し、端部に面をもつ。I 575は瓦器羽釜。体部はわずかに湾曲し、口縁部は短く直立する。口縁部内面は横撫でによって浅くぼんでいる。

I 576は灰色を呈する須恵器すり鉢。体部は厚みを減らしながら直線的に斜め上方に伸び、口縁部は玉縁状に肥厚している。

S X10出土遺物（I 577） I 577は常滑焼の甕。頸部が大きく外反して口縁部へといたっている。口縁端部は面取りされ、平坦面が形作られている。頸部外面から肩部外面にかけて自然釉が付着している。第1段階1b型式期〔愛知県史編さん委員会編2012 「編年表」〕のものにあてうると思われ、12世紀半ばごろの作と考えられよう。

S X12出土遺物（I 578） I 578は備前焼の甕。口縁部を外側に大きく折り曲げ、断面円形の玉縁を作っている。頸部外面の下半から肩部外面の上端にかけて自然釉が付着する。口縁部内面から頸部内面にかけて表面が落ちているのが認められる。14世紀前葉から中葉のものとみなされる。

S X15出土遺物（I 579・I 580） I 579は備前焼の甕。口縁端部を玉縁とする。頸部の下半から肩部の上半にかけて自然釉が付着している。頸部内面の表面が欠けているのがみうけられる。14世紀前葉から中葉のものと考えられる。I 580は甕の底部片。胴部外面および底部外面は茶褐色を呈する。その色からすると、備前焼の公算が大きい。胴部外面に縦方向の刷毛目が認められる。底部内面には自然釉が付着する。I 579と同一個体で

中世の遺跡

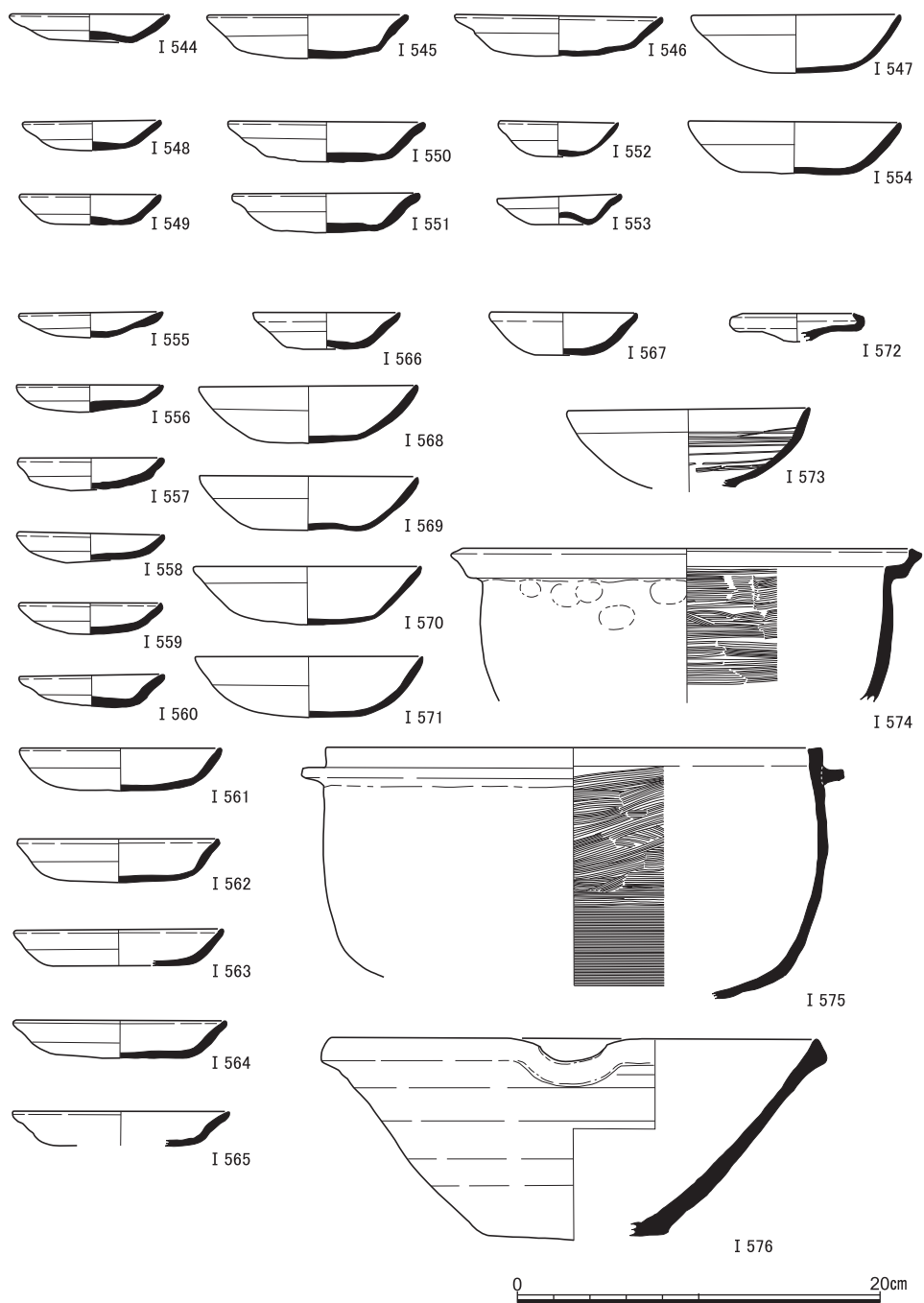


図45 S X36出土遺物 (I 544~ I 547土師器), S X37出土遺物 (I 548~ I 554土師器), S X41出土遺物 (I 555~ I 572土師器, I 573~ I 575瓦器, I 576須恵器)

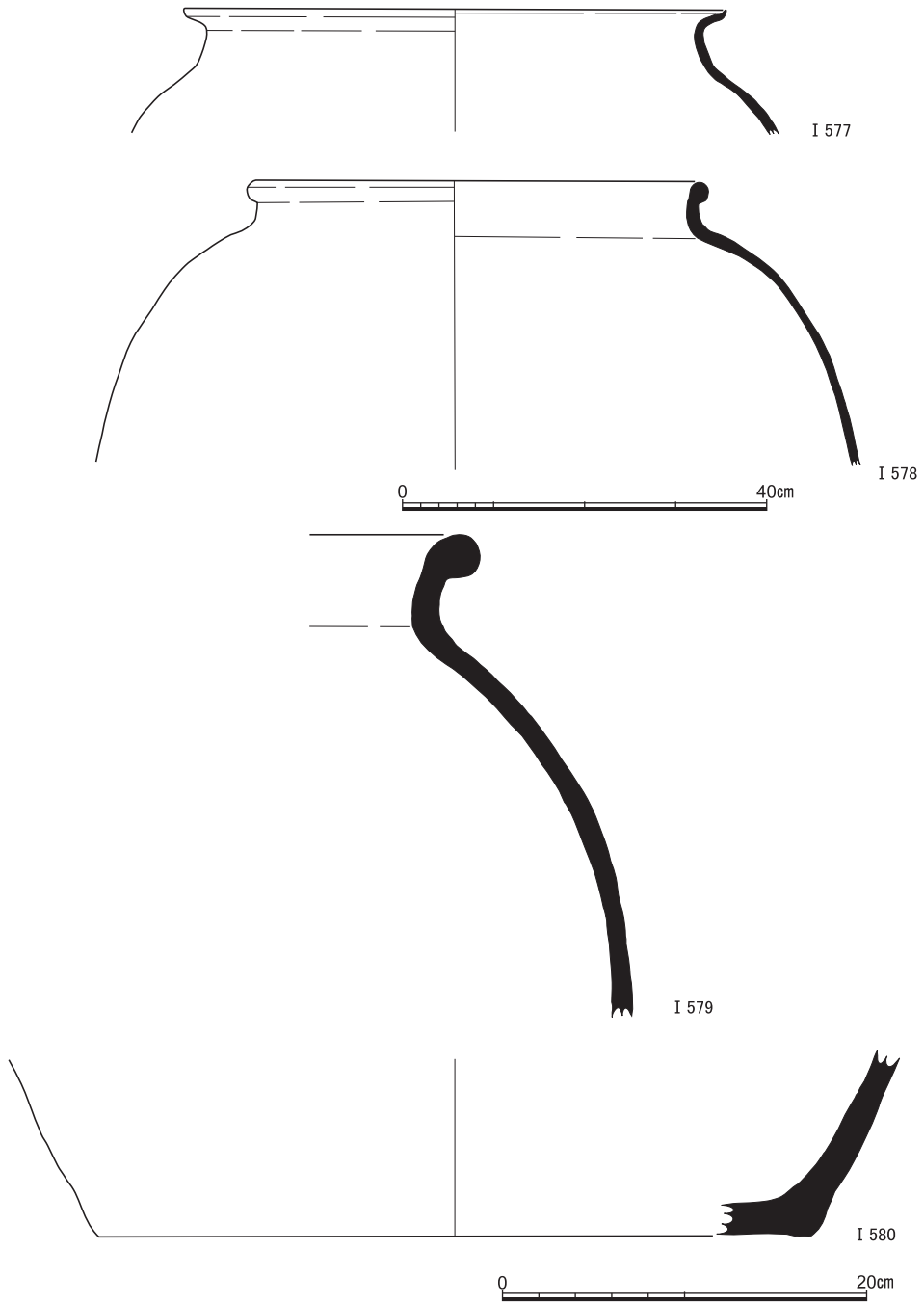


図46 S X10出土遺物 (I 577常滑), S X12出土遺物 (I 578備前), S X15出土遺物 (I 579備前, I 580陶器) I 577・I 578縮尺1/8

中世の遺跡

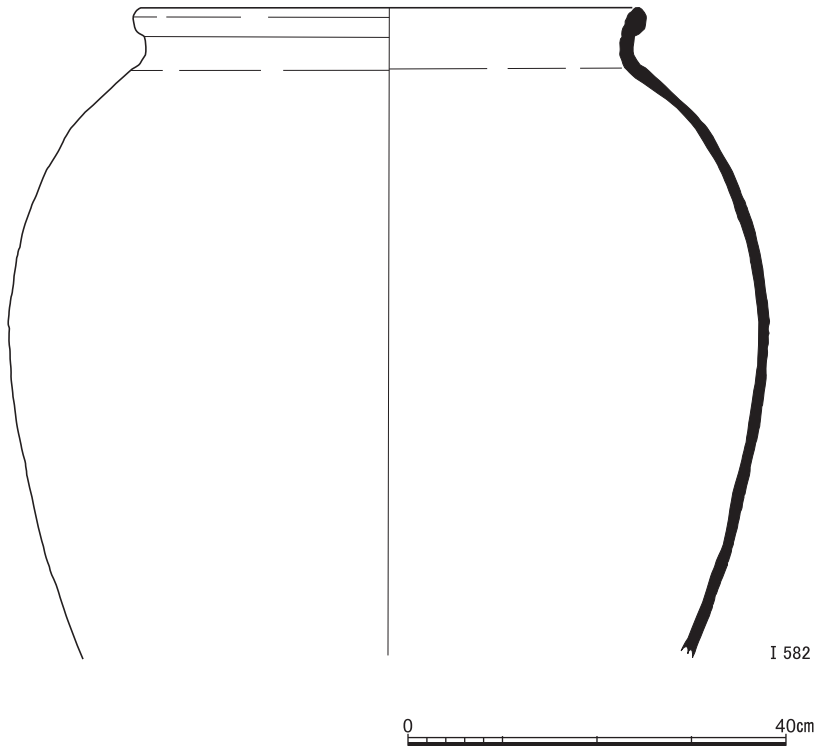
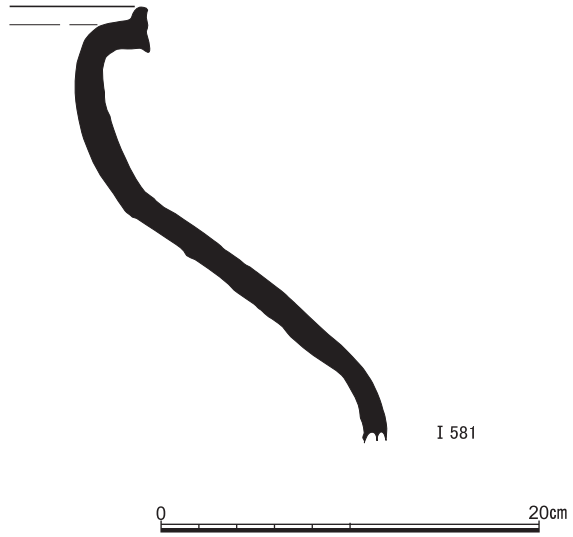


図47 S X17出土遺物 (I 581常滑), S X20出土遺物(1) (I 582備前) I 582縮尺1/8

ある可能性が存する。

S X17出土遺物 (I 581) I 581は常滑焼の甕。口縁部に縁帯が形作られる。第2段階5型式期のものにあたり、13世紀半ばに作られたと考えられる。口縁部内面および頸部外面から肩部外面にかけて自然釉が付着している。

S X20出土遺物 (I 582～I 584) I 582は備前焼の甕。頸部は短く、口縁部を外側に大きく折り曲げて、断面長楕円形の玉縁を作っている。肩部外面から胴部外面にかけて横方向の刷毛目が多く認められる。口縁部内面から頸部内面上半にかけて表面が落ちているのがみうけられる。頸部外面に自然釉が薄く付着している。中世3期のものと考えられ、14世紀中葉から15世紀前葉ごろに作られたと判断される〔乗岡2005〕。

I 583は中世3期の備前焼の甕。頸部は短く、口縁は断面長楕円形の玉縁となっている。頸部外面から胴部外面にかけて刷毛目による調整がほどこされている。口縁部内面から頸部内面にかけて表面が点々と欠けているのが認められる。頸部外面から肩部外面上半の一部に自然釉が付着している。

I 584は中世3期の備前焼の甕。頸部は短く、口縁部を外側に大きく折り曲げて、断面長楕円形の玉縁を作っている。頸部外面下半から肩部外面上半にかけて自然釉が付着しており、肩部外面下半には横方向の刷毛目がみうけられる。口縁部内面から頸部内面にかけて表面が落ちているのが認められる。

S X35出土遺物 (I 585・I 586) I 585は中世3期の備前焼の甕。頸部は短く、口縁は断面長楕円形の玉縁となっている。肩部外面上端に自然釉が薄く付着しており、胴部外面には横および斜め方向の刷毛目がみうけられる。口縁部内面から頸部内面にかけて表面が欠けているのが認められる。I 586は備前焼の甕の底部片。胴部外面に縦方向の刷毛目がみうけられる。I 585と同一個体である可能性が存する。

S X24出土遺物 (I 587～I 596) I 587はE₁類、I 588はE₃類の土師器皿。I 589は白色系の土師器小椀。

I 590は瓦器椀。I 591は外面上半が橙色、外面下半および内面が灰白色を呈する瓦器火鉢。体部が内湾する浅い鉢となる。体部外面に花文のスタンプを押印する。こうした器形のは14世紀半ばには出現していたと指摘されている〔立石2007〕。

I 592は備前焼の甕。口縁部を外側に折り曲げ、小さな玉縁を作っている。肩部外面に自然釉が付着する。頸部内面の表面が点々と欠けているのが認められる。14世紀初頭から中葉に作られたものと考えられる。

中世の遺跡

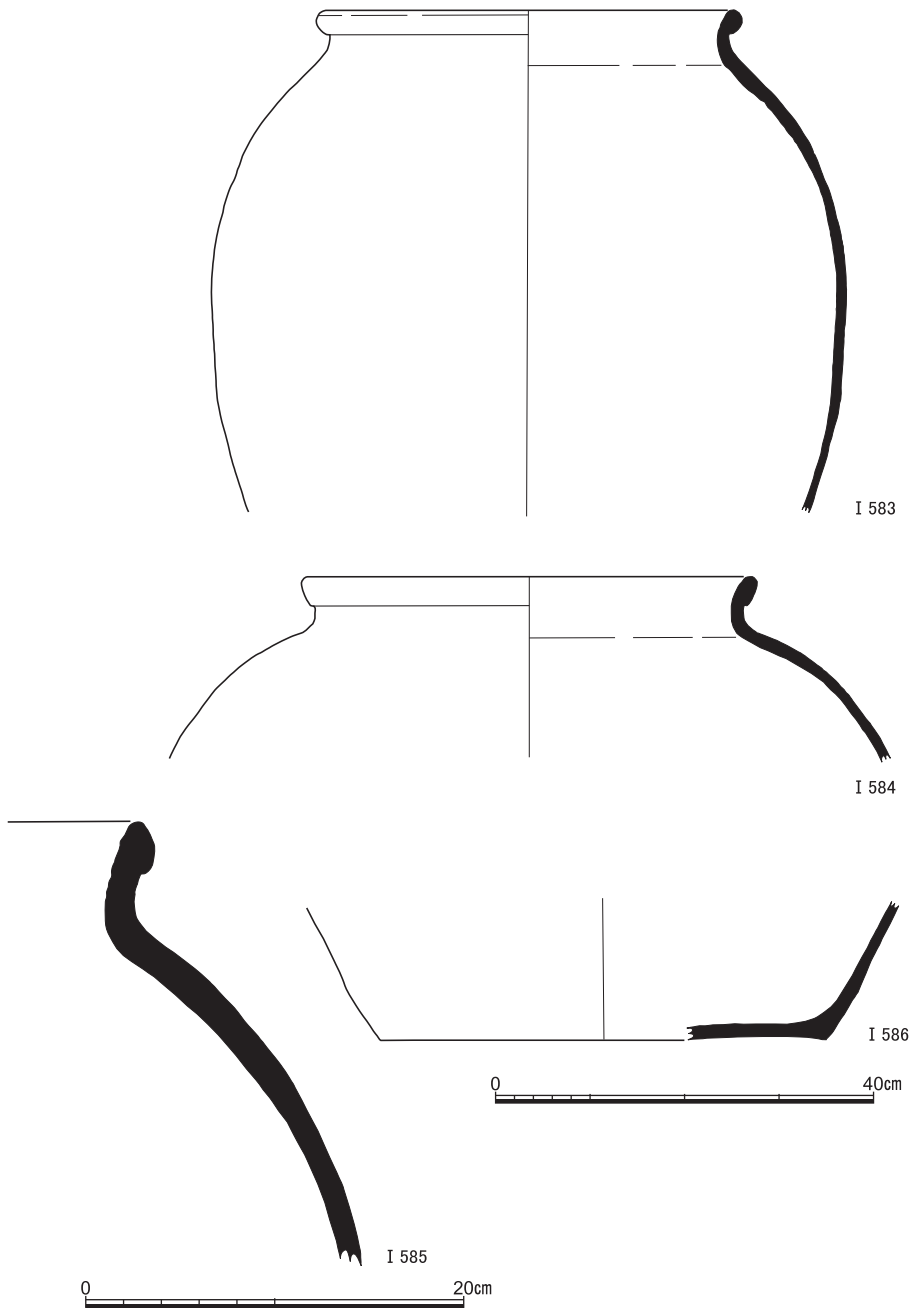


図48 S X 20出土遺物(2) (I 583・I 584備前), S X 35出土遺物 (I 585・I 586備前) I 583・I 584
・I 586縮尺1/8

京都大学吉田南構内A N21区の発掘調査

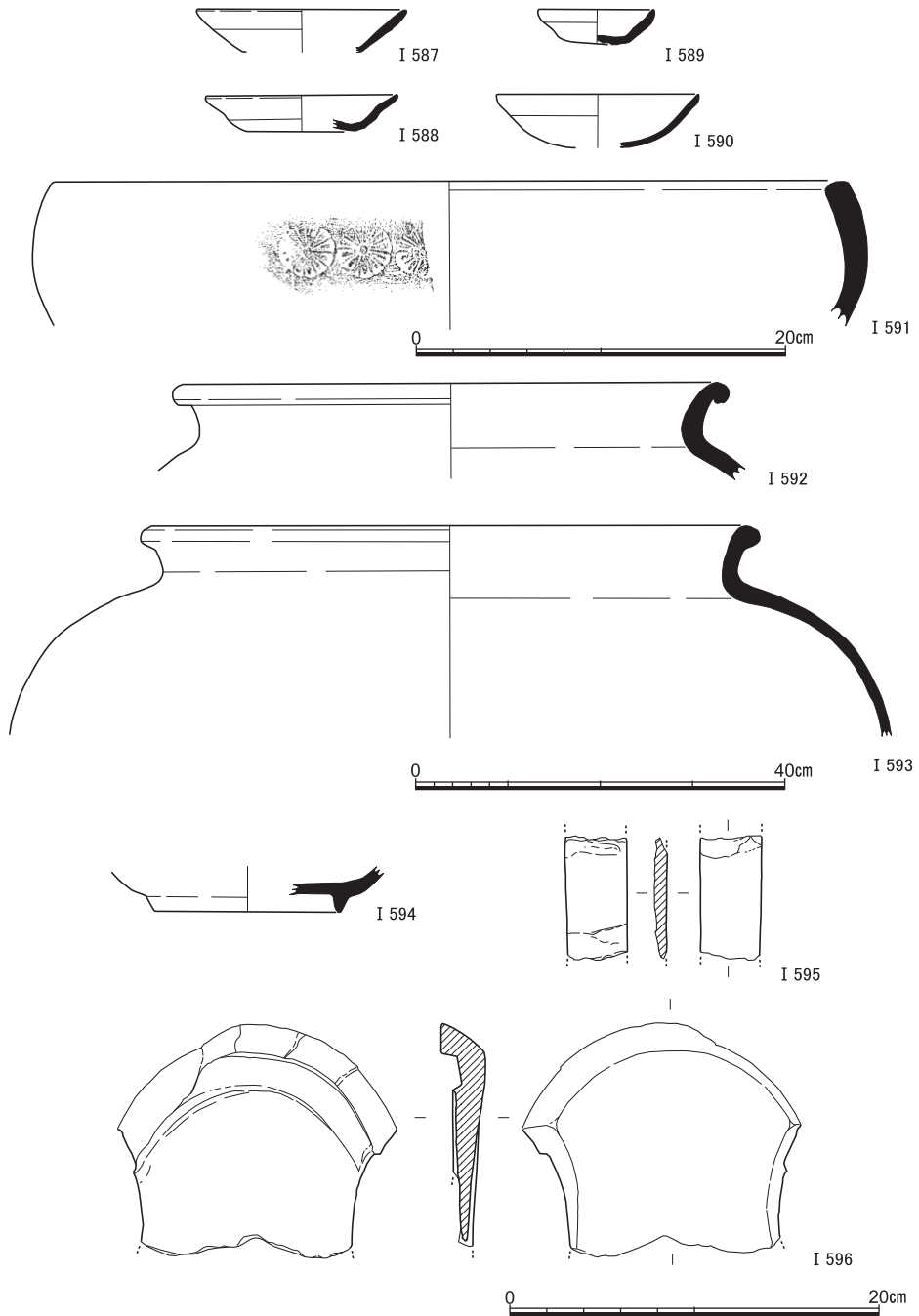


図49 S X24出土遺物（I 587～I 589土師器，I 590・I 591瓦器，I 592・I 593備前，I 594青磁，I 595砥石，I 596石製品）I 592・I 593縮尺1/8

中世の遺跡

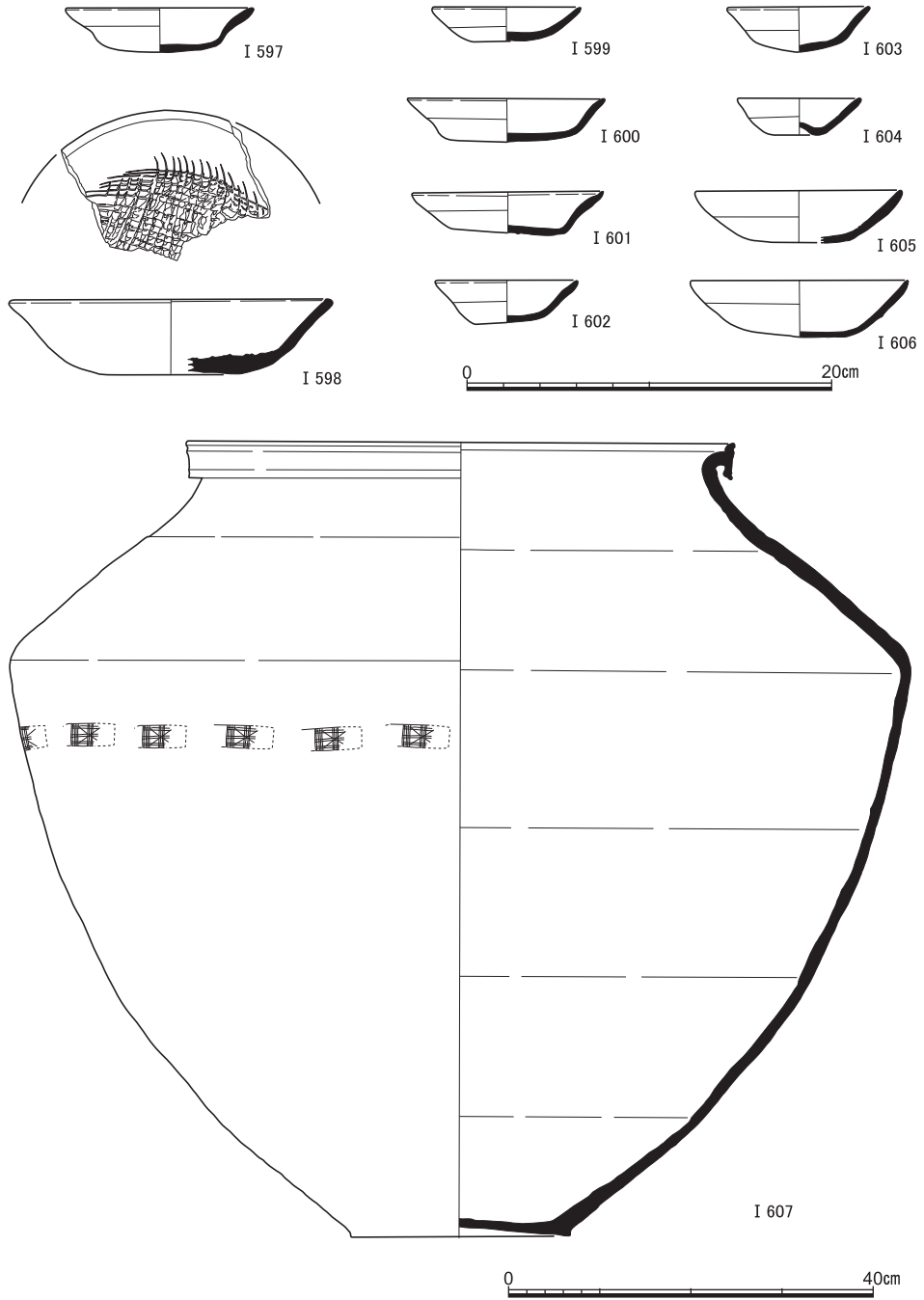


図50 S X13石敷出土遺物 (I 597土師器, I 598古瀬戸), S X13土師器溜出土遺物 (I 599~ I 606土師器), S X13埋甕 (I 607常滑) I 607縮尺1/8

I 593は備前焼の甕。口縁は断面円形の玉縁となっている。肩部外面上端に自然釉が薄く付着しており、頸部外面から肩部外面にかけて刷毛目による調整がおこなわれている。14世紀前葉から中葉のものとなされる。

I 594は青磁底部片。畳付を露胎とする。I 595は灰赤色を呈する砥石。I 596は下部を失った用途不明の石製品。内面以外は原形を保ち、なめらかに仕上げられている。内面には、一部を欠くものの、弧状の溝が存し、それにもまた同様の作業がほどこされている。そのほかの部分にかんしては、割れ落ちた痕跡が認められる。

S X13出土遺物 (I 597～I 607) I 597はE₃類の土師器皿。I 598は古瀬戸の卸皿。中期様式のものであろう。底部から体部へ丸みをもって立ちあがり、口縁端部に面をもつ。灰釉を漬け掛けしており、底部外面を露胎とする。そこには回転糸切り痕が認められる。以上は石敷より出土。

I 599はE₁類の土師器小皿。I 600はE₁類、I 601はE₂類の土師器皿。I 602・I 603は白色系の土師器小椀、I 604は白色系の土師器くぼみ底小椀。I 605・I 606は白色系の土師器椀。以上は土器溜より出土。

I 607は正位で埋められていた常滑焼の甕。口縁の一部を欠いている。口径60cm、器高87cmをはかる。口縁部に4cmの縁帯が形作られる、いわゆるN字状口縁となる。上胴部に押印文がめぐっている。第2段階7型式期のものに相当し、14世紀前半の作と考えられる。

S X21出土遺物 (I 608～I 620) I 608～I 611はE₁類の土師器小皿。I 612はE₃類の土師器皿。I 613は白色系の土師器くぼみ底小椀。I 614・I 615は白色系の土師器椀。I 616・I 617は土師器受皿。

I 618は瓦器椀。口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。体部内面下半から見込みにかけて暗文が認められる。和泉型IV-4期のものに相当しよう。

I 619は灰釉系陶器の底部片。I 620は白磁の底部片。高台の外面下半から底部外面を露胎とし、橙色を発している。胎土は灰白色を呈し、硬質・緻密となる。

S X14出土遺物 (I 621～I 627) I 621はE₁類の土師器皿。I 622～I 624は白色系の土師器くぼみ底小椀。I 622・I 624は口縁端部をつまみあげている。I 625は白色系の土師器椀。

I 626・I 627は瓦器鍋。いずれも口縁端部を尖らせて仕上げている。

S X40出土遺物 (I 628～I 630) I 628はE₁類の土師器小皿。I 629は瓦器鍋。I 630は陶器椀の底部片。小さな輪高台が貼り付けられ、体部外面下端から底部外面を露胎

中世の遺跡

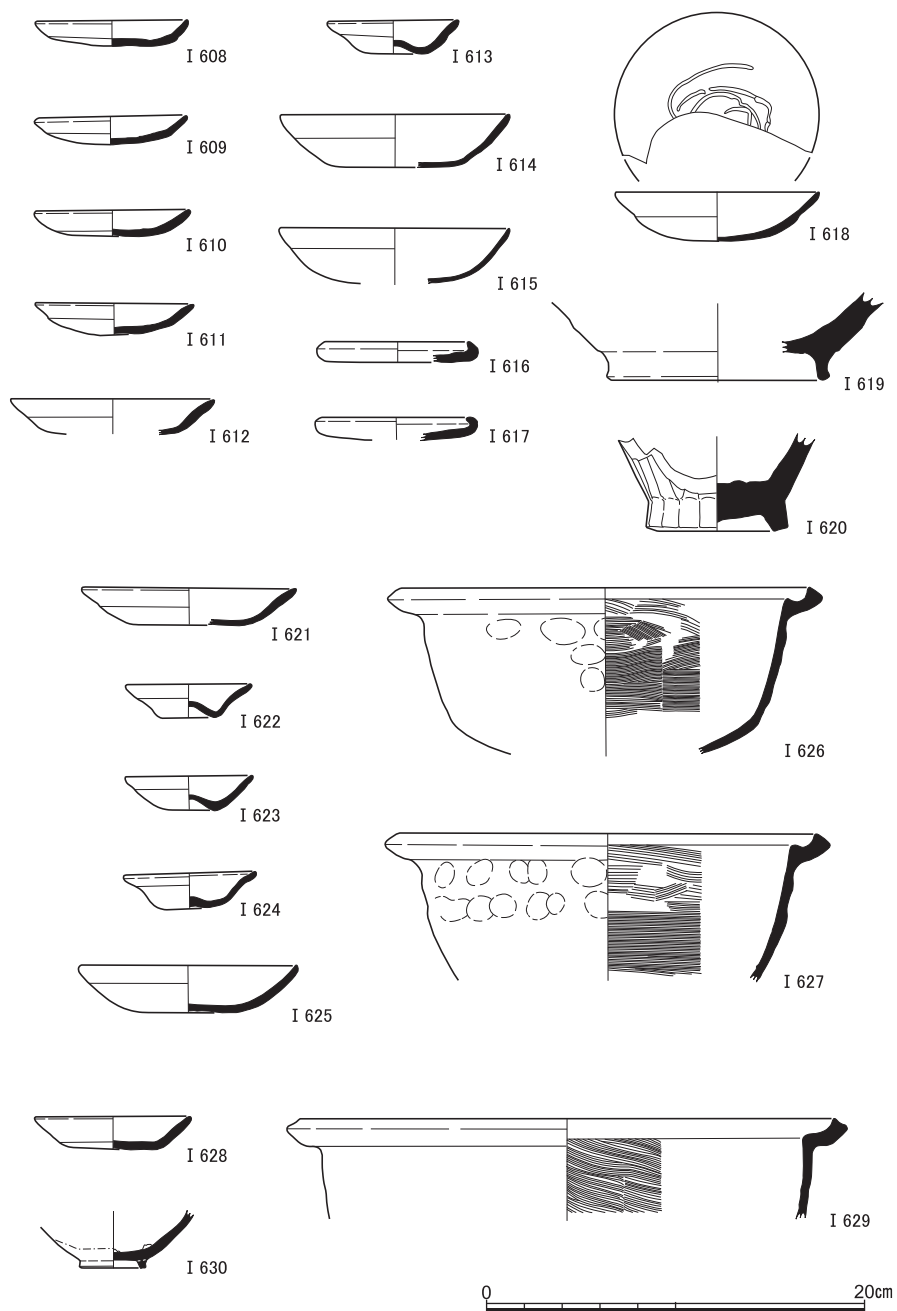


図51 S X 21出土遺物 (I 608~ I 617土師器, I 618瓦器, I 619灰釉系陶器, I 620白磁), S X 14出土遺物 (I 621~ I 625土師器, I 626・I 627瓦器), S X 40出土遺物 (I 628土師器, I 629瓦器, I 630陶器)

とする。底部内面に重ね焼きの痕跡が認められる。

ピット出土遺物(I 631～I 660) I 631はC₄類, I 632～I 634はD₂類, I 635はD₄類, I 636はD₆類, I 637はE₁類, I 638はE₃類の土師器小皿。I 637は見込みに指で撫でた痕跡が明瞭に認められる。I 639はD₂類, I 640はD₃類, I 641は乙訓在地形, I 642～I 645はE₁類, I 646・I 647はE₂類, I 648はE₃類の土師器皿。I 649～I 653は白色系の土師器椀。I 654は断面が円形となる白色系の土師器高杯脚部。

I 655は瓦器羽釜。口縁端部が内側にわずかに出ている。I 656は瓦器鍋。口縁端部をつまみあげている。I 657は須恵器杯の底部片。I 658は青磁壺。口縁端部を外側に折り曲げている。I 659は白磁の底部片。底部外面を露胎とする。I 660は浅黄橙色を呈する砥石。

(5) 茶褐色土落ち込みの遺物 (I 661～I 725, 図版28, 図53～55)

本調査区では, 図28に示したように, 茶褐色土を埋土とする不定形のくぼみが処々にみうけられた。それらは浅いものもあれば深いものもあった。ここでは, 茶褐色土落ち込みという名称を付し, そこから出土した遺物にかんして紹介していくことにする。

I 661はD₂類, I 662はD₃類, I 663はD₅類, I 664～I 669はE₁類の土師器小皿。I 670はC₅類, I 671はD₁類, I 672・I 673はD₅類, I 674・I 675はE₁類, I 676はE₂類の土師器皿。I 677・I 678は白色系の土師器小椀。I 679～I 688は白色系の土師器くぼみ底小椀。I 679・I 681は口縁端部をつまみあげている。I 687は口縁端部のあちこちに煤が付着している。I 689～I 695は白色系の土師器椀。I 696・I 697は土師器受皿。I 696は灰白色を呈する。

なお, E₃類の土師器皿, 白色系の土師器椀の破片それぞれ1点に墨書が認められた。前者は口縁部内面から体部内面, 後者は底部内面にそれがおこなわれている。前者は横棒に縦棒が3本ほぼ直交している。後者は文字である可能性が高い。

I 698～I 704は瓦器鍋。口縁部が2段に屈曲したもの, その端部がつまみあげられているものとなる。I 705は瓦器羽釜。口縁部が短く, 内側にやや傾いている。

I 706は須恵器皿。口縁部が外反ぎみに長く立ちあがり, その端部をつまみあげている。I 707は須恵器杯の底部片。I 708・I 709は須恵器杯蓋。I 708はつまみが浅くへこむ。外面に自然釉が付着する。I 709は口縁端部が下方に伸び, その断面を三角形にしている。

I 710は山茶椀の小皿。口縁部がわずかに外反し, その端部を丸くおさめている。底部外面に糸切り痕が認められる。I 711は調査区南東部から出土した常滑焼の甕。口縁部に縁帯が形作られ, その断面はN字状を呈している。肩部外面上半に自然釉が付着する。第

中世の遺跡

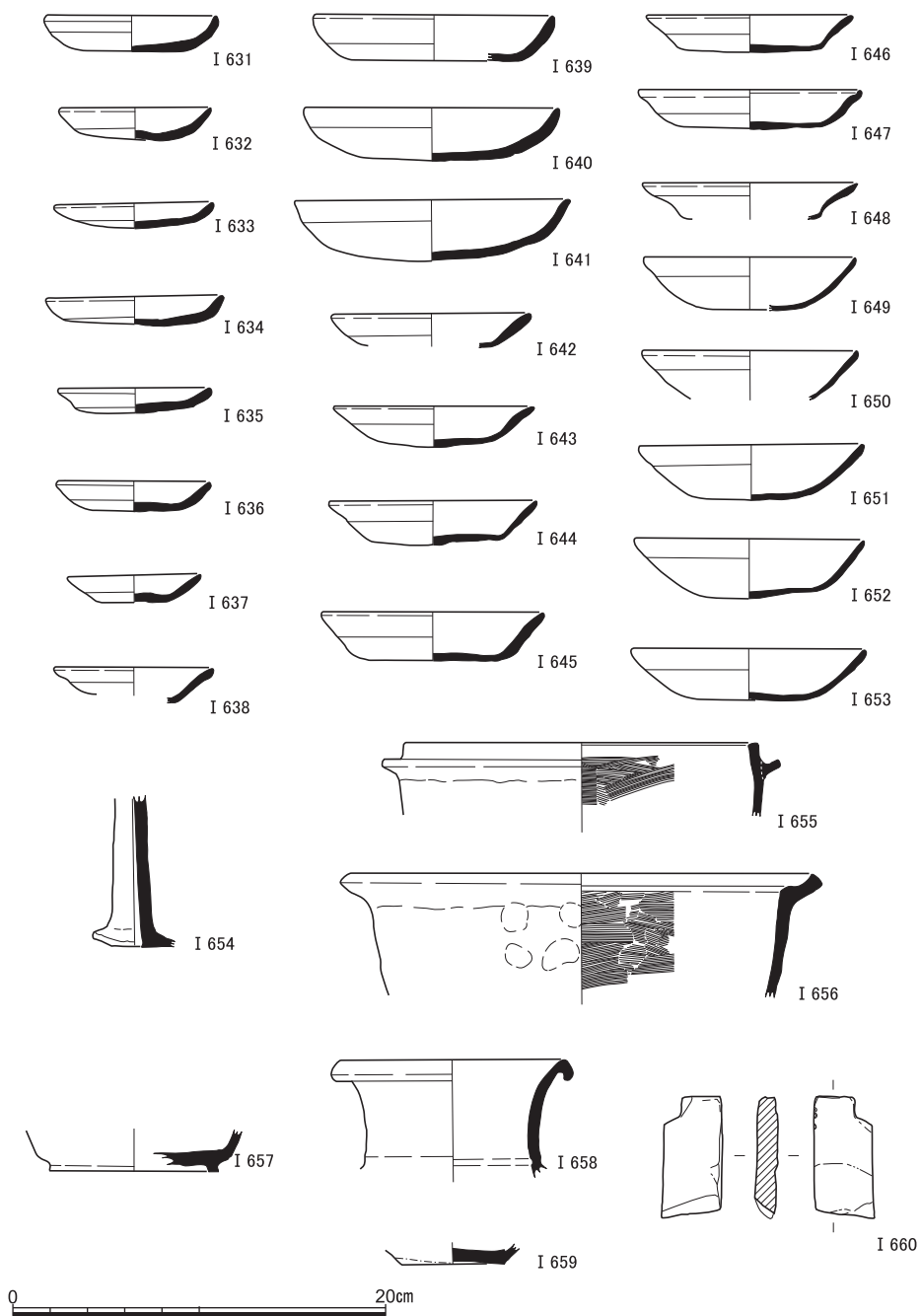


図52 ピット出土遺物（I 631～I 654土師器，I 655・I 656瓦器，I 657須恵器，I 658青磁，I 659白磁，I 660砥石）

2段階6 a型式期のものに相当し、13世紀第3四半期に作られたと判断される。

I 712は古瀬戸の卸皿。灰釉を漬け掛けしており、底部外面を露胎とする。そこには糸切りの痕跡がみうけられる。中期様式I期のものに一致すると思われ、1300年前後の作と推定される。I 713は緑釉陶器盤。体部は丸みをおび、口縁端部は折り曲げて玉縁状に作っている。体部内面下端に2条の沈線がめぐっている。底部外面を露胎とする。I 714は緑釉が薄くほどこされている陶器壺の底部片。低い高台が削りだされている。

I 715・I 716は青磁皿。体部中位で屈曲し、口縁端部は丸みをもつ。体部外面下半から底部外面を露胎とする。I 717は青磁碗の底部片。高台は断面四角で、その内部はえぐりがやや浅い。畳付およびその内部を露胎とする。内面に幾何学花文を描く。I 718は青磁浅形碗。体部は丸みをおび、内湾気味に立ちあがる。体部外面に鐫のない蓮弁文を有する。見込みには1条の浅い沈線がめぐっている。釉は鶯色を呈する。畳付およびその内部を露胎とする。I 719は青磁碗。体部は丸みをもち、口縁端部がわずかに外反する。体部外面に蓮弁文を有する。高台は低く、その内面を浅くえぐっている。釉は夏虫色を呈する。畳付およびその内部は露胎となり、橙色を発する。胎土は緻密で、灰白色を呈する。

I 720は白磁皿。口縁端部はわずかに外反し、口禿げとする。釉は灰白色を呈し、全面にほどこされている。I 721は白磁皿。口縁部が外反し、その端部を口禿げとする。灰白色の釉が全面にほどこされているものの、底部外面のそれは板状の工具によって伸ばされている。I 720・I 721ともに13世紀後半から14世紀前半に増加するものとなる〔山本2000〕。

I 722は青銅製の金具。取っ手であろう。

I 723は硯。平面は長方形で、縁がすべて欠損する。裏面は断面を弧状に仕上げている。石材は黒色の粘板岩となる。I 724は灰黄色を呈する砥石。I 725は石臼。下臼で、下部周辺が鏝状に大きくひろがる茶臼となる。すり面および鏝部の多くは欠失し、臼目はわずかにしか確認できない。

(6) 茶褐色土の遺物 (I 726～I 756, 図版28, 図56・57)

中世の遺物包含層である茶褐色土から出土したものについて説明をくわえていく。

I 726・I 727はD₃類, I 728～I 730はE₁類の土師器小皿。I 731は乙訓在地形の土師器皿。I 732は白色系の土師器小碗。I 733～I 739は白色系の土師器くぼみ底小碗。I 734・I 737・I 738は口縁端部をつまみあげている。I 736は器壁が厚い。I 740は推定口径が23cmの橙褐色を呈する土師器皿。口縁部を横撫でで仕上げている。体部外面には指押さえ、体部内面には削りの痕跡が認められる。

中世の遺跡

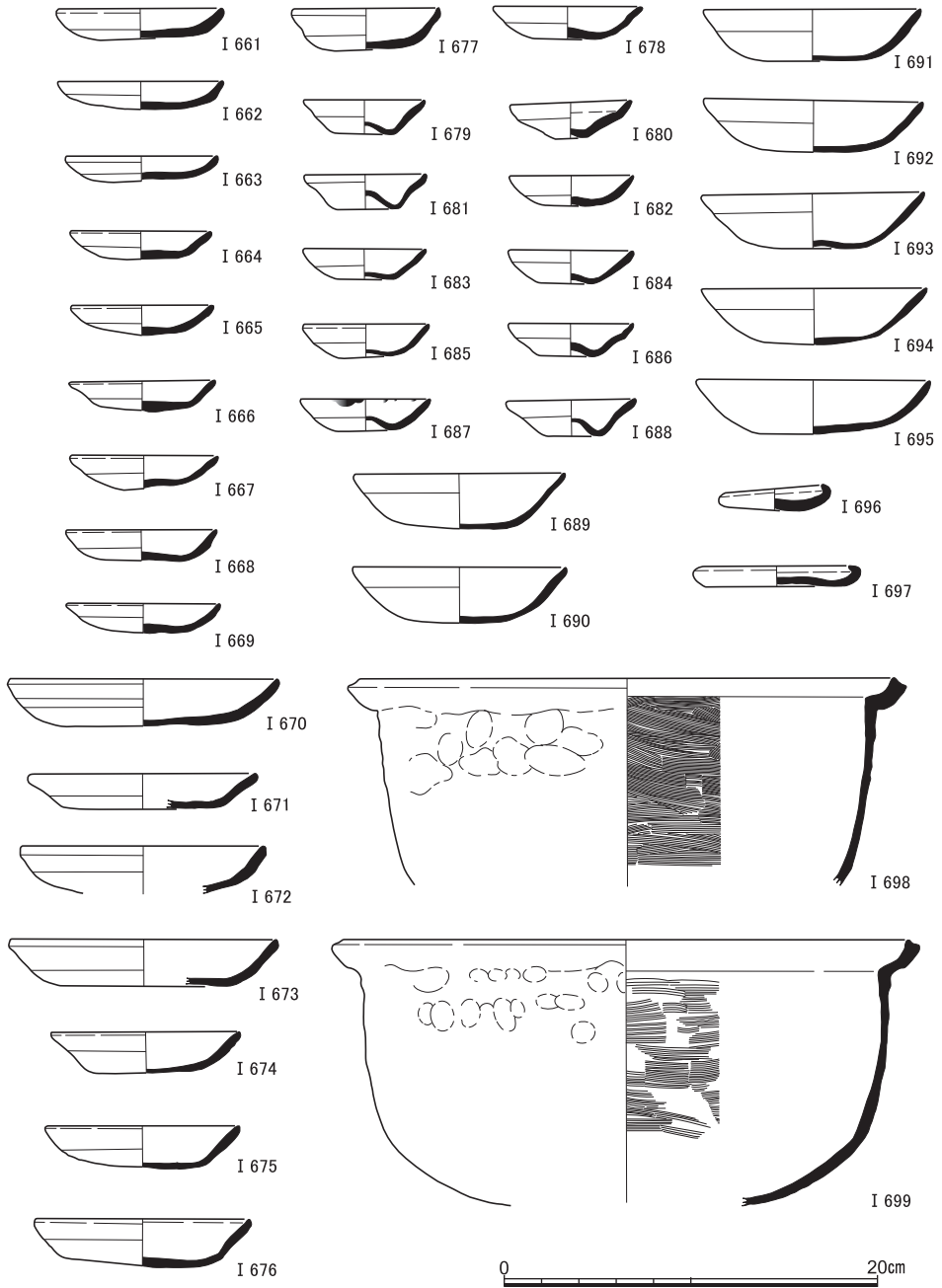


図53 茶褐色土落ち込み出土遺物(1) (I 661~I 697土師器, I 698・I 699瓦器)

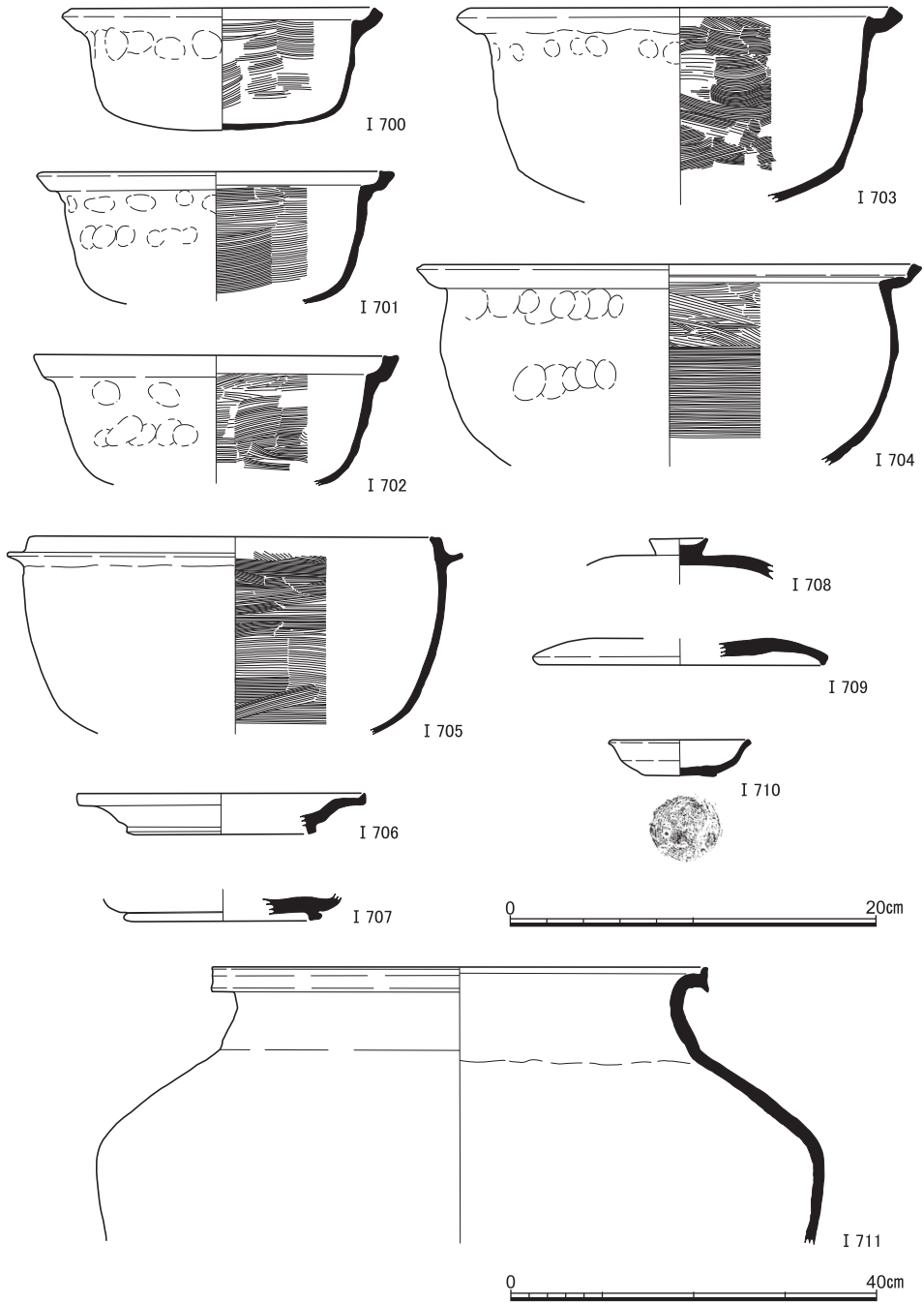


図54 茶褐色土落ち込み出土遺物(2) (I 700~ I 705瓦器, I 706~ I 709須恵器, I 710山茶碗, I 711常滑) I 711縮尺1/8

中世の遺跡

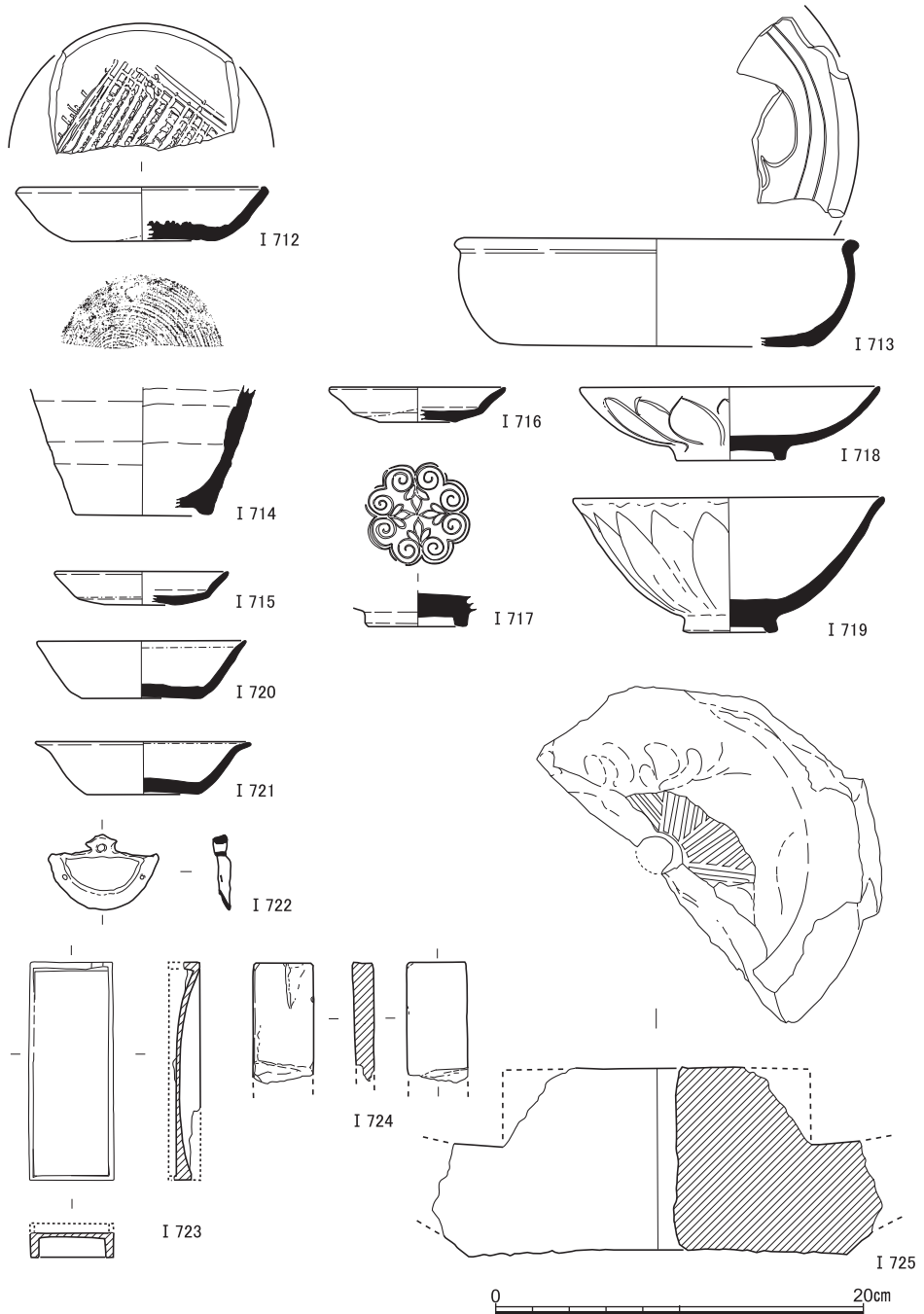


図55 茶褐色土落ち込み出土遺物(3) (I 712古瀬戸, I 713緑釉陶器, I 714陶器, I 715~ I 719青磁, I 720・I 721白磁, I 722青銅製品, I 723硯, I 724砥石, I 725石臼)

I 741は瓦器羽釜。口径が推定で30cmほどとなる大型品。口縁部が長く伸び、内側に傾いている。

I 742は古瀬戸の折縁深皿。底部内面に轆轤を用いた櫛描きによる同心円文がみうけられる。底部外面を露胎とし、体部外面から口縁部外面にかけて灰釉が刷毛により薄く塗られている。中期様式Ⅲ期のものに相当し、14世紀中葉ごろに作られたと考えられる。I 743は古瀬戸の瓶子。胴部外面には刷毛によって灰釉が薄く塗られている。胴部内面には粘土紐を輪積みにした痕跡が認められる。

I 744は完形の古瀬戸の四耳壺。本調査区の中央付近、図28の×印を付したところから出土した。口縁端部を玉縁状にし、強く張った肩部をへて、ゆるやかなふくらみをもつ胴部へと連なっている。肩部には型作りの耳が4つ貼り付けられている。向かい合う2つの耳にはそれぞれ3本・4本の筋目がみうけられる。くわえて、耳と耳のあいだに、それらをつなぐように沈線が存している。口縁部から貼り付けられた高台にかけて、おおよそ半分の箇所自然釉が付着している。ただし、肩部にはそれが全面に認められる。前期様式(13世紀)のものであり、完形である点、各地の出土事例などをふまえると、火葬蔵骨器として使われた可能性が高い。ちなみに、本調査区の北に位置する111地点からは、褐釉陶器四耳壺を用いた土壙墓S K 246・502が検出されている〔五十川・飛野1984〕。

I 745は古瀬戸の卸皿。糸切り未調整の平底から、体部は大きく開き、口縁端部は平坦に仕上げている。体部内面から底部外面にかけて灰釉が刷毛で塗られている。中期様式Ⅳ期のものにあたり、14世紀半ばに作られたとみなされる。I 746・I 747はいずれも橙色を呈する陶器卸皿。

I 748は青磁壺の口縁部片。口縁端部を外側に折り曲げ、玉縁状にしている。I 749は青白磁の合子身。体部上半および内面に釉がかけられている。

I 750～I 752は石鍋。いずれも口縁直下に削りだされた鏝がめぐっている。I 753は硯。平面形は海の側が少し狭くなる台形となる。裏面には剥離痕が認められる。縁の部分の大半が欠損する。黒色の粘板岩を材料とする。I 754～I 756はいずれも灰白色を呈する砥石。

(7) 銭貨 (I 757～I 846, 図58～60)

本調査区からはあわせて160点の渡来銭が出土している。北宋銭がその大部分を占める。それらのうち中世の遺構、茶褐色土落ち込み、茶褐色土からみつきり、かつ文字が割合に明瞭なものをえらんで図に掲げた。

I 757～I 802は、S K 8の埋土から出土した。先に述べたように、そこからは61枚の銭

中世の遺跡

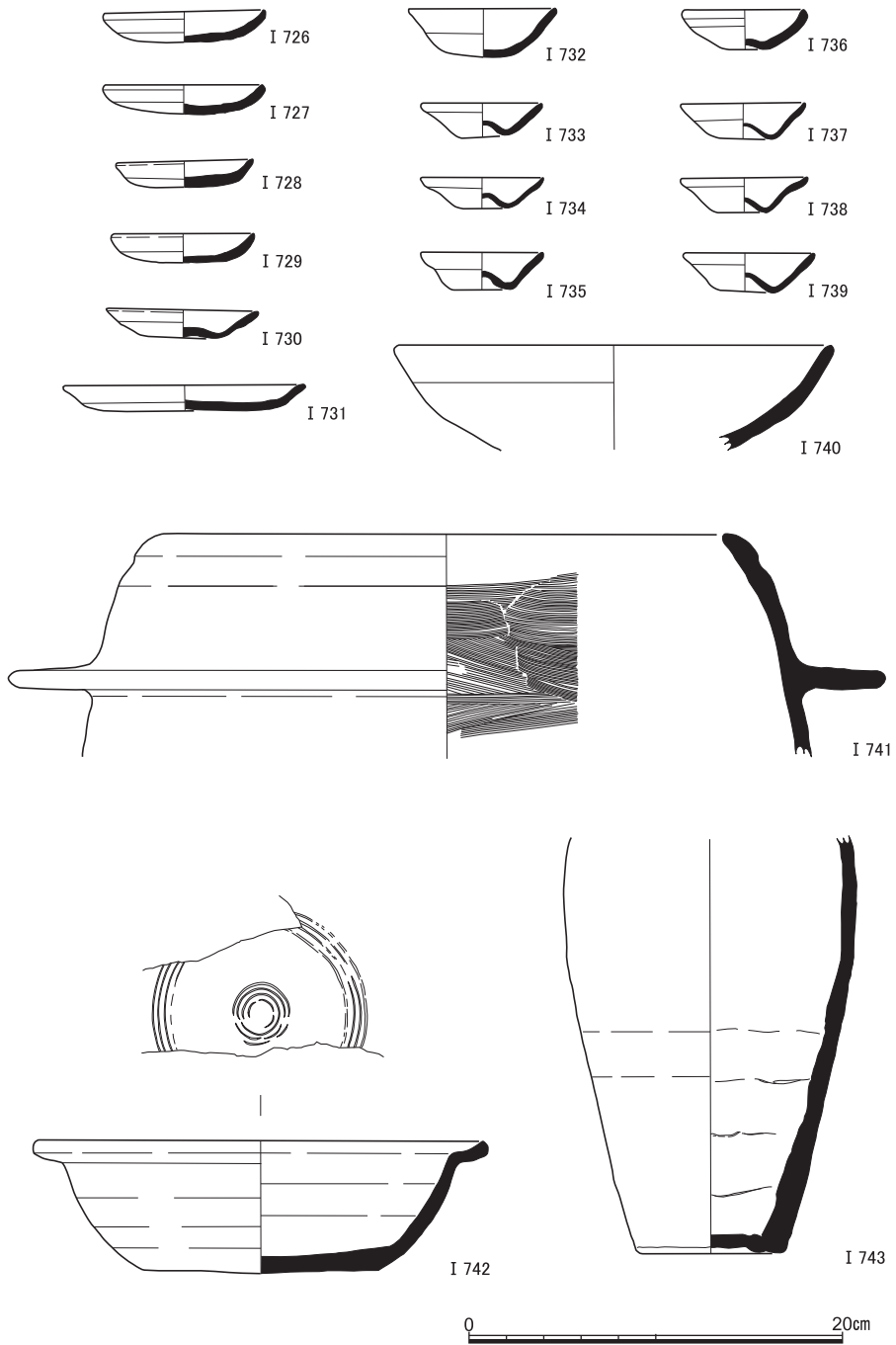


図56 茶褐色土出土遺物(1) (I 726～I 740土師器, I 741瓦器, I 742・I 743古瀬戸)

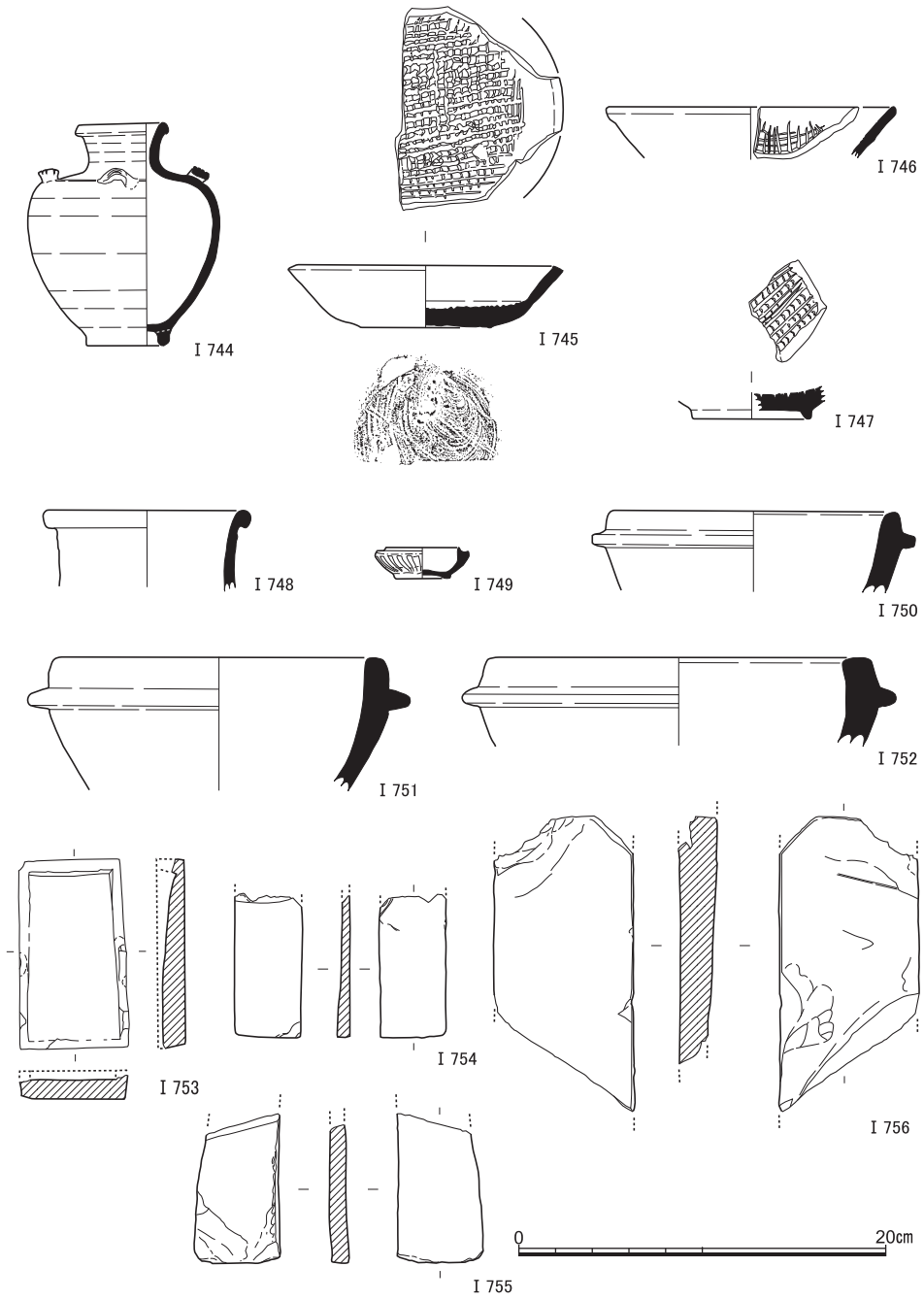


図57 茶褐色土出土遺物(2) (I 744・I 745古瀬戸, I 746・I 747陶器, I 748青磁, I 749青白磁, I 750~I 752石鍋, I 753硯, I 754~I 756砥石)

中世の遺跡

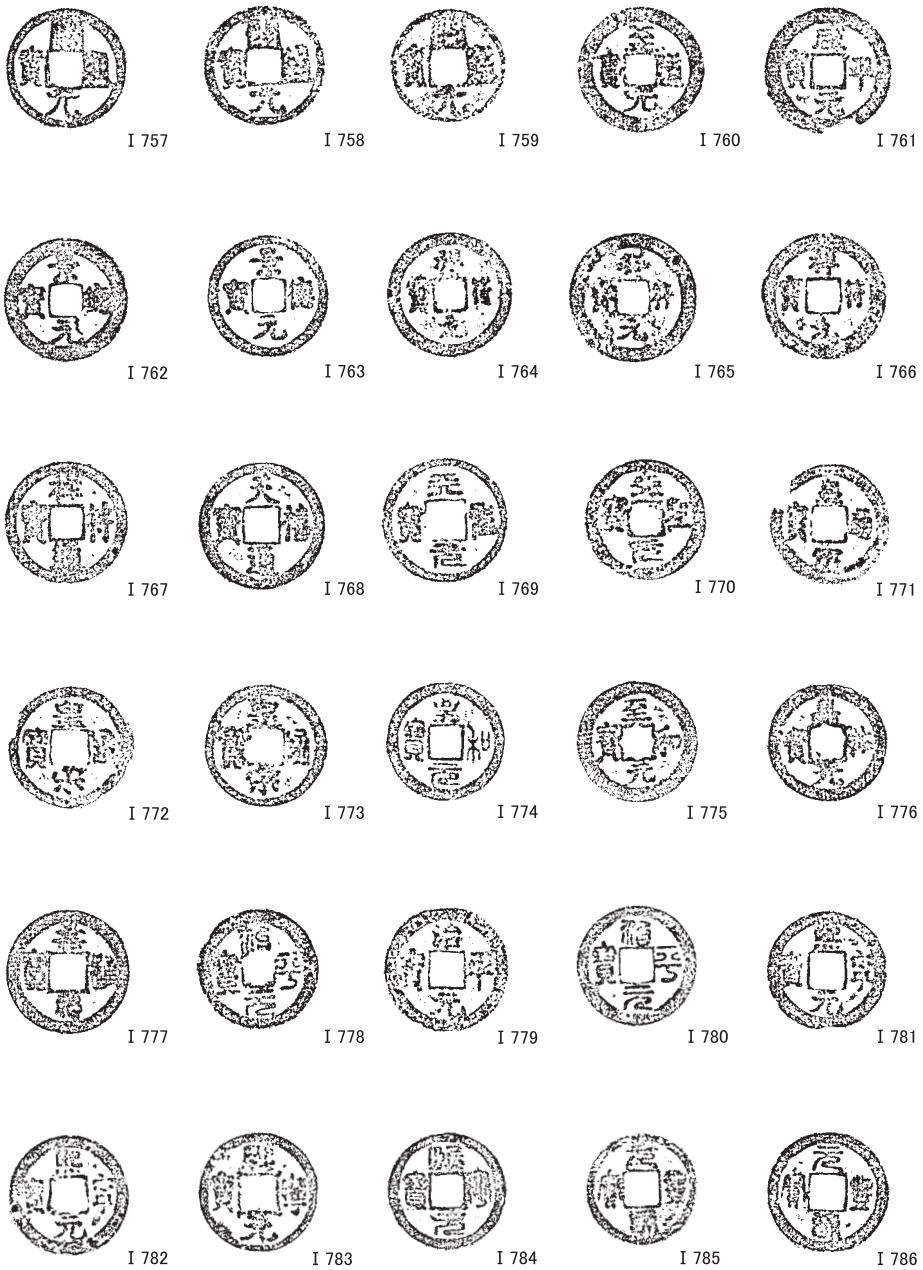


図58 銭貨(1) (I 757~I 786) 縮尺2/3

貨がみつまっている。ただし、そのうちの6枚にかんしては、文字の一部ないしはすべてを読みとることができない。

I 757～I 759は、唐銭の開元通宝で、武徳4年（621）および会昌5年（845）が初鑄となる。これらのほか2枚のそれが出土している。

I 760～I 802は北宋銭。I 760は、至道元年（995）初鑄の至道元宝。I 761は、咸平元年（998）初鑄の咸平元宝。I 762・I 763は、景德元年（1004）初鑄の景德元宝。I 764～I 766は、大中祥符元年（1008）初鑄の祥符元宝。I 767は、大中祥符元年初鑄の祥符通宝。I 768は、天禧元年（1017）初鑄の天禧通宝。このほか1枚のそれがみつまっている。I 769・I 770は、天聖元年（1023）初鑄の天聖元宝。I 771～I 773は、宝元2年（1039）初鑄の皇宋通宝。これらのほか2枚のそれが出土している。I 774・I 775は、至和元年（1054）初鑄の至和元宝。I 776は、嘉祐元年（1056）初鑄の嘉祐元宝。このほか1枚のそれがみつまっている。I 777は、嘉祐元年初鑄の嘉祐通宝。I 778～I 780は、治平元年（1064）初鑄の治平元宝。I 781～I 784は、熙寧元年（1068）初鑄の熙寧元宝。I 785～I 788は、元豊元年（1078）初鑄の元豊通宝。これらのほか1枚のそれが出土している。I 789～I 793は、元祐元年（1086）初鑄の元祐通宝。I 794～I 797は、紹聖元年（1094）初鑄の紹聖元宝。I 798は、元符元年（1098）初鑄の元符通宝。I 799は、建中靖国元年（1101）初鑄の聖宋元宝。このほか1枚のそれがみつまっている。I 800は、大觀元年（1107）初鑄の大觀通宝。I 801・I 802は、政和元年（1111）初鑄の政和通宝。これらのほか1枚のそれが出土している。

I 803は、S X24からみつかった元祐通宝。

I 804・I 805は、S X13の埋甕底部直下から出土した元豊通宝・元祐通宝、I 806は、埋甕の掘形埋土からみつかった開元通宝。

I 807～I 829は、茶褐色土落ち込みから出土した。

I 807は開元通宝。I 808は至道元宝。I 809は祥符元宝。I 810は祥符通宝。I 811・I 812は天聖元宝。I 813～I 815は皇宋通宝。I 816・I 817は熙寧元宝。I 818・I 819は元豊通宝。I 820・I 821は元祐通宝。I 822は紹聖元宝。I 823は元符通宝。I 824～I 826は聖宋元宝。I 827・I 828は政和通宝。I 829は、宣和元年（1119）初鑄の北宋銭・宣和通宝。

I 830～I 846は、茶褐色土からみつかった。

I 830は開元通宝。I 831は至道元宝。I 832は咸平元宝。I 833は天聖元宝。I 834・I 835は皇宋通宝。I 836・I 837は嘉祐通宝。I 838は治平元宝。I 839は熙寧元宝。I 840・

中世の遺跡

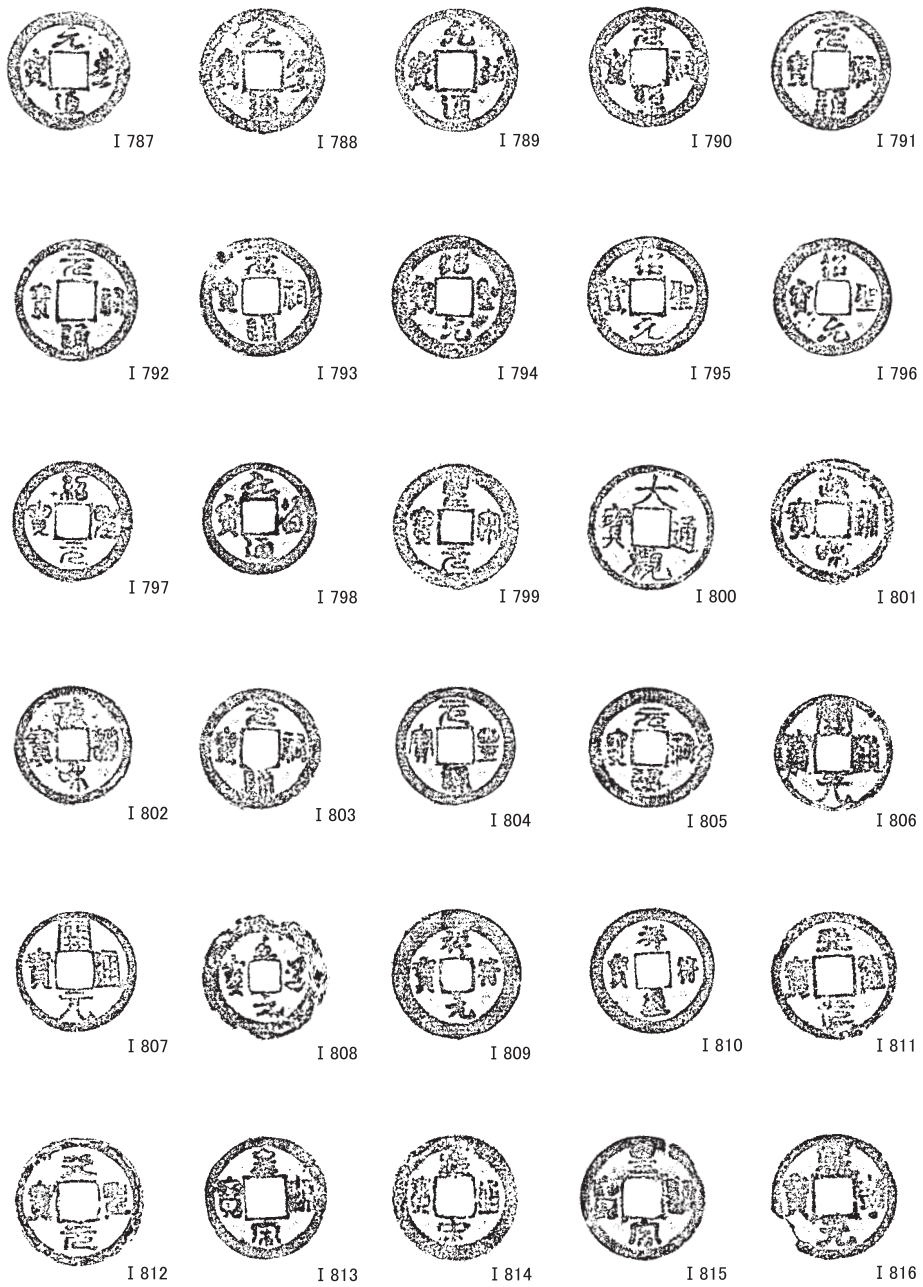


図59 銭貨(2) (I 787~I 816) 縮尺2/3

京都大学吉田南構内A N21区の発掘調査

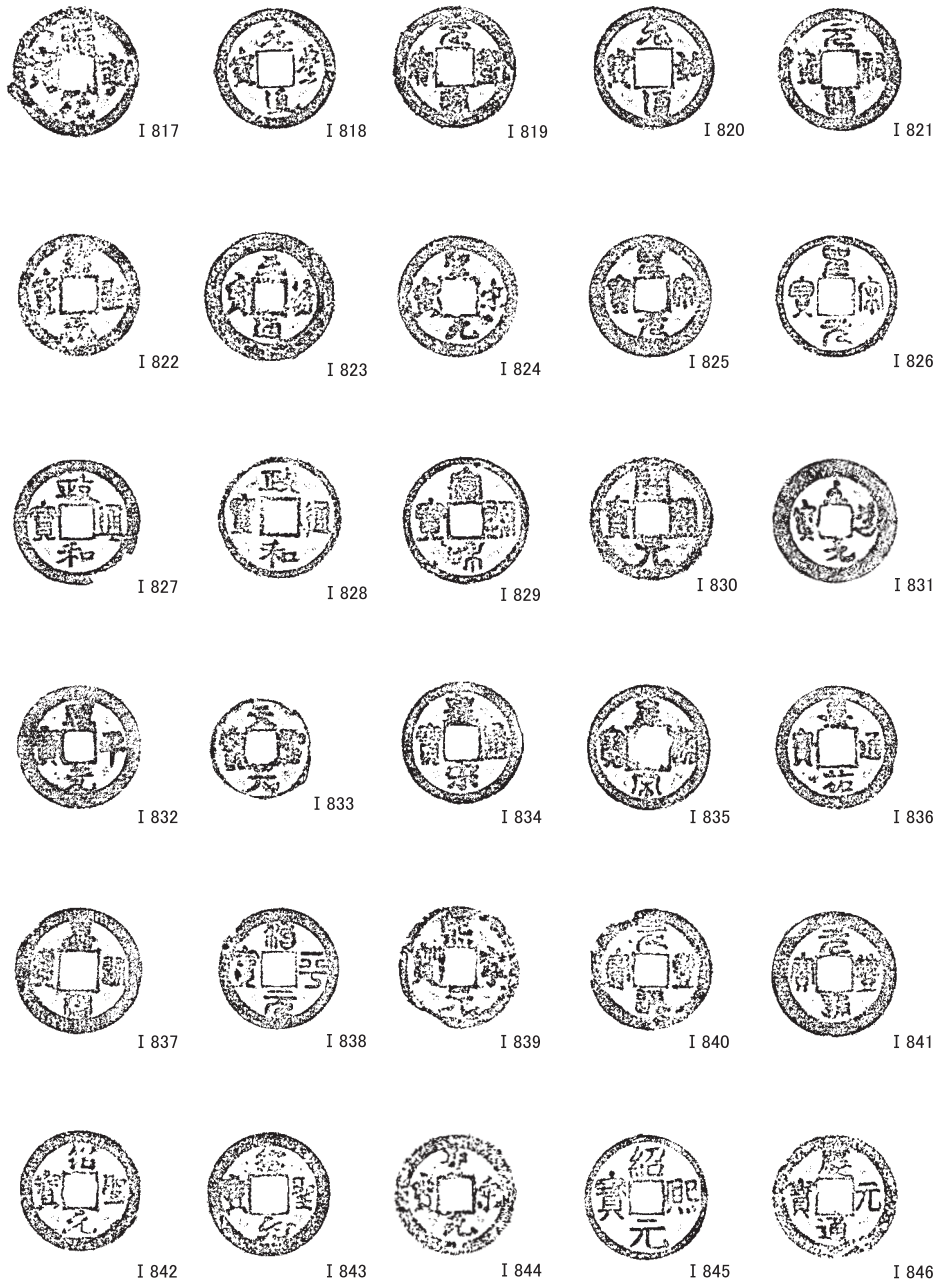


図60 銭貨(3) (I 817~I 846) 縮尺2/3

I 841は元豊通宝。I 842・I 843は紹聖元宝。I 844は聖宋元宝。I 845は、紹熙元年（1190）初鑄の紹熙元宝、I 846は、慶元元年（1195）初鑄の慶元通宝で、いずれも南宋銭。

(8) 古代・中世の瓦磚類（I 847～I 877, 図版29・30, 図61～64）

軒丸瓦（I 847～I 854） I 847は単弁八葉蓮華文軒丸瓦。中房に4 + 1の蓮子をもつ。SX46より出土。I 848は単弁推定十八葉蓮華文軒丸瓦。蓮弁は細長く尖り気味で、子葉は突線であらわされている。外区に圏線を1条めぐらせている。SX21より出土。I 849は複弁八葉蓮華文軒丸瓦。一段高い中房に「卍」をおき、外区に珠文と圏線をもつ。裏面に指の圧痕を残す。茶褐色土より出土。I 850は単弁八葉蓮華文軒丸瓦。中房に1 + 8の蓮子をおき、その周囲に雄蕊帯をめぐらせている。雄蕊帯には25本の放射状突線が認められる。蓮弁は丸みをおび、その突端を尖らせている。外区に圏線を1条もつ。外周上部から丸瓦凸面および瓦当裏面から丸瓦凹面にかけて縦方向の撫でがほどこされている。茶褐色土より出土。

I 851は右卷三巴文軒丸瓦。範の打ち込みは浅く、全体的に摩滅している。外周上部は縦方向の篋削り、瓦当裏面は横方向の撫でによって調整がおこなわれている。茶褐色土より出土。I 852は外区に珠文帯を有する左卷三巴文軒丸瓦。ただし、内区に1個の珠文が認められる。外周上部から丸瓦凸面にかけて縄叩き、瓦当裏面には横方向の撫でがほどこされている。茶褐色土より出土。I 853は左卷三巴文軒丸瓦。外区内縁に珠文をもち、外縁が突出している。外周から丸瓦凸面および瓦当裏面は撫でによって調整がおこなわれている。茶褐色土落ち込みより出土。I 854は外区に珠文帯を有する左卷三巴文軒丸瓦。全体的に摩滅しており、調整の仕方は判然としない。茶褐色土落ち込みより出土。

軒平瓦（I 855～I 869） I 855・I 856は均整唐草文軒平瓦。肉厚な唐草がゆるやかに伸びている。I 855は凹面に布目圧痕が残る。I 856は瓦当裏面に横方向の撫でがほどこされている。前者はピット、後者は茶褐色土落ち込みより出土。I 857は唐草文軒平瓦。硬化した唐草文を配する。瓦当折り曲げ式で、その裏面に指頭圧痕がみうけられる。凸面は撫でによって調整がおこなわれている。茶褐色土より出土。I 858は唐草文軒平瓦。唐草文がくずれ波状をなしている。瓦当折り曲げ式で、瓦当面に布目痕が残る。また、その裏面には縄叩き痕が認められる。茶褐色土より出土。I 859は均整唐草文軒平瓦。中心飾りに蓮華文をおき、6反転する簡略化した唐草を左右に配する。外区上部および脇区に珠文帯をもつ。凹面は布目痕の大部分を撫で消している。顎には横撫で、瓦当裏面から凸面にかけて縦方向の撫でがほどこされている。茶褐色土落ち込みより出土。

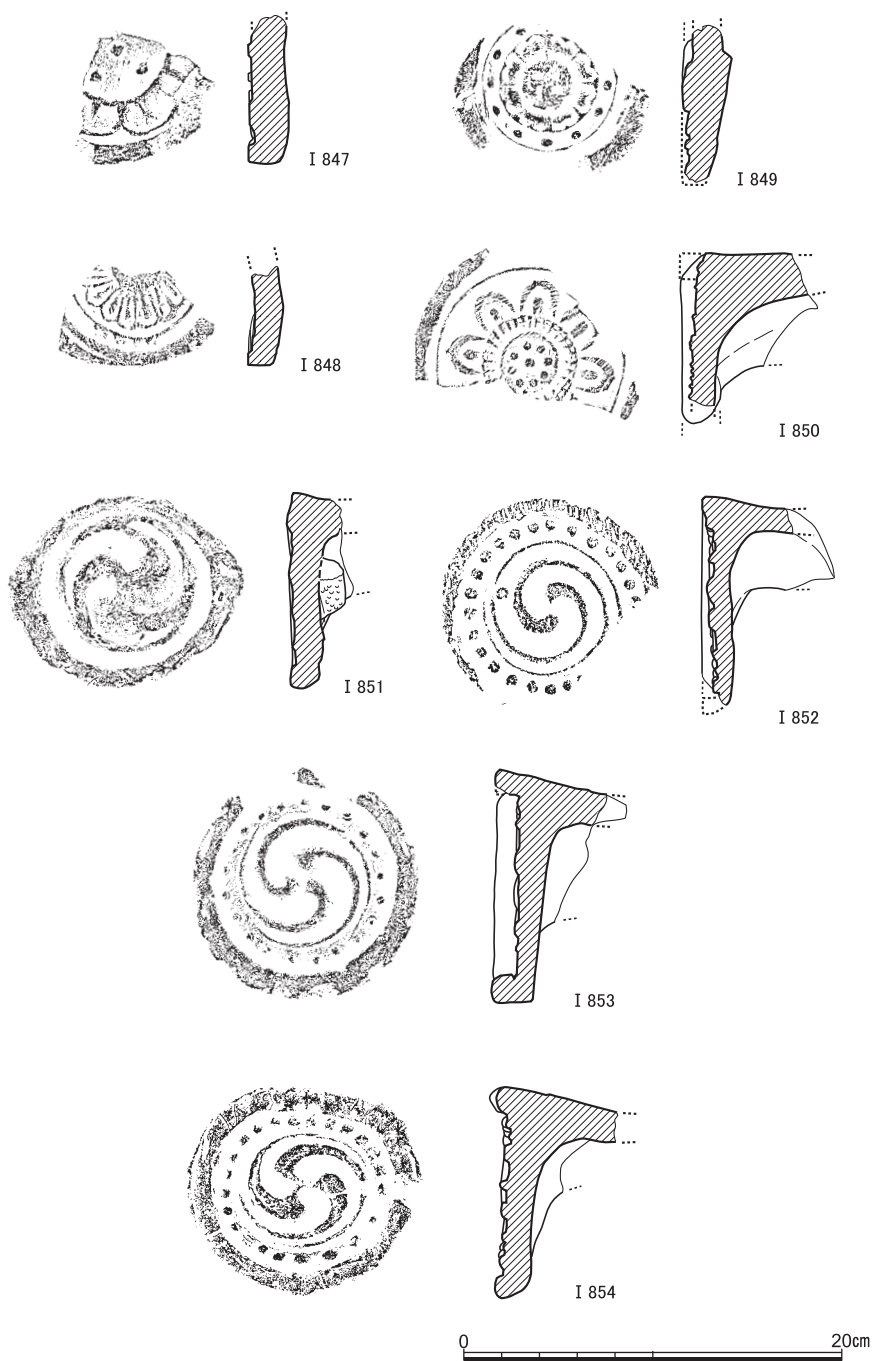
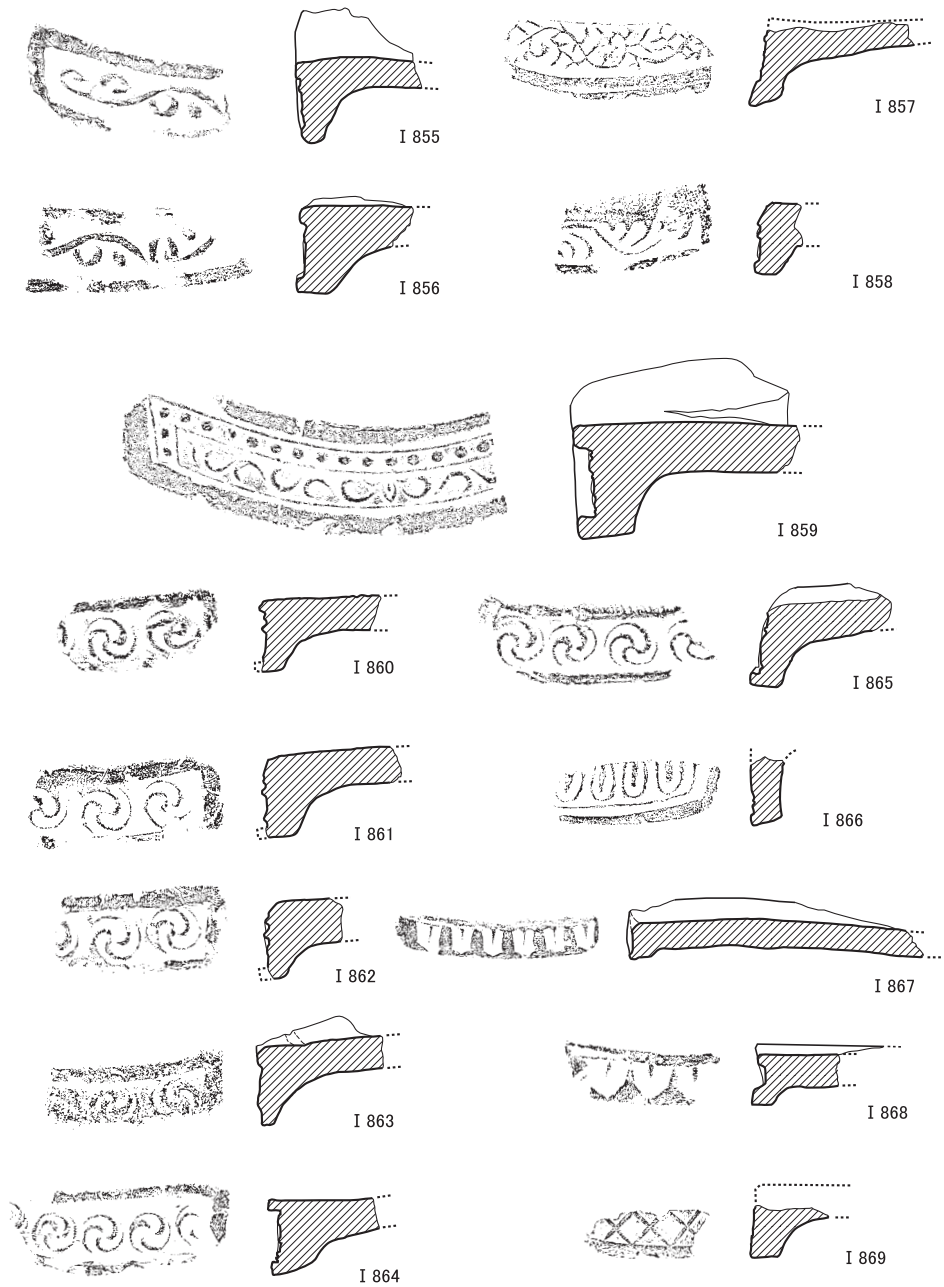


図61 軒丸瓦 (I 847~ I 854)

中世の遺跡



0 20cm

図62 軒平瓦 (I 855~I 869)

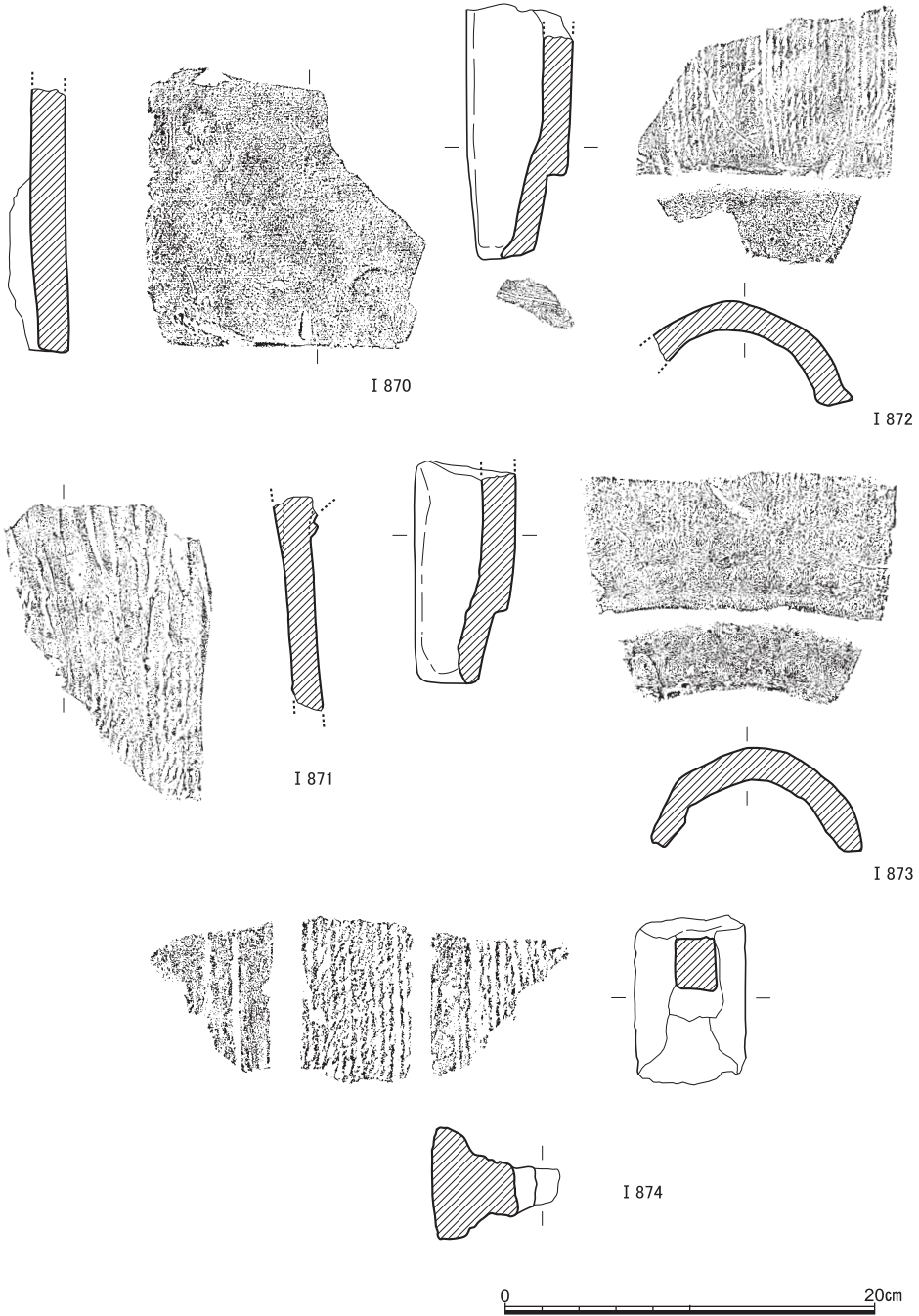


図63 丸瓦 (I 870~I 873)・埴 (I 874)

中世の遺跡

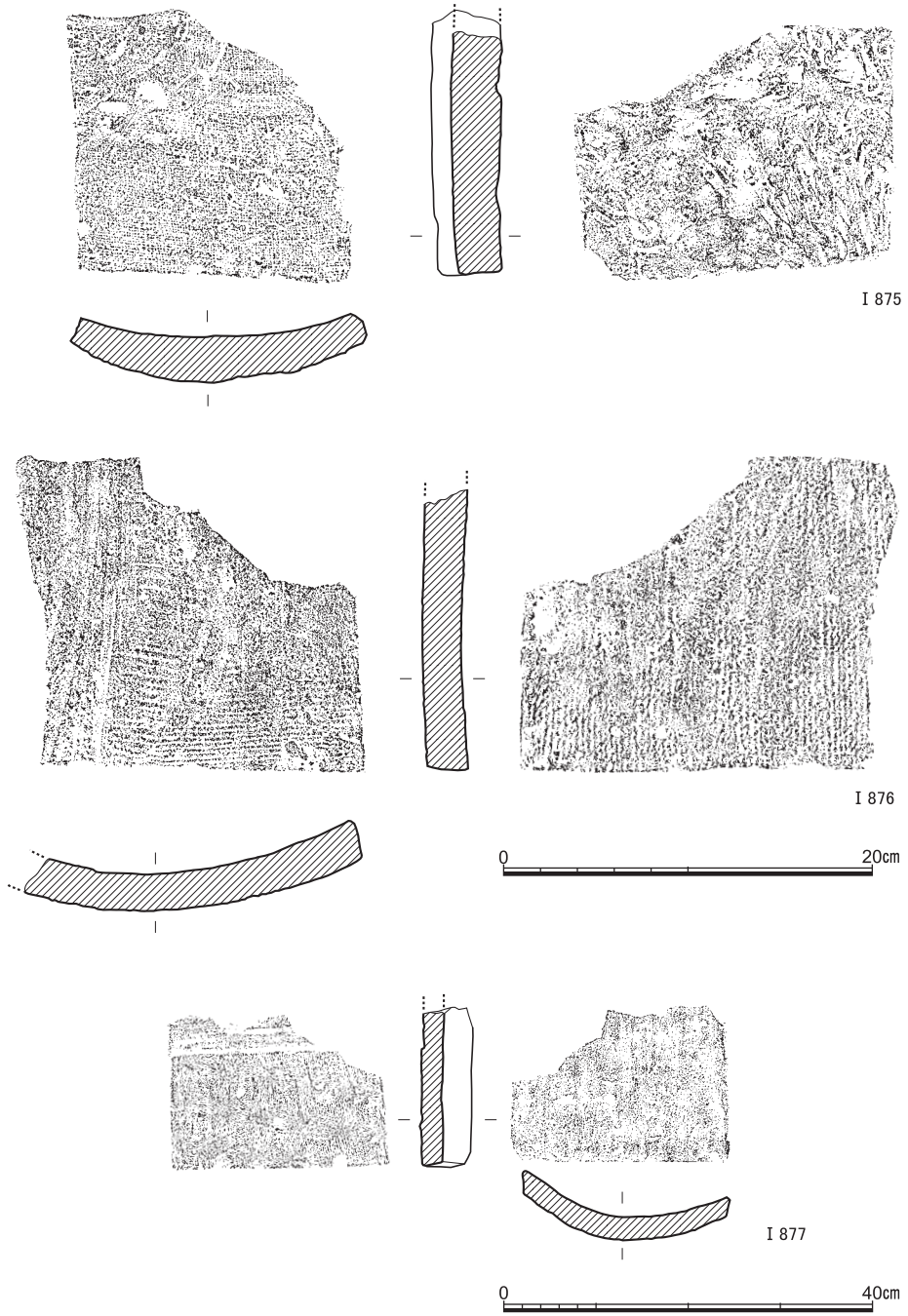


図64 平瓦 (I 875~I 877) I 877縮尺1/8

I 860～I 865は連巴文軒平瓦。それらのなかには、中心飾りがおかれているものも含まれているだろう。いずれも凹面に布目圧痕が残るけれども、I 863・I 864はその大半が撫で消されている。I 860・I 861は茶褐色土落ち込み、I 862～I 865は茶褐色土より出土。

I 866～I 868は剣頭文軒平瓦。I 866は単弁で子葉を有する陽刻剣頭文を配している。S X21より出土。I 867は上下幅の狭い瓦当面に、こぶりの陰刻剣頭文をならべている。凹面に細かい布目痕が残る。また、顎から瓦当裏面にかけて横撫でによって調整がおこなわれている。茶褐色土落ち込みより出土。I 868は彫りの深い陰刻剣頭文を配する。凹面に細かい布目、瓦当裏面に横撫での痕跡が認められる。S D10より出土。

I 869は格子文軒平瓦。茶褐色土落ち込みより出土。

丸瓦・平瓦・塼（I 870～I 877） I 870～I 873は丸瓦。I 870は凹面に布目痕を残し、凸面には横方向に丁寧な撫で調整がおこなわれている。S D4より出土。I 871は瓦当部が欠落したもの。凹面に布目の痕跡が認められ、凸面には縄叩きの後、縦削りがほどこされている。S X44より出土。I 872・I 873はいずれも玉縁がつく。凹面に布目の痕跡を残し、凸面には縄叩きがおこなわれている。I 872には玉縁端面、I 873には凸面に曲線状の篋記号がみうけられる。前者はS X27、後者は茶褐色土落ち込みより出土。

I 874は塼。中央部がくぼみ、断面形が「I」字形となる。凹部に円孔の一部が認められる。側面の一方および端面に縄叩きがほどこされている。S D2より出土。

I 875～I 877は平瓦。I 875は凹面に布目、凸面に指押さえの痕跡が残る。茶褐色土落ち込みより出土。I 876は凹面に横位の糸切り痕がみうけられ、凸面には縄叩きをおこなっている。茶褐色土より出土。I 877は凹面に細かな布目痕を残し、凸面には縄叩きがほどこされている。ただし、凸面は端面から12cmのあたりで直線的にくぼんでおり、その低くなったところの表面には横位の糸切り痕が認められる。なお、凸面には離れ砂が付着している。茶褐色土より出土。

7 近世の遺跡

第3層（茶褐色土）上面で遺構検出をおこなうと（図65）、東北辺では東に5°振れて南北方向にはしる溝S D1を、中央付近では素掘りの野壺S E2を、それぞれ検出した。ともに遺物はほとんど含まれない。20cm前後の方形ないし円形のピットは、調査区全面で多数検出している。東西方向に規則的に並ぶ状況を確認できる場合もあるが、南北で対応するものを抽出できないので、建物跡ではなく農耕に関わるものだろう。また、調査区中央

近世の遺跡



図65 近世の遺構 縮尺1/300

(Y=2100辺り)の北半で南北方向に集中してみられる部分は、土地の区画を示すものかもしれない。

この集中部の南側では、南側および西側に下がる約20cmの段差を検出した。段差下の黒褐色土からの出土遺物には、近現代に帰属することが明確なものを認められなかったが、段差のラインは、北半の南北方向の杭の集中部や調査区全体の東西方向の杭群よりも西に振れ、ほかの近現代の穴列など軸線が平行する。したがって、この段差については、段差下位の溝も含め、近現代の産物と判断する。

調査区西辺では、近現代の陶磁器類を多数包含している廃棄土坑を複数確認したが、中央以東では、近現代の陶磁器類もあまり多くは出土しなかった。近世の遺物は、17世紀と判断できる遺物はほとんどなく、それ以降の時期でも出土量が少ない上にはほとんどは破片である。中央辺のピットSP1からは、完形の印が出土しており(図66)、近世と判断している。体部下半に紐通しの穿孔を認められる。

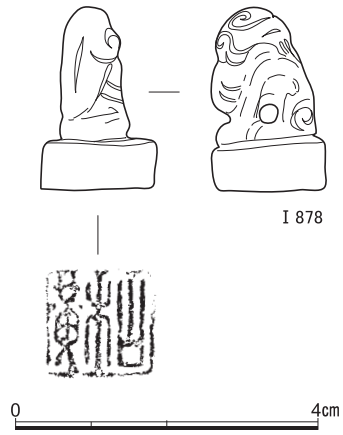


図66 近世の印 原寸

8 小 結

(1) 遺跡・遺物の調査研究法の試み

レーダー探査 本調査区では、1990年度に地中レーダー探査を実施している〔浜崎1991〕。こうした探査は、当時まだあまり実施されておらず、その点では重要な試みだった。そのときの成果の一つとして、本調査区西北辺に当たる部分での南北方向の大溝の存在が指摘された。そして、周辺地点での既往の発掘成果を加味した条坊復元に基づく歴史地理学的な理解で、その大溝は古代に掘削され中世でも機能していたと想定された。

発掘によって大溝の存否を確かめ得たのは、20年後の今回の発掘調査ということになる。はたして、それに相当すると思われる大溝が、実際にSD2として検出された。年代こそ中世後半であって、掘削が古代に遡る可能性を示唆することはなかったものの、レーダー探査の結果は実証されたと言える。その一方で、発掘調査で大きな成果の得られた、幅や深さの点で規模的にあまり遜色のない、そしてほぼ同一面で検出されている、古墳の周溝はこのときのレーダー探査では検出され得なかった。

地中探査法においては、探査結果では、遺構が有るか無いか、有る場合にはその年代を

いつ頃と推定するか、という読み取りや解釈の上での課題を生むことは確かである。しかし、探査の実施によって、遺構によっては掘削しなくても存在を指摘し得るものがあることは、今回の発掘でも実証された。地中探査法は、緊急発掘調査での作業工程の策定や、学術調査での発掘地点の設定において、あるいはむしろ掘削を避ける目的の遺跡保存において、判断素材として有効に機能する場合もあろう。

遺物の出土状況分析 弥生中期の方形周溝墓と古墳中期の8・9号墳で、遺物の出土状態に留意した。出土状況の原位置分析は、墓のような、行為者の行為目的が比較的明瞭で、器物をともなった行為が為されたその状態を保つように案配されることの多い遺構では、行為者の意図にも接近し得る。非日常的な空間のために、器物が人為的な二次的移動を被る確率は低いと考えられ、実際に、元の形状をよく維持した状態で出土することも多い。本項では、方形周溝墓の分析についてまとめ、古墳については別項で詳述する。

弥生中期後葉の方形周溝墓では、型式学的に先行する東接する261地点の方形周溝墓では複数の土器が接近して出土する事例が多いのと対照的に〔千葉・阪口2005〕、3点の土器がそれぞれ離れて出土した。土器の系譜的特徴と出土地点におよその対応を認めうる点は興味深い、偶然かもしれない。さて、南の周溝から出土した伊勢系の壺（I21）は、横位で出土したが、中世の攪乱を受けて二次的に少し移動した可能性がある。

北の周溝の在地的とも捉えうる甕（I20）も、横位で出土した。中世に口縁部の損壊を被ったが、遺構検出によって中世の遺構に切られた土坑と認識して掘削してから土器が出土した発掘過程に照らしても、既に横位になって埋積した後に損壊を被ったことは明瞭である。しかし、底裏面が周溝底面に直交して出土したけれども、この土器は、口縁側が重いので横位に置いて十分にバランスが取れ、底部側に傾くわけでもない。つまり、正位に据えられていたとしても、溜まった雨水など内容物があれば、横転したときに勢いもつくから、この体位を保つことは可能だろう。供献時に横位だったと断定はできない。

その一方、西の周溝の南縁で出土した、淀川水系を中心とした近畿西部系の水差（I19）については、個体の向き、特定破片の出土位置や傾きなどから、正位でなく横位に安置されていた可能性を指摘した。正位で安定するための重厚な台部を有しながら、ライフヒストリーの最終段階では、おそらくは接地面に凹凸をつけて安定させた横位状態で機能していたことになる。これは、焼成時の変色部をやや逸れたところに施された焼成後の穿孔部が、出土時に地面側を向いていたことにも関わろう。弥生時代には、胴体下半の穿孔部が地面側を向く状態で据え置かれる埋設土器がしばしば確認される。なお、穿孔部と把

手との位置関係を考慮すれば、穿孔箇所の設定は把手に規制されていたとも解釈できる。

遺物の破損状況分析 出土遺物については、破片の接合で明らかになる割れ線（＝破損線）の観察を、中世の埋甕S X13（I 607）と、陶器溜S X20から出土した3個体の甕（I 582～I 584）で試みた。中世の埋甕S X13の大甕は、土中に正位で据えられており、内部に焼土や包含層と同じ茶褐色土が埋積し、少量の銭貨も包含していた。埋設状態の東面の胴下半部に2箇所、中心が上下に並ぶ蜘蛛の巣状の破損線が展開し、ともに破片が外側にやや張り出す（図版13-3）。しかし、それらの中心たる割れの起点からの破損線は全面には広がらない。また、それ以外の胴下部では、破損線は水平方向に横走するか、水平に近い角度で斜走する。その一方で、口縁部から胴上部までは、肩部の屈曲をおよその境にして、口縁側も胴部側も、器体に対して縦方向に割れの幹線が走る部分が多い。すなわち、正位の状態で俯瞰すれば、同心円状よりも放射状の破損幹線を多く認める（図版13-2）。この大甕は、粘土帯の積み上げで成形されているが、埋設された状態を維持したままでひび割れる時には、このような縦走する破損線が主体になることもあるのだろう。

一方、陶器溜S X20から出土した破片の多くは、接合によって同様の器形の甕3個体分の屈曲部上位から口縁部にかけてのものと判明した。胴下半部の破片は少量で、底部はない。これらの3個体はいずれも、器体に対して縦方向に破損線の幹線がはしる部分が多い。出土時の破片の集合状況では（図版11-6）、I 582は、およそ遺構の下位の主たる構成破片となっているが、複数の大破片にわかれている。I 583・I 584は、上位であり大きなまとまりもなく、また双方に分布的排他性もなく、出土する。しかし、前者と後二者との間で埋土が少しでも厚いわけではない。以上から、別のところで割れた3個体分のおもに口縁部が集められて捨てられたと言える。

ほかの遺構やほかの遺跡の事例をまだあまり多く実見していないが、1mほどの大きさの甕において、屈曲部から口縁部にかけての破片が縦に長く接合してその長方形ないし等脚台形のまとまりがいくつも存在する例を、今のところ確認できていない。ただ、時代や器形も異なり、したがって焼成や脆弱性も異なるが、縄文土器の深鉢では、正位に据えられて内外に土が充填される埋甕炉で、同様に、器体に対して縦方向に破損幹線のみがはしる個体は散見できる〔富井2011 p395〕。現時点では、S X20から出土した3個体も、埋甕だった可能性を考えたい。どこか近くに埋められていた状態だったものが、意図的に掘り返されて、内部の土を取り去って内容物を確認する際に邪魔になる屈曲部までが割られ、そしてそれが捨てられた、という解釈もできるかもしれない。

(2) 先史時代の堆積環境

第9層（黄褐色シルト～細砂）からその直上の第8層（暗茶褐色砂質土）へは、一挙性の堆積ではないが、土壌化のあまり進んでいない状態で上方粗粒化していることがわかる。第9層は掘削できていないので堆積年代は不明だが、第8層から出土したあまり摩滅していない土器片で古いものは、北白川上層式3期～元住吉山I式に京都盆地で盛行する一乗寺K式（縄文時代後期中葉）なので、縄文後期中葉頃までにかけては、近くの河川などからの影響が強くなっていたことをうかがわせる。その水流は、第9層の下位には場所によって、高野川系の砂礫層が堆積していたり、白川系の砂層が堆積していたりするので、高野川と白川とのどちらかを特定することはできない。

第8層出土のあまり摩滅していない土器片で新しいものは滋賀里IV式（晩期後半）なので、後期中葉から晩期後半の古い段階までは、堆積環境は安定して土壌化が進み、第8層は褐色を呈するようになったと考えられる。その間ないしその後、大流路やSR1～3などの流路が本調査区をはしり、その水流が、流路内に第7a層（青灰色シルト～細砂）として細粒物を堆積させたり、調査区全体にあふれて第6b層（灰色粘質土）の母体となる細粒物を堆積させたりした。第6b層の上位には、第9層から第8層への展開と同様、上方粗粒化して第6a層（灰色砂質土）が堆積している。第7a層と第6b層の堆積は調査区全体で見ればおよそ同時期であり、前者はあまり摩滅していない弥生前期末の土器片を含み、後者はやや摩滅した縄文晩期末の滋賀里Vの破片を含む。縄文晩期末から弥生前期にかけて、再び河川からの影響を受けやすくなったと考えられる。この流路の縁や底面に堆積するのは灰白色の粗砂なので、白川系の流路の影響が強かったと思われる。

(3) 古墳の器物出土状況と位置づけ

9号墳の須恵器出土状況 渡り土手のすぐ西で周溝底面近くから出土した須恵器の坏身（I53）と甕（I54）と鉄製U字形刃先（I55）では、坏身とU字形刃先が北に傾いている。しかし、坏身のすぐ南東側から出土した大型甕は、それらとは逆に、南側に口縁を向けてほぼ完全に横転している。中が空の場合には、砂質土の上でもこのままの体位では安定しづらく正位方向に戻りがちである。穿孔部が地面を向いていることも加味すれば、意図的に横位に据え置かれたと考えたい。

甕が据え置かれたとすると、下場の標高は3点とも同程度なので、坏身とU字形刃先の傾きは、両者の着地面の微凹凸を反映しているとは言えない。坏身は、北壁際で北に傾いているので、正位のところに、北側上部から崩壊したか南側からかかった土が、容器内の

北側に溜まって傾いたのかもしれない。その場合には、内容物は腐朽したかもともと無かったか、ということも考えられる。いずれにしても、正位のものが傾いたとすれば、坏蓋をとまなわなかったことが傾いた素因である。なお、U字形刃先もそのときに傾いたならば、平たく置かれた状態で北側に土を受け北側に傾くことになるので、刃先のみだったとは考えがたい。把手が刃先に直角に近い角度で装着された鍬だった可能性がある。

8号墳東周溝の須恵器出土状況 東周溝の底面近くで、ホームベース状に並んでTK23・47段階の須恵器蓋杯が5組出土し（I25～I34）、その南側約50cm辺りにわずかな立ち上がりを確認した。北の1組を除いておおよそ方形をなす4組は、いずれも方形の中心に向かってやや傾く。5組のうち、北の1組と西北の1組は、天地が通常と逆で蓋に身を被せる状態で出土している（図14）。5組のうち、内容物は東北の1組から出土した針状鉄製品2点にすぎず、しかもその組では上に被さる蓋（I29）が割れていた。割れて出土したのはこの蓋だけなので、上方からの圧力が不均等だった可能性が考えられる。

TK23・47段階には、たとえば滋賀県守山市服部古墳群など〔滋賀県教育委員会1984〕、墳丘裾部での須恵器の供献事例を散見でき、「須恵器祭式」とも呼ばれるが〔楠元1992・山田2014〕、これら5組の須恵器については、上述の特徴から、被葬者用枕への転用と考えたい。須恵器転用枕はおもに、つづくMT15段階（6世紀前葉）に近畿北部などで蓋や身を凸面上向けで置く例が多いが〔桑山2006〕、本例は萌芽期の一形態ともみなせよう。その場合、南側の立ち上りを考慮すれば、被葬者の頭位は南だろう。また、方形をなす4組の中軸よりも東側に北の1組が位置するのは、被葬者頭部を西側に向けて安定させるためだったかもしれない。なお、針状鉄製品は形状的には髪留めかは不明である。

そしてこの須恵器群から50cmほど北側で、主軸を南北方向にして、刃部が墳丘外側の東を向き先端が南を向いて出土した鉄製刀子（I37）は、副葬品とみなしえる。また、須恵器群の5cm上から横倒して出土した壺（I35）も、刀子と同様に東周溝に葬られた者の副葬品と解釈できよう。壺は5組の蓋杯の分布の中心から30cmほどに西方で口縁が西側を向いていた。横位に安置された可能性もあるが、被葬者の頭部を意識してその直上付近に正位に据えたものが、横転して最終的にこの状態で埋没した可能性もある。周溝での葬送に棺を用いたかは不明だが、口縁が厚手のこの壺は、棺板上では正位では安定せずすぐ横転しよう。しかし、砂質土の上でならば正位で安置しえるので、その場合には、墳丘外側からの営力、たとえば降りかかる土などによって横転した状況を想定できる。

これらの器物と、50cmほど上位の埋土上層から多数出土した埴輪の破片との間には、遺

物をほとんど含まない埋土下層・中層が堆積しているが、埴輪の出土層準と同じ埋土上層からは、南周溝の上半からだが同じくTK23・47段階の甕（I41）が出土している。埴輪と同様に墳丘上のどこかの原位置から崩落してきたのであれば、8号墳の墳丘本体での葬送とこの東周溝での陪葬との間に数十年の時間幅を想定することはできまい。

8号墳南周溝の土師器出土状況 東周溝と同様に、埴輪の出土層とは間層をはさんで底面近くに器物が出土する状況は、南周溝にも認められる。そこでは、赤色顔料と土師器（I39・I40）の破片が出土している。東周溝内での葬送との先後関係は不明だが、埋土上層出土の甕（I41）と東周溝の須恵器群とは同型式なので、およそ同時と言える。

赤色顔料のもっとも大きなまとまりは、西辺の人頭大のものだが、その西端は中世の土坑SK4に切られる。そして、そのまとまりの下部、SK4との境界付近から出土した6点の土師器片では、内外面と破断面に顔料が付着しているものもあり、また、1点は別の1点の下位から出土しているが、6点は一まとまりに接合した。これら6点の口縁方位は異方向なので、この一まとまりはその場で割れたものではない（図15）。これら6点と接合する破片も多いSK4から20点以上出土した同一個体の破片でも、内外面だけでなく破断面にも顔料が付着しているものが目立つ。接合により、全体として一個体の甕の底部から胴下半であることが判明したが（I39）、口縁部や頸部のような変曲点の破片は出土していない。以上から、南周溝に持ち込まれるまでは中華鍋状の底部大破片に赤色顔料を収めていたと思われるが、破片が出土位置に着地する以前には割れていたことになろう。

別の個体ではほぼ完形になる壺は（I40）、破損線の走向から、底部に割れの起点を推定できるが、東から離れて出土した口縁部の出土状況から、その場で割れた状態を保っているとは考えられず、二次的な移動を想定し得る。口縁部の残存率が低いこともこの想定を支持しよう。出土時に下位に赤色顔料が認められた破片でも、その破断面や上面側には顔料は付着していないので、甕（I39）よりは後にここにもたらされたのだろう。内面が上向きで出土することは、破片の形状に照らせば無理からぬことではあるが、朱色の内面は赤色顔料と同様の視覚的効果を帯びたのではないだろうか。

8号墳の埴輪出土状況 周溝の埋土断面は、埴輪が盛り土とともに崩れてきた状況を想起させた。埴輪の大半は、破片化し、南・東の両周溝からレベル差もあまりなく、表面が良好な遺存状態で、出土した。東周溝では、半截円筒状に検出でき完形に復元できた個体もあるが（I48）、円筒の軸と周溝の長軸は斜交し、墳丘のやや外側を向く口縁が墳丘側の底部より少し高い標高で出土したので、墳丘から完形のままでやや勢いをもって倒れ

落ちてきたと考える。南周溝でも、馬子の右側に樹立されていただろう馬形埴輪（I 43）の場合、左足が右足より東で出土することを考慮すれば、やや勢いをもって倒れた瞬間があったと思える。また、埴輪の全体的樹立状況は不明だが、個体数に照らせば個体間距離は数十cm程度だろうから、近接個体とぶつかったものもあろう。さらに、内面の剝離した放射状の破損線の収れん部を確認できる個体もある。つまり多くの埴輪は、比較的短時間に、中にはやや急な力を得て、墳丘から割れ落ちていったと考えて矛盾なかろう。

もっとも I 48 の円筒埴輪の場合は、接地面の対向面の破片は、半円筒内に収まるものが多いとはいえ、内面が接地面の内面に覆い被さるような状態ではなく、口縁方位が変わるくらいである。着地してから破片になるまでには、土砂が流れ込む猶予もあったし、また破片化してからも土砂は一気には溜まらなかったのだろう。

その一方、南周溝東辺で出土した家形埴輪（I 44）と円筒埴輪（I 45）は、完形状態のまま着地してその瞬間に破片化したと考えられる。しかも、家は周溝の軸に対して直交に近い角度の周溝外側から、円筒も方形墳の南面の東隅近くでありながら東方面の周溝外側から、それぞれ営力を受けている。この2点は、周溝の内外どちらに立っていたにせよ、それ以外の埴輪とは異なる直接原因で割れたと思える。人為的廃棄かもしれない。

吉田二本松8号墳の位置づけ 吉田二本松古墳群ではこれまで7基の古墳が確認されており、いずれもTK23・47段階（5世紀後半ごろ）である〔伊藤2010〕。今回検出された8・9号墳も、出土した須恵器はTK23・47段階で、同時期である。8号墳以外は、一辺10～13m程度の同規模の方形墳と考えられる。8号墳も、西・北に近接する地点の調査成果から大型古墳の張り出し部とは思えず、方形墳と判断できる。しかし、規模は確定できないが一辺が13mを上回るのは確実で、埴輪をもち、周溝での陪葬の可能性さえある。8号墳の主体部の被葬者は、ほかの8基の被葬者より社会的に上位だったと言えよう。

5世紀後半ごろ、埴輪と須恵器においては、生産が地方展開し〔高橋1996 p.152, 菱田1996 p.71〕、古墳での組成や扱われ方が変化する〔高橋1998〕。近畿では、大型前方後円墳をそなえる墓群が途絶える一方で新たに小規模古墳が群集する地域が出てくる〔和田1992〕。山城北部でも、吉田二本松古墳群を含め小型古墳の群集が顕在化する〔宇野2010〕。京都盆地東北部で埴輪をともなう古墳は、動物・人物（巫女）・家・蓋・桶をもつ鳥羽古墳群や〔堀内・吉崎1986〕、円筒のみと思われる梅小路古墳がある〔梶川1993, 宇野2010〕。より北に位置する吉田二本松8号墳では、埴輪の様相は両者の中間である。また東周溝の須恵器の出土状況は、古墳での葬送儀礼の地域的展開を考える上で興味深い。

(4) 中世の遺跡

本調査区において、遺構・遺物の質・量ともにピークを迎える時期にあたる。それらのうち中世2期、すなわち14世紀代のものがかなりの数を占めている。ただし、15・16世紀代の遺物はほとんど認められず、それゆえにその遺構を確定することはかなわなかった。

まずは、中世1期、13世紀代の遺構について着目するに、溝・井戸・水溜と推測されるもの・土坑・土器溜などが検出されている。しかしながら、この時期の遺構の数はけっして多いとはいえない。

遺物のうち、注目すべきは、水溜と思われるSE9から出土した13世紀末ごろの華南三彩盤となる。めずらしい物品である点をふまえると、SE9の近くにそれを入手することのできた有力者が邸宅を構えていた公算が大きい。

なお、先に述べたように、その底部外面には文字の墨書がみうけられた。なおざりにすることができないのは、医学部構内308地点の整地層である黄色粘土層から、同様に底部外面に墨書を有する華南三彩盤がとりあげられている点だ〔伊藤2008, III956〕。このほど実見したところ、それは文字であるのは疑いないものの、重ね書きしている可能性もあって、何にあたるのか断定しえなかった。けれども、そのような優品に文字を書き記すことにかんしては、同じ家系に属する人びとによっておこなわれたとも推考され、注意が必要となろう。

また、SD4・SE9・SK11・SX42~44などにおいて、乙訓在地形の土師器がみつがっている点をないがしろにすることはできまい。乙訓地域産と思われる土師器がどうして吉田地域にもたらされて使われることになったのか、今後さらなる出土をまっとうえて、さまざまな視角から考察を深めていくことが肝要となろう。

つづいて、中世2期の遺構については、溝・石組井戸・土坑・土器溜・陶器溜・埋甕・石室の可能性のある集石など、多彩なものが検出されている。

これらのうち土器溜に眼を向けるに、SX32・36をのぞくそれらには、灯火のための土師器が少なくとも1つは含まれていた。たとえば、本調査区においてもっとも出土量の多いSX2では、口縁部が1/6以上残るもののうち、E₁類の土師器小皿が3点（I332・I336）、E₁類・E₃類の土師器皿が2点と1点、白色系の土師器椀が1点の合計7点が確認されている。したがって、それら土器溜にかんしては、夜間における飲食の際に土師器が用いられ、それが終了したのちにまとめて廃棄されるにおよんだとも推想される。

くわえて、留意すべきは、本調査区の南東部から陶器の甕が少なからずみつがっている

点だ。前にふれたように、S X13の常滑焼の埋甕のほかに、土坑S K 7やS X20といった陶器溜から常滑焼や備前焼の甕の破片が出土している。また、その茶褐色土落ち込みからも常滑焼の甕の一部（I 711）がとりあげられている。

これら事例を勘案すると、本調査区内にこの時期、邸宅が存していた蓋然性はすこぶる高いと考えられるのではなかろうか。甕の出土量にもとづくに、食料や飲料などを貯えておくための建物が南東部にもうけられていたことがうかがわれる。

ちなみに、本調査区からは、柱穴と思われるものがたくさんみつまっている。けれども、残念ながら建物や柵列を確定することはかなわなかった。また、瓦の出土量が少ないことから、そうした建物が瓦葺きであったとはとうてい考えがたい。

これまで、吉田南構内から検出された中世の遺構をめぐっては、勤修寺流吉田氏および吉田神社との関係で説明されることが少なくない。けれども、吉田地域にはそれら以外の貴族の邸宅などが相当に営まれていたことはまずまちがいあるまい。文献史料からは、割合に多くそれらをひろい出すことが可能となる。したがって、本調査区でみつかった遺構を特定の人物や氏、社寺などに結びつけていくことはなかなかむずかしいといえる。

なお、福山敏男氏は、応仁の乱以前の吉田神社の鎮座地について、吉田南構内に位置していたと推測している〔福山1984〕。しかしながら、本調査区において神社とおぼしき遺構はまったく検出されなかった。

発掘調査と資料整理は、富井と笹川が担当し、磯谷敦子、柴垣理恵子、長尾怜、荒田敬介、河野葵、貴志真生也、上月克巳、坂川幸祐、下川澄子、鈴木健吾、高木康裕、高原洋子、西田陽子、水谷正人、柰佐和子が補佐した。なお、古墳時代の遺構と遺物について、宇野隆志（奈良県立橿原考古学研究所）、片山健太郎（本学文学研究科博士課程）、河野正訓（東京国立博物館）、下垣仁志（立命館大学）、高橋克壽（花園大学）、土生田純之（専修大学）、藤沢敦（東北大学）、山本亮（本学文学研究科博士課程）、吉井秀夫（本学文学研究科）、和田晴吾（立命館大学）の各氏から、弥生時代の遺構と遺物について、深澤芳樹（奈良文化財研究所）、森岡秀人（芦屋市教育委員会）、若林邦彦（同志社大学）の各氏から、縄文土器について長田友也氏（中部大学）から、堆積物について竹村恵二氏（本学理学研究科）から、有益なご助言をいただいた。記して謝意を表します。

〔注〕

- (1) 発掘調査現地説明会の時点で巫女とみなした破片は、接合作業により、馬の左手綱と判明した。

第3章 京都大学病院構内 A F 17区の発掘調査

富井 眞 長尾 玲

1 調査の概要

調査地点は京都大学病院東構内の西南隅付近に位置し、聖護院川原町遺跡に含まれる(図版1-385)。ここに、先端医療病棟の新設が計画されたために、発掘調査を2012年9月18日～2013年9月6日に実施した。調査面積は4100㎡で、調査直前までは標高48m前後の駐車場であった。途中、近世の遺物包含層の掘削時に調査区西南辺で滴状の金属水銀が十分に目視できるほどの広がりを見せたために、協議の結果、調査区全体で土壤調査を実施して汚染土壌を除去することになった。その結果、2012年12月7日～2013年9月1日の中断をはさんだので、実際の掘削調査期間はおよそ3ヶ月である。

近接地での既往の調査によれば、先史時代に関しては、東接する278地点で自然河道から縄文時代後期の土器が大量に出土しており、古代については、西方では、39地点で平安中期の護岸と平安後期の井戸や溝が、122地点でも平安後期の井戸・列石・埋甕などが、それぞれ検出されており、東方では、278地点の井戸から平安後期の瓦がまとめて出土している。このように、本調査区周辺での活動は平安後期以降に活発になる。鎌倉時代にも西方の122地点で井戸や溝が確認されているが、とくに室町時代には、本調査区を取り巻くように、井戸や溝や土坑や集石が、西方の122地点、北接する338地点、東接の278地点などで確認されている。近世にも、同様の地点で井戸や溝、土坑や集石が検出されているほか、東方の141・240地点では池が、278地点では砂取穴が、西北方の384地点では流路が、それぞれ検出されている。さらに278地点では、乾山焼・蓮月焼などの遺物も多数出土している。

発掘調査の結果、既存の建物による攪乱が調査区全体の半分程度を占めていたが、東北辺と西辺では、現地地表下1mに近世後半の包含層を2枚確認できた。江戸後期の畑境の段差や区画溝、井戸と鋤溝や杭群などを検出した。中世以前については、遺物包含層は残存していなかったが、まれに中世や古代の土器片を含む混礫砂層とその下位のシルト層が、厚い砂礫層の隙間を埋めるように堆積していることを確認した。土質調査の結果を踏まえて、掘削が制限された遺物包含層などもあったが、出土遺物は、ほとんどが江戸～明治時代の陶磁器・瓦で占められ、整理箱で133箱を数える。

2 層 位

調査区北辺と南半には広く攪乱がおよんでいる（図版31-1・3）。掘削作業は、調査区中央のX=870ラインおよびX=860ラインに東西方向の層位確認用の畔を残して、断面観察をおこないながら進めた。また、北壁東辺と南壁で部分的に残存する堆積層の残りの良い部分で地層断面図の作成を予定していた。しかし、近世の遺物包含層に土壤汚染が認められ、その後、遺物包含層を含めて処分対象となった地層が調査区の広い範囲におよぶこととなったので、京都市とも協議し、処分対象地層の発掘を断念して通常の発掘作業が可能な箇所のみで調査を再開することにした。その結果として、最終的に断面図を作成できたのは、X=860ラインの東西畔全体と、X=870ラインの東西畔のごく一部に限られた（図版31-2, 図67・68）。

表土（第1層）は、厚さ約2mに達し、機械掘削により除去した。表土下部には、278・338地点と同様に、レンガを包含する明茶褐色～褐色の粘質土が分布していたところもある。第1層を除去すると、調査区北辺では、338地点と同様に、遺物包含層ではなくその下位の鴨川・高野川がもたらした自然堆積層（第6層）があらわれ、西下がり基調となるラミナを確認できる。X=880以南では、攪乱を免れた部分には黒灰色土が分布する。

黒灰色土（第2層）は、Y=1852辺りで検出された南北方向にはゆる東下がり近世の段差の西側、および調査区東北辺では、厚さ30cmほど残存しており、人工層位によって上部と下部に分けて掘削した。また、段差の下位側すなわち東側では、X=880以南では色調の違いを確認できたので、やや明るい上部を黒灰色土Ⅰ（第2a層）、黒味の強い下部を黒灰色土Ⅱ（第2b層）、として掘削し、第2b層上面では遺構検出もおこなった。第2層上部および第2a層は、ガラスやレンガの破片、および濃青色の釉で染色体のような意匠を描く近代染付の破片などが散見できるが、第2層下部および第2b層には、そうした近代の遺物は認められず、端反りの染付椀などを含むので、黒灰色土は、幕末から明治にかけての包含層といえる。なお、調査区西南辺の段差上位側の黒灰色土下部の掘削中に、水銀の集積が認められたため（図69）、調査区全体で土質調査をおこなった。その結果、その周辺の50m前後の黒灰色土は掘削調査ができなかった。

黒灰色土の下位には、淡褐色土（第3層）が広く分布する。下位の褐色混礫砂層（第4層）との境界には礫を多く混じえるので、礫をまれにしか含まない上部とその混礫部とを分層した（第3a層と第3b層）。第3a・3b層は、細片だが端反り口縁や瀬戸産と思

層 位

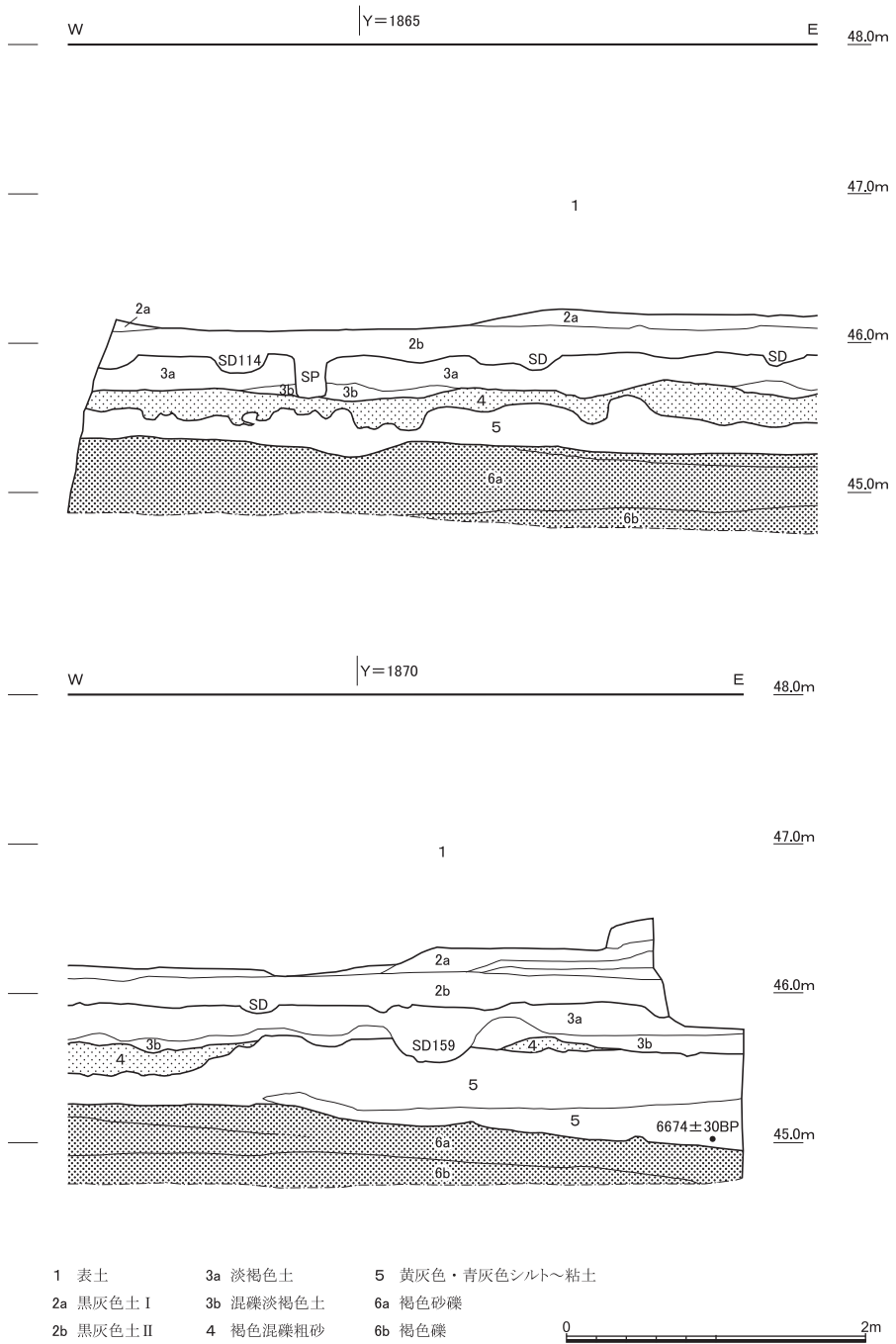


図67 調査区東西畔 (X = 870) の層位 縮尺1/50

京都大学病院構内A F17区の発掘調査

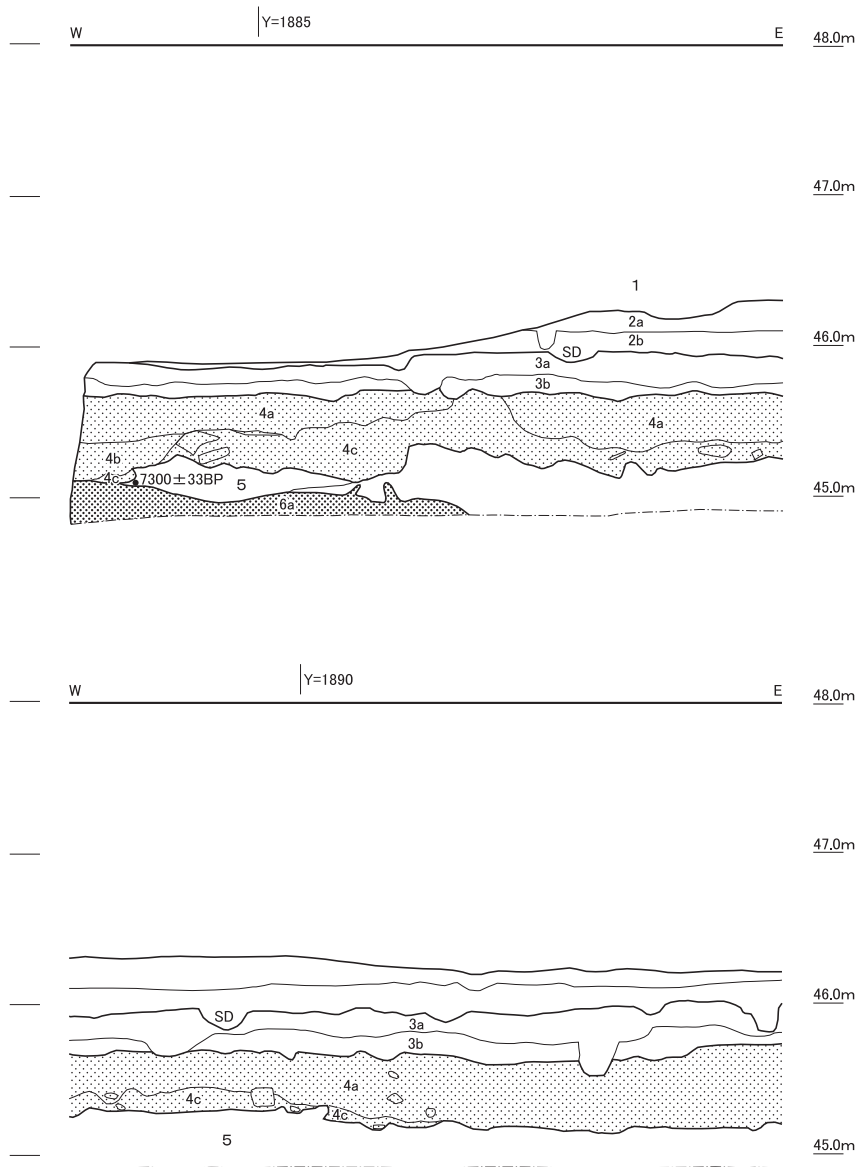


図68 調査区東西畔 (X = 860) の層位 縮尺1/50

層 位

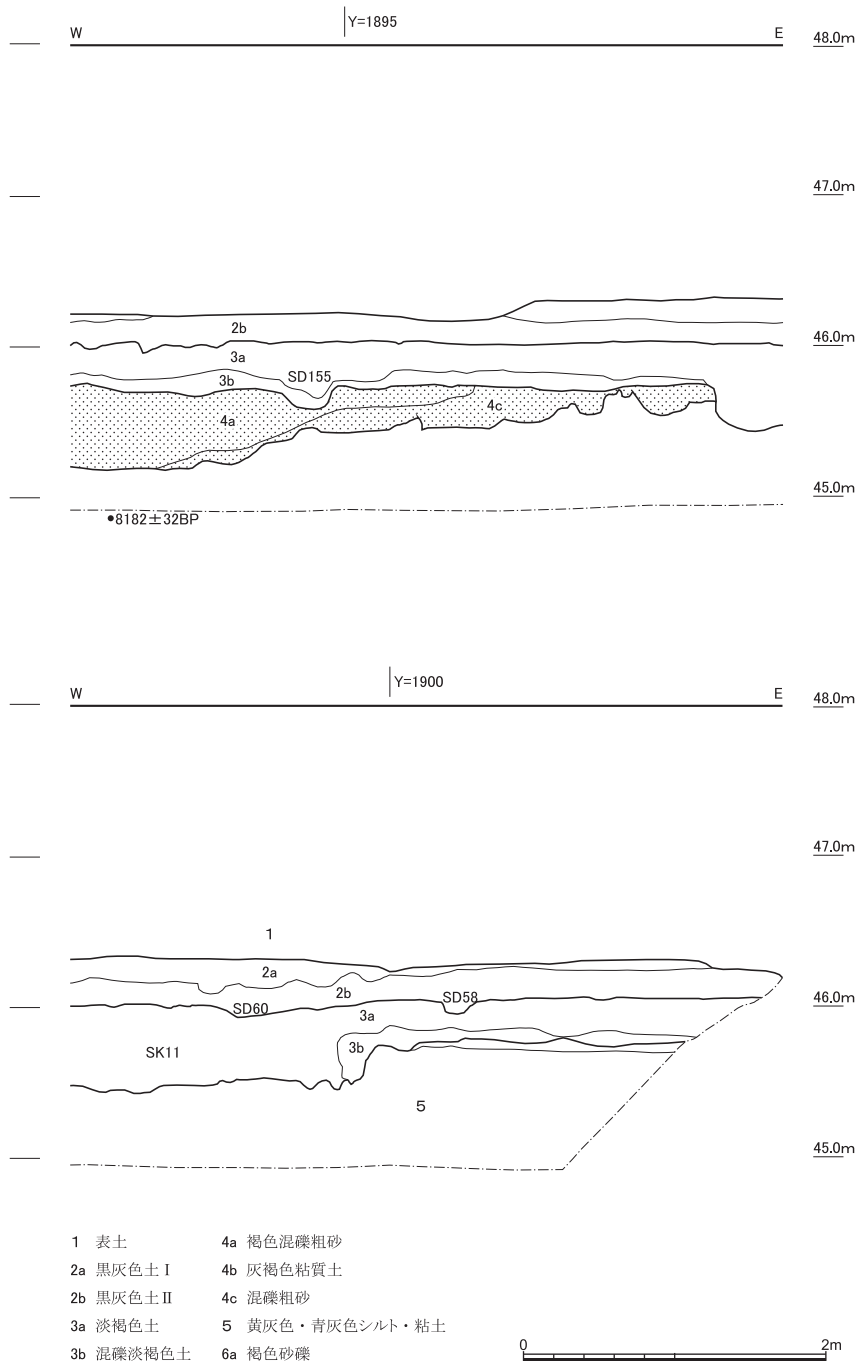


図68 つづき

われる染付が数点出土するので、幕末にまで下る可能性もあるが、摩滅していない数cm台以上の破片は17～19世紀前葉ごろまでにおさまる。段差上位のY=1852以西では、すぐに自然堆積の厚い砂礫層（第6層）があらわれる部分が広く、また、淡褐色よりは茶色みが強くなっている（第3'層）。なお第3層については、汚染土壤の除去によって、その大半と第3'層全体は掘削調査ができなかったが、調査区東辺および中央付近では合計60㎡程度は掘削調査できた。

第6層上面の標高の低い範囲が広い、調査区東北辺およびX=880以南の段差東側には、第3層と第6層の間に、おもに青灰色～黄灰色を呈するシルト層（第5層）が堆積しており、層厚は東北ほど厚く、2m近くに達する部分もある。このシルト層の上位には、広い範囲で、拳大までの法量の多数の礫と、まれに中世以前の土師器・瓦器・陶器・瓦の破片、およびシルトの偽礫を含む、褐色混礫砂層（第4層）が堆積している。出土遺物は、もっとも新しい時期と思われるのはF類の土師器皿で、江戸時代の遺物は確認できなかった。ラミナを確認できず、礫や遺物も立位のもものが少ないので、一挙性の堆積と思われるが、部分的には上方粗粒化を確認できるものの拳大の礫はむしろ第5層境界付近の下部に多いので、人為的堆積物の可能性も排除できない。また、調査区東辺では部分的にレンズ状に粘質土が介在し（第4b層）、そこからはあまり摩滅していないD類の土師器皿の大型破片や数点のF類の土師器皿が出土した。したがって、第4層は鎌倉時代以前の堆積物と、中世末期以後の堆積物とに分離できるのかもしれないが、断面観察ではかなわなかった。なお、この第4層と、北接する338地点で確認された18世紀後半の土石流堆積物との対応関係は不明である。

第5・6層からは、遺物の出土を確認していない。シルト質の第5層は、主に下部で、部分的には粒径がさらに細くなって粘土となることもある。また、下部を中心に希に有機質が残存していたので、この層の堆積年代を検討するため、(株)加速器分析研究所で放射性炭素年代測定をおこなった。X=860畔の、Y=1893付近で標高44.9mのやや黒化して粒子も細かい粘土質に近い部分の「バルク」とよばれる微細植物片を含む土壌を試料にした部分では8182±32BP（測定番号：IAAA-131416）、同じくX=860畔の西端付近の、Y=1884付近で標高45.1mの青灰色シルト中の木炭を試料にした部分では7300±33BP（IAAA-131414）、X=870畔の、Y=1872付近で標高45.0mの青灰色シルト最下部の紐状の植物質を試料にした部分では6674±30BP（IAAA-131415）、と西へ向かって新しくなる。これら3点の試料の年代はおおよそ縄文時代早期～前期頃におさまるとと思われる。

褐色砂礫層（第6層）は、堆積岩を主体とし、上面の標高は東および南下がりとなる。調査区中央のX=870畔では、上部に黒化した透かし礫の広がりをもなう20～50mmの礫の緩やかな盛り上がりを確認した（第6b層）。北接する338地点でも同様の堆積を確認していたが、本調査区でも、この辺りが一時は高野川の河床だったことを想定できる。第6b層の上位の第6a層には、100mm台の礫の分布する下部から徐々に上方細粒化していく状況を確認できたので、離水傾向がうかがえる。ただし、第6a層の最上部は、粒径が3～5mm台の花崗岩粒や頁岩粒が主体で、第5層との間には細砂やシルトを認められない。

調査区東辺では、第6a層には、10mm台の礫がほとんど含まれないが、ラミナを確認できない。また、直上のシルト層（第5層）に陥入している部分もある。地震による液状化と判断できるが、その発生時期は、縄文早期以降ということしかわからない。

3 近世・近代の遺構と遺物

(1) 遺 構（図版31・32、図69～71）

近世の遺構検出は、黒灰色土の掘削中および掘削後、また黒灰色土Ⅰ掘削後および黒灰色土Ⅱ掘削後におこなった（図版31-3）。図69では、第4層（淡褐色土）ないし第6層（褐色礫層）の上面、すなわち黒灰色土・黒灰色土Ⅱの掘削後の遺構検出面を近世第2面とし、黒灰色土Ⅰ掘削後の遺構検出面を近世第1面としている。また、黒灰色土掘削中に検出した遺構は、便宜的に近世第1面に組み込んだ。しかし、遺構検出面と包含遺物との対応は円滑ではなく、近世第1面で検出した遺構には近代のものも含まれたり、出土遺物から同時期と判断される遺構でも別の遺構面で確認されたりした。なお、汚染土壌の除去作業のため、個別遺構図の作成は断念せざるを得なかった。

溝・石列・段差など Y=1852辺りに、比高差60cm程度の段差がX=880ライン付近から南北方向に認められる。段差際上縁部には、黒灰色土の掘削中には、段差に並行して南北方向にはしる小さな溝SD1を検出し、また、黒灰色土除去後の近世第2面では、上縁部が10cm前後盛り上がりそのあたりが幅80cm程度で南北方向に硬化しているのを確認した。近世第2面では、段差際下縁部には、底面に鋤先痕跡と思われる小孔列をもなう同様の並行溝SD126がはしる。端反り椀を包含する幕末の溝である。そして、段差を境にして、下位の東側には鋤溝と杭群が展開するが、上位の西側にはそうした鋤溝は認められない。なお、X=860ライン以南には深い攪乱がおよんでいるので、並行溝を備えたこの段差がどこまで続くのかはわからない。南北方向にはしるやや大きめの溝は、このほかに、

京都大学病院構内A F17区の発掘調査

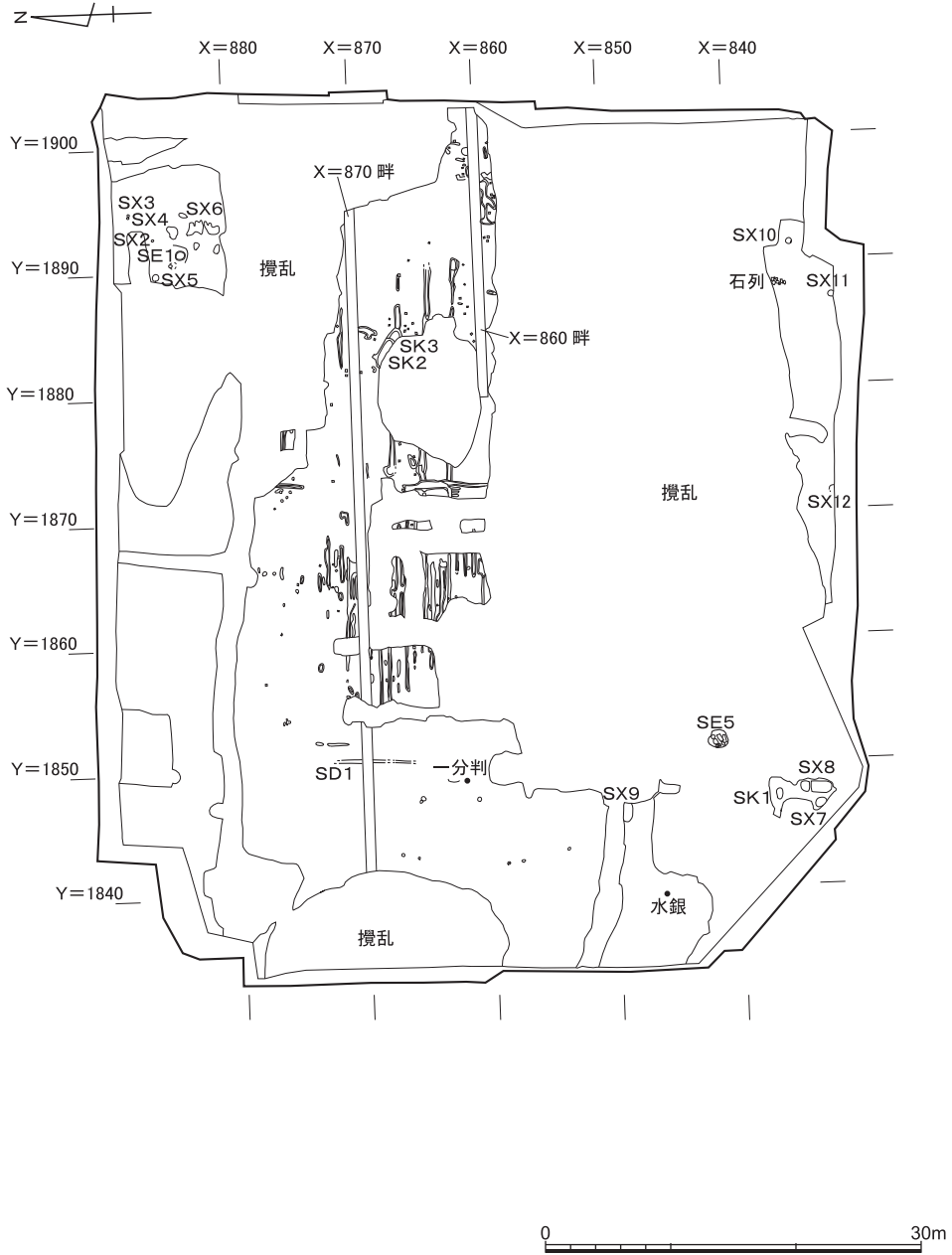


図69 黒褐色土掘削中・黒灰色土 I 掘削後の検出遺構 縮尺1/600

近世・近代の遺構と遺物

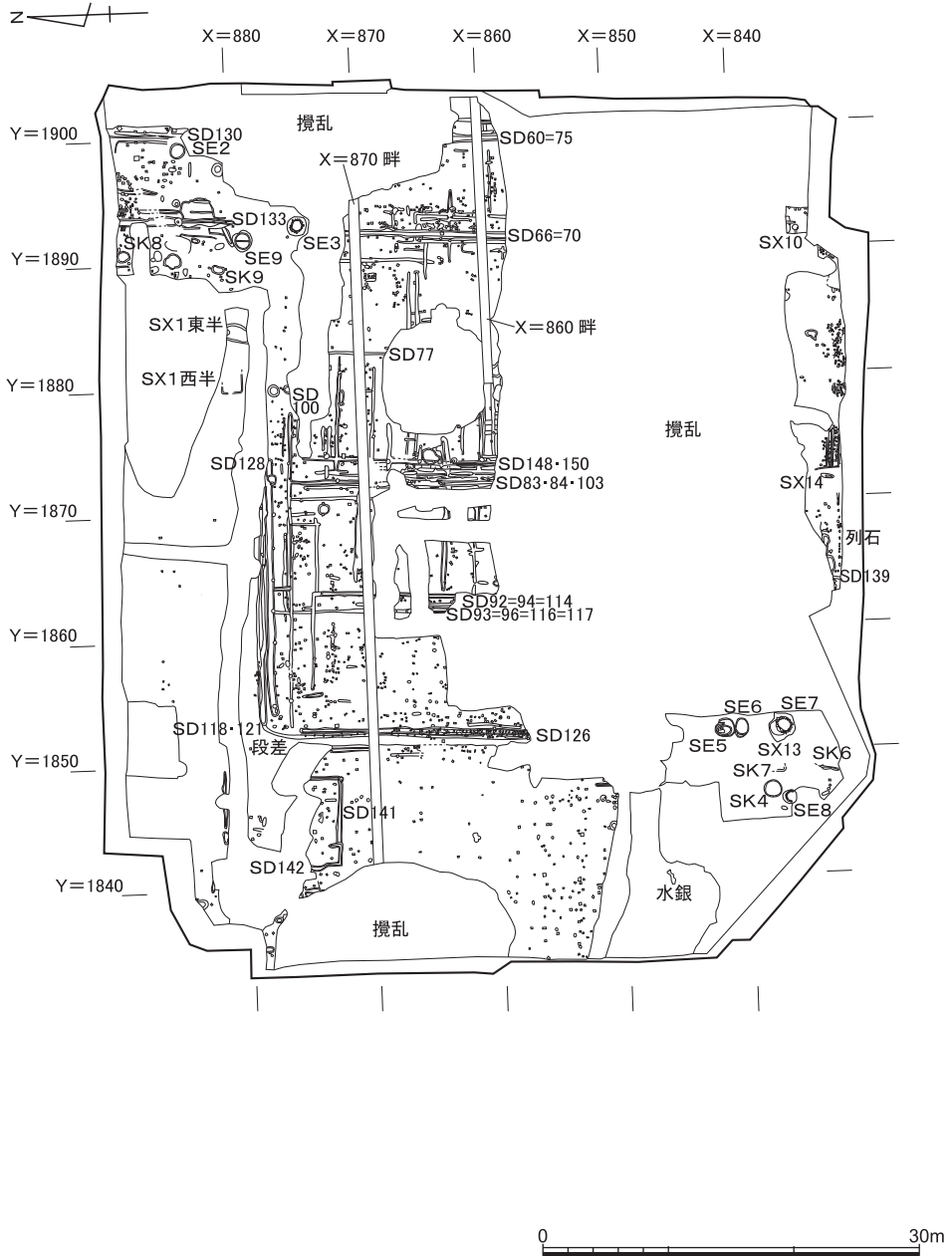


図70 黒褐色土・黒灰色土Ⅱ掘削後の検出遺構 縮尺1/600

約20m間隔となって、Y = 1873ライン辺り（S D148・150，S D83・84・103）およびY = 1894ライン辺り（S D66=70）にもあり、前者では、溝のはしる辺りが緩く西下がりの傾斜を見せる。そしてそれらの中間のY = 1862ライン辺り（S D92=94=114，S D93=96=116=117）およびY = 1883辺り（S D77）には、それよりはやや細めの溝がはしる。また、Y = 1900ライン辺りにもやや大きめの溝がはしる（S D60=75，S D130）。これらの溝はおよそ平行している。出土する遺物には、端反り腕を認められなかったものの小片ばかりで量も少ないので、幕末まで機能していたものがある可能性は否定できない。

X = 878ライン付近には、東西方向の溝S D128がはしる（図版31-4）。近世第2面で検出したが、黒灰色土Ⅱの掘削中から、この上部には陶磁器や瓦の破片を中心とした遺物が、比較的多く出土していた。端反り腕を含むので幕末と判断する。溝の南縁には、200cm前後の間隔で並ぶ径30cm前後の柱穴も検出した。この柱穴列については、上面検出時の精査によって、溝の埋積途中に埋没した柱穴もあったことを確認している。さらに、S D128の北には、部分的にS D128に切られながら同じく東西方向にはしる規模の小さい溝がある（S D118・121）。出土遺物は小片ばかりで量も少ないが、S D128と異なり、端反り腕を認められなかった。また調査区南縁では、黒灰色土の掘削後に、X = 835ライン辺りで、人頭大の石列をとまって東西方向にはしる、小規模な溝S D131を検出している。

このほかに、Y = 1893ライン辺りでは、調査区北辺ではS D133のすぐ西側の淡褐色土上面で、それ以南でも淡褐色土内で、南北方向にはしる石列を確認できる。近世第1面で調査区南縁で検出したものと異なり、東にもほとんど振れていない。338地点で検出した石垣の延長と判断できる。

調査区東北辺の遺構 SE1は、黒灰色土上面で検出した漆喰製の野壺で（図版31-5）、もともとあった井戸の針葉樹縦板組の木桶の上部に、井戸をふさぐように構築されていたが、底部は割れて井筒に抜け落ちていた。野壺の内部からは、全体の1/4程度の残存度となる大甕の破片がまとまって出土した。明治期の遺物は含まない。井戸の木桶内部は、出水が著しく、2段目内部の掘削中に水圧を受けて倒壊した。2段目の縦板は、長さ40cm以上あり、その上端の標高は45.3mをはかる。

SE2は、SE1から東に7mほど離れている、多量の針葉樹木片を含む直径1.5m前後の円形の土坑で、深い攪乱の除去後に検出した（図版31-6）。第5層の厚い堆積の途中で底面となっており、底面標高は44.7mをはかる。端反り腕が出土しており、幕末の遺構と考える。不透水性のシルト層に掘り込まれているので、木片の使用に備えた貯蔵施設

の可能性はあるが、素掘りである。同程度の標高で機能していたと思われる井戸SE1の存在から、井戸の掘削を断念して残存した土坑とも考えられよう。

SE3は、SE1から南に10m離れて位置する石組の井戸で、針葉樹縦板1段組の木桶を有し、底面の標高は43.3mをはかる(図版32-1)。木桶の長さは60cm程度。深い攪乱の掘削中に確認し、石組みは7、8段しか残存していないが、掘り方は近世第2面で検出できた。端反り椀を含まず、19世紀前半までの遺構と思われる。なお、木桶上端付近で、内部に拳大の礫1点が収まった状態で縦板組の手桶が出土している(図版32-2)。縦半割分くらいしか残存していないので、水の汲み上げ中に井戸石の落下を受けて破損した釣瓶と判断する。

SE1とSE3の間に、木枠の野壺SE9を、淡褐色土上面で検出した。木枠底部が5cmほど残存しており、底面中央には南北方向に幅10cm弱の板を渡している。検出面からの深さは60cm前後で、底面の標高は45.5mをはかる。出土遺物は少ないが、18世紀後半から19世紀と判断する。

SX1は、攪乱の除去後に確認した集石土坑で、深さ1m程度はあるものの、深い攪乱にほとんど壊されていた。遺物量は少ないが、端反り椀の出土を見ない。19世紀前半ごろまでの遺構と思われる。SX2~4は、SE1の東北辺で黒灰色土上部の掘削中に検出したいわゆる胞衣壺で、いずれも掘り方は確認できず、蓋は割れて出土している。SX3・4は近接しており、口縁の標高もほとんど同じだが、西側のSX4の身部の東辺部分が破損していることから、東側のSX3の方が後出と判断する(図版32-3)。

SX5・6は黒灰色土の掘削中に確認した、散漫な瓦の集積。ほとんどが棧瓦だが、SX6には丸瓦1点も含む。端反り椀を確認しており、幕末の遺構と思われる。

土坑SK8も瓦の集積があり、瓦破片を主体に、整理箱1杯分の遺物が出土した。ほとんどが棧瓦だが、丸瓦破片も含む。端反り椀を含まないので、18世紀後半から19世紀前半ごろと判断する。その南の土坑SK9は、不整形で出土遺物も多くないが、これも端反り椀を含まないので、18世紀後半から19世紀前半ごろと判断する。

淡褐色土を埋土とする遺構は(図71)、おもに鋤溝群で、遺物量は少なくその中でも中世の土器片の比率が高いものの、近世後半と思われる陶片も出土する。溝の走向は、黒灰色土を埋土とする鋤溝群と同様に、南北方向とそれにほぼ直交する東西方向には二種がある。すなわち、黒灰色土を埋土とする幕末~明治にかけての土地利用は、それ以前の近世後半段階には成立していたと想定できる。なお、調査区東壁際では長方形を呈すると

京都大学病院構内A F17区の発掘調査

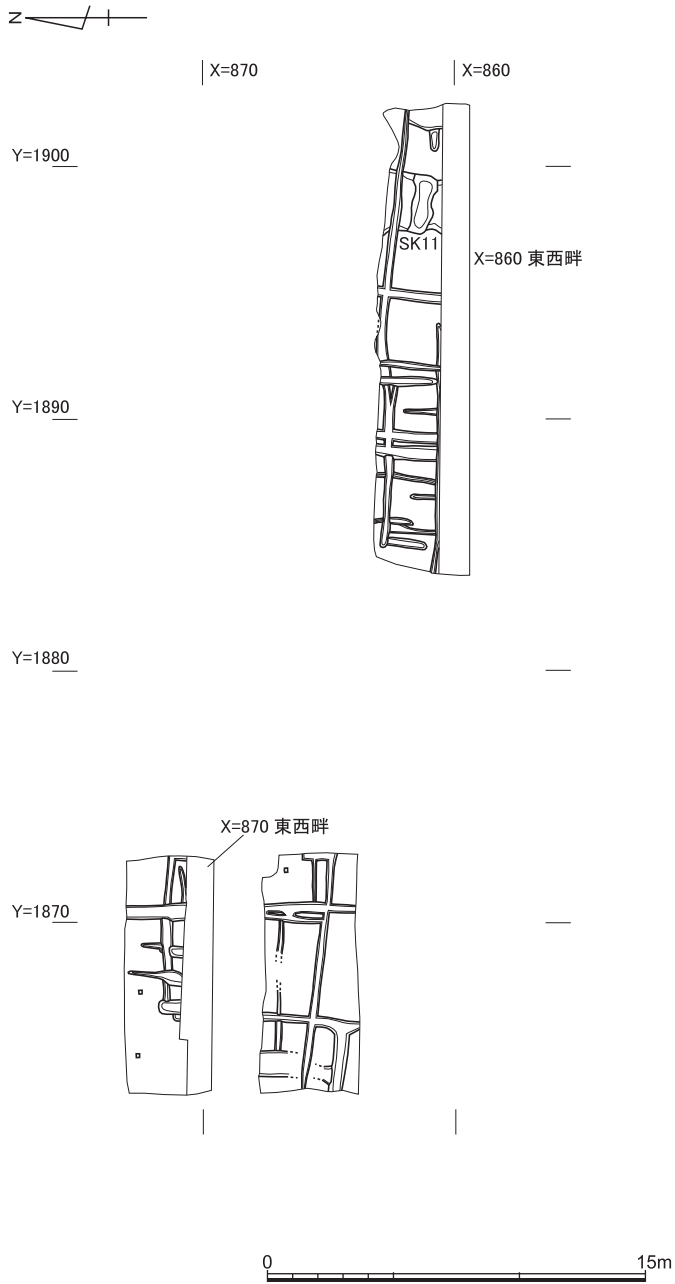


図71 淡褐色土掘削後の検出遺構 縮尺1/300

思われる土坑SK11を検出しているが、底面には凹凸があり、また遺物の出土量も小さいので、性格はよくわからない。

調査区西辺の遺構 SE5は、調査区西南で深い攪乱の除去後にシルト層上面で確認した直径2m前後の円形土坑で、一抱え以上ある花崗岩5点をはじめ、大ぶりの礫を包含する。検出面からの深さは0.5mで、底面の標高は44.9mをはかる。出土遺物は少数の陶磁器細片のみ。南接するSE6も、攪乱除去後のシルト層上面で確認した同規模の円形土坑で、少数の陶磁器片以外に遺物をほとんど含まないが、底面標高は45.2mと浅い。SE6のすぐ南では、石組の井戸SE7をシルト層上面で検出した。石組最下段には縦長に成形した花崗岩を配し、その下位には針葉樹縦板2段組の木桶を有する。底面の標高は42.9mで、石組内から明治期の染付が出土している。

SE7から西に5mほど離れて、石組の井戸SE8を淡褐色土上面で検出した(図版32-4)。SE7よりは小ぶりの石が主体で、13段以上残存している。石組の下位には、遺存状態が悪いものの、針葉樹縦板1段の木組みを確認できた。検出面の標高は46.4mをはかるが、底面標高は、計測前に石組が倒壊しその後の汚染度除去により、測量できなかった。端反り椀を確認できず、19世紀前半までの遺構と判断する。

SX7・8は、調査区西南部で黒灰色土上面で確認した土器溜。明治期の陶磁器が主体となるが、多数の獣骨や10cm前後の二枚貝、棧瓦片も含む。SX8は、上面検出後に掘り下げていくと、無遺物地帯をはさんで南側2/3と北側1/3とに分離できた。

SX9は、調査区西辺で黒灰色土上面で確認した土器溜。上面には明治期の陶磁器もある。その下位には、東西方向の溝を、攪乱の断面で確認しており、またその西側の黒灰色土下部の掘削中には、SX9と同様に多量の遺物の出土を見たが、そこには明治期の遺物は認められなかった。土質調査によって、SX9本体およびその西側の土器溜の遺物の多くを回収できてはいないが、19世紀以前の溝の埋没過程で多量の陶磁器が廃棄され最終的に東辺のSX9の地点には明治期でもまだ投棄が継続した、と推測する。

SX13は、SE7に切られる1m×2m程度の広がり瓦溜まり(図版32-5)。端反り椀と思われる磁器片も出土しているので、幕末の遺構と判断する。10cm四方を超える破片は無く、復元率が50%を超える個体もなかったが、合計で整理箱9杯分出土した。

SK1は、調査区西南辺でSX8から北へ約3m離れて黒灰色土掘削中に検出した、長辺80cm程度の長方形の土坑で、5cm大の大量の小礫と、獣骨と思われる多数の骨片を包含していた。深さは約10cmで、底面は淡褐色土には達していない。獣骨や遺物の出土状態が

ら長方形土坑と判断したが、掘り方を確認できたわけではない。人工遺物は少ないが、明治期の陶磁器が出土せず、幕末の可能性のある磁器が出土した。

S K 1のすぐ北側で、黒灰色土を除去した淡褐色土・砂礫の上面で、土坑S K 4を検出した。南西すぐには井戸S E 8が位置するが切り合い関係は見られない。径120cm前後の円形で、検出面からの深さ80cmをはかる。底面は、壁面と同じく砂礫層で、平坦で45.5mをはかる。遺物をほとんど含まないが、明治期の陶磁器は出土しないので、18世紀後半から19世紀と判断する。

同じく調査区西南辺では、本体が攪乱で破壊されてわずかに遺構の西側のみが残る落ち込みS K 6・7を検出している。遺物量は少ないが、S K 6には明治期の磁器やガラス片を含み、S K 7には明治期のものは含まれない。

このほか、調査区西辺の段差上位側では、黒灰色土下部の掘削中に、X = 862辺りで一分判（金）1点と、X = 846辺りで金属水銀の集中部を、それぞれ確認したが、どちらも掘り方は確認できなかった（図69）。

調査区南縁の遺構 東辺では、黒灰色土掘削中に瓦集積土坑S X 10を検出した。これも土質調査によって上面検出時以外の遺物を回収できなかったが、近世の遺構と推測している。この5m南西には、黒灰色土掘削中に、散漫な土器の集積S X 11を検出した（図版32-6）。明治期の陶磁器は出土していない。土器溜S X 11から15mほど西側では、攪乱の底面で小規模な明治期の土器溜S X 12・14を検出した。

そのほかの遺構 調査区西北辺で、比較的大きめの石を組んだ井戸S E 4を検出している。周辺の調査成果に照らせば、このサイズの石組の井戸は中世の可能性があるが、土質調査の結果を受け、掘削を断念した。

以上の近世第1・2面検出で確認した遺構のうち、近代のものは、井戸S E 7、土器溜S X 7～9・12・14、土坑S K 6である。それ以外の、井戸S E 1・3・8、野壺S E 9、円形土坑S E 2・5・6・S K 4、集石土坑S X 1、獣骨集積土坑S K 1、土坑S K 7、胞衣壺S X 2～4、瓦集積S X 5・6・10・13、S K 8、土器溜S X 11、S D128などの区画溝は、18世紀後半ごろから幕末にかけてとみなし得よう。そのうち、幕末の遺物を含むのが、S E 1・2、S K 1、S X 6・13、S D128である。また、調査区内での遺物包含層からの遺物の出土傾向として、調査区東北辺のY = 1890以東でX = 880以北、および調査区西辺の段差上位のX = 860以南では、量も多くまた破片の法量も大きめのものがあるが、それ以外の地点の包含層からは、量が少なく破片もほとんどが小ぶりである。

(2) 遺物 (図72～79)

出土遺物の大半を占めるのは、第2層出土の近世後半から近代の陶磁器類である。容器以外では、瓦は少なく埴塼の破片が目立つ。中世以前では、第4b層(灰褐色粘質土)からほとんど摩滅していない中世の土師器がわずかに出土したが、そのほかは摩滅した中世の土器や瓦の破片で、先史時代から古代にかけての遺物はほとんど出土していない。

S D128出土遺物 (Ⅱ1～Ⅱ36) Ⅱ1は陶器椀。外面には褐色の地の上に淡黄色、淡緑色、鉄絵、白泥を用いて庭園のような文様を描き、口縁部から内面にかけては白色の地を塗り、これら全体の上に透明釉を施す。Ⅱ2～Ⅱ4は灯明皿。Ⅱ2・Ⅱ3は、内面に櫛書きによる沈線を施し、Ⅱ4は内面の口縁近くに18弁の菊花文の貼付けを施す。Ⅱ2の口縁の大部分とⅡ3の口縁の一部には煤の付着が見られる。いずれも淡黄灰色に発色する釉を内面から口縁外面付近まで施す。Ⅱ5～Ⅱ8は、灯明受皿。Ⅱ5は完形であり釉は黄白色を呈する。Ⅱ6は口縁部が残存しておらず、釉はやや青灰色がかかった発色。Ⅱ7は外面がやや赤変していてⅡ7・Ⅱ8の釉は黄灰色を呈する。Ⅱ6～Ⅱ8は受口の一部のみが残存する。Ⅱ2～Ⅱ8は京・信楽系か。Ⅱ9～Ⅱ12は陶器蓋。Ⅱ9・Ⅱ10は外面に緑灰色を呈する釉を施し、いずれもつまみの先端が欠けている。Ⅱ9は口縁部も欠けている。Ⅱ10は鉄絵による文様の上に釉を施す。Ⅱ11は口縁部が欠けており、内面には鉄釉、外面はつまみ周辺に鉄釉を施した後に白泥でいっちゃん描きを施している。Ⅱ12は水注の蓋である。Ⅱ13は陶器椀の一種であるが、外面に把手の装着用に上下を穿孔した窓状の付着物を有し、内側面中央付近には横方向の鉄釉による線描がなされ、その上に淡黄灰色を呈する釉が施されている。18世紀半ば～後半頃の京焼系か。Ⅱ14は軟質施釉陶器の玩具で、土師質の胎土の外面上半に薄い透明釉がかけられている。

Ⅱ15～Ⅱ21は、磁器染付椀である。このうちⅡ15～Ⅱ17は口縁部が端反りであり、幕末頃の遺物と考えられる。Ⅱ15は外面に草花のような文様を描き、内面見込み中央にも文様を配し、その周囲および口縁付近に円弧の線描を有する。Ⅱ16は、外面にのみ円形の意匠が等間隔に施されていて、内面に文様はない。Ⅱ17は、外面に果実のような文様が施され、内面は円弧状の線描のみである。Ⅱ16・Ⅱ17は内外面の釉内ににひび割れが見られ、焼成は良くない。Ⅱ18・Ⅱ19は、外面にのみ草花のような文様を有する。Ⅱ20は青磁染付の底部である。外側面には緑がかかった青磁釉が施され、見込み中央の五弁花と底裏の銘がくすんだ藍色で描かれる。Ⅱ21は、外面を不等辺の亀甲状に押圧して成形し、その上と底裏に黒褐色を呈する釉を、口縁部には銹釉を施す。一方内面には、濃紺の呉須で山水を描く。

京都大学病院構内A F17区の発掘調査

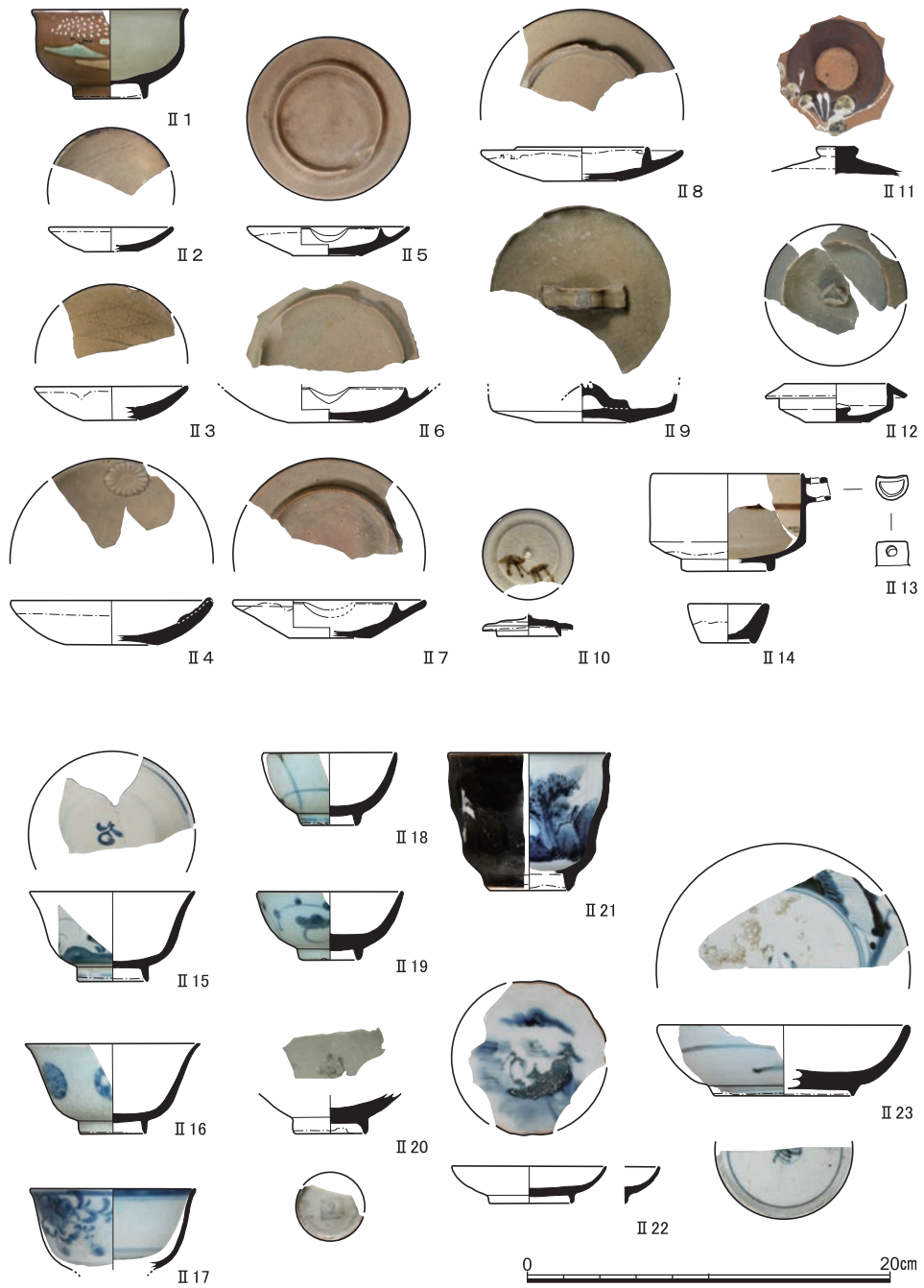


図72 S D128出土遺物(1) (II 1 ~ II 13陶器, II 14軟質施釉陶器, II 15 ~ II 23磁器)

近世・近代の遺構と遺物

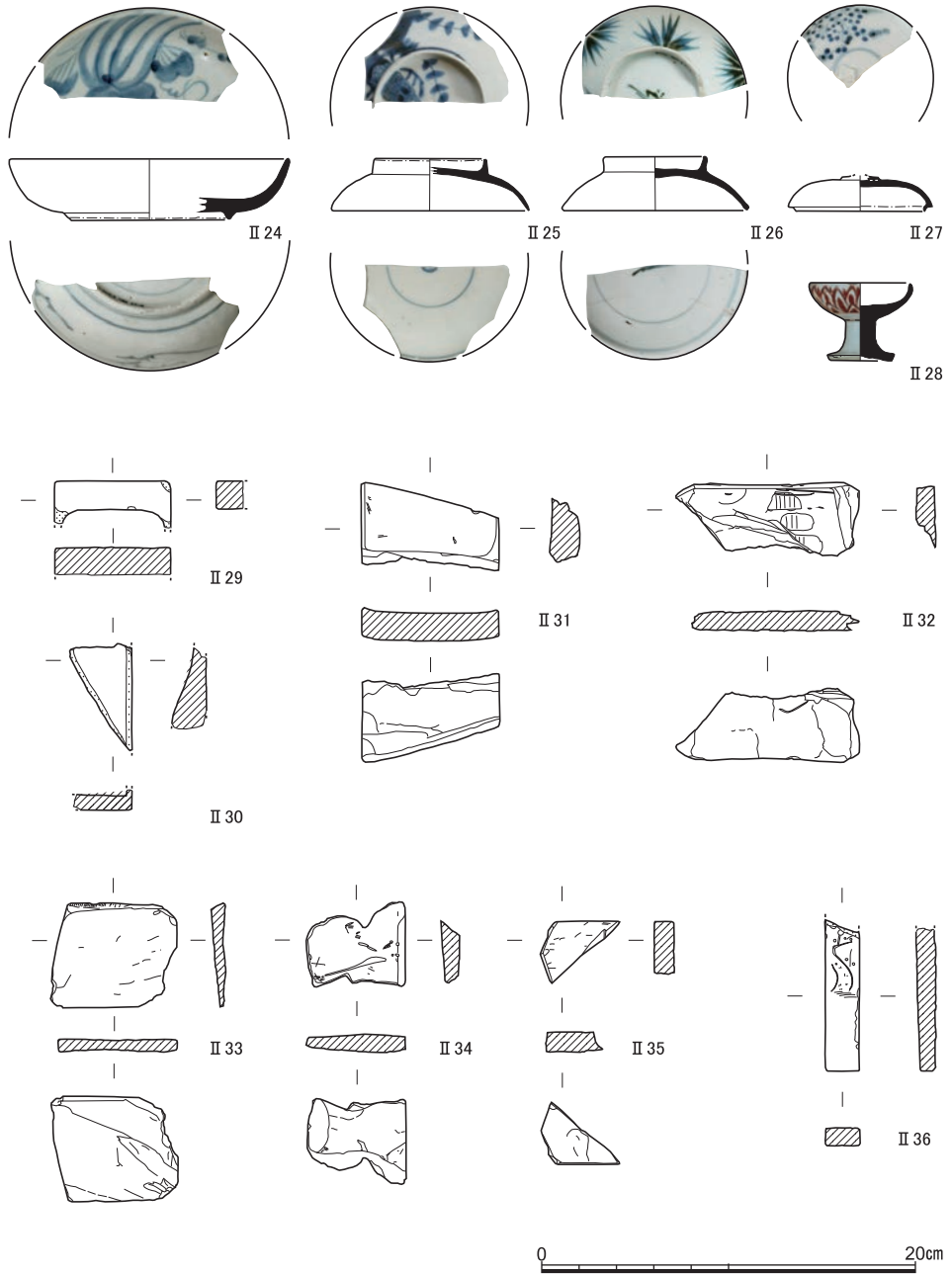


図73 S D128出土遺物(2) (II 24~ II 28磁器, II 29・II 30硯, II 31~ II 35砥石, II 36石製品)

Ⅱ18～Ⅱ21は胎土がやや灰色を帯びている。

Ⅱ22～Ⅱ24は磁器染付皿。Ⅱ22は波状の口縁で、内面にぼやけた山水のような文様を描き、口縁部には銹釉を施す。Ⅱ23は、欠けていて一部しか見えないが見込み中央におそらく五弁花を、底裏中央に銘を配し、高台付近に円弧を線描し、側面に草花のような文様を描く。Ⅱ24は内面全体に草花のような文様が、外面には蔓草のような比較的簡素な文様が描かれる。Ⅱ23・Ⅱ24は肥前系か。Ⅱ25～Ⅱ27は磁器染付の蓋。Ⅱ25は外面に頂部から側部まで連続して見える濃紺の草木文様を描く。Ⅱ26は外面に笹のような文様を描く。Ⅱ25・Ⅱ26の内面の文様は、中央の意匠と周囲の円弧の線描のみで簡素である。Ⅱ27は、つまみを有する蓋であるが、つまみは端の一部しか残存していない。外面にはなんてんの実のような文様が描かれ、内面は施釉のみである。Ⅱ28は磁器仏飯で、外面には白色を呈する釉の上から赤絵による上絵付が施されている。内面には施釉のみ。底部は露胎するが部分的に垂れた釉が付着する。

Ⅱ29・Ⅱ30は、石製の硯の欠損した一部である。Ⅱ31～Ⅱ35は砥石。このうちⅡ31・Ⅱ34はおそらく欠損した硯の一部を砥石として転用したものと思われる。またⅡ32には、幅1cm弱位の研磨痕が3単位見られる。Ⅱ36は細長の石製品。上部は欠けているが、川と草木花のような文様が彫り凹められている。

SE1 出土遺物 (Ⅱ37～Ⅱ44) Ⅱ37は、陶器灯明皿で、木桶二段目内埋土より出土した。内面に目跡が残り、口縁端部に煤が付着する。釉は黄灰色を呈する。Ⅱ38は堺・明石系の陶器摺鉢で、埋土上部の漆喰枠内より出土した。内側面全体に1単位10本位の摺り目を施し、底部内面にはおそらく放射状になる摺り目の一部が残っている。胎土には1cm大の小石を含み、内外面とも口縁部から胴部中ほどまで鉄釉または鉄漿をかけている。18世紀後半頃のものか。Ⅱ39は、陶器大甕で、破片の大半は埋土上部の漆喰枠内から出土したが、その下の一段目木桶内埋土出土の破片も若干接合した。底部は完存し、その二つの破片はいずれも上向きで近接して出土し、その付近にはほかの破片や石・漆喰片が集中していた。口縁部はわずかしかなかったが、漆喰枠内の北西部が攪乱で破壊されているために元来はもっとあったかもしれない。内外面に鉄釉をかけ、外面の中ほどに黒釉を垂らす。底部内面には、離れ砂が四カ所残っている。底部外面には判読不能の墨書が描かれている。Ⅱ40は、埋土から出土した非常に薄手の磁器の小椀で、外面に赤絵による上絵付が施されている。Ⅱ41は木桶二段目内埋土から出土した磁器染付底部。精良な白色の胎土で内外面薄めの呉須で染付が施される。Ⅱ42は磁器染付皿か。内外面に染付が施されるが、

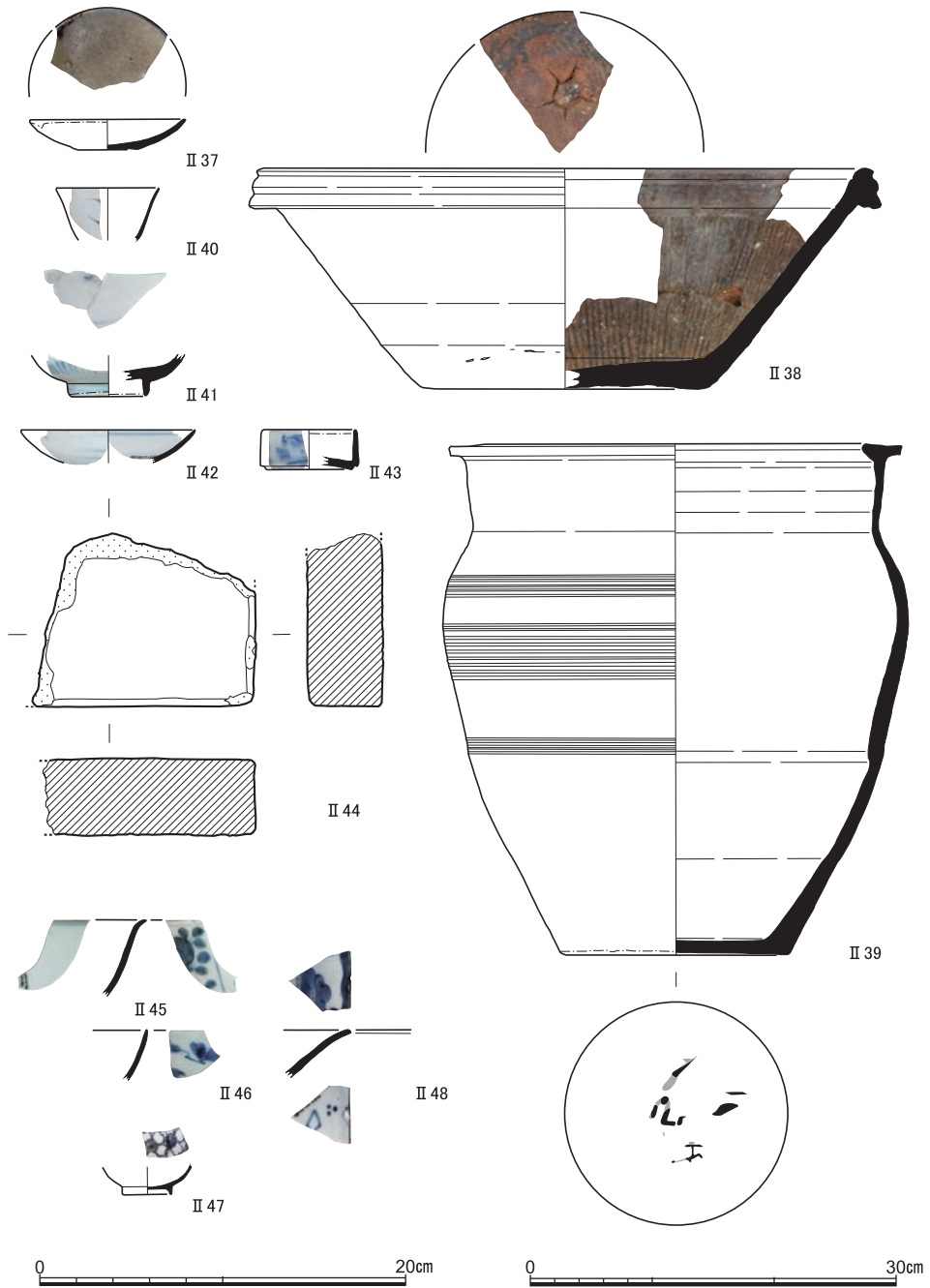


図74 S E 1 出土遺物 (II 37~II 39陶器, II 40~II 43磁器, II 44埴), S E 2 出土遺物 (II 45~II 48磁器) II 39のみ縮尺1/6

残りが悪く、蓋かもしれない。Ⅱ43は、磁器染付の蓋物の身であり、外面に文様が描かれる。Ⅱ44は胎土が褐色を呈する平らなレンガ状の焼き物で、1～5mmほどの砂粒を多く含む。四角の一角が残存する磚の一種の可能性はある。Ⅱ42～Ⅱ44は、埋土上部の漆喰枠内から出土した。

SE2 出土遺物 (Ⅱ45～Ⅱ48) Ⅱ45・Ⅱ46は磁器染付碗の口縁であるが、残存部が少なくいずれも口径は不明である。Ⅱ45の口縁は、端反りである。Ⅱ47は磁器の底部で、内面に黒褐色で花卉文様が上絵付されている。Ⅱ48は磁器染付の角皿の一部であり内外面に文様が施されるが、残存部分が少なく大きさは不明である。

SE3 出土遺物(Ⅱ49～Ⅱ62) Ⅱ49～Ⅱ51は陶器蓋である。Ⅱ49は水注の蓋であり、外面上部に鉄釉を施す。蓋の中央のつまみは五弁花をあしらう。Ⅱ50は、外面上部から側面の一部にかけて鉄釉を施し、底面には糸切りの痕跡が残り、その上に所々釉が付着する。Ⅱ51は手づくねで整形し、内外面に鉄釉を薄くかけた陶器の蓋で、内外面に指押さえの痕跡が残る。胎土は暗灰色を呈し、つまみの部分は全体が欠損している。Ⅱ52は陶器甕。胴部は底部から直線的に口縁まで立ち上がる。内外面に鉄釉を施し、外面胴部上半から下に所々黒釉を垂らす。底部は完形だが、口縁は一部しか残存していない。Ⅱ53は軟質施釉陶器の手水鉢。胎土は淡赤褐色で、外側面には白色と黒褐色で白梅とその枝の文様を描き、底裏には黒褐色で「乾山」の銘が手書きされる。内外面、底裏全体に透明がかかった粉状の白色を呈する釉をかける。二代乾山に関わる物か。SE3 出土遺物のうちⅡ51は木桶内出土、それ以外は石組内埋土出土である。

Ⅱ54～Ⅱ57は、磁器染付の碗である。Ⅱ54は、外面に草花の文様を描き、半分ほどしか残っていないが見込み部分にはおそらく五弁花を描く。内側面上部には格子状の意匠をめぐらせる。Ⅱ55は完形で、外面の二カ所のみ草花山水のような文様を描く。高台は低く薄手である。Ⅱ56は外面に草花、見込み中央の二重円弧内に笹のような文様、内側面上部に格子状の意匠を描く。Ⅱ57は底部を欠くが、外面に染付、口縁の内面寄りに銹釉を施す。Ⅱ54～Ⅱ57はいずれも薄手で白色の精良な胎土を用いており、丹精に作られている。Ⅱ58は磁器染付蓋物の身で、外面に山水のような文様が描かれる。Ⅱ59は磁器染付の仏飯で完形に近い。外面の一カ所のみ草のような文様を描く。胎土はやや灰色がかり釉も少し緑灰色を帯びる。釉のかかっていない底裏は橙褐色を呈し、底は焼け歪んでおり作りは粗雑である。Ⅱ60は白磁の小皿であるが、残存部が1/3であり、染付の一部かもしれない。

Ⅱ61は砥石。中央での断面は長方形で、平らな面のそれぞれに使用の痕跡が見られる。

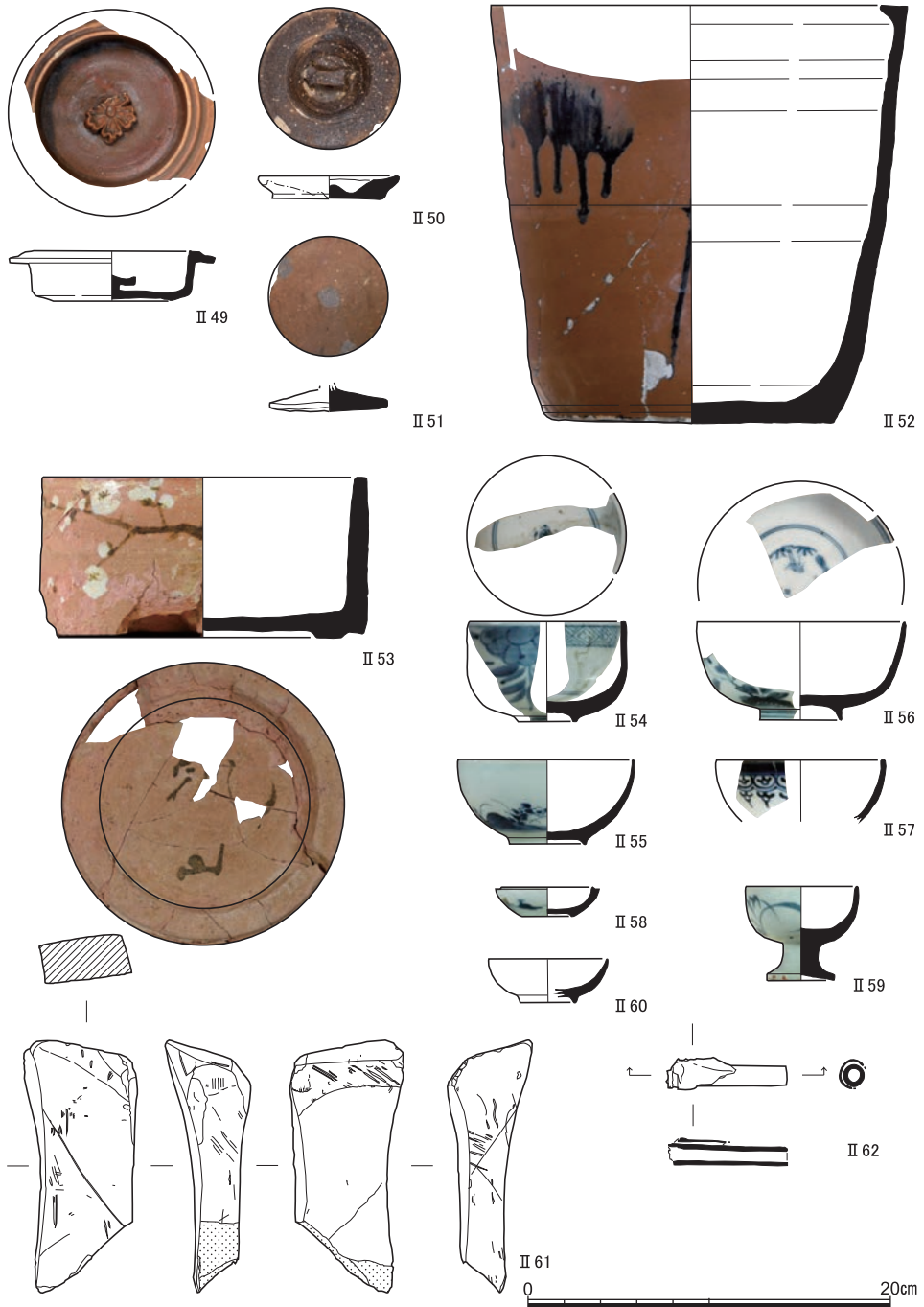


図75 SE 3 出土遺物 (II 49~II 52陶器, II 53軟質施釉陶器, II 54~II 60磁器, II 61砥石, II 62キセル)

Ⅱ62はキセルの一部。吸い口の竹管とその周囲の金属の一部のみが残存する。竹管の端部には節の痕跡が見られその付近に金属部分との隙間に溜まった灰が付着している。S E 3出土遺物のうち、Ⅱ51は木桶内埋土、そのほかのものは全て石組内埋土出土である。

S E 9 出土遺物 (Ⅱ63・Ⅱ64) Ⅱ63は磁器染付椀であり、残りが悪いが外面に草のような文様がわずかに見える。Ⅱ64は磁器染付椀か鉢であり、外面に濃紺の呉須で草花と六角形の文様を、内面上部に格子状の文様をめぐらす。いずれも底部は残存していない。

S X 1 出土遺物 (Ⅱ65～Ⅱ70) Ⅱ65は内面に明瞭な墨書を有する土師器であるが、器種不明である。胎土は乳白色、口縁は直線的で、その外部を面取りしている。Ⅱ66～Ⅱ69は磁器染付椀。Ⅱ66は外面に梅花のような文様を描く。Ⅱ67～Ⅱ69は底部付近のみ残存し、いずれも見込み部分に文様は見られない。Ⅱ67は外面高台周辺に円弧を描き、胎土は所々やや赤変する。Ⅱ68は外面に草木のような文様、底裏に銘を描く。Ⅱ69は外面に円弧と意匠を推定できない文様を描き、見込み部分は蛇の目釉ぎ。Ⅱ70は磁器椀の口縁部であるが、1/12ほどしか残存しておらず、染付か白磁か判然としない。

S X 1 周辺出土遺物 (Ⅱ71・Ⅱ72) Ⅱ71・Ⅱ72は、磁器染付椀。外面に花鳥となんてんのような文様が描かれ、口縁部から内面上端にかけて釉剥ぎがなされている。Ⅱ72は外面に草花のような文様を描く。白色の胎土を用いた薄手の作りで、丹精に作られている。

S X 2 出土遺物 (Ⅱ73・Ⅱ74) Ⅱ73は有蓋壺の蓋。胎土は橙褐色を呈し、口縁部は2/3以上残存している。Ⅱ74は有蓋壺の身で完形、ほぼ無傷で出土した。胎土は乳褐色であり、Ⅱ73とは色調が異なる。Ⅱ73はⅡ74の蓋として合わさって出土した。

S X 3 出土遺物 (Ⅱ75・Ⅱ76) Ⅱ75は有蓋壺の蓋。胎土は乳褐色で、中央部はやや凹む。口縁部は半分強残存している。Ⅱ76は有蓋壺の身で完形、ほぼ無傷で出土した。胎土は乳褐色である。Ⅱ75とⅡ76は合わさって出土した。

S X 4 出土遺物 (Ⅱ77・Ⅱ78) Ⅱ77は有蓋壺の蓋。胎土は乳褐色で、口縁は3/4以上残存する。Ⅱ78は有蓋壺の身で、底はほぼ完形に近いが口縁は一部を欠き、隣接するS X 3の有蓋壺をこれより後に埋めたためか、やや壊れた形で出土した。胎土は乳褐色である。Ⅱ77とⅡ78は合わさって出土した。なおS X 2～4の有蓋壺は胞衣壺と呼ばれるもので、蓋は上からの土圧のためかいずれも破片に割れた形で出土した。

S X 6 出土遺物 (Ⅱ79～Ⅱ82) Ⅱ79・Ⅱ80は土師器皿である。Ⅱ79は乳赤褐色の胎土で、見込みに明瞭な圏線を有する。Ⅱ80は二次的な火の影響で破片全体が黒化し、内面は更に赤みを帯びる。見込みに圏線を有するがⅡ79に比して不明瞭であり、やや時代の古

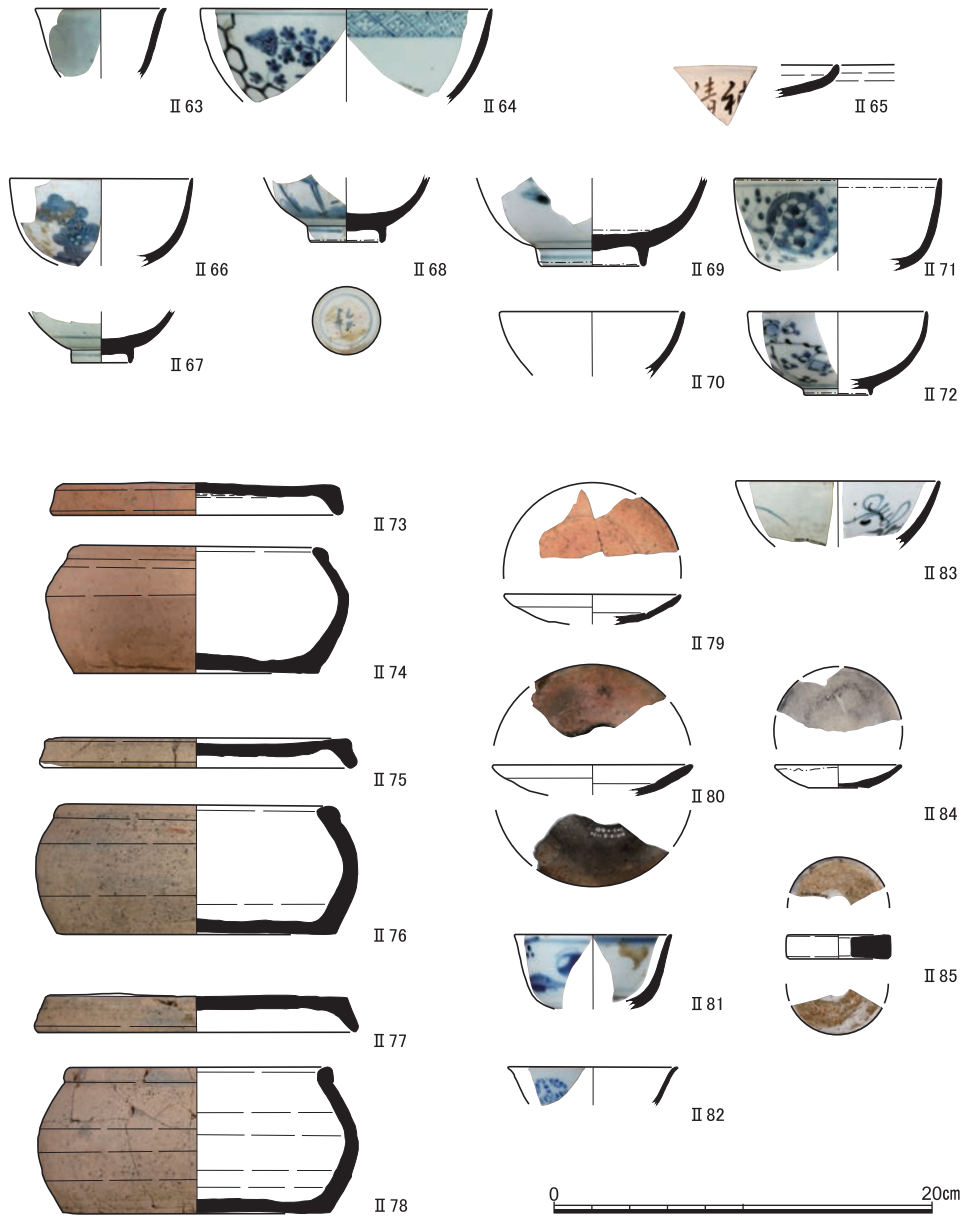


図76 S E 9 出土遺物 (II 63・II 64磁器), S X 1 出土遺物 (II 65土師器, II 66~II 70磁器), S X 1 周辺出土遺物 (II 71・II 72磁器), S X 2 出土遺物 (II 73・II 74土師器), S X 3 出土遺物 (II 75・II 76土師器), S X 4 出土遺物 (II 77・II 78土師器), S X 6 出土遺物 (II 79・II 80土師器, II 81・II 82磁器), S K 8 出土遺物 (II 83磁器), S K 9 出土遺物 (II 84陶器, II 85戸車)

いものかもしれない。Ⅱ81・Ⅱ82は磁器染付椀。いずれも底部が残存しない。Ⅱ81は口縁部がやや端反りで、外面に花のような文様、内面に線描をめぐらす。Ⅱ82は端反りの口縁で、外面に文様、口縁部の内側に銹釉を施す。胎土は白色で薄手である。

SK 8 出土遺物 (Ⅱ83) Ⅱ83は磁器染付椀。内外面に草花のような文様を施す。

SK 9 出土遺物 (Ⅱ84・Ⅱ85) Ⅱ84は陶器灯明皿。内面から口縁付近に灰色を呈する釉を施す。内面には目跡が残り、口縁の一部と内外面の一部は火の影響によりやや黒ずんでいる。Ⅱ85は白磁の戸車の一部と思われ、外周と中心には回転しやすいように白磁釉が施されている。

SE 8 出土遺物 (Ⅱ86・Ⅱ87) Ⅱ86は、土師器皿。胎土は乳赤褐色で、見込みに明瞭なV字形の圏線を有する。口縁部全体に煤が付着し、灯明皿として使用したものと思われる。18世紀頃のものか。Ⅱ87は磁器染付椀で半分弱が残存している。外面に濃紺の呉須で桐のような文様を多数描き、内面は施釉のみである。底裏には「年製」の銘のみが読める。全体に薄手で白色の胎土を用いて丹精に作られている。Ⅱ86・Ⅱ87とも石組内埋土出土である。

SX13 出土遺物 (Ⅱ88・Ⅱ89) Ⅱ88は陶器灯明受皿。内面から外面上部まで淡灰色の釉を施し、口縁と立ち上がり上端に銹釉を施す。受口部は残存していない。外面露胎部はやや赤化している。Ⅱ89は磁器染付椀で、口縁部が1/12強残存するのみであるが筒型椀か。外面は染付の後、赤、緑、金、黒褐色で上絵付けが施されている。内面には口縁近くに染付で格子状の文様をめぐらす。

SK 1 出土遺物 (Ⅱ90～Ⅱ92) Ⅱ90は陶器灯明皿。内面から口縁部にかけて黄白色を呈する釉を施す。火の影響で内外面とも全体にやや黒ずんでいる。Ⅱ91は磁器染付小椀。薄手の作りで、見込み部分に文様を描き、底裏に薄く銘を描いている。Ⅱ92は白磁の皿。薄手のしっかりした作りで、外面は高台の少し上で折れ曲がり口縁に向かって外反する。幕末頃のものか。

SK 4 出土遺物 (Ⅱ93～Ⅱ102) Ⅱ93は土師器小皿。赤褐色の胎土で、内外面上部に横ナデを施す。Ⅱ94は陶器椀。内外面に黄白色を呈する釉を施し、外面にはその上から緑と青色で絵付けを施す。Ⅱ95はSK 4 底部出土の陶器蓋。外面上部に黄白色を呈する釉を施す。Ⅱ96は軟質施釉陶器の小壺で、玩具の一種か。乳白色の素地の上に外面に部分的に緑色を呈する釉をかける。口縁付近以外ほぼ完形のため、胴部は器壁の厚みが実測できなかった。Ⅱ97は青磁染付の鉢。胎土は白色で外面に青磁釉を施し、内面には上部を中心

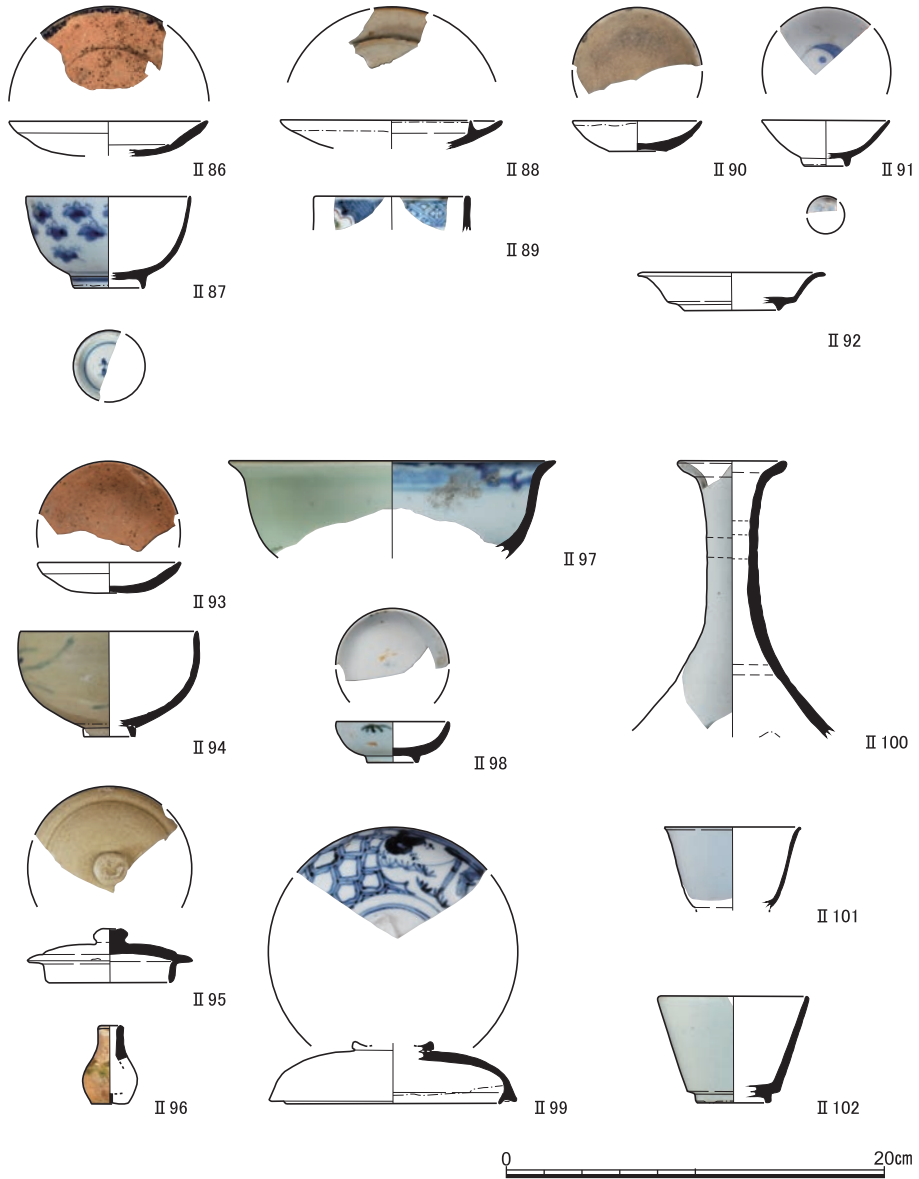


図77 S E 8 出土遺物 (II 86土師器, II 87磁器), S X 13出土遺物 (II 88陶器, II 89磁器), S K 1 出土遺物 (II 90陶器, II 91・II 92磁器), S K 4 出土遺物 (II 93土師器, II 94・II 95陶器, II 96軟質施釉陶器, II 97~II 102磁器)

に呉須でばやけた文様が描かれている。19世紀前半頃のものか。Ⅱ98は磁器染付小椀。外面の一部に笹の葉のような文様，見込み中央にかすかに銘か文様が見られるほかは，ほとんど文様が施されていない。胎土は精良な白色で，高台畳付は釉剥ぎをしていて赤化している。Ⅱ99は磁器染付蓋。つまみの端は一部のみ残存する。外面には濃紺の呉須で五角形の組み合わせと笹のある庭園のような文様が描かれている。内面は施釉のみで，身と合わさる部分は露胎している。Ⅱ100は磁器染付の長口壺。口縁部は3/4近く残存するが，胴部から下は欠けている。外面残存部の最下部にわずかに染付が見える。胎土はやや灰色を帯び，内面にも釉がかかるが残存部の最下部は露胎する。Ⅱ101は白磁の椀。胎土は精良な白色で，薄手の作りである。高台は残存していないが，胴部からの屈曲部はわずかに残っている。Ⅱ102は白磁の椀。胴部は直線的に斜めに立ち上がり，胎土および釉の色調はやや灰色を帯びる。

S X11出土遺物（Ⅱ103～Ⅱ112） Ⅱ103は土師器平壺。乳白色の胎土で，側面を轆轤による水引き整形し，底部外周を平らに，底部中央を内湾させて篋ケズリを施している。19世紀前半頃のものか。ほぼ完形であるが，底部の中央は穴が開いて欠けていて，出土時には底部が上を向いていた。Ⅱ104は瓦質の浅い容器であるが器種不明である。胎土は乳白色，表面の色調は淡灰色を呈する。底部の残存状況から，おそらく六角形の器形であると推定される。底面の破片と側面の破片は直接接合しないが，底部と側面は接合部で剝離し，側面の破片は一部が底部にかかっているため，つなげて図示した。底面と側面の間に粘土の接合痕があるほか，口縁部と側面の間にも粘土の接合痕が見える。口縁内面の接合部付近から底部を含めた外面全体に磨きをかけている。

Ⅱ105は陶器深皿又は鉢。口縁上端は面取りし，高台畳付および口縁部を除いて乳白色の胎土の上から黄白色を呈する釉を施す。Ⅱ106は陶器皿。内面に鉄絵を描き，内面全体と外面に淡黄灰色を呈する釉を施す。見込みには三カ所目跡が残る。Ⅱ107は焼締め陶器の蓋か。胎土は乳赤褐色を呈する。外面全体は梅花をあしらったような意匠で，輪花状口縁をともなう花卉の中央に12本のおしべを模した文様が浮き彫りにされ，めしべにあたる中心部は円形に凹められている。内面の中心部周辺は口縁端部と同じ位の高さまで下方へ向けて環状に突起し，その下端は平らに整形されている。Ⅱ108も焼締め陶器で，鉢状だが機種は不明。胎土は乳赤褐色を呈する。上から見た口縁部の形状は，辺の中央がやや外側へ膨らんだ方形になると思われるが，全体の1/4強しか残存していない。底部は半分ほど残存しており，下から見た形は円形又は楕円形である。外面は底部から胴部にかけて

近世・近代の遺構と遺物

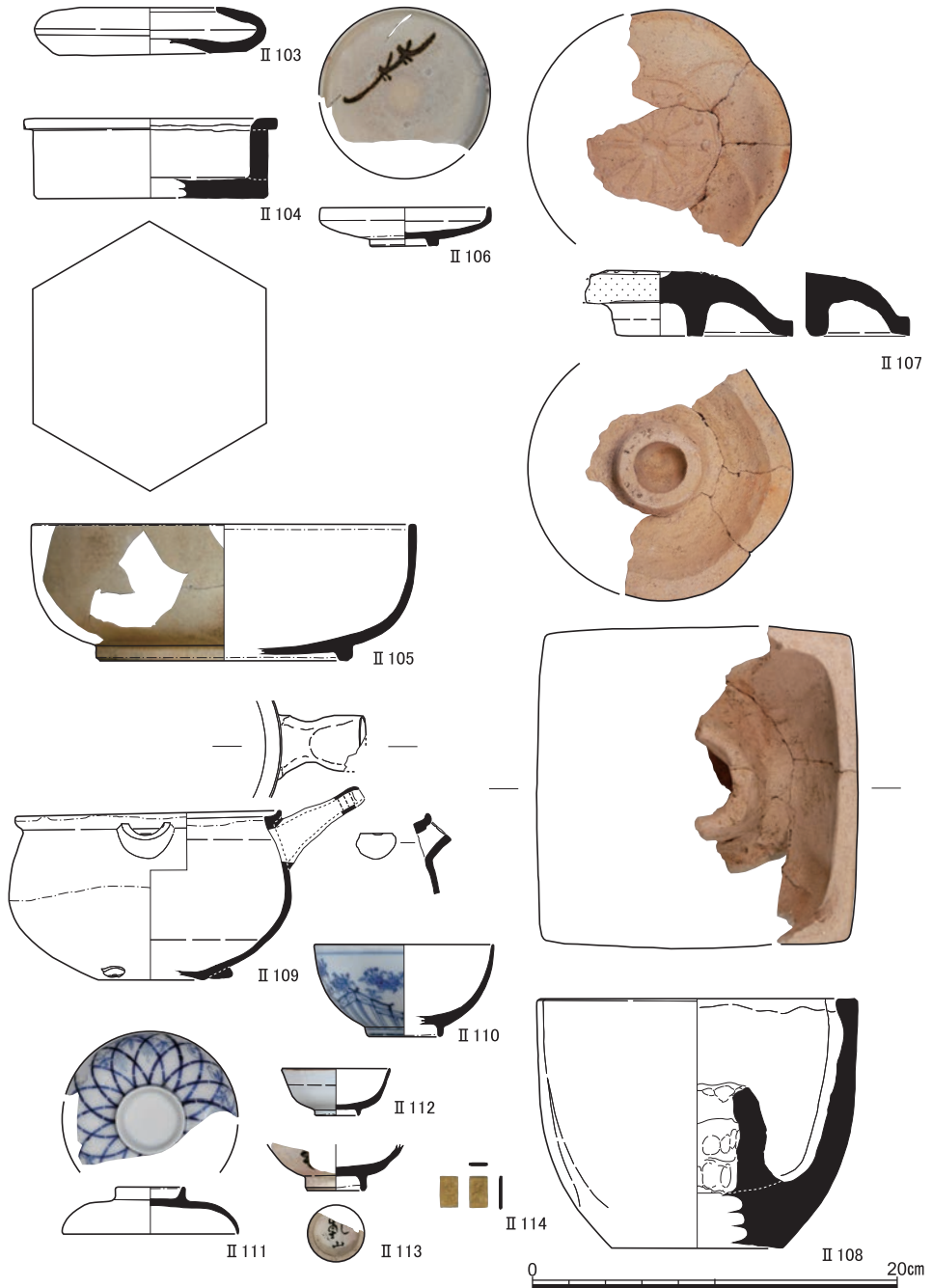


図78 S X11出土遺物（II 103土師器，II 104瓦質土器，II 105～II 109陶器，II 110～II 112磁器），砂礫上面出土遺物（II 113陶器），黒灰色土出土遺物（II 114一分判）

丸みを帯びて立ち上がり、口縁では方形の角に合わさる。底部は篋削りをし、外側面は水引き整形をしている。内面の中心部周辺には、手づくねで整形した環状の突起を接合している。突起部には粘土紐の接合痕のほか、多くの指頭圧痕が残る。この突起の機能はよくわからない。II107とII108は胎土、焼成とも酷似しているが、組み合わせらない。

II109は、陶器行平鍋。乳白色の胎土で、蓋と合わさる部分を除いた内面と、外面上半に淡黄灰色を呈する釉をかける。把手と注口部が残存し、底部には飾りの脚が3箇所が付されている。内外面底部付近には煤が付着し、底の中心部は欠けている。II110は磁器染付椀。外面に花鳥と間仕切りのような文様を描く。II111は磁器染付蓋。外面に草花と竹を曲線的な格子状に意匠化したような文様を施す。II110、II111とも内面は施釉のみで、外面は濃紺の呉須で文様が描かれている。また胎土は白く薄手で、丹精に作られている。II112は白磁小椀。胎土は白く薄手で外面の胴部中央が条線状にわずかに膨らみ、口縁部には銹釉を施す。19世紀前半頃のもののか。

包含層出土遺物 (II113・II114) 近世～近代の遺物は、近代陶磁器を中心に大量に出土したが、ここでは特筆すべきものを2点図示する。II113は、調査区東辺の第6層(褐色砂礫)上面で出土した陶器椀で、底裏に「乾山」の銘が手書きされる。II114は、調査区西辺の第2層(黒灰色土)下半の掘削中に出土した一分判。縦17.6mm、横10.5mm、厚さ1.6mm、重さ3.3gをはかる。表面には、上部に扇枠に桐文、中部に「一分」の文字、そして下部に桐文が刻印され、裏面には、上部に「光次」の署名と右上に草書体の「文」、下部に花押が刻印されている。刻印の特徴から、文政2年(1819)に発行された文政一分判と思われる。

近世遺構出土瓦 (II115～II133) II115はS D128出土の巴文の軒丸瓦。瓦当接合部で剥離しており、全体の1/3位しか残存していない。II116とII117はS E1一段目木桶内出土であり、II116は巴宝珠文軒丸瓦。瓦当下半部と玉縁は欠けている。玉縁近くに焼成前の穿孔が施されている。凹面には布目の痕跡と、瓦の長軸方向に直行する鉄線切り(コビキB)の痕跡が残る。II117は軒棧瓦であるが、瓦当部は剥離してほとんど残存しておらず、唐草の一部のような文様がわずかに見えるのみである。後部の中央付近の二カ所に直径5mm強の焼成前の穿孔が半分ほど見られ、これより後ろの破片は残存していない。これとは別に2孔から等距離のやや前側に焼成後の穿孔が施され、下面側のその周囲は表面が剥離している。このことから見て、二カ所の穿孔部を釘で止めていたがそれより後ろが割れて、新たに手前の中央付近に一カ所穿孔して釘で止め、瓦を葺き直したものと推定で

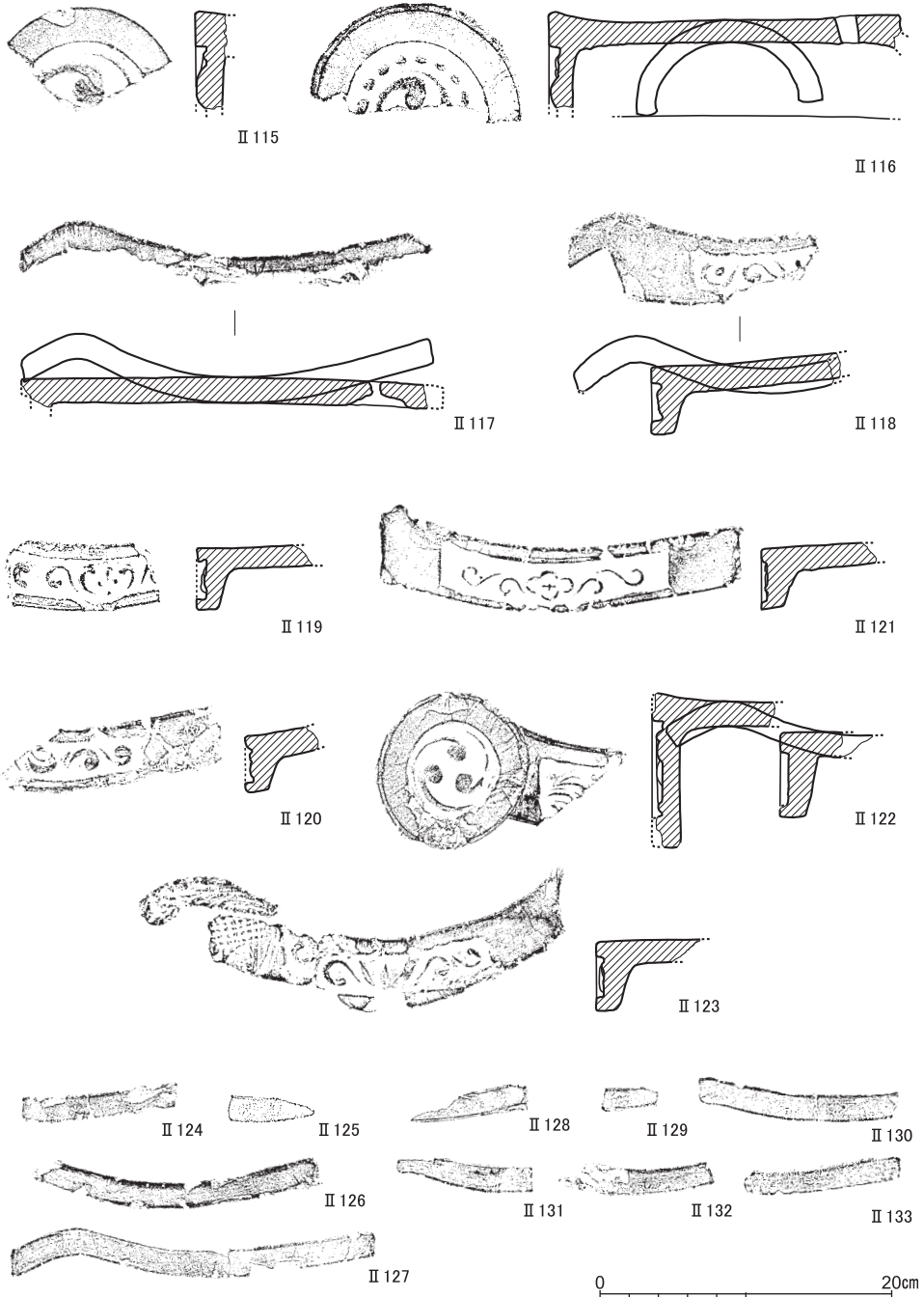


図79 近世遺構出土瓦（II 115・II 116軒丸瓦，II 117～II 123軒棧瓦，II 124～II 133刻印棧瓦）縮尺1/5

きる。

Ⅱ118はS X 6出土の軒棧瓦であり、瓦当は平瓦部のみからなる。三葉弁のような文様を中心に二回反転の唐草を配したものである。Ⅱ119はS K 8出土で、軒棧瓦と思われるが、棧部が残っていないため軒平瓦の可能性もある。左右の葉弁が内傾した三葉弁内に逆三角形に三珠点を配置したような文様を中心に、少なくとも二回反転の唐草を配する。Ⅱ120はS X 11出土。Ⅱ120は宝珠文を中心に二回反転の唐草を配し、正面から見た瓦当右端の楕円形囲みの中に「長」の刻印を有する。Ⅱ121～Ⅱ123は瓦溜まりS X 13出土である。Ⅱ120・121は軒棧瓦で、Ⅱ121は横長の十字形の周囲に配置した四花文を中心に二回反転の唐草を配する。Ⅱ122・Ⅱ123は丸瓦部にも瓦当を備えた軒棧瓦である。Ⅱ122は丸瓦と平瓦の部分が接合部で剥離していたが接合した。丸瓦部は三巴文であるが、平瓦部は残りが悪く、文様がよくわからない。Ⅱ123は、丸瓦部が接合部で剥離してその破片は見つからなかった。平瓦部は三葉弁を中心に二回反転の唐草を配する。

Ⅱ124～Ⅱ133は刻印を有する棧瓦で、Ⅱ124～Ⅱ127はS X 6から、Ⅱ128～Ⅱ133はS X 13から、それぞれ出土した。このうちⅡ124・Ⅱ128・Ⅱ129は八弁の花弁を持つ菊花の刻印で、いずれも正面から見て瓦の右端近くに刻印が押されている。花卉の形はⅡ124が丸みを帯びた滴形、Ⅱ128・Ⅱ129が三角形であり微妙に異なる。正面から見て右寄りに押した八花卉の菊花の刻印は四天王寺元三大師堂の近世瓦に例がある〔山崎2008〕。Ⅱ125は、楕円形囲みの中に棧部を上にした横向きに「渚」および右半の見えない文字を書いた刻印で、瓦の中央付近に刻印がなされている。

Ⅱ126は、四角囲みの中に棧部を下にして横向きに右半に「大ふつ」と書き、左半は一部が剥離と瓦からはみ出ているためよく読めない刻印である。この刻印の下に別の刻印の四角囲みの左端の一部と思われる痕跡がある。このことから、焼成前の棧瓦を何枚も並べて「大ふつ」の字がよく読めるようにややずらしながら連続して刻印を押した可能性もある。大仏瓦師に関係あることを強調するためかもしれない。なお刻印は正面から見て瓦の右寄りに押されている。

Ⅱ127は四角囲いの中に「甚」のような字を書いた刻印で、瓦のほぼ中央に押されている。Ⅱ130～Ⅱ132は四花を繋げたような意匠の刻印で、瓦の中央付近に押されている。Ⅱ133は上部がはみ出ているがおそらく円形又は楕円形囲みの中に書かれた「善」の字の刻印で、正面から見て瓦の右端寄りに押されている。

4 小 結

今回の発掘地点では、汚染土壌の除去のために、遺物の回収もままならなかった上に遺跡に関する情報の記録も満足にはできなかった。したがって、以下で述べる、本調査区における近世の土地利用にかんしては、限られた資料に基づくことをことわっておかねばなるまい。

(1) 中世以前の堆積環境

本調査区の近世の鋤溝群の基盤となっているシルト層（第5層）は、北接する338地点ではその調査区の東南部で、褐色砂礫（338地点第10層）の上位に下面が標高45.5m前後からいくぶん東下がりになる状態で限定的な範囲に堆積していた「暗灰色粘土層」（同第9層）に連なるものである。それよりも南の下流側に位置する本調査区でも、下面は標高45.0m前後で同様に東下がり堆積しているが（図67・68）、分布域は東北辺から中央部を経て南辺へと拡大している。すなわち、およそ東北から西南の方向に高野川系の流路堆積物である褐色砂礫層（本調査区第6層）が自然堤防状に堆積するその東南部の後背湿地に、細粒のシルトが埋積していったことをうかがわせる。そしてその堆積は、今回の3点の放射性炭素年代によれば縄文早期頃には始まっていたことがわかる。

本調査区の東南に位置する278地点の北壁では〔千葉ほか2007〕、標高45.0m前後に、厚さ30cmほどで上方細粒化する青灰色シルト～泥炭質土が堆積する部分があり（278地点第7層）、高野川系流路の厚い砂礫（同第6層）に覆われている。しかしこの砂礫層は、堆積年代は縄文後期前葉（北白川上層式2期）頃で、もっとも残りの良い部分では標高は47mを超える。さらには、この砂礫層の上位には縄文後期中葉（北白川上層式3期）の白川系流路がもたらした粗砂層があり（同第4層）、この両者の堆積によってできたさらに東側の後背湿地には晩期の黄色シルト層（同第5'層）が堆積する。

本調査区の主に青灰色を呈するシルト層については、堆積開始年代は278地点の堆積状況とも矛盾しないが、上部の、遅くとも15～16世紀頃までの氾濫起源と思われる堆積物の褐色混礫砂層（本調査区第4層）とは不整合に連なる。北接する338地点でも、このシルト層の上位の徐々に西方へと堆積していった黄褐色砂群（338地点第8'層）からは、中世まで時期の下る可能性のある土師器細片と摩滅した縄文中期初頭の土器片の2点が出土している〔富井・笹川2010〕。両地点のこの砂層も対比が可能であろう。また、本調査区の西南100m辺りの39・122地点では、平安中期から現地性の活動痕跡が認められるがその

基盤となる砂礫層は、上面の標高が45.5mを超える部分もあり、包含遺物としては弥生時代や奈良時代の摩滅した土器片が出土する〔京大埋文研1981a〕。したがって、同様に、本調査区第4層と338地点第8'層に対比する部分を見いだせよう。なお、縄文から古代の遺物は本調査区でも338地点でもほとんど出土していない。

以上から、第5層のシルト層を堆積させた環境について、次のように推測する。縄文早期までには、本調査区の北方から西辺にかけての褐色砂礫層（338地点第10層および本調査区第6層）が標高およそ46m前後まで堆積して自然堤防となり、それを西北限としてその後背湿地状の窪みに比較的広大な滞水域が広がっていた。そして、その窪みには、縄文後期前葉において高野川系の流路の出水によって上流部で自然堤防が決壊して褐色礫層（278地点の第6層）が堆積したり、縄文後期中葉において白川系流路の流入によって灰白色粗砂（278地点の第4層）が堆積したりする。遅くとも弥生時代以来、平安時代中頃までは、本調査区から数十m西ではたびたび高野川系の流路が襲うが、本調査区は、鎌倉時代までに出水が時折あった可能性はあるものの、およそ、後背湿地のような淀んだ水域だった。

(2) 中近世の土地利用

中世末期の土地開発 338地点では、16世紀には人びとが積極的に進出して井戸を掘削している〔富井・笹川2010〕。本調査区では、通常の水成堆積ではない褐色混礫砂層（第4層）に15～16世紀の土器器が認められるが、仮にこれが人為性の堆積物であるとすれば、16世紀頃に湿地帯に耕作地を確保するための土地改良がおこなわれた、と評価できよう。出水のような自然現象による堆積物だとしても、結果的には、それによって湿地帯の干拓化が進み耕作地が形成されていった。そして、東方からの活動が、338地点や本調査区あたりを経て、地続きに西方にまで広がっていく。すなわち、吉田山西麓から高野川系流路東岸にかけての低地部開発という視点で見れば、16世紀頃からは地続きで安定的に展開できる堆積環境が整ったと言えよう。

本調査区の150m西に位置する349地点では、遅くとも13世紀に遡る高野川系流路の堆積による砂礫層が徐々に西に移動しながら最終的に16世紀頃に離水している状況が認められた〔千葉・富井2011〕。また、本調査区の北西150mに位置する384地点では、16世紀頃には、側溝を備えた道をともなう直線的な流路が北北東から南南西方向にはしり〔伊藤2014〕、この辺りの治水が16世紀頃には整っていたことをうかがわせる。こうした状況は、上記の理解に矛盾しないだろう。

近世の土地利用 17世紀以降は、338地点で18世紀頃の土石流堆積物が確認されているものの、そのほかには砂層や礫層などの自然堆積物の比較的広域的な分布はこれまでのところ確認できていない。こうした安定的な環境下で、田畑が営まれていたのだろう。少なくとも吉田村および聖護院村に含まれるこの一帯では、寛文新堤の効果もあって〔吉越2006, 千葉・長尾2014〕, 近世の高野川（鴨川）の河川管理は比較的よく機能していたと評価したい。

本調査区は、聖護院村の西北縁として位置づけられると思われるが、居住に関する明確な痕跡を確認してはいない。調査区東北部では、黒灰色土（第2層）の掘削中および掘削後に幕末頃までの時期の、いわゆる胞衣壺を3基（SX2～4）とその南側に瓦溜まり（SX5・6, SK8）を検出している。しかし、日常什器が多く出土したわけではなく、瓦も居住用の構造物での使用にともなうには出土量が少ないように思われる。その一方で、すぐそばには野壺SE1もある。また、すぐ北側の338地点東南部では、18世紀の陶磁器の廃棄を確認しているがその後は耕作地となっている。こうしたことから、本調査区東北部は、少なくとも18世紀の終わりごろからは、基本的には田畑だったと考えたい。瓦溜まりや胞衣壺については、祠での地鎮と考えることもできよう。

調査区南半では、黒灰色土中に土器溜を検出でき、幕末までの時期におさまるものがあったが、南縁部に分布する淡褐色土（第3層）の掘削がかなわなかったので、いつ頃からこうした日常什器の一括廃棄がおこなわれる空間となったのかはわからない。第2層の直下に第6層（褐色礫層）の分布する調査区西南辺では、ほとんど鋤溝群は確認されなかったが、黒灰色土の下部でも17世紀にまで遡るような陶磁器や土師器は非常に少なかったので、居住域だったとしても早くても江戸時代後半からと言える。

東接する278地点では、調査区南辺で乾山焼やその焼成に関わる生産関連遺物も出土しており、二代乾山による「乾山焼工房」に関わると推定されている。本調査区では、東南部の広い範囲が攪乱を受けているものの調査区の東北辺で乾山焼と認め得る製品が2点出土したにとどまる（II53・II113）。278地点で推定した生産関連の場合は、本調査区にまでは達していないと判断してよからう。なお、II113については、「乾」の第1画のタッチが278地点のそれらとはまったく異なっている。

19世紀に残した富岡鉄斎の絵図によれば（京都市編1985）、本調査区は、安政～文久年間（19世紀前半）に画家の小田海仙の居住域の北東部を、西南部辺りに内包していたことが想定された〔京都大学総合博物館2000〕。今回、それを裏付ける資料は確認できなかった。

しかし、調査区西辺を南北にはしる段差の上位（すなわち西側）の南半部からは、段差の下位に多数あったような鋤溝は検出されない一方で、近世後半から明治初期にかけての、石組み井戸や瓦溜まり、陶磁器類が多量に廃棄された土坑や溝が確認されており、田畑ではなく日常的な生活空間の縁辺部を想定させる。そして、黒灰色土からは埴塼の破片もしばしば出土していた。加えて、黒灰色土の下部を掘削中に出土した金属水銀は、絵画などに用いる赤色の顔料として水銀朱を獲得するために辰砂を加熱した副産物とも考えられる。こうした点は、本調査区に小田海仙の居住域が含まれ得るという想定とも矛盾しまい。

このような調査区東北辺・西辺・南縁の様相に対して、段差下位の調査区中央部から東部にかけては、緩い傾斜ややや大きめの溝に区切られた方形区画の整った空間の中に、鋤溝がおもに東西方向にはしる。そして、その地山は、北辺や西辺の段差上位の褐色砂礫層ではなくその上位に堆積したシルト層である。地山に保水力のあるより低位の空間は、水稲耕作に向いていたと思われるし、大根で有名な聖護院村の一角に位置することも踏まえば、近世には二毛作も実施されていたことだろう。そしてこうした区画は、出土遺物と層序から、18世紀にはさかのぼり得る。

なお、北接する338地点で確認されている、18世紀には存在していたY = 1850ライン辺りをX = 910ライン辺りまで南北にはしる段差は、そのほぼ延長上にある本調査区とは逆に、西下がり段差際では比高差が20cm程度になる。しかし、338地点では、そのまま西に進むと下位の砂礫層の上面は、むしろ西上がりになっていく。本調査区でのX = 880以南で東下がりの段差との関係は、かつての高野川の氾濫によってできた中州状の地形やそれに規制されるシルト堆積にかかわる微地形を反映した、と判断したい。

本章は、第3節(2)を長尾が、そのほかを富井が執筆し、全体を富井が調整した。現地調査および整理作業は、富井眞・長尾玲が担当し、河野葵・西田陽子・柰佐和子・高木康裕が、測量および出土資料の実測・復元などをおこなった。なお、木材について村上由美子氏（総合地球環境学研究所）から有益なご助言をいただいた。記して謝意を表します。

第4章 京都大学病院構内A H13区の発掘調査

千葉 豊 長尾 玲

1 調査の概要

本調査区は、京都大学医学部附属病院の西構内、鴨川まで直線距離で200mの地点に位置し、聖護院川原町遺跡に含まれる（図版1-398）。ここに、総合先端基盤研究棟の新営が計画されたため、周辺地区での調査成果を勘案し、予定地全域の発掘調査を実施した。

調査区の西に隣接する379地点の調査では、近世の水路・道路・井戸・溝・小穴などを検出し、近世の土器・陶磁器類を主体として整理箱79箱を数える遺物が出土した。古図に描かれた人工の水路とともに、江戸時代の聖護院村と吉田村を画する道路が見つかり、近世以降の土地利用の変遷に関する重要な知見が得られている〔千葉・長尾2014〕。

今回の調査区は379地点の東側に隣接し、東側に延びていると想定できる水路や村境の道路が残存していることが予想された。こうした遺構の検出を主たる目的とし、鴨川にはほど近いこの地点の土地利用の変遷を明らかにすることを課題として調査をおこなった。調査期間は2013年5月30日～8月5日、調査面積は960㎡である。

発掘調査の結果、近世の水路・道路・溝・小穴などを検出し、近世の土器・陶磁器類を主体として整理箱75箱を数える遺物が出土した。

当初の予想どおり、西隣りの調査区で検出した水路および聖護院村と吉田村の村境（道路）を今回も認めることができた。水路は出土した遺物から、17世紀後半に構築され、幕末には機能しなくなっていたことを追認したほか、成立期の水路の幅は3m前後をはかる大規模なものであったが、砂の埋積とともに護岸の補強をおこなった結果、最終的に幅が半分まで縮小したことが新たに判明した。

聖護院村と吉田村を画する東西道路には、水路と同時期に機能していたものと水路以前に遡るものがあり、また礫を混じえた一種の舗装をおこなったり、轍や側溝を伴っていたこと、水路の設置とともにその位置を少しずつ変化させていたことなどが明らかになった。

また、幕末期に比定できる整地土が見つかっており、これはこの時期に当地に設置された練兵場に関係するものとして注目しうる。このように、今回の調査では近世の土地利用の変遷を明らかにするうえで、重要な情報を得ることができた。

本章は第1・4・5節を千葉、第2・3節を長尾が執筆し、全体を千葉が調整した。

2 層 位

調査区全体には、厚さ50cm前後の表土（第1層）が広がり、X=999付近より南では、その下に整地土と思われる灰色砂礫（第2 a層）および礫混じり灰茶褐色土（第2 b層）がみられる。上半の2 a層はX=993以南に分布し、30cm前後の厚さをもつ。下半の2 b層はX=993以北では厚さ10cm前後、以南では20～40cm前後で、南へ行くほど厚く堆積している。さらに、X=994～998付近にかけてその下層に、南へ行くほど薄くなる灰白色砂礫（第2 c層）が分布する。第2層は幕末頃の整地土と想定しており、遺構の項で詳述する。

第3層の黒褐色土は厚さ15cm前後で、径1～数cmの黄色・黄橙色のブロックが入る。19世紀中頃を中心とした遺物を含む。第4層は、均質な灰褐色耕作土。厚さ20cm前後で、18世紀後半～19世紀前半の遺物を包含する。第5層は、黄褐色を帯びた淡褐色土。厚さ10cm前後で、ところどころ浅い溝状の落ち込みがみとめられた。量は多くないが、17世紀～18世紀前半の遺物が出土している。

第3・4・5層は、おもにX=994付近より南に分布し、この順序で埋土に含まれる遺物の量は少なくなる。これらの層はX=1001付近より北にも分布するが、調査区北西で北に向かってやや厚くなる第3層の黒褐色土は、調査区北東では部分的にしか確認されず、全体に黄色・黄橙色のブロックを含まないという違いが認められた。

第6層の灰褐色砂質土は厚さ20cm前後で、X=986～995付近にかけて帯状に分布する。自然の微弱な流れで形成されたものと推定する。第7層は高野川系流路による砂礫であり、この地一帯の基盤をなす堆積物である。砂礫中から、古代～中世の磨滅した遺物が若干量出土している。

3 遺 構

本調査区内は、隣接するAG13区、AH12区同様、中世以前においては高野川系流路の氾濫原であり、この時期の遺構は見られない。遺構の形成が見られるようになる近世以降を3時期に分けて記述する。Ⅰ期は、17世紀から18世紀前半までの時期。おもに淡褐色土を埋土とする遺構で、第7層の砂礫上面で検出した遺構である。Ⅱ期は、18世紀後半から19世紀前半までの時期。第6層の淡褐色土上面で検出した遺構で、灰褐色土を埋土とする遺構である。Ⅲ期は、灰褐色土上面検出で黒褐色土を埋土とする遺構と、黒褐色土より上部で検出された遺構で、幕末期の古段階と明治期以降の新段階に分ける。

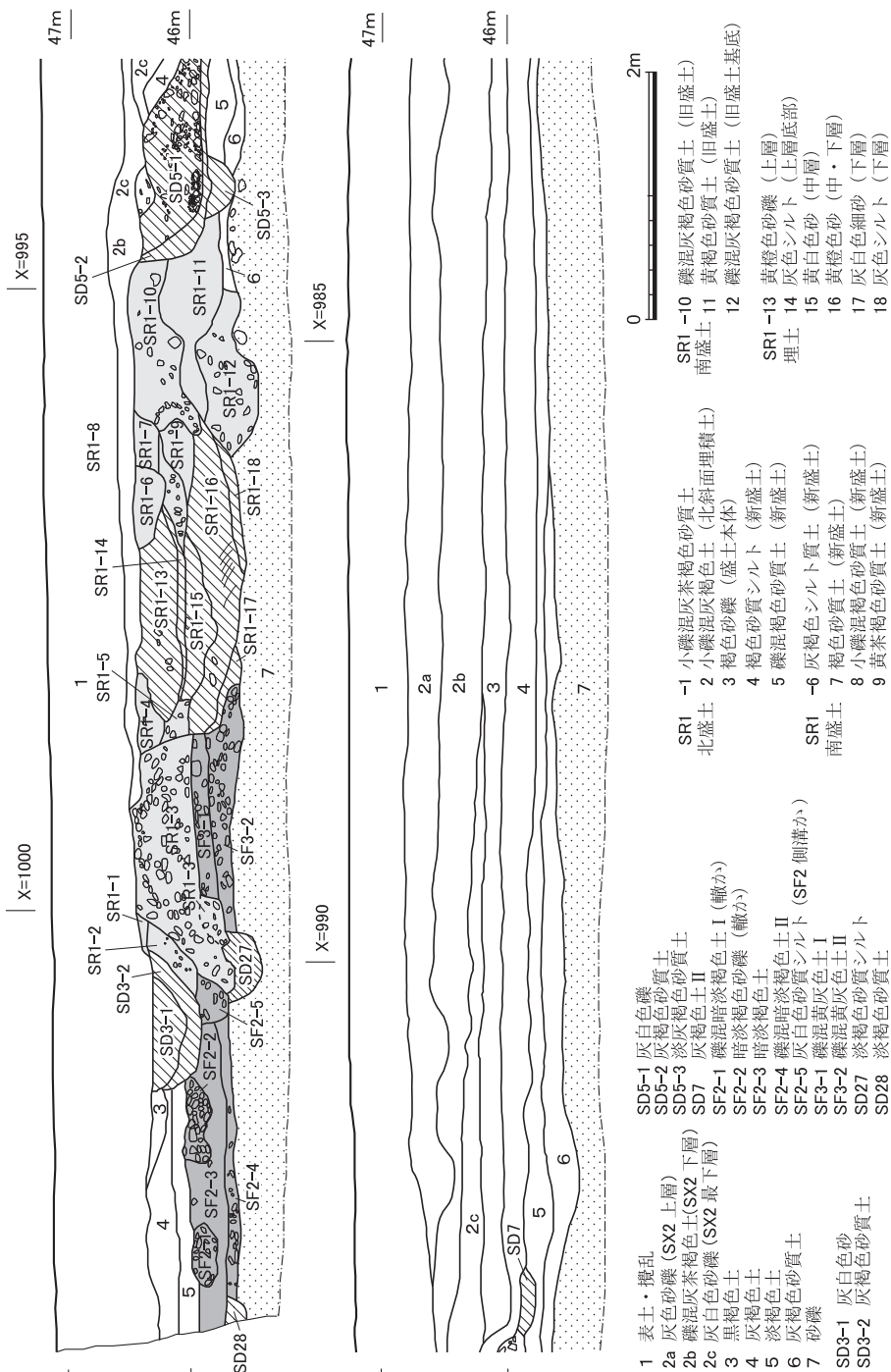


図80 調査区南北畦の層位 縮尺1/60

調査区北辺には、東西方向の水路S R 1及びその南北盛土、東西道路があり、複雑に切り合っているが、おおむね上記の時期に対応させて記述する。

(1) I期の遺構（図版34・35、図81・82）

この時期は、大きく分けて調査区北辺の東西水路S R 1の構築以前と以後に分かれる。

道路S F 3 S R 1構築以前の遺構と確実に言えるのは、S R 1北盛土直下で検出された東西道路S F 3である。この道路は2枚の堅い面からなり、上層検出面の標高は45.9m前後、下層検出面の標高は45.8m前後である。上層の上面S F 3-1は、南側をS R 1に切れ、北側にはS R 1北盛土が落ち込むため、路面の幅は不明である。この部分を1回目として掘削した。

1回目の掘削後、幅1～1.5mで、直径5cm前後の礫を含む東西の石敷面S F 3-2を検出した。これより下部を下層とし、2回目として掘削した。2回目掘削後の標高は45.6m前後である。

S F 3-2の北側、砂礫上面で検出したS D 27は、S F 3-2の北側溝である。検出面の標高は45.7m、その部分での底の標高は45.5mであり、幅50～80cm、深さ20～30cmである。埋土は淡灰褐色の砂質土・シルトである。調査区東半では、軸が真東西よりも若干西南西に傾き、西半では西北西に傾く。西端付近では溝内に礫が埋積していた。

これらの遺構から出土した遺物は少なく、時期を明確に特定できないが、S F 3-1直上の北盛土内遺物の年代が1650～80年頃であり、それよりは古いことは確実である。

道路S F 2 S F 3の北側で検出された、S F 3と平行する道路。S F 2は上層と下層からなり、上層の上面S F 2-1の検出面は淡褐色土掘削後で標高は46.0mである。この面はあまり堅くないが、南寄りに、径5cm前後の礫がぎっしり詰まった轍状の東西石列が存在する。石列検出面の標高は46.0mで、その幅は50cm前後、厚さは20～30cmである。

北寄りにもやや礫の多い轍状の部分が存在するがあまり鮮明ではなく、調査区西寄りでは道路の上に埋積した黄褐色シルトの凹みへとつながる。凹みの検出面の標高は45.9m、底の標高は45.7mである。この黄褐色シルト上面でS F 2-1の北側溝と思われるS D 26が検出された。検出面の標高は45.9m、底の標高は45.8m、幅40～50cmで、埋土は褐色砂である。わずかに軸が西南西に傾いた東西方向の溝で、西端ではわずかに軸が西北西に傾く。東の方は調査区北壁で隠れて不明である。

S F 2-1の南側は後代の溝S D 3に破壊されているが、畔断面ではその南側溝らしき落ち込みがS D 3の下に見えた。

遺 構

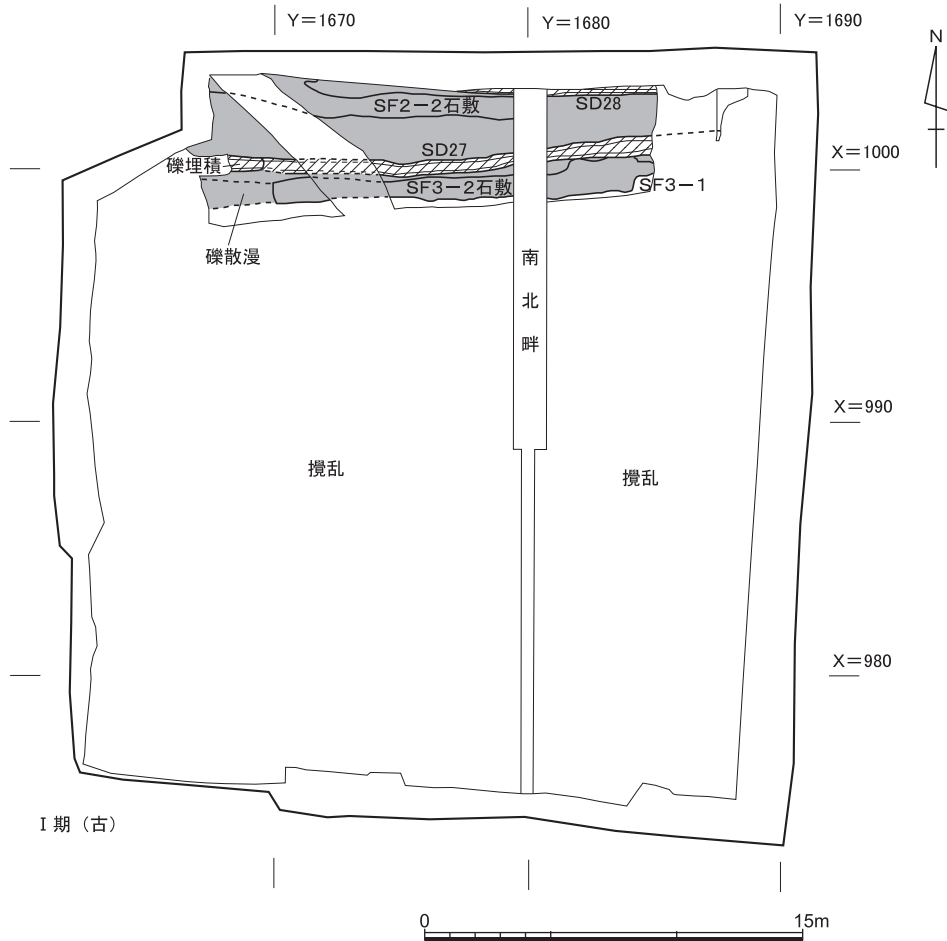


図81 I期(古段階)の遺構 縮尺1/300

S F 2 上層の上半を 1 回目，下半を 2 回目として掘削した。いずれも遺物が多く，1680～1710年頃に編年される。この出土遺物から判断して，S F 2 上層は S F 3 より新しいと判断できる。

上層掘削後，北寄りで幅 1 m 弱位で径 5 cm 前後の磔を主体とする東西石敷を検出した。その上面である S F 2 - 2 検出面の標高は 45.7 m であり，これより下層を 3 回目として掘削した。3 回目掘削後の標高は 45.5～45.7 m である。S F 2 - 2 の北側溝と思われる S D 28 は，検出面の標高 45.7 m，底の標高 45.5 m で，北肩と西の方は調査区北壁に隠れて不明である。埋土は淡灰褐色の砂質土であり，遺物は少ない。S F 2 下層は年代比定のできる遺物に乏しく，S F 3 との先後関係も不明である。

京都大学病院構内A H13区の発掘調査

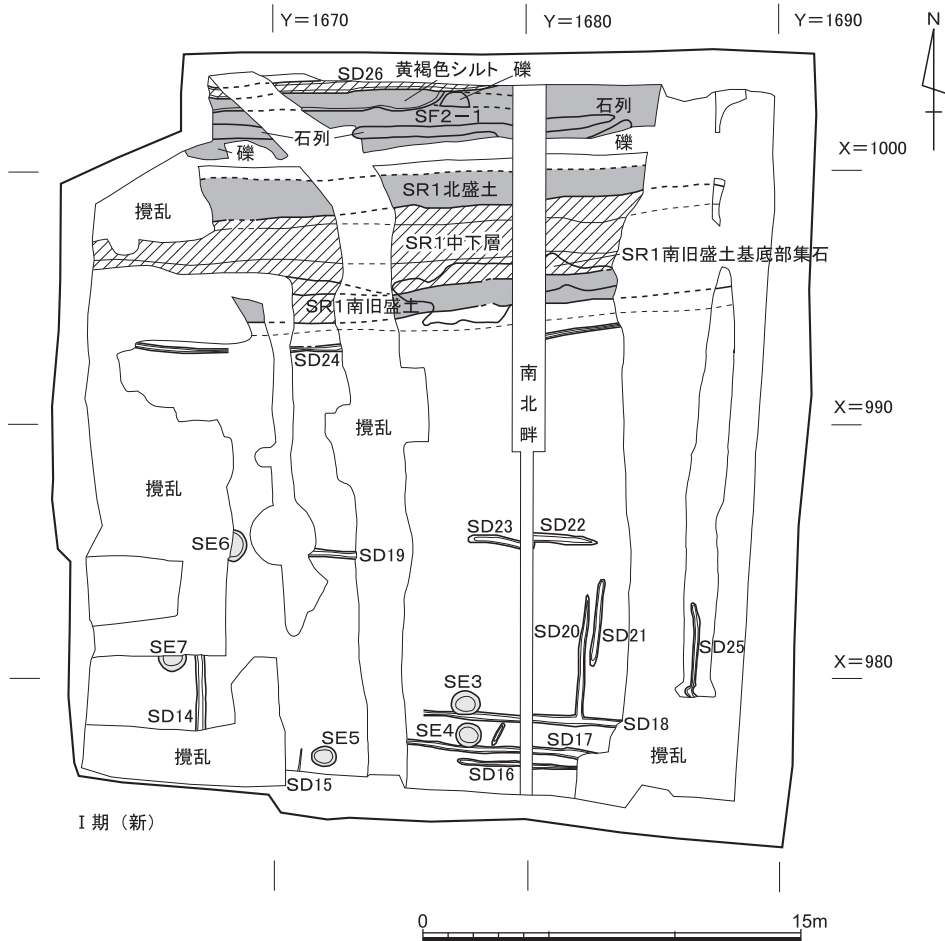


図82 I期（新段階）の遺構 縮尺1/300

水路SR1 調査区北辺でみつかった東西方向に伸びる人工の水路である。水路を引く際、上記の道路のうちSF3を基盤としてその直上に北側の護岸（SR1北盛土）を構築している。この盛土は径10cm前後までの礫を多く含み、断面で層位を区別することが困難であったので、機械的に4回に分けて掘削した。このうち、4回目の掘削部分にあたる黄褐色の砂質土中から、1650～80年頃の遺物が出土しており、この時期が最初の盛土構築時期にあたる可以考虑することができる。この年代は、西に隣接する379地点の盛土基底部集石内の遺物の年代とも整合している〔千葉・長尾2014〕。

一方、水路の南側には、護岸構築の際に基礎となる道路が存在しない。そのため、人為的に地山の灰褐色砂質土および砂礫の一部を標高45.3～45.5m位まで掘り凹めたのち、径

10cmまでの礫を集石として配置し、同様の礫土で覆っている。その上に黄褐色砂質土を埋土とする初期の盛土を構築している。これはおおむね南旧盛土3～4回目として機械的に掘削した部分にあたり、1650～80年頃の遺物が出土している。379地点では、盛土下部として掘削した部分に相当する。

その上部は、径10cmまでの礫を多く含む褐色～灰褐色の砂質土が覆っているが、これは後に補修されたものである可能性もある。南旧盛土2～3回目として機械的に掘削した部分におおむね相当し、2011年度の調査区では盛土上部として掘削した部分である。ここまですべてを南旧盛土とし、これと初期の北盛土で囲まれた部分が、最初期のSR1であり、中層・下層として掘削した部分の一部にあたる。中層と下層は便宜的に分けて掘削したもので、明確な埋土の差はない。

水路の幅は2.5～3m前後、SR1底の標高は45.4～45.6mである。下層の底近くには、北側・南側に灰色シルト・砂質土が約10cm埋積し、水路中央の底直下は高野川の砂礫で、礫にマンガンが沈着し、黒色化している部分がある。灰色シルト・砂質土の上には黄白色、橙白色の砂が堆積しており、畔断面では南に落ちるラミナが見える。その上部では部分的に礫が入り、埋積が乱されている。中層・下層は遺物が少なく埋積の年代を決めることは困難である。なお、SR1の南には、第7層の砂礫の上に、自然によるものと思われる灰褐色砂質土が堆積している。高野川系流路が西へ移動した後も、自然の緩やかな流れが存在した箇所がある。こうした部分に水路を構築した可能性もある。

調査区の大部分では、SR1は、真東西より若干軸が西南西に傾いているが、下層の最下部のみ残っていた調査区西端では真東西になり、2011年度調査区のSR1の若干西北西の傾きに繋がると思われる。

以上記述した道路と水路の先後関係については、まず、SF3があり、その上にSR1盛土が構築されたことにより、道路が北側のSF2-1に移動したと考えるのがわかりやすい。ただし、379地点では、北盛土があったと推定される部分の北側に1620年～50年の遺物を多く含む路面または路盤が見つかっている。SF2-2→SF3→SF2-1という変遷も想定されるが、SF2-2とSF3の先後関係は不明である。いずれにせよ本調査区内では、盛土構築後1680～1710年頃に路面は盛土北側に移動する。

溝SD14～25 SR1南旧盛土の南側、灰褐色砂質土および砂礫上面で検出した。淡褐色土を埋土とする浅い溝である。これらは全体に幅10～30cm、深さ10cm前後で、検出面の標高は45.6～45.8mの間である。方向は、東西または南北方向に近いものが多く、遺物

は少ない。これらは最初期の耕作に伴うものと考えられる。

落ち込みSE3～7 淡褐色土を埋土とする円形の落ち込み。これらは直径1m前後で、検出面の標高は45.6～45.7m、底の標高は45.3～45.6mの間であり、深さは10数cm～40cmである。これらは木枠の腐った野壺か、自然の円形落ち込みか判然としない。

(2) II期の遺構 (図版33, 図83)

水路SR1 この時期になると、まず、SR1南旧盛土の北への拡張がおこなわれる。SR1中層の埋積後、その上に新たに盛土が構築され、水路の幅が縮小される。この新しい盛土を南新盛土として掘削した。盛土上面の標高は畔際で45.6mである。全体的に旧盛土よりも礫が少なく、出土遺物は18世紀のものである。同様に北盛土も少し南に拡張され、SR1の幅は1.2～1.3mとなり、北盛土の幅が広がる。

道路SF1 SR1北盛土上で検出された道路。先述したSF2の上には、淡褐色土が埋積しており、おそらく東西道路が18世紀前半～中頃にSF2から北盛土上のSF1に移行したことに関係してSF2が廃絶したことによると推測できる。

側溝SD3 SF1の北側溝。2011年度調査区のSD9につながると思われる。SD3は径2～3mmの灰白色砂を主体とする上層と、灰褐色砂質土を主体とする下層に分かれるが、このうち淡褐色土上面で北肩を検出した下層がこの時期に機能していた溝である。SD3下層の検出面標高は北肩で46.1mで、底は45.7～45.9mで、北盛土際からの深さは30～40cmである。幅は70～100cmで、埋土に礫は少ない。南肩は、北盛土全体を1回掘り下げた上で、さらに盛土北端を少し下げた箇所を検出した。

この時期以後のSD3とSR1が『山城国吉田村古図』（本学総合博物館蔵）で水色に塗られた水路であり、その間の道路が北盛土上の村境道路SF1である。『山城国吉田村古図』にはSR1の南盛土も緑色で塗られて描かれているが、聖護院村の領域になるためか実際の盛土幅より狭く描かれている。SD3北側の吉田村地区は、耕作地であったと思われる。淡褐色土上面で灰褐色土を埋土とする直径20cm前後、深さ10cm前後のピットが3つ検出されている。調査区北壁際の淡褐色土上面の標高は46.0～46.1mである。

溝SD5 SR1南旧盛土の南際、SR1に沿ってもうけられた溝。SD5は上層・下層・最下層からなる。いずれも西端より東端の標高がやや高い。このうち最下層は淡褐色土上面で検出され、幅20～40cmである。埋土は薄い灰褐色土であり、掘削後の標高は45.6～45.7mである。下層は礫をほとんど含まない灰褐色土を埋土とし掘削後の標高は45.8～45.9mである。その南肩は灰褐色土の包含層に削平されていて幅は不明であるが、

遺 構

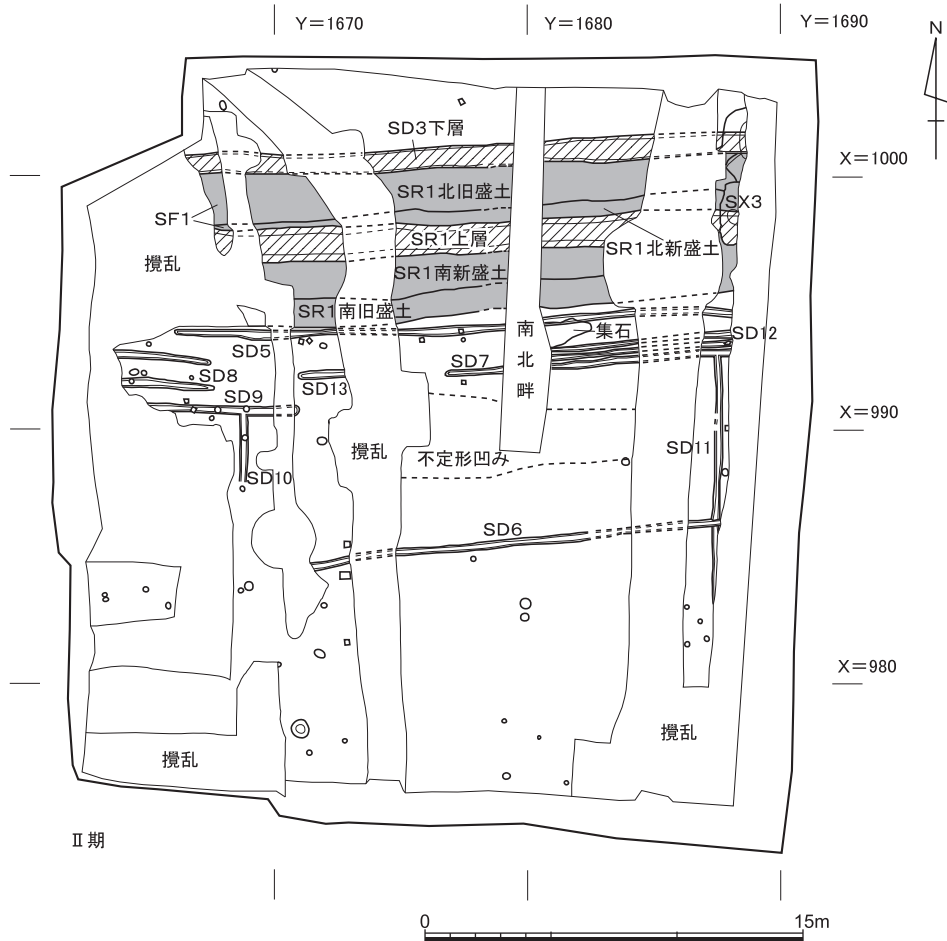


図83 II期の遺構 縮尺1/300

畔断面を見ると1.5m以上はあったと思われる。この下層または最下層が379地点のSD13につながると推定される。379地点では、赤褐色土上面で盛土南際の溝を検出したが、本調査区ではおそらく後代の削平により灰褐色土の下部に赤褐色土は認識できず、その上面での検出はできなかった。

SD5上層は、主に礫からなる。畔断面では、径5~10cmの礫を主に下部に含み、これは畔の東側でも集石として確認でき、人工的に配置した可能性がある。集石の上には径1~2cm位の砂利を含む部分があり、さらに上の部分は径1cm弱の砂利、灰白色砂を主体とし、ときにより大きな礫を含む。集石より上のこれらの埋積は流れにより形成された可能性がある。下層同様、南肩は削平されていて、溝の幅は不明であるが、下層と同じ位の幅

があったと思われる。掘削後の標高は46.0mである。

東西溝群 S D 5のすぐ南でみつかった、S R 1およびS D 5と平行な溝群（S D 7～9・12・13）。淡褐色土上面で検出。これらはS R 1の傾きに沿い、調査区東半で真東西よりやや西南西に軸が傾くが、西端ではやや西北西に傾く。379地点のS D 11・12・14・15と同様の、盛土際の耕作に関する東西溝と考えられる。

このほかに淡褐色土上面では、調査区中央で東西溝S D 6、東辺で南北溝S D 10、西辺で南北溝S D 11を検出した。これらも耕作に関するものと考えられる。これらの溝はいずれも灰褐色土を埋土とし、全体に幅20～40cmで、深さ10cm前後の浅い溝であり、遺物は少ない。検出面の標高は45.7～45.9mである。これら以外に、直径10～40cm、深さ数cm～20数cmの灰褐埋土の円形または方形ピットも散在するが、明確な並びは見られなかった。また、盛土際溝群の南1～2mでは、南北幅2～3mで灰褐色土を埋土とする不定形の浅い落ち込みが多数みつかった。植栽痕跡の可能性が考えられる。

S X 3 調査区北東で検出したS R 1の南北に広がる不定形の遺構である。この遺構は、S R 1中層に当たる部分の砂除去後に検出され、その検出面の標高は水路内で45.7m、北肩では46.2mである。底の標高は45.6mである。黒灰色の土と19世紀前半頃の遺物をやや多く含む。S X 3北部の下では灰褐色及び褐色の土と黄白色砂を含む埋土により北盛土とS F 2・3が大幅に壊されている。またS X 3南部付近では、南盛土も大きく破壊されていて、新旧盛土が区別できない。これらのことから考えて、S X 3の埋土は、19世紀のS R 1廃絶までの期間に水路とその南北盛土を補修した土である可能性がある。

(3) III期（古段階）の遺構（図版33・35、図84）

溝S D 3 この時期までにはS F 1北側溝のS D 3下層は埋まり、その北側には灰褐色土及び黒褐色土が埋積する。調査区北壁際での灰褐色土上面の標高は46.1～46.3m位である。灰褐色土上面は調査区北西で北へ向かってわずかに下がり、その上に黒褐色土が埋積しているが、畔断面を含む調査区北東ではS D 3の北側で灰褐上面が凹んで、その上に黒褐色土が埋積している部分がある。これらの黒褐色土または灰褐色土上面でS D 3上層が検出された。検出面の標高は46.4mで、その場所での底の標高は46.1mである。全体に、深さ20～30cm、幅80～110cm位である。この溝もまもなく灰白色砂で埋まり、機能しなくなる。埋土内の遺物はあまり多くない。

水路S R 1 S F 1南のS R 1は、19世紀半ばの洪水により一気に廃絶される。このS R 1の最終的な埋積を含む最終段階の水路の埋土をS R 1上層として掘削した。S R 1

遺 構

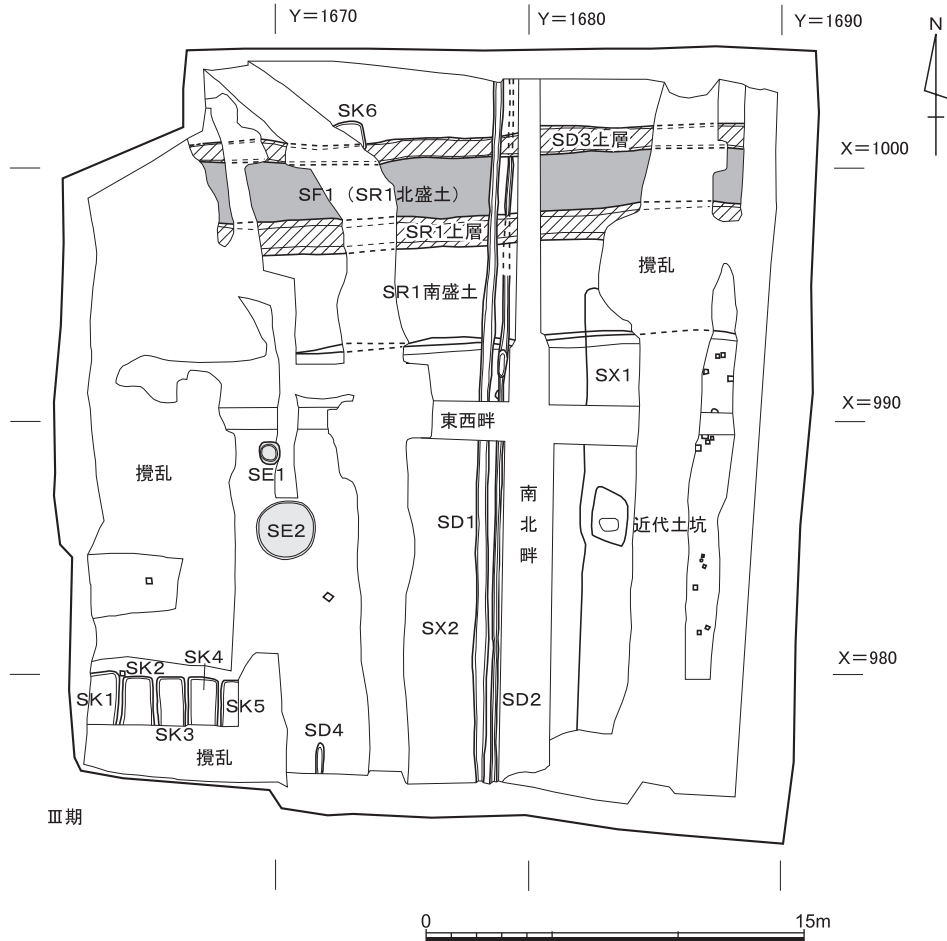


図84 III期の遺構 縮尺1/300

上層の大半には、径5cm大の礫を主体とした礫混じりの黄橙白色砂が埋積し、その上半20cm位の厚さの部分に大量の遺物を含む。下半は比較的遺物が少ない。おおむね2011年度調査区でSR1上部として掘削した部分がこの上半に、SR1下部として掘削した部分が下半にあたる。畔断面で見ると、この砂礫は、南新盛土と北盛土の追加部分の、土質が変化するそれぞれ中間を挟っており、洪水の激しさをうかがわせる。この砂礫を除去したSR1上層の底付近に、灰色～灰褐色のシルトが厚さ5cmほど埋積している。上層の砂検出面の標高は46.4m、底の標高は46.0m位である。SR1上層とSD3上層の廃絶の先後関係はわからないが、埋積状況が異なり、同時に廃絶したものではなさそうである。

SD3・SR1が機能していた間に盛土の南には黒褐色土が埋積したと考えられる。黒

褐色土の埋土中には、1～数cmの黄色または黄橙色の小ブロックが入る部分が多く、埋土中の遺物は灰褐色土よりも多い。調査区の中央では黒褐色土を埋土とする遺構はまったく見られず、東辺と西辺にわずかな遺構が見られる程度である。このうち、調査区南端のSD 4は、深さ10数cm、幅20～30cmの南北溝であり、検出面の標高は46.0m、底の標高は45.9mである。

整地土 SX 2 SX 2は、調査区中央付近から南にかけて黒褐色土の上に埋積した、幕末の遺物を含む分厚い土混じりの砂礫（第2層）である。表土除去後に検出し、その検出面の標高は46.8m、黒褐色土上面での底の標高は46.1mである。分布範囲は、調査区東半と西半のそれぞれ南北を貫く攪乱の間で、SR 1北盛土付近より南である。

SX 2は、上層、下層、最下層に分かれる。上層の灰色砂礫（第2 a層）は、SR 1南盛土の上付近から南にかけて分布する。約20～30cmの厚さで、径2～10cm位の礫を多く含む。下層（第2 b層）は、SR 1北盛土から南にかけて分布し、5cm大位までの礫混じりの灰茶褐色土を埋土とする。最下層（第2 c層）は、おもに灰白色の砂利層で、SD 5上層の上に部分的に見え、おもにSR 1南旧盛土際から南に分布する。厚さは旧盛土際で20数cmで、南へ行くほど薄くなり、X=990ラインの少し南で消滅する。最下層の砂はSR 1上層の砂と類似しており、SR 1の洪水がその南盛土を越えて溢れ出て埋積した自然堆積と推定できる。一方、上層・下層は、砂礫や土の埋積状況が不均一で自然によるものとは考えられず、洪水の後にこの付近全体をSR 1盛土と同じ位の高さにするための整地土であると推定できる。SX 2の最上部付近からは使用済みの銃弾が出土しており、埋土に明治期以降の遺物を含まないことなどから判断して、幕末にこの地に設置された練兵場に関する整地土の可能性が高い、と理解している。

溝SD 1・SD 2 南北畔西のSX 2最下層及び黒褐色土上面で検出した、底がコの字状になるしっかりした南北溝である。真南北よりもわずかに軸が北北東に傾き、出土遺物は幕末である。東西畔の断面で見るとその埋土はSX 2下層と同様であり、これらの溝は、SR 1及びその南北盛土を切り、本調査区を南北に縦断する。このことから、SR 1廃絶後に作られ比較的短期間で埋められた溝であると考えられ、幕末～明治初期の練兵場との関係が推測される。

SD 1は幅40～50cm、SD 2は幅20～30cmである。SD 1検出面の標高は、南盛土上面で46.5m、その部分での底の標高は45.9mであり、調査区南端での底の標高とあまりかわらない。調査区北端での底の標高は46.0mである。

S D 2 検出面の標高は南盛土上面で46.4m, その部分での底の標高は46.1m, 調査区南端では45.9mである。位置的にS D 1は, 2011年度調査区のS D 24, 2008年度調査区のS D 14につながり, かなり長い南北溝になると推定される。

集石S X 1 南北畔より東でS X 2の上層を切り, 南北に長く分布する集石である。多くの幕末の遺物を間に含み, その北半は拳大の礫と大きめの遺物, 南半はそれよりもやや小さい礫・遺物と土からなる。東端は攪乱に切られており東西幅は不明であるが, 1.5~2m以上である。北端は不鮮明であるが, S R 1より手前までであり, 南端は攪乱に切られて不明である。検出面は表土除去後であり, 検出面の標高は47.0m, 厚さは約40cmである。これも整地に関わる集石である可能性がある。

(4) III期(新段階)の遺構(図版33・35, 図84・85)

井戸S E 1 調査区西半の黒褐色土上面で掘方を検出した瓦組の井戸。掘方検出面の標高は, 46.0mである。井筒は直径70cmで, 縦30cm弱, 横25cm前後, 厚さ2~3cmの井戸瓦を段ごとに互い違いに組み合わせて構築されていた。下から3段目までは完全な形で残存し, 4段目の瓦の下部が南西の一部で残存していた。井筒の下に木桶は現存していなかったが, 水溜があり, 円形の木桶が存在していたことが推定される。底の標高は44.4mである。埋土には上部から下部までレンガが多量に含まれており, 廃絶は明治以降であるが, 掘方には遺物が含まれず, その製作年代は不明である。

野壺S E 2 S E 1の南にある黒褐色土上面で検出した直径2.2m位の漆喰の野壺であり, 漆喰の上部は破壊されていた。漆喰の厚さは底で5cm位, 側面で10cm前後であり, 底部までレンガが埋積していた。掘方は見つからなかったため製作年代は不明である。検

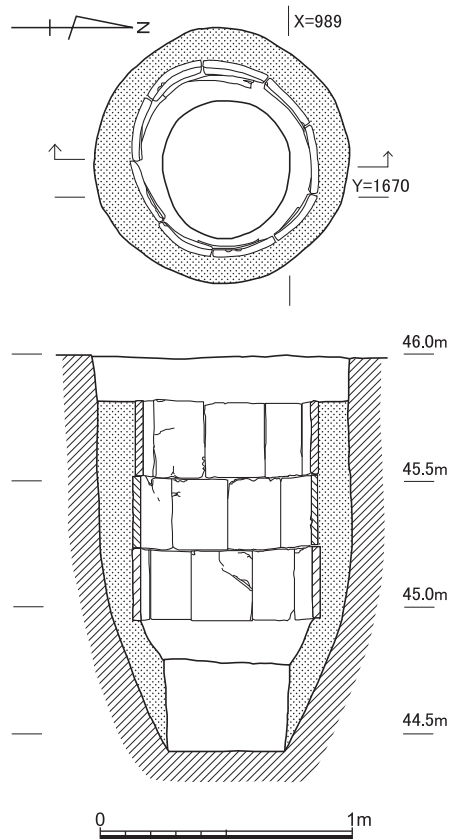


図85 井戸S E 1 縮尺1/30

出面の標高は46.1m、底部の標高は漆喰の上で45.6mである。SE1・2は対になって使用されたものかもしれない。

方形土坑SK1～5 調査区南西隅で確認された、礫混じりの黒褐色土を埋土とする方形土坑の並び。これらの土坑は灰褐色土上面で検出され、検出面の標高は、45.9m、底の標高は45.6～45.7mであり、深さ20～30cm、東西1m強、南北2m以上である。南端は攪乱で切られている。SK2からはレンガ、ガラスが、SK4・5からは近代の陶磁器が出土しており、明治以降に埋められた遺構と考えられる。これらの土坑群の上の黒褐色土からは1厘銭が出土しており、実際の掘り込み面は認識できた検出面よりも高かった可能性がある。北肩は、真東西よりもやや西北西に軸が傾いて並んでいる。位置的に379地点のSK33～39と並ぶ可能性が高い。

方形土坑SK6 調査区北西で検出された、黒褐色土を埋土とする東西幅1.2m以上、南北幅1.1m以上の方形土坑。検出面はSD3下層上面で、その標高は46.1mであり、底の標高は45.8mである。明確な近代以降の遺物は見つかっておらず、並びの土坑も確認されていないため、上記の土坑群と同時期のものかは不明である。本調査区内ではこれらの土坑より東では類似の方形土坑は見つかっていない。

近代土坑 調査区南東寄りの集石SX1上面で検出した一辺1～2mの土坑。近代の陶磁器を大量に含む。検出面の標高は46.9m。この土坑はレンガ・ガラスを含むが、大学病院関係の遺物は含まず、大学以前の廃棄土坑と推定される。底の標高は45.5mで、第7層の砂礫にまで達している。

4 出土遺物

SF2出土遺物(Ⅲ1～Ⅲ127) SF2は3回に分けて掘削し、遺物を取り上げをおこなったが、3回目の掘削では遺物は僅少で、年代比定のできるものはなかった。ここに掲げた遺物は、1回目と2回目の掘削で出土した遺物、すなわちSF2上層に関するものである。

Ⅲ1～Ⅲ84は淡橙～橙褐色を呈する土師器皿。Ⅲ1～Ⅲ4は見込みに圈線をもたないタイプで、口径6.5～8.5cm。Ⅲ5～Ⅲ84は見込みに圈線をもつタイプ。圈線は、凹線状を呈して不明瞭になるものもあるが、おおむね境界の明瞭な凹線として引かれているものが多い。口径は小は9.5cm(Ⅲ5)、大は16.5cmをはかるが、12～14cm台のものが主体を占めている。Ⅲ59・Ⅲ79は口縁端部にすずが付着する。これらの土師器は、17世紀後葉～18世紀

出土遺物

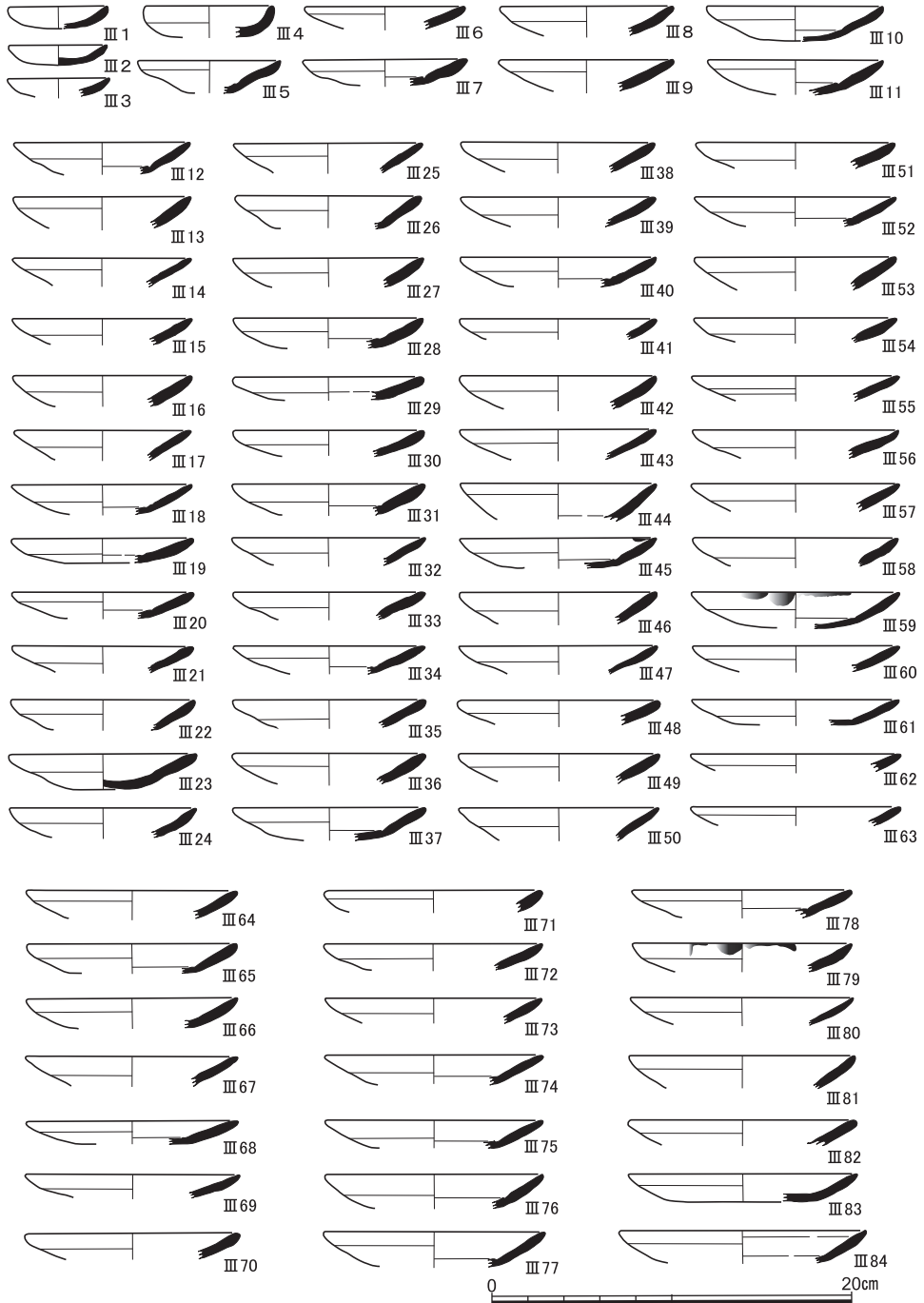


図86 SF 2 出土遺物(1) (III 1 ~ III 84土師器)

京都大学病院構内A H13区の発掘調査

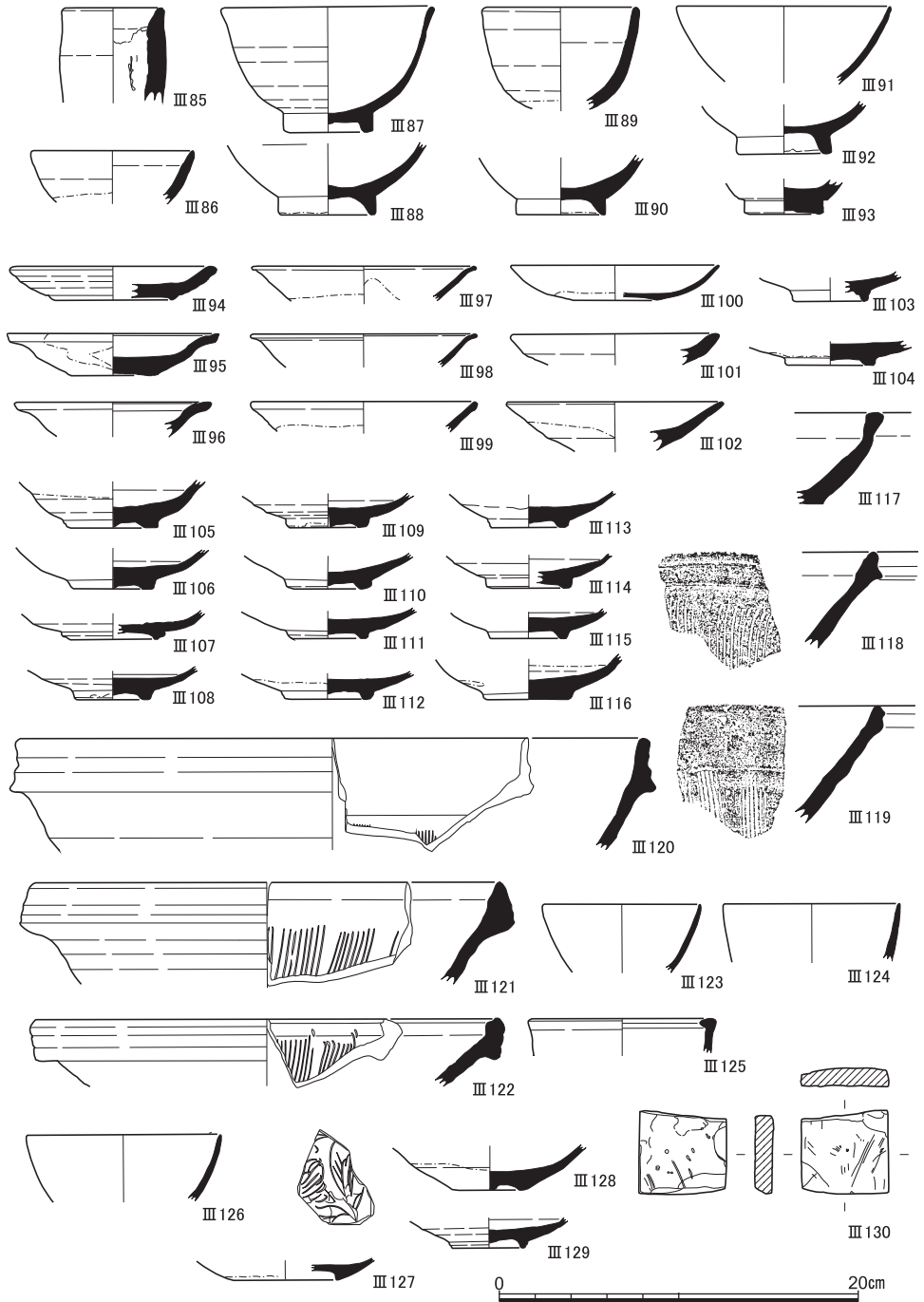


図87 S F 2 出土遺物(2) (III 85土師器, III 86~III 124陶器, III 125~III 127磁器), S D 26出土遺物 (III 128・III 129陶器, III 130砥石)

出土遺物

初頭ごろに編年できる。

Ⅲ85は土師器焼塩壺の身。口径5.4cm。粘土板を巻き付けて成形した痕跡が内面に残る。外面から口縁端部内面までは撫でて仕上げている。

Ⅲ86～Ⅲ93は陶器椀。Ⅲ87は全面に施釉し高台に目跡を残す。Ⅲ88・Ⅲ90・Ⅲ92は高台畳付のみ無釉としている。Ⅲ89は高台回りの除いて、内外面に鉄釉を施している。Ⅲ93は天目椀の底部。

Ⅲ94～Ⅲ116は陶器皿。Ⅲ95は底部を回転糸切りし、見込みと底部に砂目の目跡を残している。Ⅲ100は底部外面を除いて、鉄釉を施している。Ⅲ102～Ⅲ116は唐津焼であり、見込みや高台に砂目の目跡を残している。

Ⅲ117は無釉焼締陶器の鉢。Ⅲ118～Ⅲ122は陶器すり鉢。Ⅲ123・Ⅲ124は磁器染付の椀。Ⅲ125は青磁香炉。Ⅲ126は白磁椀。Ⅲ127は白磁皿で、見込みに、線彫りによる草花文をもつ。

S D 26出土遺物(Ⅲ128～Ⅲ130) Ⅲ128・Ⅲ129は陶器椀ないしは皿。Ⅲ128は見込み、Ⅲ129は見込みおよび高台に砂目をもつ唐津焼。Ⅲ130は砥石。

S F 3 出土遺物(Ⅲ131～Ⅲ140) Ⅲ131・Ⅲ132は土師器皿で、Ⅲ132は見込みに、体部側の境が不明瞭な圏線がめぐっている。Ⅲ133は天目椀の底部。Ⅲ134～Ⅲ136は陶器椀で、Ⅲ135・Ⅲ136は唐津焼。Ⅲ137は内面無釉、外面に鉄釉を施す陶器で、高台の3カ所に半円形のくり込みをいれている。Ⅲ138は陶器乗燭。底部外面を除いて鉛釉を施釉する。Ⅲ139は陶器瓶の口縁部。Ⅲ140は陶器皿。見込みに鉄釉で文様を施す唐津焼。

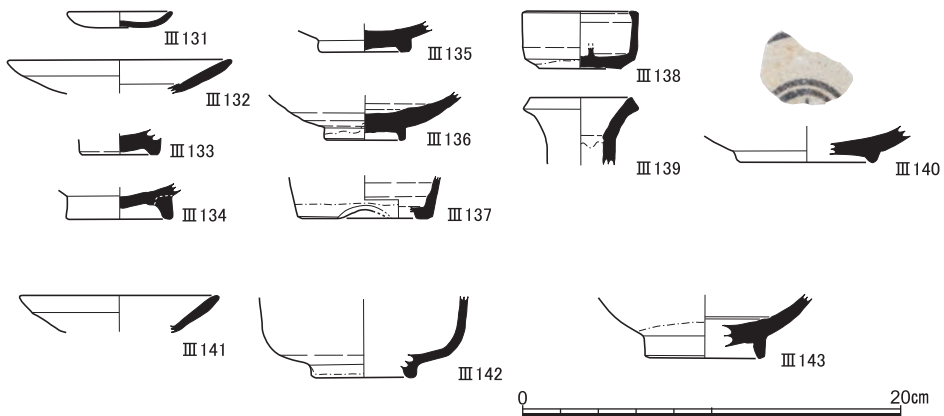


図88 S F 3 出土遺物(Ⅲ131・Ⅲ132土師器, Ⅲ133～Ⅲ140陶器), S E 6 出土遺物(Ⅲ141土師器, Ⅲ142陶器), S E 7 出土遺物(Ⅲ143白磁)

SE6 出土遺物 (Ⅲ141・Ⅲ142) Ⅲ141は土師器皿。内面底部と体部の境が強い撫でによって凹線状を呈している。Ⅲ142は陶器椀か。

SE7 出土遺物 (Ⅲ143) Ⅲ143は白磁椀の底部。見込みに圈線がめぐる。

SR1 北盛土出土遺物 (Ⅲ144～Ⅲ182) SR1の北側の盛土(護岸)は、礫土からなり層位の区別が困難であったので、機械的に4回に分けて掘削し遺物を取り上げた。また、肩部の堆積は北肩盛土(新盛土)として区別した。ここでは、上記の北盛土から出土した遺物を一括して提示するが、4回目の掘削にあたる最下部からは17世紀後半に比定できる遺物が出土し、1回目・2回目あるいは新盛土から19世紀前半代に下る遺物が出土しているので、出土層位を記しつつ解説する。

Ⅲ144・Ⅲ145は土師器皿。Ⅲ144は見込みに凹線状の圈線がめぐっている。Ⅲ145は体部がやや外反気味に立ち上がり、圈線部分で欠損している。Ⅲ144は掘削4回目、Ⅲ145は3回目の出土。

Ⅲ146～Ⅲ151は陶器の椀ないし皿。Ⅲ146～Ⅲ150は唐津焼で、Ⅲ146は見込みに胎土目、それ以外は砂目の痕跡を残す。Ⅲ146・Ⅲ148・Ⅲ151は掘削4回目、Ⅲ147・Ⅲ150は3回目出土。

Ⅲ152～Ⅲ154は陶器灯明受皿。いずれも掘削1回目の出土。Ⅲ155～Ⅲ160は陶器蓋。Ⅲ155はいっちゃん描きで施文する。Ⅲ157は外面白化粧の後に、鉄釉で文様を描く。Ⅲ155が掘削1回目、Ⅲ156・Ⅲ157・Ⅲ160が2回目、Ⅲ159が3回目の出土。Ⅲ158は北肩盛土(新盛土)出土である。

Ⅲ161～Ⅲ164は陶器すり鉢。Ⅲ161は北肩盛土、Ⅲ162は3回目、Ⅲ163・Ⅲ164は4回目出土。Ⅲ165・Ⅲ166は陶器鉢。Ⅲ165は灰釉、Ⅲ166は黒釉を施す。ともに3回目出土。

Ⅲ167～Ⅲ178は磁器染付。Ⅲ167～176は椀。Ⅲ171は線描きによる文様をもつ。焼継している。Ⅲ172はコンニャク判。Ⅲ174は広東椀。Ⅲ175は底裏に「福」、見込みに「□明成□年製」の銘をもつ。Ⅲ167・Ⅲ168は4回目、Ⅲ169・Ⅲ172・Ⅲ173・Ⅲ176は1回目、Ⅲ170・Ⅲ171・Ⅲ174は2回目、Ⅲ175は3回目出土。Ⅲ177は皿。見込みに、山水楼阁文を描く。2回目出土。Ⅲ178は蓋。1回目出土。

Ⅲ179は白磁椀。2回目出土。Ⅲ180・Ⅲ181は青磁椀の底部。Ⅲ180は2回目、Ⅲ181は4回目出土。Ⅲ182は砥石。北肩盛土出土。

SR1 南旧盛土出土遺物 (Ⅲ183～Ⅲ199) SR1南側の盛土は、旧盛土と新盛土が区別される。新盛土は、SR1中層が埋積したのち、新たに構築された盛土である。旧盛

出土遺物

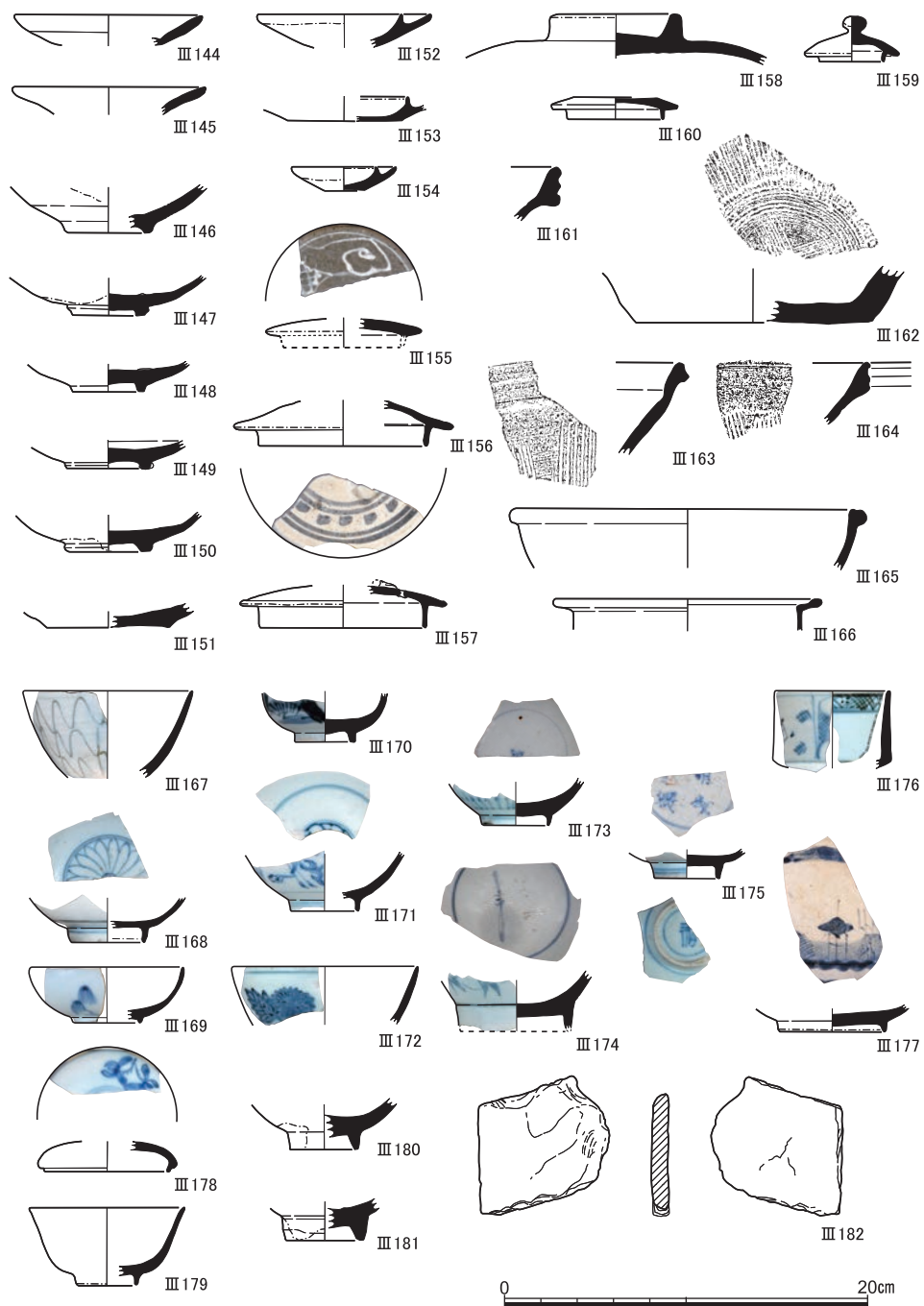


图89 S R 1 北盛土出土遺物 (III 144· III 145土師器, III 146~ III 166陶器, III 167~ III 181磁器, III 182砭石)

土は、初期の盛土で4回に分けて掘削し、さらに最下部は基底部として別に遺物を取り上げている。上部の盛土（1～3回目）は後の補修の可能性もあるので、出土層位を列記しつつ解説する。

Ⅲ183～Ⅲ185は土師器皿。Ⅲ185は見込みに凹線状の圏線がめぐる。Ⅲ184は口縁端部に煤が付着する。Ⅲ183・Ⅲ184が3回目、Ⅲ185が4回目出土。

Ⅲ186は陶器天目椀。3回目出土。Ⅲ187・Ⅲ188は陶器の椀ないし皿。Ⅲ187は見込みを蛇の目釉はぎしている。Ⅲ188は唐津焼で、見込みと高台に砂目の目跡をもつ。いずれも、3回目出土。Ⅲ189は陶器灯明皿。1回目出土。

Ⅲ190～Ⅲ192は、陶器すり鉢。Ⅲ190は基底部、Ⅲ191は4回目、Ⅲ192は2回目出土。Ⅲ193は陶器壺。2回目出土。Ⅲ194は陶器水指。口径18cm、体部の2カ所に段をもつ。口縁内面に蓋受けの突出がつく。口辺部には鉄絵を施している。3回目出土。Ⅲ195は陶器壺。口縁部が内外に肥厚し1条の沈線がめぐっている。外面に鉄釉を施す。基底部出土。

Ⅲ196は舶載の磁器染付。基底部出土。Ⅲ197は磁器染付皿。3回目出土。Ⅲ198は白磁椀。2回目出土。Ⅲ199は青磁皿。3回目出土。

S R 1 南新盛土出土遺物（Ⅲ200～Ⅲ218） Ⅲ200は見込みに圏線をもつ土師器皿。Ⅲ201は土師器焼塩壺の身。Ⅲ202は土師器焙烙。口縁部が内湾する形態。体部は外型作りで、口縁部から内面にかけて撫で調整を施す。

Ⅲ203～Ⅲ205は陶器椀。Ⅲ203・Ⅲ205は唐津焼で、Ⅲ203は白化粧土による刷毛目文を内外面に施文している。Ⅲ207～Ⅲ209は陶器灯明受皿。Ⅲ210は陶器蓋。Ⅲ211は陶器すり鉢。Ⅲ212は陶器鉢。飴釉を内外面に施している。

Ⅲ213～Ⅲ217は磁器染付椀。Ⅲ213の文様はコンニャク判による。Ⅲ216・Ⅲ217はいわゆる、くらわんか椀である。Ⅲ216は青磁香炉。脚がつくが、接地しない。

S R 1 埋土出土遺物（Ⅲ219～Ⅲ304） S R 1の埋土から出土した遺物は、おもに上・中・下の3層に区分して取り上げた。これら以外に、S R 1埋土とS R 1盛土（護岸）との境界付近から出土し、帰属がはっきりしないものについて、「肩際」として取り上げた遺物が若干量存在する。下層出土遺物には、17世紀にまで遡るものが認められるが、上層から出土した遺物は19世紀中葉頃のもの为主体を占めている。ただし、明治期に下る遺物は含まない。

Ⅲ219～Ⅲ226はS R 1下層から出土した遺物。Ⅲ219は土師器小皿。Ⅲ220は陶器は椀。Ⅲ221は焼締陶器。Ⅲ222は陶器すり鉢。Ⅲ223は磁器染付。Ⅲ224～Ⅲ226は白磁で、Ⅲ224

出土遺物

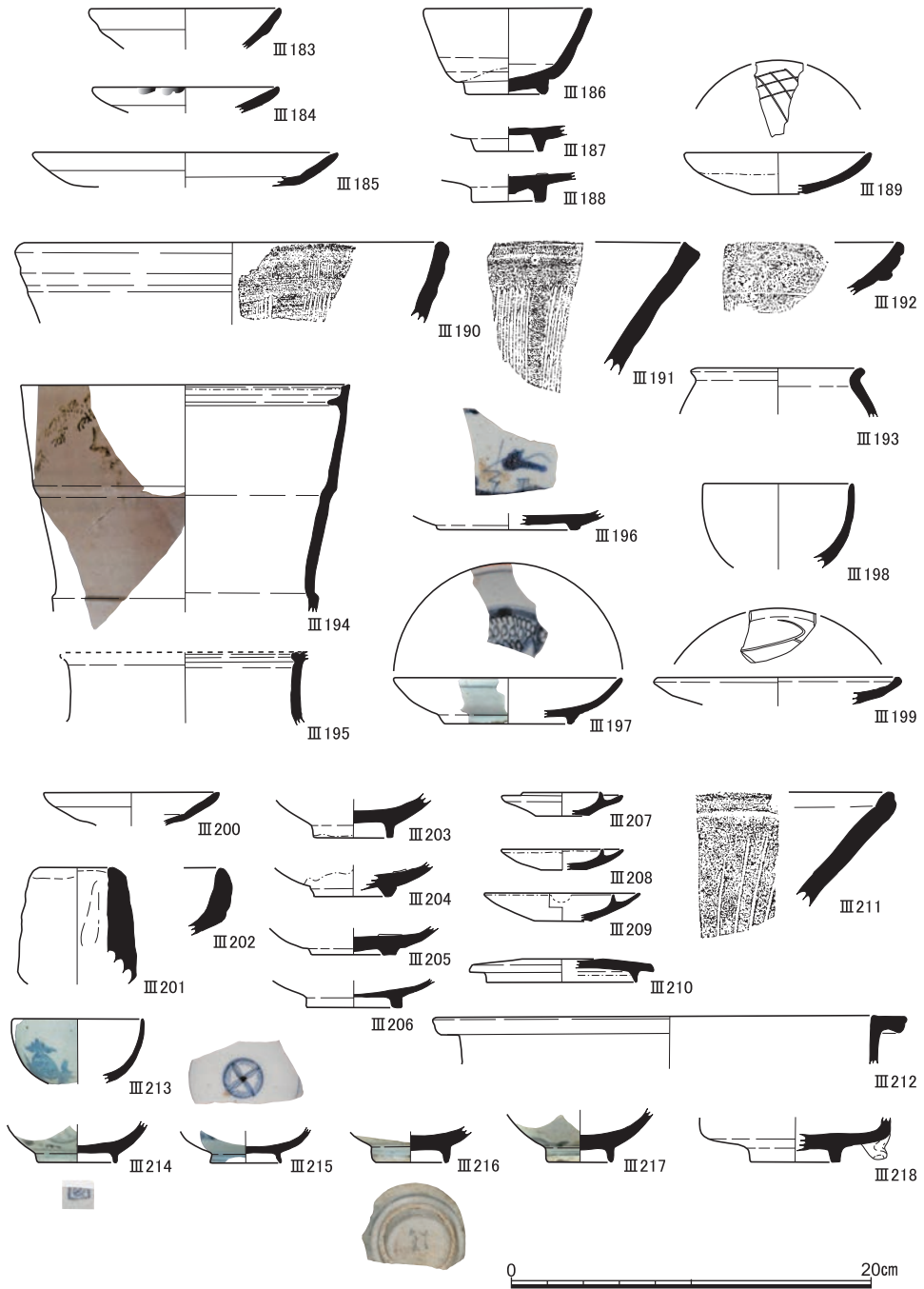


图90 S R 1 南旧盛土出土遺物 (III 183~III 185土師器, III 186~III 195陶器, III 196~III 199磁器), S R 1 南旧盛土出土遺物 (III 200~III 202土師器, III 203~III 212陶器, III 213~III 218磁器)

京都大学病院構内A H13区の発掘調査

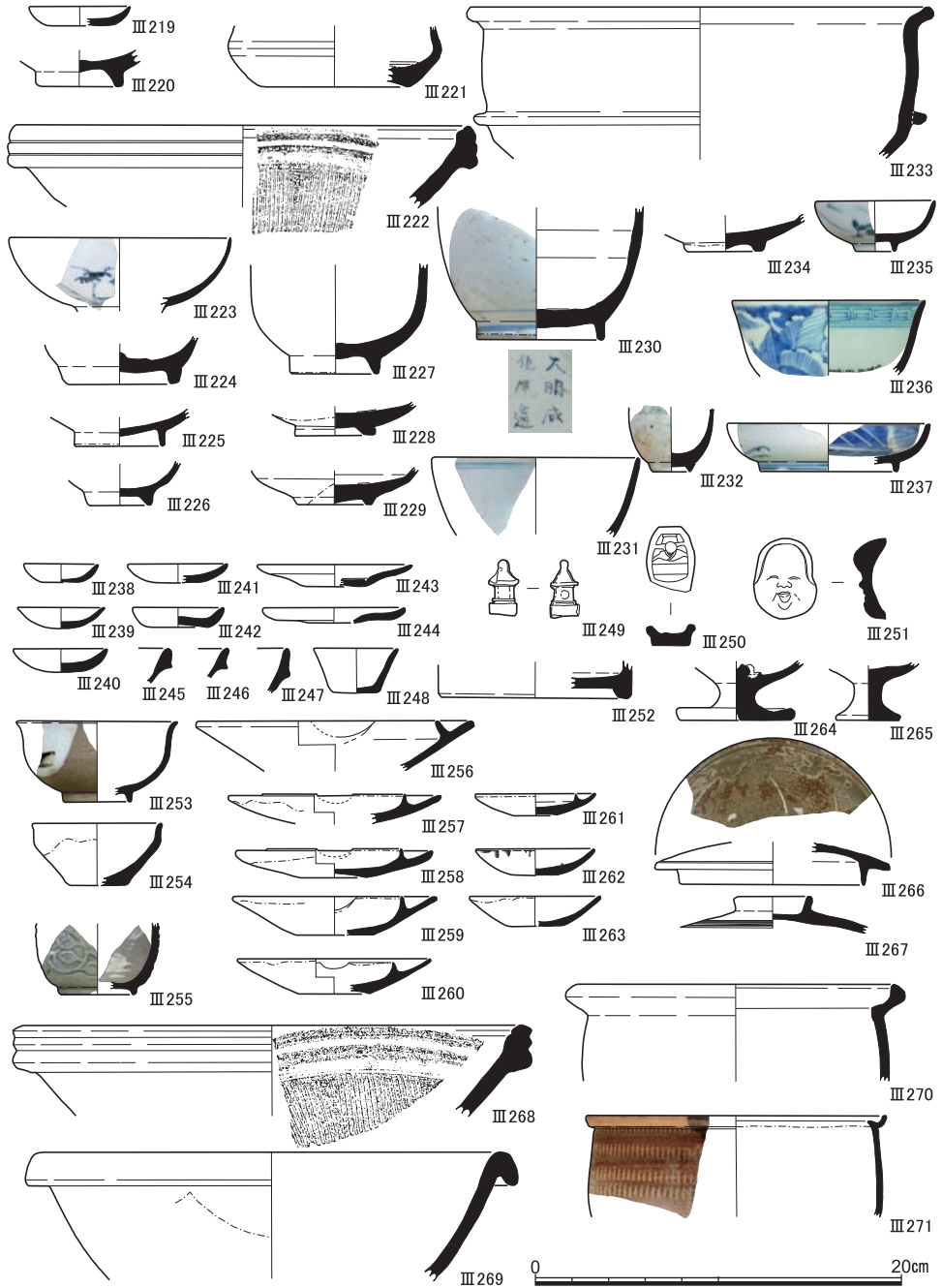


図91 S R 1 埋土出土遺物(1) (III 219・III 238～III 248・III 233土師器, III 220～III 222・III 227～III 229・III 252～III 271陶器, III 223～III 226・III 230～III 237磁器, III 238～III 248土師器, III 249～III 251土製品, III 252～III 271陶器)

出土遺物

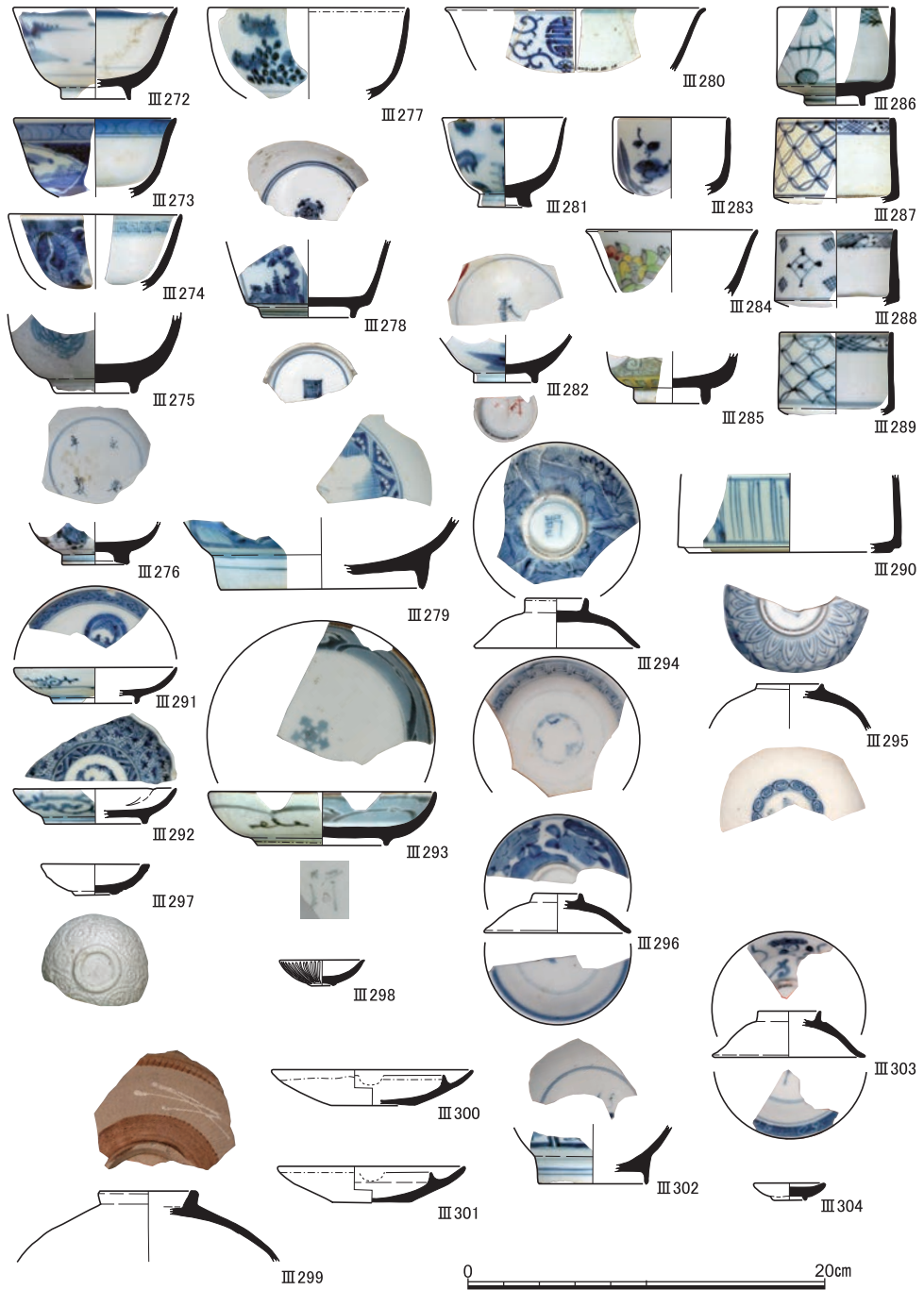


図92 S R 1 埋土出土遺物(2) (III 272~III 298・III 302~III 304磁器, III 299~III 301陶器)

は瓶、Ⅲ225・226は椀の底部。

Ⅲ227～Ⅲ232はS R 1 中層から出土した遺物。Ⅲ227～Ⅲ229は陶器椀。Ⅲ227は呉器手の椀、Ⅲ228・Ⅲ229は唐津焼で、見込み、高台に砂目の目跡をもつ。Ⅲ230～Ⅲ232は磁器染付。Ⅲ230は瓶で底裏に「大明成化年製」の銘をもつ。Ⅲ231は椀、Ⅲ232は小椀ないしは小瓶の類であろう。

Ⅲ233～Ⅲ237はS R 1 の北肩際から出土した遺物。Ⅲ233は球胴の体部に鏝がつく土釜。口縁部が外側へ折れる。外面に、煤が厚く付着する。Ⅲ234は陶器椀。唐津焼。Ⅲ235～Ⅲ237は磁器染付で、Ⅲ235は盃、Ⅲ236は椀、Ⅲ237は皿である。

Ⅲ238～Ⅲ298はS R 1 上層出土。Ⅲ238～Ⅲ244は土師器皿。Ⅲ238・Ⅲ239は内面に、離型材の雲母が残る。Ⅲ243・Ⅲ244は見込みに圈線をもつ。器壁が3mmと薄く、体部が外反する。Ⅲ245～Ⅲ247は土師器焙烙。Ⅲ248は土師器の小型鉢。Ⅲ249・Ⅲ250は玩具。Ⅲ249は土師器のお堂で、型作り。対角線で二等分し、同じ型から2個抜いて接合して成形している。Ⅲ250は軟質施釉陶器の舟に乗る人物。緑釉と透明釉を施す。Ⅲ251は、泥メンコでお多福をかたどった芥子面である。髪の毛部分を彩色している。Ⅲ252は軟質施釉陶器。

Ⅲ253～Ⅲ255は陶器椀。Ⅲ253は内面白化粧、外面も一部白化粧し鉄絵を施す。Ⅲ254は天目釉を掛けている。Ⅲ255は型を用いて、外面に草花文を陽刻している。Ⅲ256～Ⅲ261は陶器灯明受皿、Ⅲ262・Ⅲ263は陶器灯明皿。Ⅲ264は陶器秉燭。底部は回転糸切成形、底面を除いて鉄釉を施す。Ⅲ265は陶器仏飯。底部回転糸切成形。Ⅲ266・Ⅲ267は陶器蓋。Ⅲ266は土瓶、Ⅲ267は鍋の蓋である。Ⅲ268は堺・明石系の陶器すり鉢。Ⅲ269は陶器鉢。Ⅲ270・Ⅲ271は陶器鍋。

Ⅲ272～Ⅲ283・Ⅲ286～Ⅲ289は磁器染付の椀。Ⅲ272・Ⅲ273・Ⅲ280は口縁部端反りとなり、Ⅲ281は口鏽とする。Ⅲ280には焼継がみられる。Ⅲ275の文様はコンニャク印判による。Ⅲ276は見込みに「永楽年製」の銘をもつ。Ⅲ279は蛇ノ目凹形高台である。Ⅲ284・Ⅲ285は磁器色絵の椀。

Ⅲ290は磁器染付段重。Ⅲ291～Ⅲ293は磁器染付皿。Ⅲ292は口縁部を輪花とし、Ⅲ293は口鏽としている。Ⅲ294～Ⅲ296は磁器染付の蓋。Ⅲ294・Ⅲ295は線描きにより、Ⅲ296は線彫りで文様を描いた後、濃みをもちいて、文様を描いている。Ⅲ297・Ⅲ298は白磁紅皿。Ⅲ297は型を用いて蛸唐草文を陽刻している。

Ⅲ299～Ⅲ304はS R 1 上面清掃時に出土した遺物。Ⅲ299は陶器鍋蓋。Ⅲ300・Ⅲ301は陶器灯明受皿。Ⅲ302は磁器染付の広東椀。Ⅲ303は磁器染付の蓋。Ⅲ304は白磁で、口径

出土遺物

4 cm, 器高0.5cmをはかる小型の皿。

S D 3 下層出土遺物(Ⅲ305～Ⅲ333) Ⅲ305は土師器皿。口縁端部に、煤が付着する。Ⅲ306は伏見人形の牛。Ⅲ307～Ⅲ310は陶器椀。Ⅲ307は見込みを蛇ノ目釉剥ぎしている。Ⅲ308は胴下部が屈曲する腰折れ形。Ⅲ309は唐津焼で、見込みと高台に砂目の目跡をもつ。Ⅲ311は陶器灯明受皿。Ⅲ312は陶器灯明皿。Ⅲ313は陶器蓋。Ⅲ314は陶器瓶。Ⅲ315・Ⅲ316は陶器すり鉢。Ⅲ317は鉄釉を施す陶器鍋。

Ⅲ318～Ⅲ326は磁器染付の椀。Ⅲ318は器面の劣化で文様がみえない。Ⅲ323は広東椀で、見込みに目跡をもつ。Ⅲ327は磁器染付皿。口径18.5cm, 器高4.1cm。見込みを蛇ノ目釉剥ぎしている。Ⅲ328・Ⅲ329は磁器染付の瓶。Ⅲ330は磁器染付仏飯。Ⅲ331は磁器染付蓋。Ⅲ332・Ⅲ333は青磁椀。

S D 3 上層出土遺物(Ⅲ334～Ⅲ342) Ⅲ334・Ⅲ335は玩具。Ⅲ334は伏見人形で、獅子形。体部全体を緑, 眉および目をこげ茶で彩色してある。Ⅲ335はミニチュアの土師器蓋。Ⅲ336～Ⅲ341は磁器染付椀。Ⅲ342は磁器染付の蓋物。口縁端部を釉剥ぎしている。

S D 3 上面出土遺物(Ⅲ343・Ⅲ344) Ⅲ343はミニチュアの玩具。土師器の蓋。Ⅲ344は磁器色絵の椀。口縁部端反り。焼継している。

S D 5 下層出土遺物(Ⅲ345～Ⅲ348) Ⅲ345は陶器椀。鉄絵で文様を描く。Ⅲ346・Ⅲ347は磁器染付椀。Ⅲ348は磁器染付鉢。

S D 5 上層出土遺物(Ⅲ349～Ⅲ355) Ⅲ349は陶器灯明受皿。Ⅲ350は陶器鍋。Ⅲ351は陶器すり鉢。Ⅲ352・Ⅲ353は磁器染付椀。Ⅲ354・Ⅲ355は磁器染付蓋。

S D 13 出土遺物(Ⅲ356・Ⅲ357) Ⅲ356は磁器色絵の広東椀。緑・赤・黒を用いて上絵付けを施す。焼継している。Ⅲ357は陶器仏餉具。

S X 3 出土遺物(Ⅲ358～Ⅲ371) Ⅲ358は土師器蓋。Ⅲ359は陶器仏餉具。銅緑釉を施している。Ⅲ360は陶器椀。Ⅲ361・Ⅲ362は陶器灯明受皿, Ⅲ363は陶器灯明皿。Ⅲ364は陶器蓋。Ⅲ365は陶器蓋。白化粧後, 鉄絵を施す。Ⅲ366～Ⅲ369は磁器染付椀。Ⅲ360は外面青磁釉を施す染付蓋。Ⅲ371は磁器染付皿。

S X 2 出土遺物(Ⅲ372～Ⅲ518) Ⅲ372～Ⅲ375は土師器皿で, Ⅲ372・Ⅲ373は見込みに圈線をもつ。Ⅲ374・Ⅲ375は口縁部を花びら形に成形する。Ⅲ376は土師器焙烙。Ⅲ377は小型の土師器鉢。外型作りで, 内面を撫でて仕上げる。Ⅲ378～Ⅲ381は土師質の玩具。Ⅲ378・Ⅲ379はミニチュアの蓋, Ⅲ380は鳩笛, Ⅲ381は伏見人形。

Ⅲ382は鉛製の銃弾で, S X 2 上部から出土した。使用により先端がつぶれている。西

京都大学病院構内A H13区の発掘調査

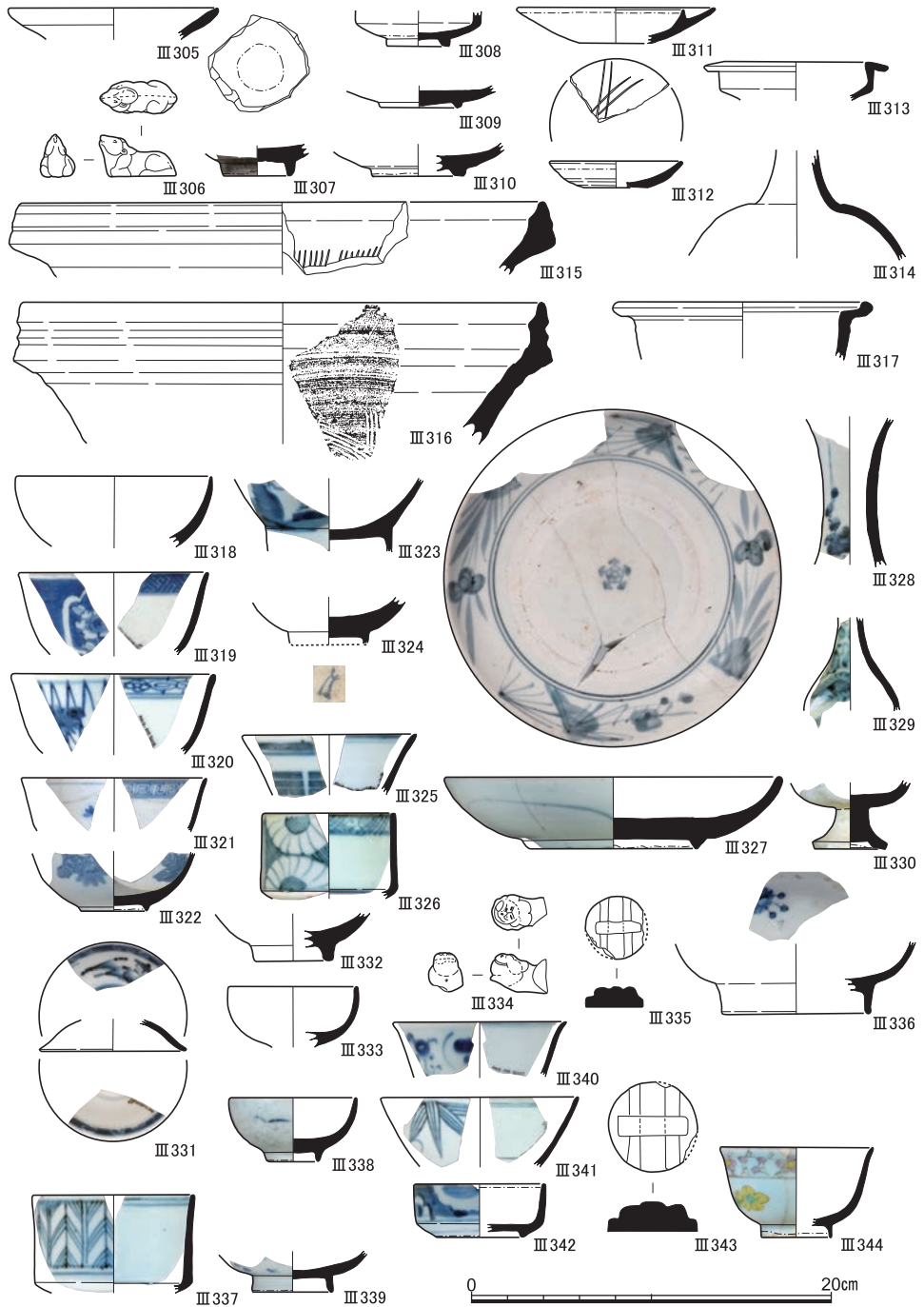


図93 S D 3 上層出土遺物 (Ⅲ305土師器, Ⅲ306土製品, Ⅲ307～Ⅲ317陶器, Ⅲ318～Ⅲ333磁器), S D 3 上層出土遺物 (Ⅲ334・Ⅲ335土製品, Ⅲ336～Ⅲ342磁器), S D 3 上面出土遺物 (Ⅲ343土製品, Ⅲ344磁器)

出土遺物

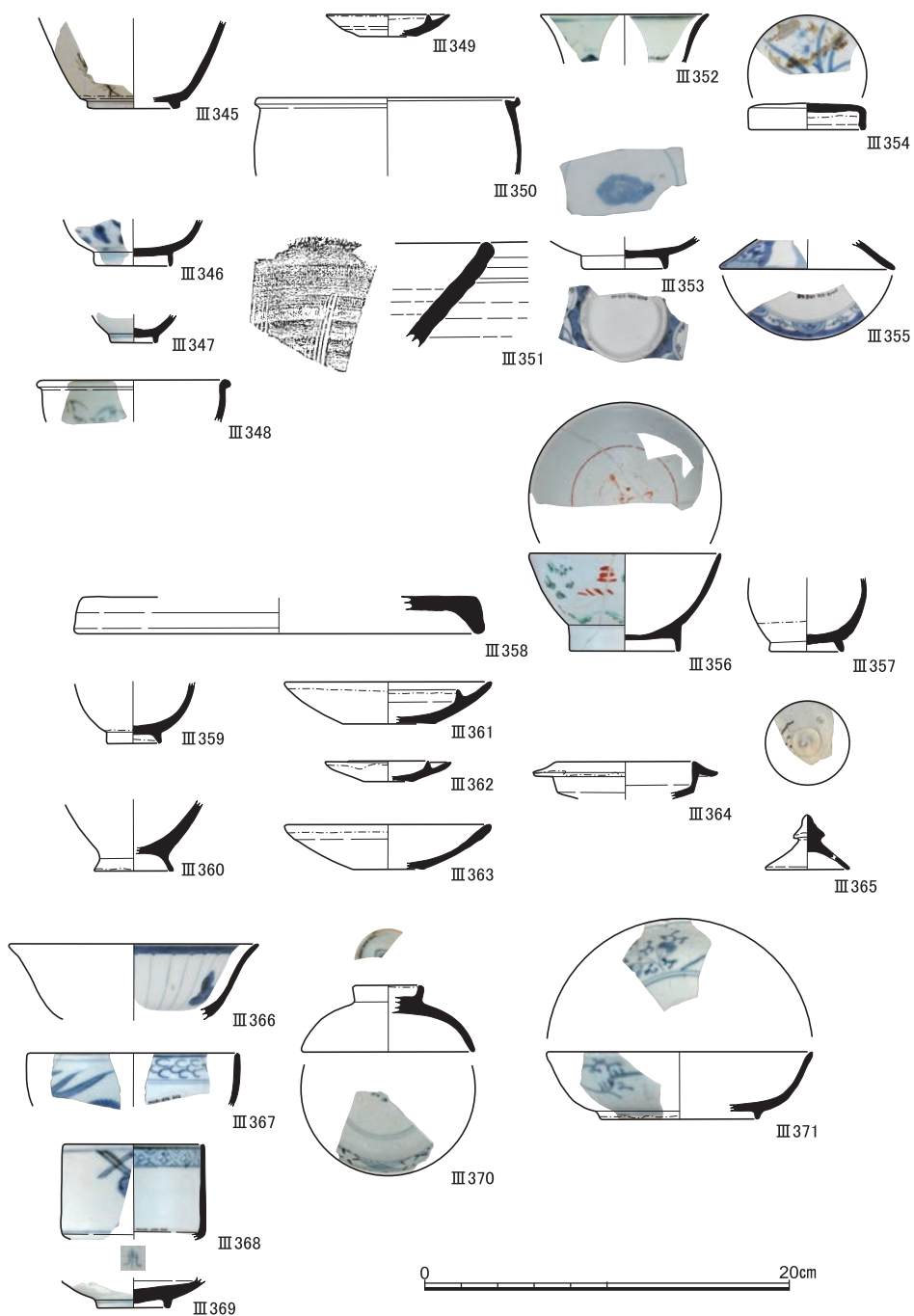


图94 S D 5 下層出土遺物 (III 345 陶器, III 346~III 348 磁器), S D 5 上層出土遺物 (III 349~III 351 陶器, III 352~III 355 磁器), S D 13 出土遺物 (III 356 磁器, III 357 陶器), S X 3 出土遺物 (III 358 土師器, III 359~III 365 陶器, III 366~III 371 磁器)

に隣接する379地点からも、同類の銃弾が3点出土している〔千葉・長尾2014, p.60〕。幕末にこの地に設置された練兵場に関する遺物と見てよい。

Ⅲ383～Ⅲ390・Ⅲ403～405は陶器椀。Ⅲ383・Ⅲ388は天目釉を施す。Ⅲ384は煎茶椀で、底裏に「木村」という墨書がみられる。Ⅲ386は高台脇に刻印をもつ。Ⅲ389は見込みに白泥による刷毛文様と鉄絵を施している。Ⅲ390は底裏に「ち」という墨書がみられる。Ⅲ404は肥前京焼風陶器で、底裏に「清水」の銘をもつ。Ⅲ404は雲錦手の色絵陶器で、紅葉を表現した赤は上絵による。底裏に枠囲みの「犬山」の刻印がみられる。Ⅲ405は見込みと高台に砂目の目跡をもつ。

Ⅲ391～Ⅲ400は陶器灯明受皿。Ⅲ401・Ⅲ402は陶器灯明皿。Ⅲ406～Ⅲ415は陶器蓋。Ⅲ416・Ⅲ417は軟質施釉陶器の蓋。Ⅲ417は上面端に、スタンプによる菊花文を13個（うち1個は剥落でみえない）押捺した後に緑釉を施している。Ⅲ418は陶器栓。Ⅲ419は陶器油差しか。Ⅲ420は陶器の瓶。内外面ともに白化粧する。底裏に、「道八」の銘をもつ。Ⅲ421は陶器仏飯。天目釉を施す。Ⅲ422は陶器皿。小判形で見込みに龍文をもつ珉平焼である。Ⅲ423は軟質施釉陶器のコンロ。底部外面に枠囲みで「上製」の刻印をもつ。Ⅲ424～Ⅲ428は陶器すり鉢。いずれも堺・明石系とみられる。Ⅲ429・Ⅲ430は鉄釉を施す陶器鍋。

Ⅲ431は磁器製の戸車。直径5.1cm、高さ1cm、中央の孔の直径1.5cm。側面は使用により摩耗している。

Ⅲ432～Ⅲ481は磁器染付の椀。Ⅲ434・Ⅲ448は色絵染付で、両例とも口縁部内面に四方禪文をもつ。Ⅲ448は焼継がみられる。Ⅲ438・Ⅲ456は型紙刷りで施文している。Ⅲ461・Ⅲ466・Ⅲ471・Ⅲ474は焼継しており、Ⅲ461は底裏に焼継師のマークがみられる。Ⅲ472・Ⅲ473・Ⅲ479は外面に青磁釉を掛けた青磁染付である。Ⅲ475は蛇ノ目凹型高台。

Ⅲ482は菊花形の磁器染付皿。Ⅲ483は磁器染付鉢。Ⅲ484は上絵染付の皿。Ⅲ485～Ⅲ487は磁器染付皿。Ⅲ487は見込みを蛇ノ目釉剥ぎしている。Ⅲ488～Ⅲ490・Ⅲ492～Ⅲ498は磁器染付蓋。Ⅲ488は外面に青磁釉を施している。Ⅲ495は上絵染付である。Ⅲ491は上絵の蓋。口縁端部にも赤で彩色している。Ⅲ499は磁器染付鉢。口縁部が外側に折れ曲がる。Ⅲ500・Ⅲ501は磁器染付瓶。Ⅲ502・Ⅲ503は磁器染付仏飯。

Ⅲ504～Ⅲ505は青磁で、Ⅲ504は皿、Ⅲ505は椀、Ⅲ506は鉢である。Ⅲ504・Ⅲ506は型物で、Ⅲ504は見込み、Ⅲ506は外面に陽刻文様をもつ。Ⅲ507～Ⅲ519は白磁。Ⅲ507は椀、Ⅲ508・Ⅲ509は紅皿、Ⅲ510は蓋。

Ⅲ511～Ⅲ518は砥石。Ⅲ516は菊花の印刻がみられ、別の製品の転用とみられる。Ⅲ518

出土遺物

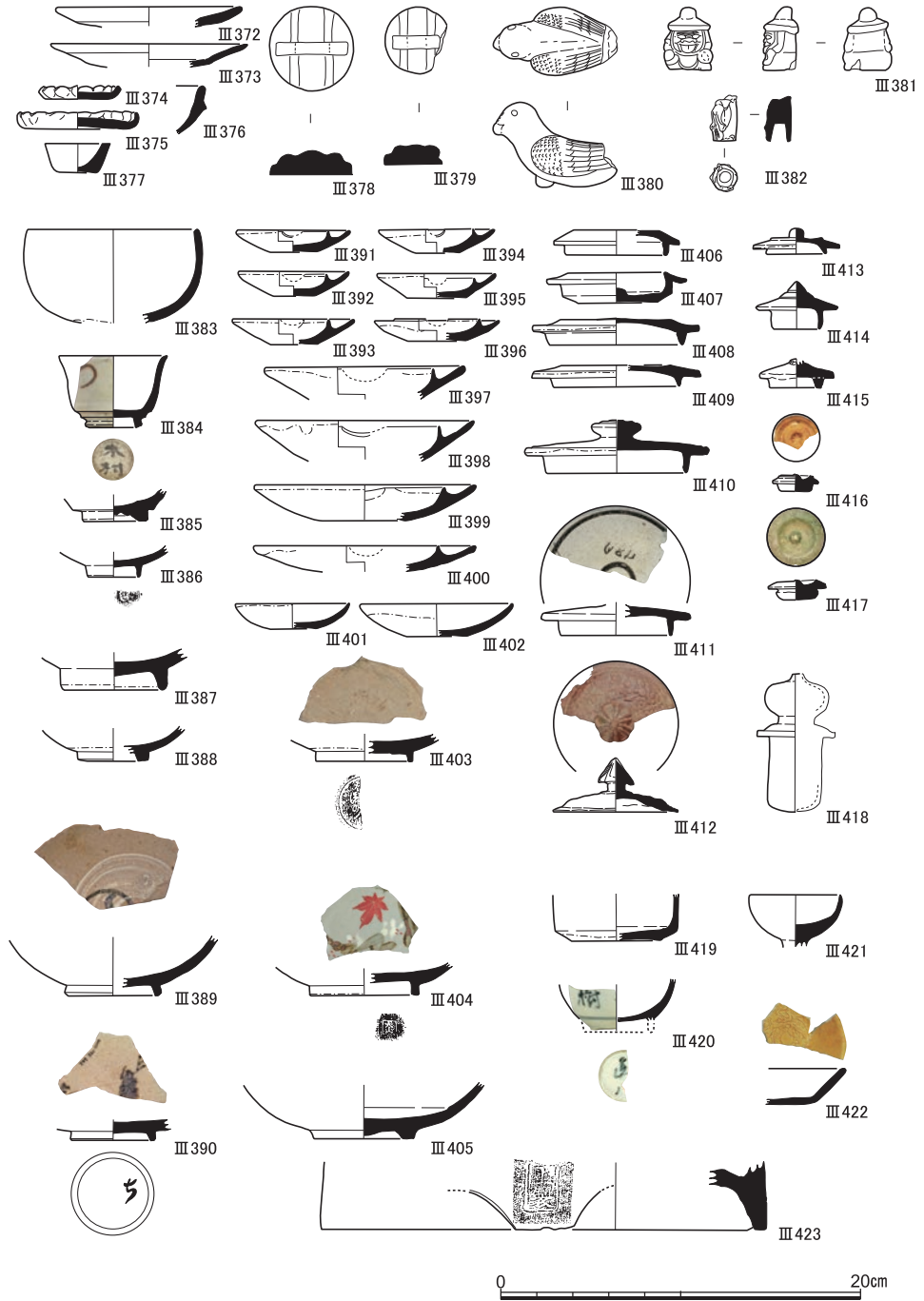


图95 S X 2 出土遺物(1) (III 372~III 377土師器, III 378~III 381土製品, III 382銃彈, III 383~III 423陶器)

京都大学病院構内A H13区の発掘調査

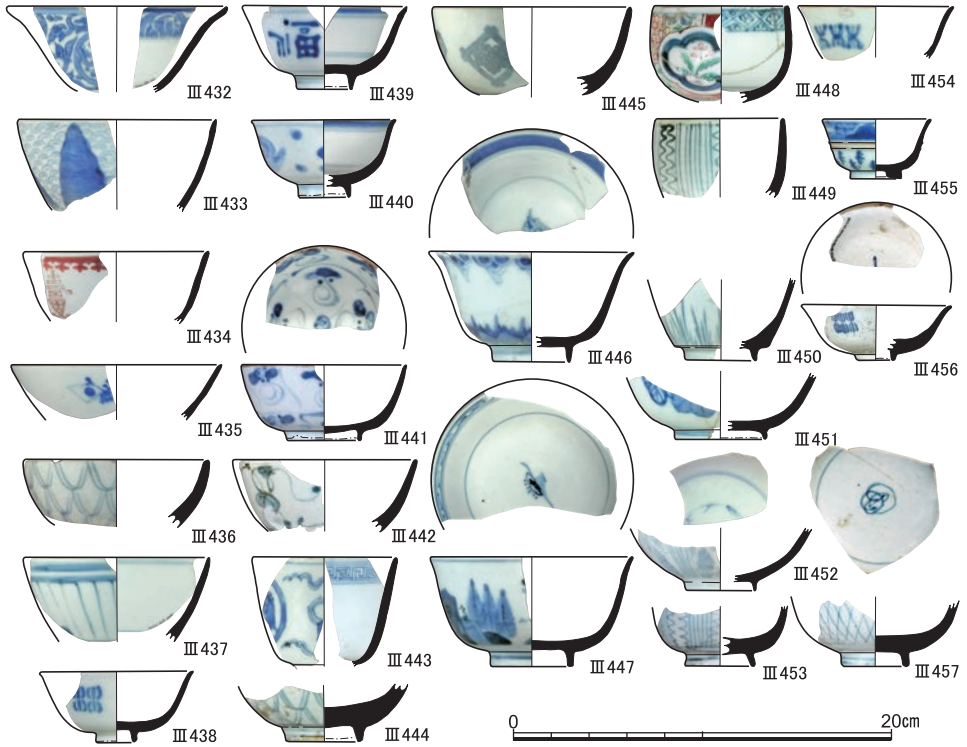
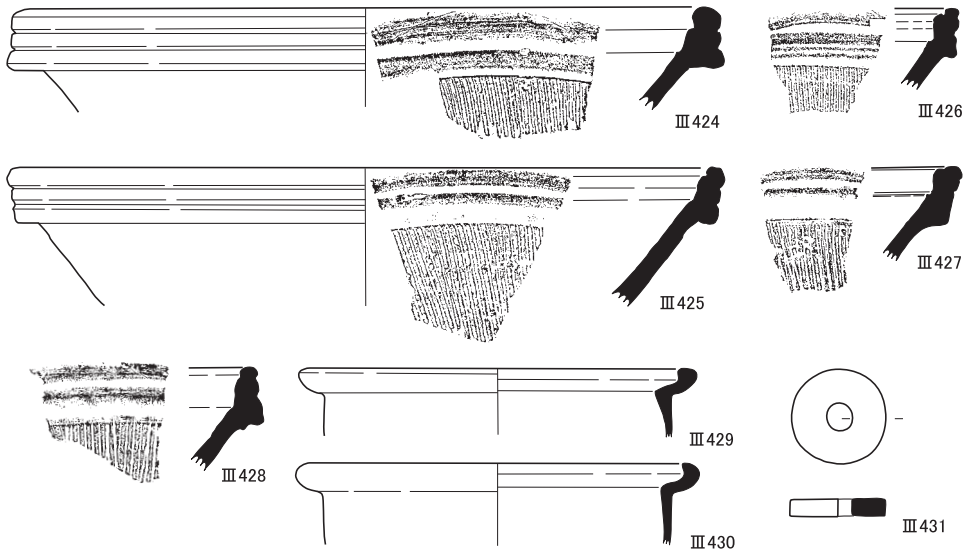


図96 S X 2 出土遺物(2) (Ⅲ424～Ⅲ430陶器, Ⅲ431～Ⅲ457磁器)

出土遺物



图97 S X 2 出土遺物(3) (III 458~III 482磁器)

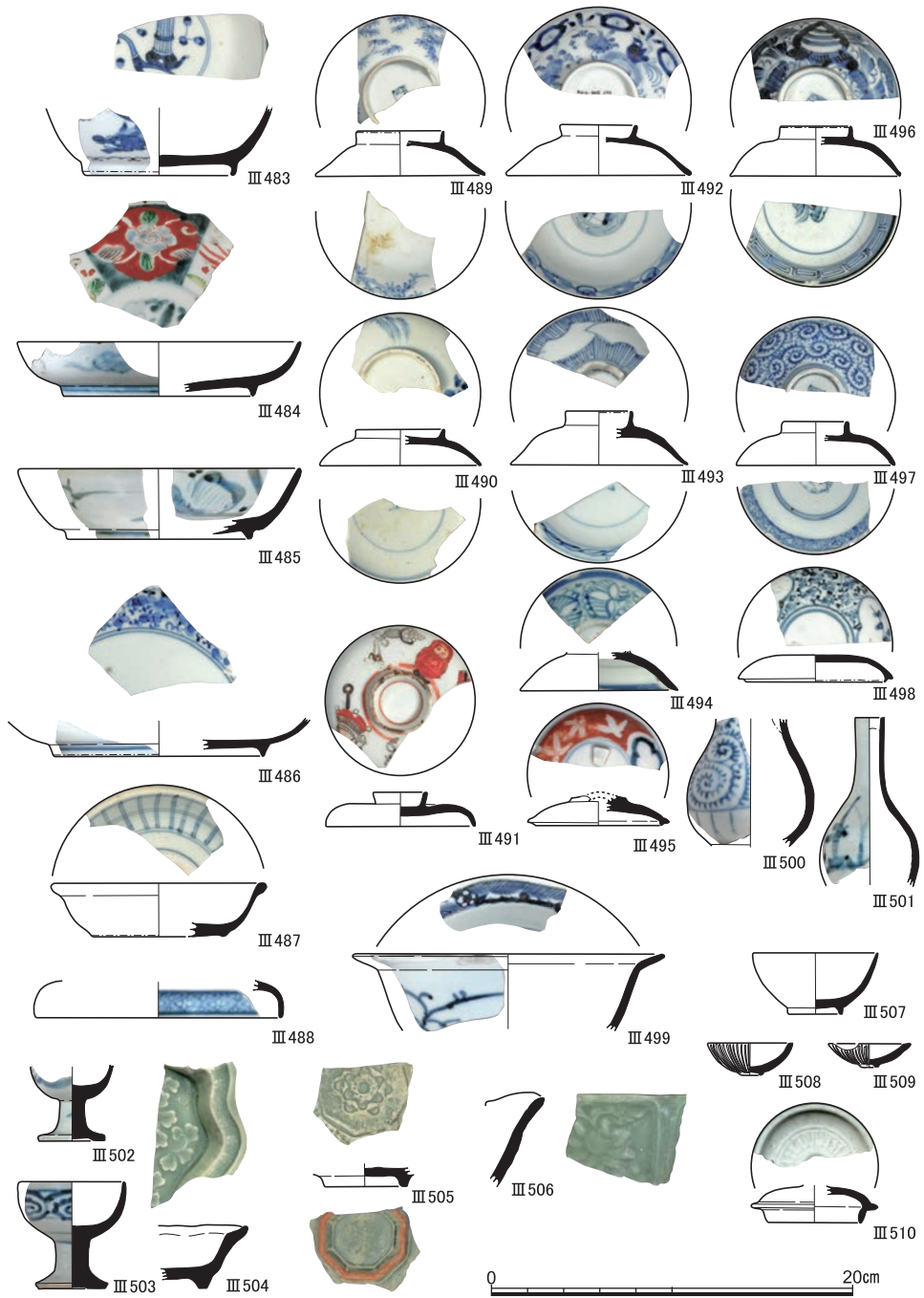


図98 S X 2 出土遺物(4) (III 483~III 510磁器)

出土遺物

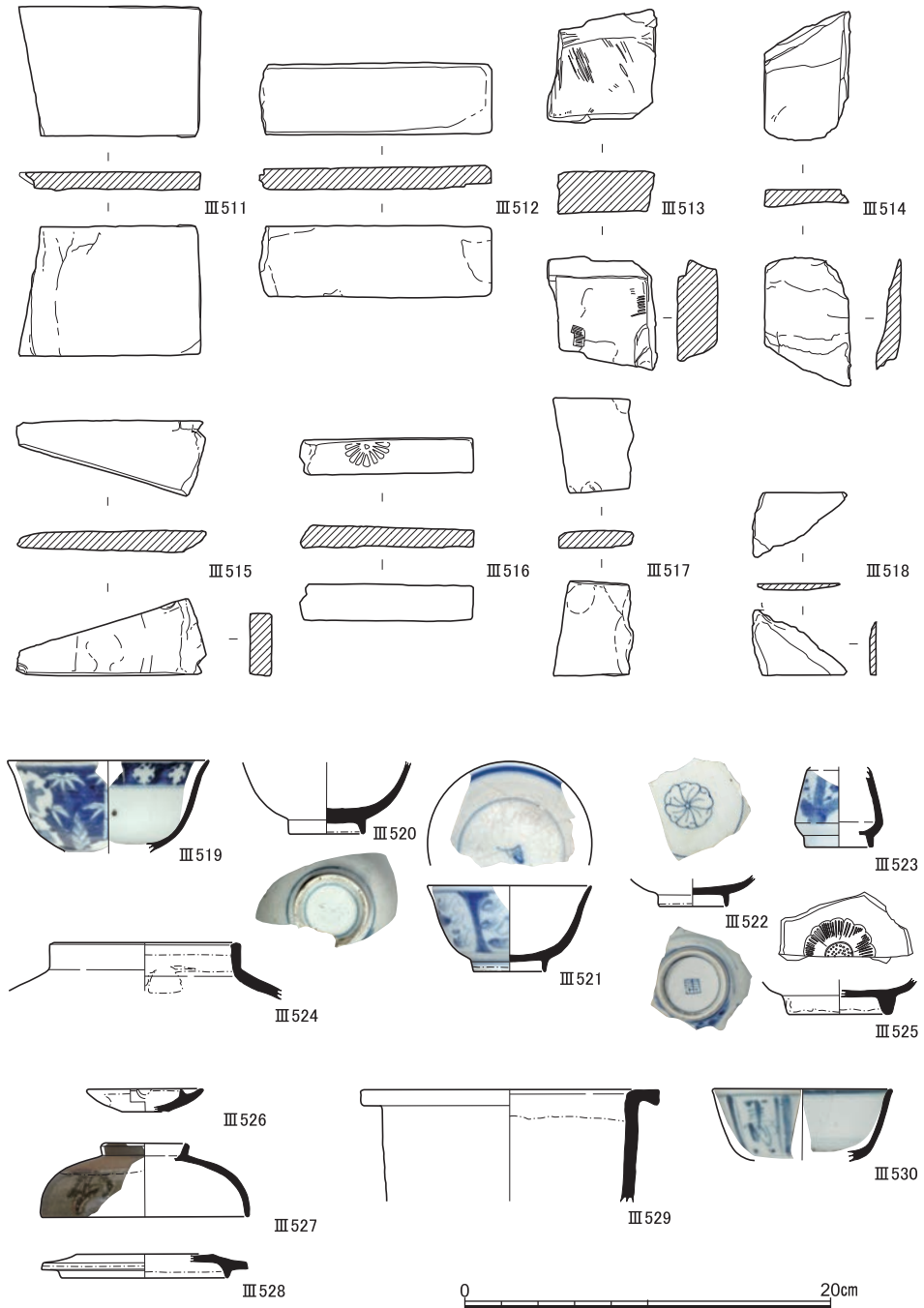


图99 S X 2 出土遺物(5) (III 511~III 518砥石), S D 1 出土遺物 (III 519~III 525磁器), S D 2 出土遺物 (III 526~III 529陶器, III 530磁器)

は粘板岩製。器壁の薄さと両面ともに擦過痕がみられることから、硯の一部であったものを砥石として転用したものであろう。

SD1 出土遺物 (Ⅲ519～Ⅲ525) Ⅲ519～Ⅲ522は磁器染付椀。Ⅲ519・Ⅲ521は口縁部が端反りとなる。Ⅲ523は磁器染付瓶。Ⅲ524は磁器染付の壺。蜻唐草文を施す。Ⅲ525は青磁椀。見込みの花文は型による陽刻である。

SD2 出土遺物 (Ⅲ526～Ⅲ530) Ⅲ526は陶器灯明受皿。Ⅲ527・Ⅲ528は陶器蓋。Ⅲ529は陶器植木鉢。Ⅲ530は磁器染付の椀。

SX1 出土遺物 (Ⅲ531～Ⅲ592) Ⅲ531～Ⅲ533は土師器焙烙。Ⅲ534は瓦器火鉢。Ⅲ535・Ⅲ536は軟質施釉陶器の玩具。Ⅲ535は灯籠, Ⅲ536は椀である。Ⅲ537は窯道具の輪トチン。

Ⅲ538は陶器椀。Ⅲ539は陶器皿。見込みに放射状のヘラ刻みをもつ。高台脇に, 小判形の圏線で囲まれた刻印をもつが, 文字の判読はできない。Ⅲ540～Ⅲ543は陶器灯明受皿。Ⅲ544～Ⅲ550は陶器灯明皿。Ⅲ551は陶器朱泥急須の蓋。Ⅲ552は陶器蓋。Ⅲ553は陶器*燭。底部は回転糸切り成形。Ⅲ554～Ⅲ556は, 堺・明石系の陶器すり鉢。

Ⅲ557～Ⅲ571は磁器染付椀。Ⅲ565・Ⅲ557～Ⅲ559・Ⅲ561・Ⅲ562は口縁部を端反りとする。Ⅲ567・Ⅲ568は広東椀。Ⅲ569は底裏に「玩玉」の銘をもつ。Ⅲ570は蛇ノ目凹型高台。Ⅲ572は磁器染付の瓶。底裏に「亀亭」の銘をもつ。「亀亭」は京都五条坂の窯元・和氣亀亭が用いた銘である。Ⅲ573～Ⅲ580は磁器染付蓋。Ⅲ573は焼継している。Ⅲ581は青磁香炉。

Ⅲ582～Ⅲ585は石製の硯。いずれも長方形の形態を呈する。Ⅲ586～Ⅲ592は砥石。Ⅲ591は粘板岩製で, 両面とも摩耗している。硯を転用した砥石であろうか。

SK2 出土遺物 (Ⅲ593) Ⅲ593は磁器製の玩具人形。鉄絵で, 顔や髪の毛を表現している。

SE1 出土遺物 (Ⅲ594) Ⅲ594は砥石。

砂礫(第7層) 出土遺物 (Ⅲ595～Ⅲ599) Ⅲ595・Ⅲ596は中世の土師器で, 1段撫で素縁。Ⅲ597は陶器水指。蓋を受けるため, 口縁部内面が突出する。Ⅲ598・Ⅲ599は中世の白磁。

灰褐色砂質土(第6層) 出土遺物 (Ⅲ600) Ⅲ600は陶器唐津焼の皿。

淡褐色土(第5層) 出土遺物 (Ⅲ601～Ⅲ644) Ⅲ601～Ⅲ612は土師器皿。このうち, Ⅲ601は中世に遡るが, そのほかは17世紀後半～18世紀前半におさまる。Ⅲ613は土師器鉢。

出土遺物

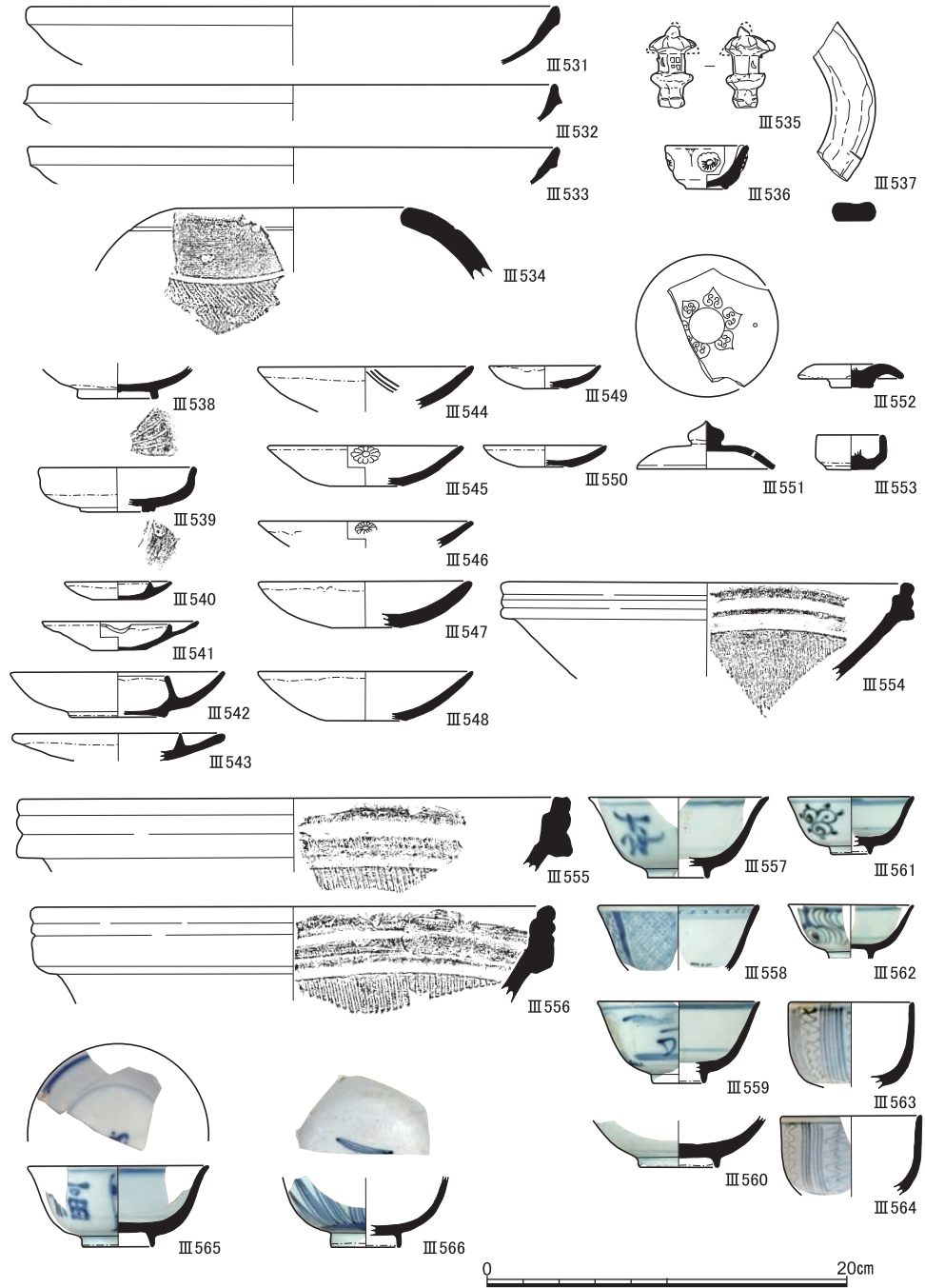


图100 S X 1 出土遺物(1) (III 531~III 533土師器, III 534瓦器, III 535·III 536土製品, III 537窯道具, III 538~III 556陶器, III 557~III 566磁器)

京都大学病院構内A H13区の発掘調査

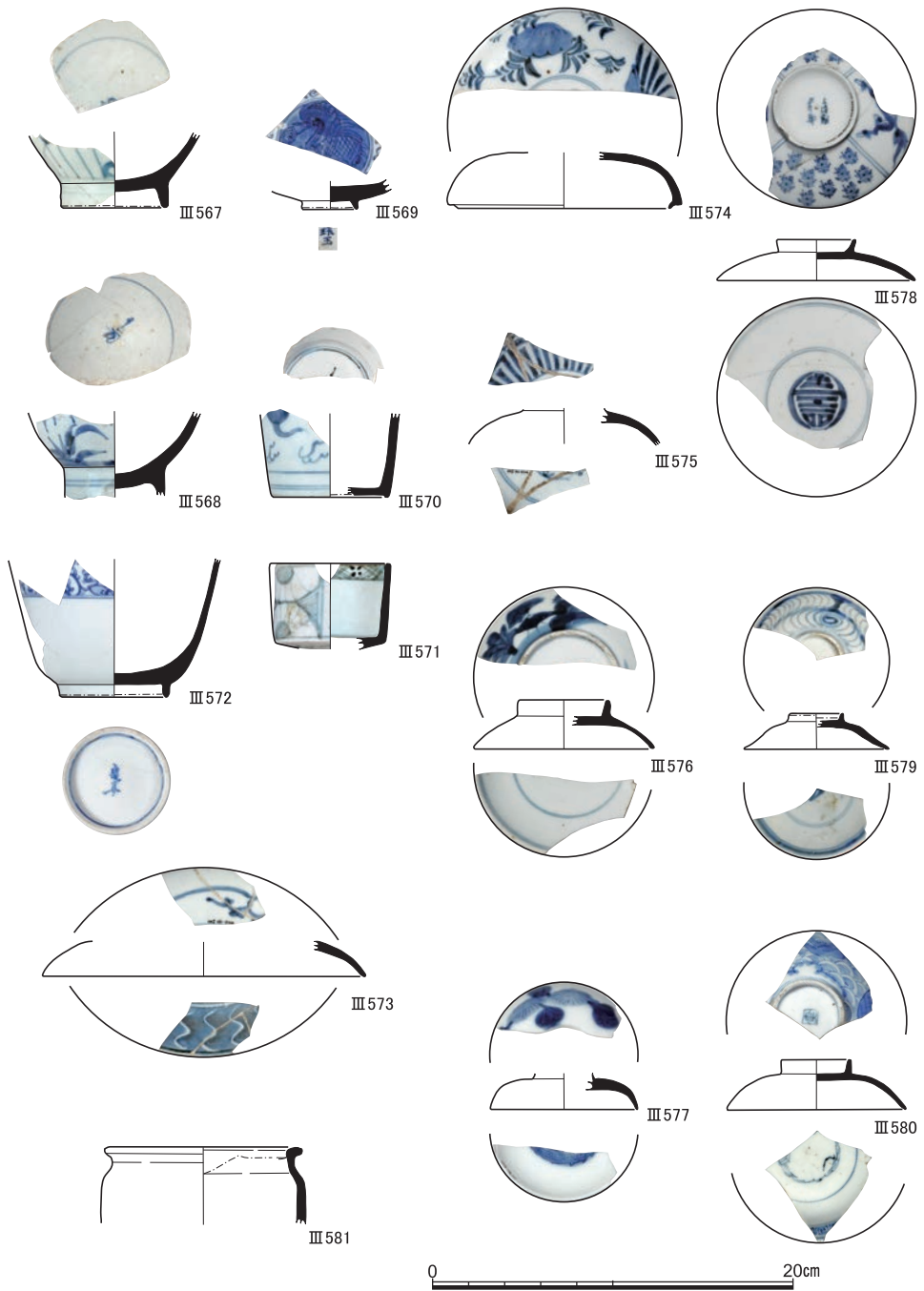


図101 S X 1 出土遺物(2) (III 567~III 581磁器)

出土遺物

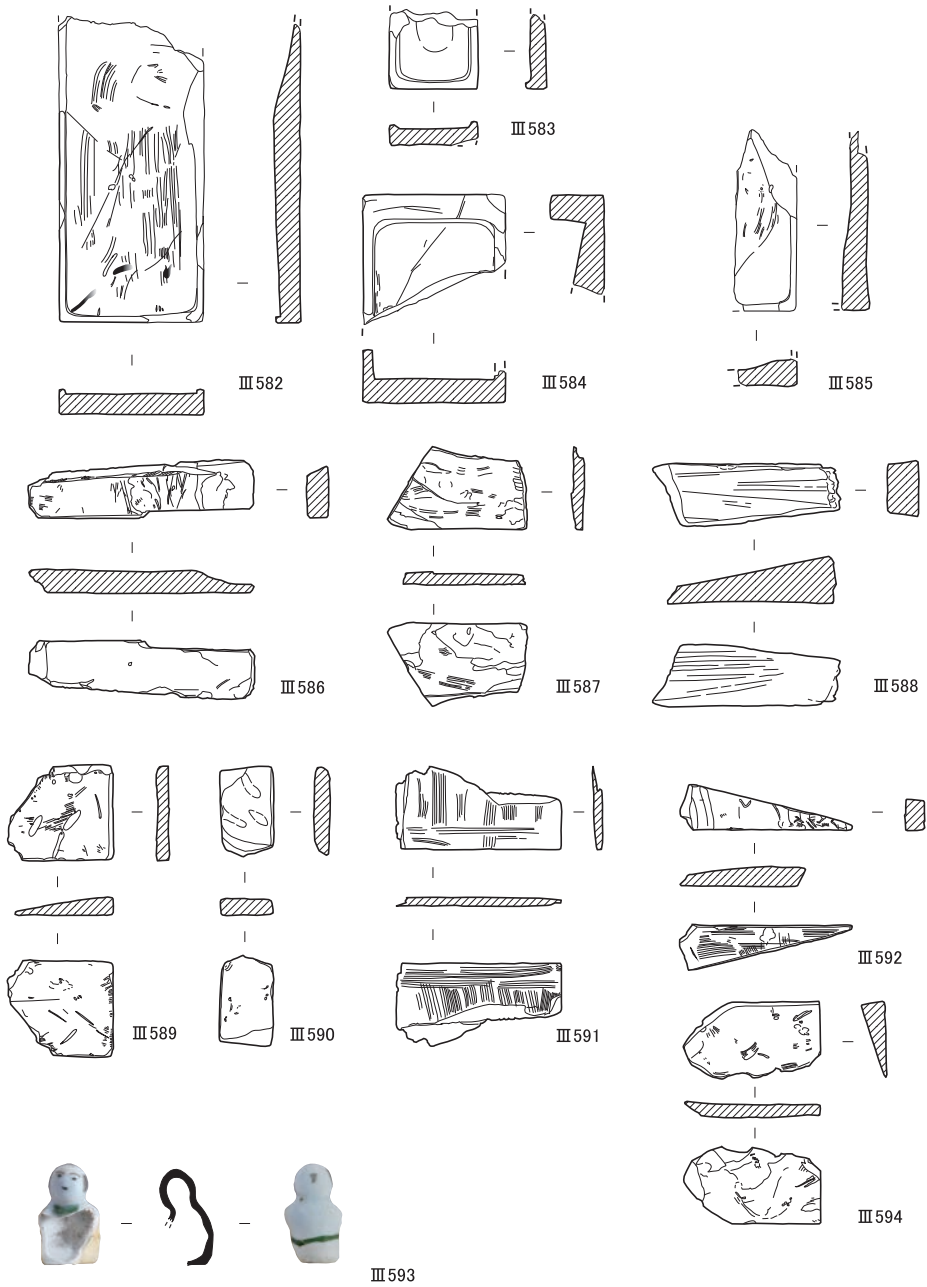


图102 S X 1 出土遺物(3) (III 582~III 585硯, III 586~III 592砥石), S K 2 出土遺物 (III 593磁器人形), S E 1 出土遺物 (III 594砥石)

外面は粘土紐の接合痕跡を残し、内面は撫でて仕上げている。中世（13世紀代）の遺物であろう。Ⅲ614も中世に遡る瓦器羽釜。Ⅲ615・Ⅲ616は瓦器火入れ。Ⅲ615は、口縁部が受口となり、口縁部よりやや下がった位置に、径1.6cmの小孔があく。

Ⅲ617～Ⅲ631は陶器の椀ないし皿。Ⅲ632～Ⅲ634は陶器すり鉢。Ⅲ635は陶器植木鉢。Ⅲ636～Ⅲ638は磁器染付椀。Ⅲ638は底裏に「大明」の銘をもつ。Ⅲ639は磁器染付の皿、Ⅲ640は磁器染付の鉢。Ⅲ641・Ⅲ642は青磁椀。Ⅲ643・Ⅲ644は白磁で、Ⅲ643は椀、Ⅲ644は皿。ともに中世前半期の遺物である。

淡褐色土上面出土遺物（Ⅲ645～Ⅲ648） Ⅲ645は東播系の須恵器鉢、Ⅲ646は口縁部を玉縁とする白磁椀。いずれも中世前半期の遺物。Ⅲ647は小判形をした土製品。片面に、文字などを型押しして陽刻している。玩具であろう。Ⅲ648はキセル。

灰褐色土（第4層）出土遺物（Ⅲ649～Ⅲ651） Ⅲ649・Ⅲ650は伏見人形。Ⅲ649は褐色を呈する胎土、Ⅲ650は灰白色を呈する胎土を用いる。Ⅲ651は軟質施釉陶器の鬢水入れ。

灰褐色土上面出土遺物（Ⅲ652・Ⅲ653） Ⅲ652は窯道具の輪トチン。Ⅲ653は陶器土瓶の底部で、底裏に「音羽」とみられる刻印がみえる。

黒褐色土（第3層）出土遺物（Ⅲ654～Ⅲ676） Ⅲ654～Ⅲ656は焼塩壺の蓋。いずれも、内面に布目の痕跡を残す。Ⅲ657～Ⅲ663は玩具。Ⅲ657・Ⅲ658はミニチュア羽釜で、体部を外型で製作した後、鏝を貼り付けている。Ⅲ659はミニチュア竈。Ⅲ660はミニチュア灯籠。Ⅲ661は鳩笛。Ⅲ662・Ⅲ663は伏見人形。

Ⅲ664は陶器椀。底裏に「京」の刻印をもつ。Ⅲ665は陶器灯明受皿、Ⅲ666は陶器灯明皿。Ⅲ667は陶器皿。Ⅲ668は蓋物の蓋。Ⅲ669は土瓶の蓋で、内面に「寶山」の刻印をもつ。Ⅲ670は磁器染付椀。外面には青磁釉を掛ける。Ⅲ671・Ⅲ672は磁器染付の皿。Ⅲ671は見込みを蛇ノ目釉剥ぎする。Ⅲ673・Ⅲ674は石製硯。Ⅲ675・Ⅲ676は砥石。

瓦類（Ⅲ677～Ⅲ690） Ⅲ677は単弁八葉の蓮華文軒丸瓦。表土出土。弁を凸線で囲み、弁間に珠文を配している。Ⅲ678は蓮華文軒丸瓦。S F 3出土。Ⅲ679は巴文軒丸瓦。巴文の外側に珠文を配する。S D 27出土。Ⅲ680は唐草文軒平瓦。表土出土。以上は、平安後期～鎌倉前期に比定されよう。

Ⅲ681～Ⅲ685は近世～近代の瓦で、刻印をもつもの。Ⅲ681は○囲みに「十」、Ⅲ681は□囲みに「甚」、Ⅲ683は○囲みに「市」、Ⅲ684は□囲みに「二区 六九号」、Ⅲ685は□囲みに「二区 一〇八号」の刻印をもつ。

出土遺物

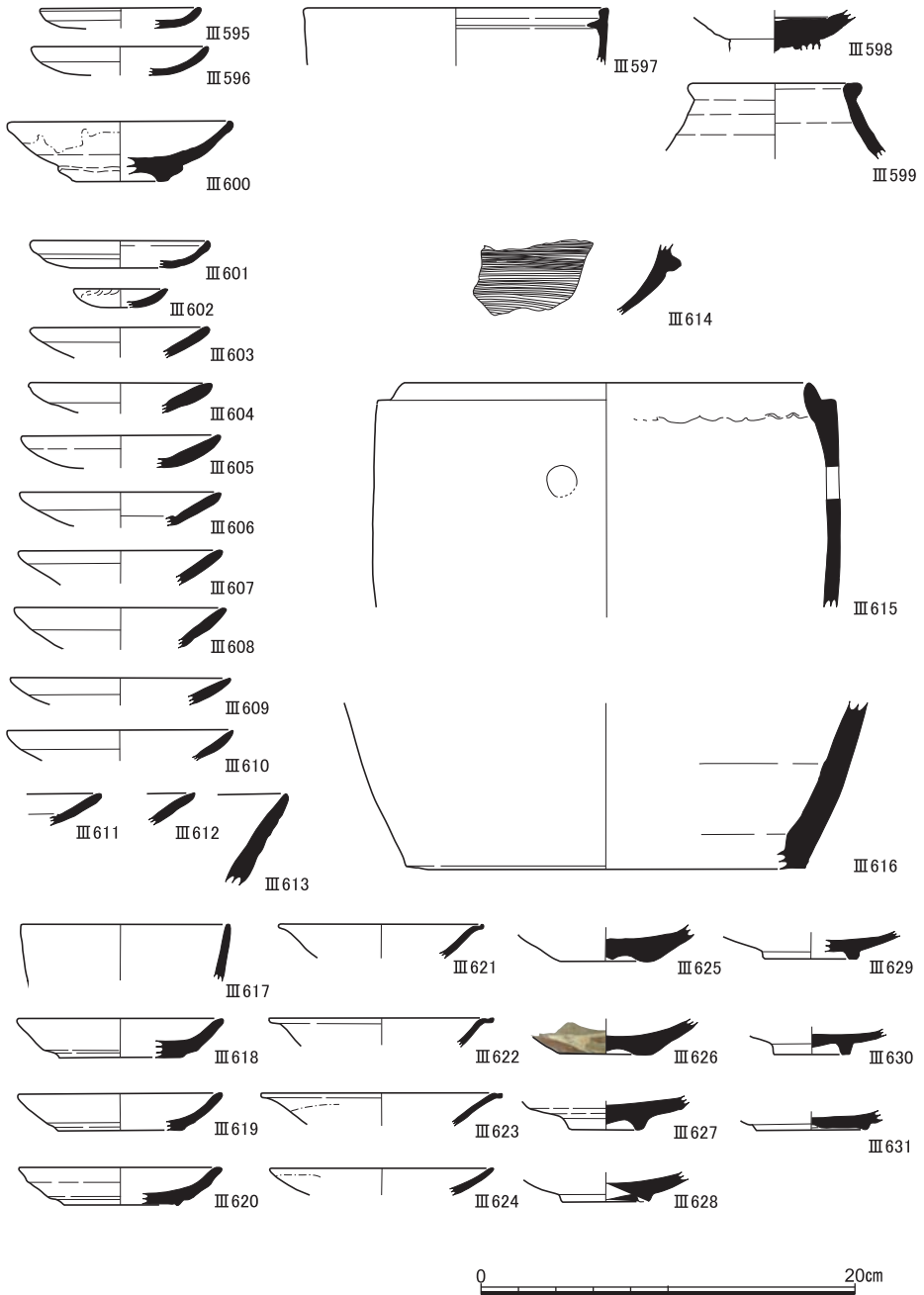


图103 砂礫出土遺物 (III 595・III 596土師器, III 597陶器, III 598・III 599磁器), 灰褐色砂質土出土遺物 (III 600陶器), 淡褐色土出土遺物(1) (III 601~III 613土師器, III 614~III 616瓦器, III 617~III 631陶器)

京都大学病院構内A H13区の発掘調査

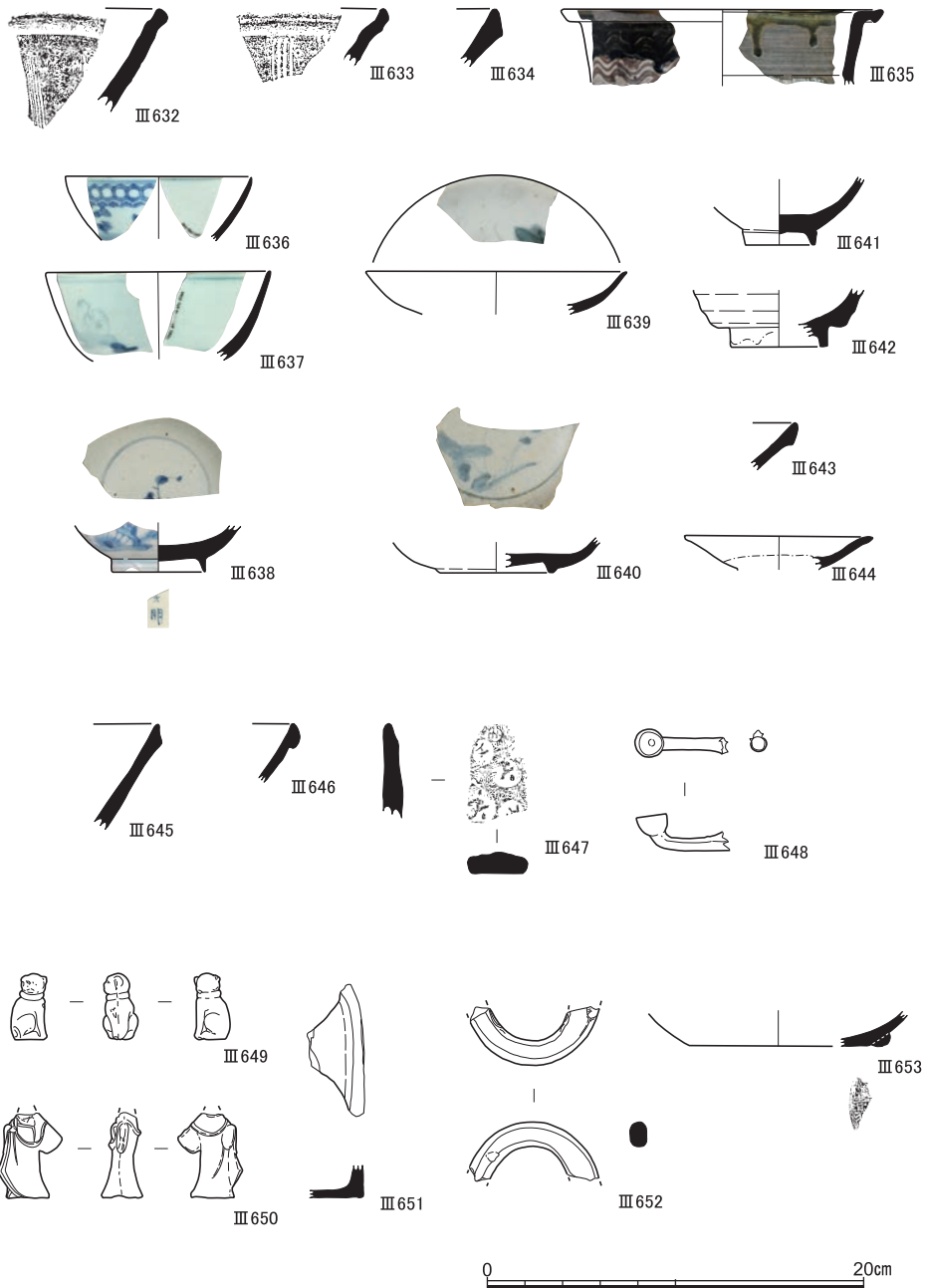
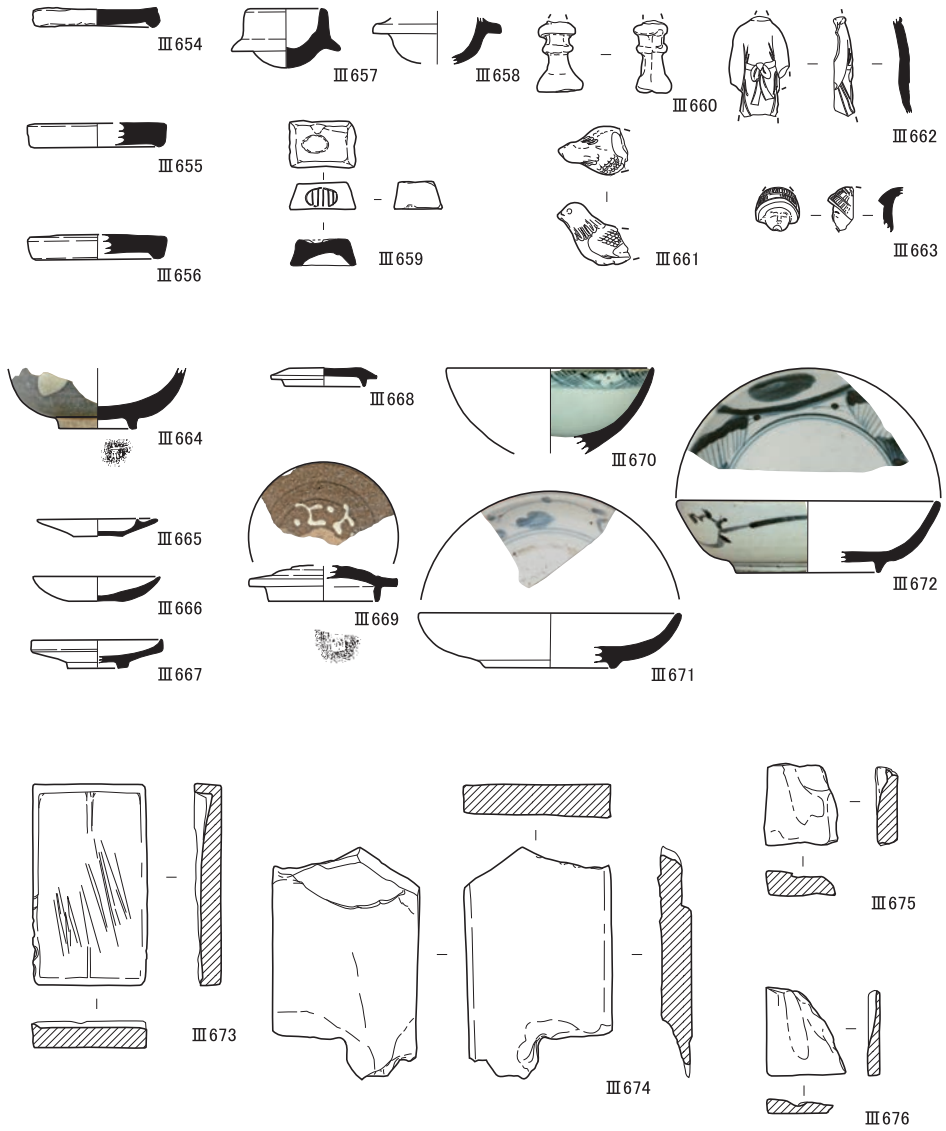


図104 淡褐色土出土遺物(2) (Ⅲ632～Ⅲ635陶器, Ⅲ636～Ⅲ644磁器), 淡褐色土上面出土遺物 (Ⅲ645須恵器, Ⅲ646磁器, Ⅲ647土製品, Ⅲ648煙管), 灰褐色土出土遺物 (Ⅲ649・Ⅲ650土製品, Ⅲ651軟質施釉陶器), 灰褐色土上面出土遺物 (Ⅲ652窯道具, Ⅲ653陶器)

出土遺物



0 20cm

图105 黑褐色土出土遺物 (III 654~III 656土師器, III 657~III 663土製品, III 664~III 669陶器。III 670~III 672磁器, III 673·III 674硯, III 675·III 676砥石)

Ⅲ686～Ⅲ690は井戸SE1の井筒に用いられていた井戸瓦。法量は、長辺28.5～30cm、短辺25～27cm、厚さ3cm前後。凸面に楔形の刻みをⅢ686は4段、Ⅲ687は3段いれている。Ⅲ688・Ⅲ689は両側面に、各2個ずつ長方形の穴をあけている。

泥面子（Ⅲ691～Ⅲ768） 遺構および包含層から出土した泥面子を一括して示した。面打（めんちょう）と呼称されるもので、上面に型押しにより文様を施している。文様には、文字・家紋・動物・将棋の駒などがあり、多様である。上面形が円形を呈するものがほとんどであるが、Ⅲ756・Ⅲ757のように六角形となるものもある。円形のもの径は、小は1.7cm（Ⅲ755）、大は5.7cm（Ⅲ767）をはかるが、主体を占めるのは2.5～3cmのものである。

土製品（Ⅲ769・Ⅲ770） 小判形の土製品で、片面に型押しで「銀」（Ⅲ769）、「寶」（Ⅲ770）といった文字を陽刻している。

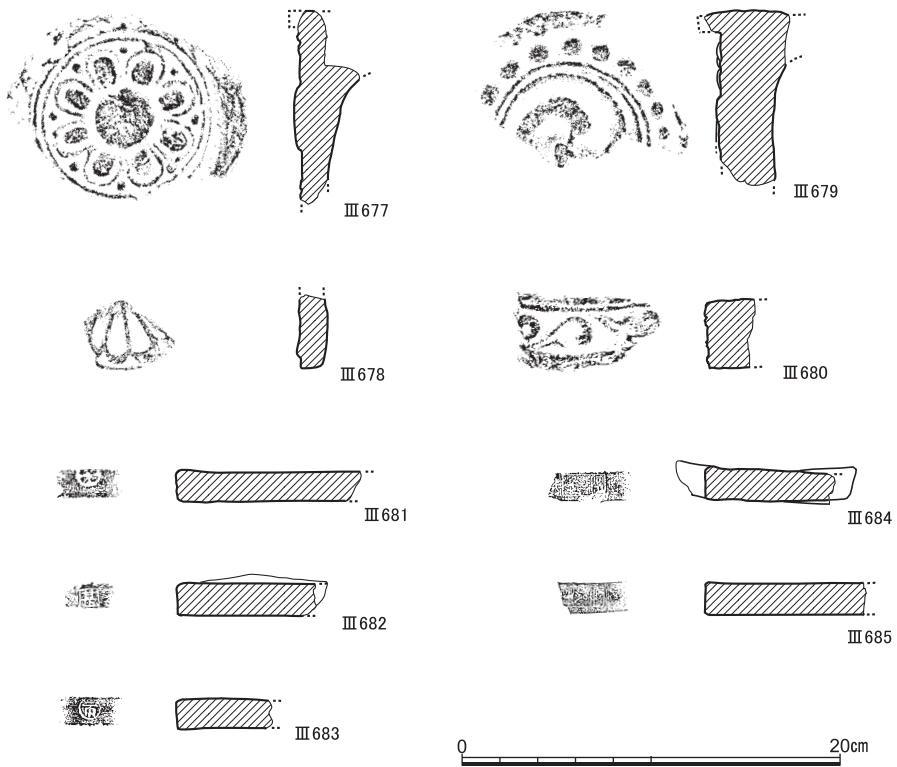


図106 瓦類(1) (Ⅲ677～Ⅲ679軒丸瓦, Ⅲ680軒平瓦, Ⅲ681～Ⅲ685刻印瓦)

出土遺物

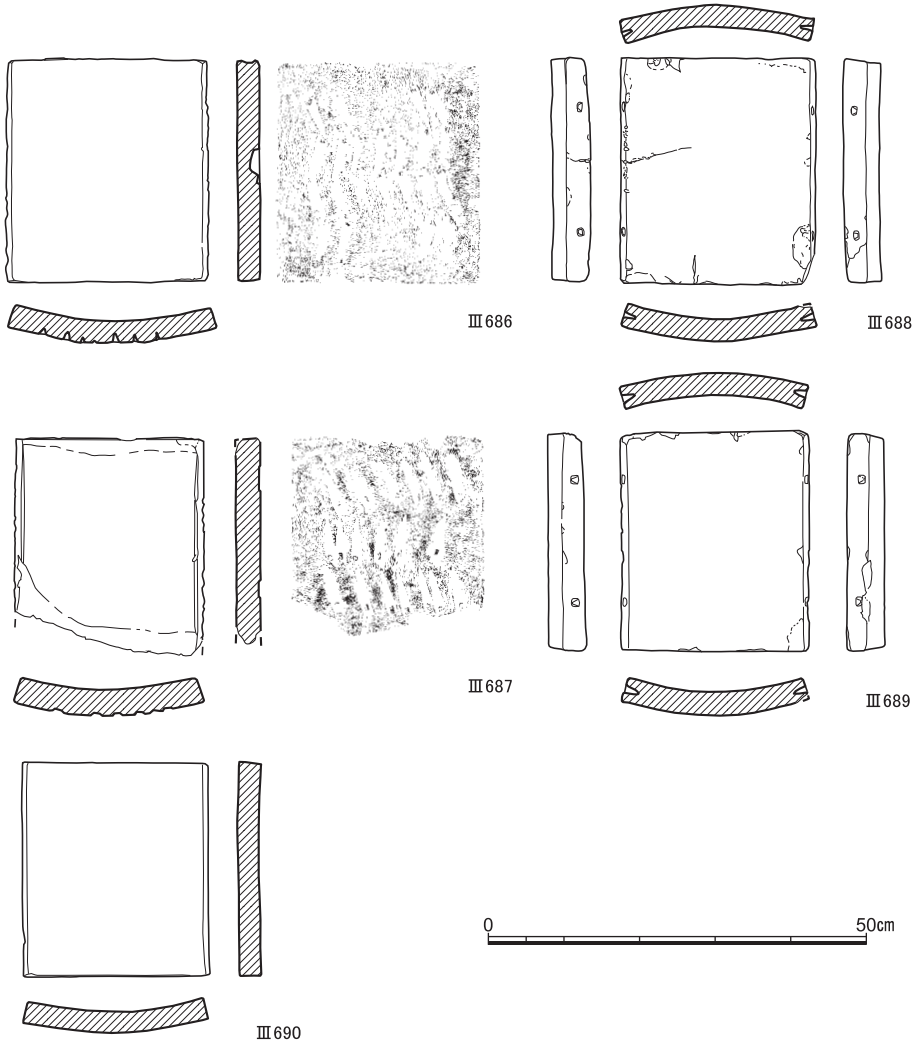


図107 瓦類(2) (III 686~III 690 S E 1 井戸瓦)

京都大学病院構内A H13区の発掘調査

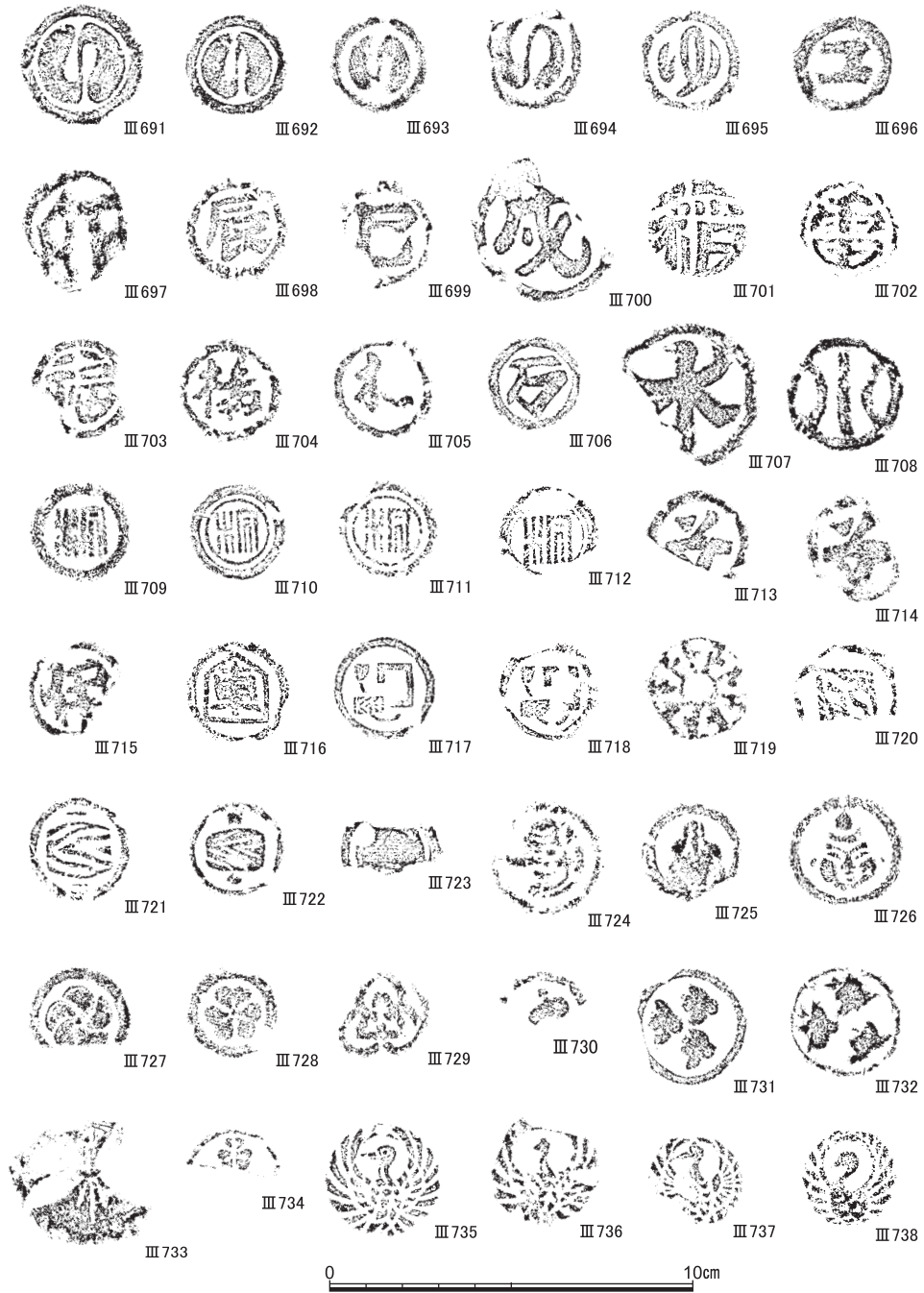


図108 土製品(1) (III 691~III 738泥面子)

出土遺物

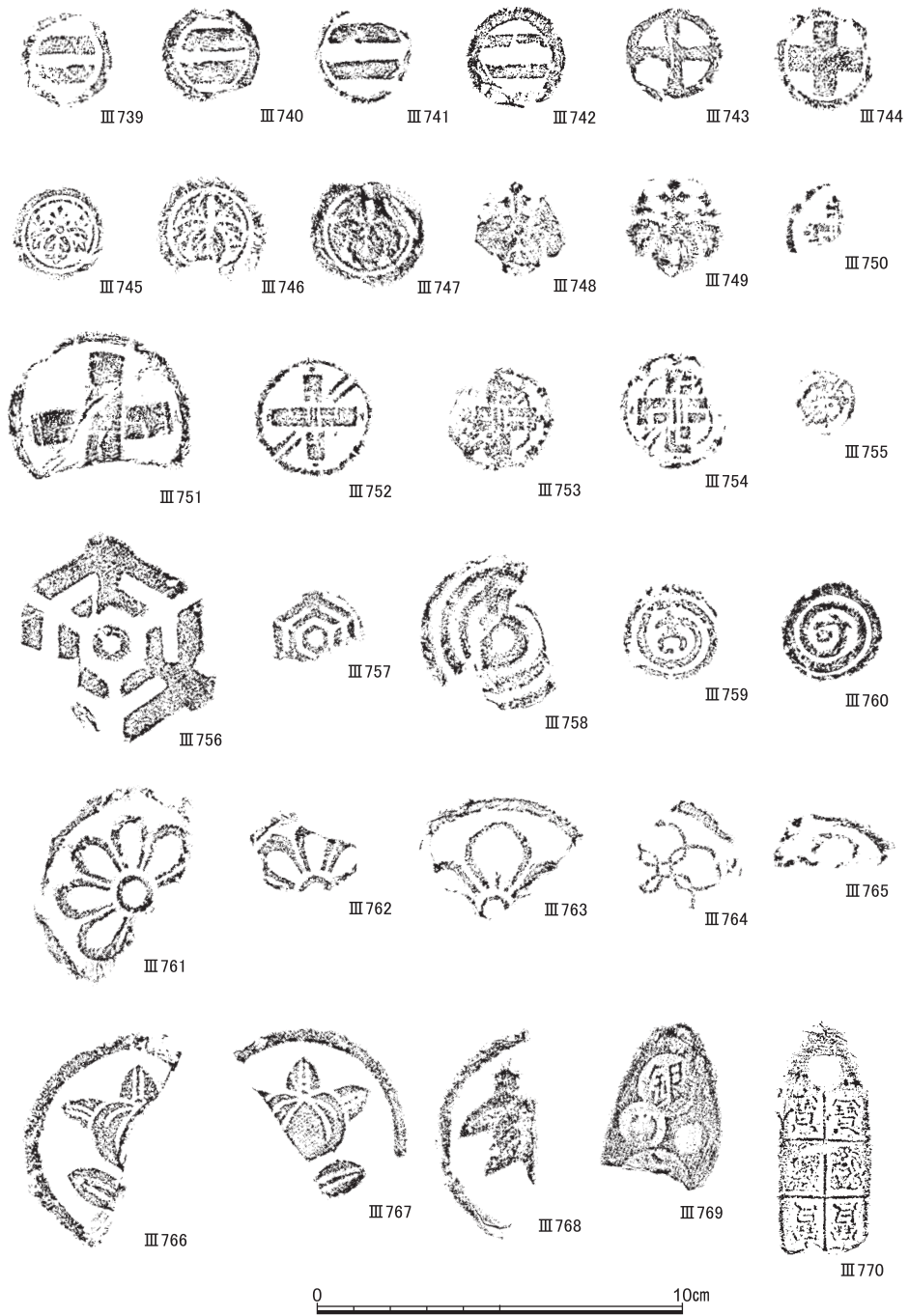


图109 土製品(2) (III 739~III 768泥面子, III 769・III 770玩具)

5 小 結

本調査区の主要な課題は、西に隣接する379地点で検出された水路・道路が東側へどのように展開しているかを明らかにすることにあった。調査の結果、前回の調査では、攪乱等で残存状態のよくなかった東西部分の水路・道路を比較的良好な状態で検出することができ、その構造や変遷をとらえることができた。この結果、つぎの点が明らかになった。

17世紀前半、聖護院村と吉田村を画する道路が水路に先行して設置された。SF 2-2とSF 3とした遺構がこれにあたる。ともに礫敷で側溝をもつが、この2つの道路の先後関係は、年代の比定できる遺物が出土していないため、はっきりしない。SF 3の上部に水路が構築されていること、SF 2-1が水路とともに機能していることから判断すれば、SF 3→SF 2-2という想定が自然であるが、結論は保留する。

17世紀後半、水路SR 1が構築される。北側の盛土（護岸）はSF 3を基盤にし、南側は、この地一帯の基盤層である砂礫を掘り凹め礫を集積して、盛土（護岸）の基盤としてしている。構築当初の水路の幅は、2.5～3m前後である。この水路とともに当初機能したのが道路SF 2-1であるが、18世紀中頃までには廃絶し、村境の道路はSR 1の北側盛土の上面に移動する（SF 1）。そして水路は、19世紀中葉の遺物を多量に含む洪水性堆積物によって埋積しその役割を終えている。以上のような成果は、前回の調査成果を補強するものであり、村境のありようを知るうえで重要な知見となった。

もう一つ、今回の調査で新たに判明した成果として、SX 1・SX 2とした集石および砂礫土の存在があげられる。SX 1はSX 2を切っており、時間的には新しいが、ともに幕末頃の遺物を多量に含んでおり、それほどの時間差は認められない。SX 2は3層に細分できるが、その最下層（2c層）はSR 1を埋積した洪水性堆積物の溢流であり、その上部を覆う2a・2b層は、この付近全体を地均しするための整地土と推定できる。SX 1も整地のための集石である可能性が高い。これらは、出土遺物から判断して、幕末にこの地に設置された練兵場に関連するものであろう。さきに、この地に練兵場が設置された理由の一つとして、度重なる洪水による荒蕪地化を掲げたが〔千葉・長尾2014〕、SX 1・SX 2は、そうした想定を支持する証拠になるかもしれない。

現地調査と整理作業は千葉豊が担当し、長尾玲が補佐した。測量や出土資料の整理などにあたっては、河野葵・西田陽子・上阪航・空佐和子・高野紗奈江・馬兆中の助力を得た。

第5章 自家発電設備設置にかかわる発掘調査および立合調査

笹川尚紀 伊藤淳史 千葉 豊

2013年度、大学構内14の地点で、自家発電設備の設置が計画された（第1章参照）。このため、当センターでは、周辺地区でおこなわれた過去の調査成果や遺跡の性格を勘案して、①発掘調査の必要な地点5カ所（図版1-397・400・402・403・405）、②慎重な立合調査の必要な地点5カ所（図版1-412・413・422～424）、③通常の立合調査が必要な地点4カ所（図版1-406・418～420）に分けて、調査を実施することにした。②の慎重な立合調査とは、専属の作業員を用意し、慎重な掘削と記録作業をおこなったものである。

以上の調査のうち、整理作業が終了したものを以下に報告する。

1 本部構内A Z 30区の発掘調査

(1) 調査の概要

本調査区は本部構内の北東辺に位置し、吉田本町遺跡のうちに含まれる（図版1-397）。周辺の調査成果をふまえたうえで、中世の遺跡のひろがりにとくに留意しつつ、近世にいたる土地利用の変遷にかんして究明することを目的に発掘調査を実施した。調査期間は2013年5月7日から5月24日、調査面積は42.9㎡となる。

出土遺物は縄文時代から江戸時代にまでおよんだものの、その多くは小片で、整理箱1箱強の分量にすぎなかった。

なお、発掘調査と遺物整理作業は笹川尚紀が担当し、長尾玲が補佐した。このほか、磯谷敦子・高野紗奈江・柰佐和子・河野葵の助力をえた。

(2) 層位

本調査区の南東部、南壁際に土層観察用の畔をもうけた。その理由は、そのほかの箇所が現代における掘削によって大きく破壊されていたからである。そこで、その層位を図示したうえで（図110の上）、堆積状況にかんする説明をおこなっていく。

第2層の灰褐色土1は近世、第3層の茶褐色土は中世の遺物包含層となる。後者を掘り下げていく過程で、集石S X 1を検出した。

第4層は吉田キャンパス一帯で多くみられる黄色砂で、弥生時代前期末ごろの洪水性堆積となる。ただし、本調査区ではY=2509.5のあたりよりも西側では認められず、そこに

自家発電設備設置にかかわる発掘調査および立合調査

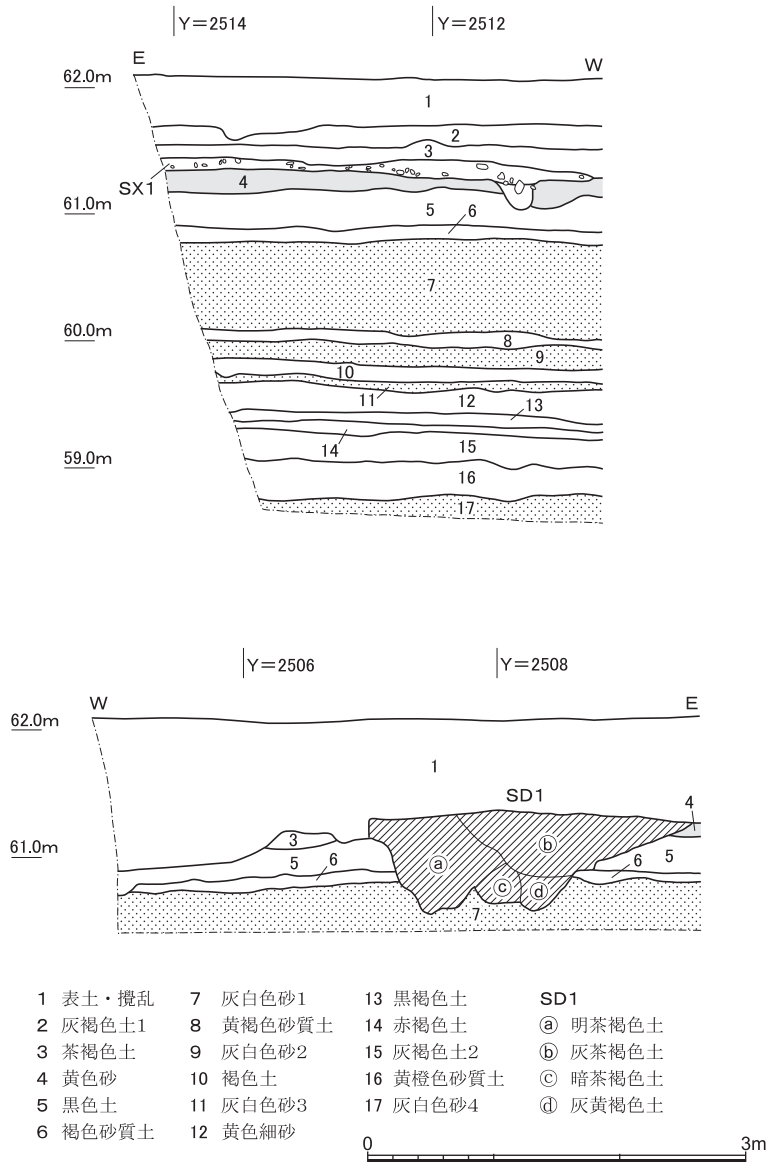


図110 調査区南東部東西畔（上）および北西部北壁（下）の層位 縮尺1/60

は茶褐色土がひろがっていた（図110の下）。

第5層は黒色土で、出土した遺物をふまえると、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての土層であると推断される。第6層の褐色砂質土は、黒色土と第7層の灰白色砂1のあ

いだに位置し、漸移的な様相を示している。

大部分が水成堆積物となる第7層から第12層までを重機でとりのぞいたところ、第13層の黒褐色土、第14層の赤褐色土、第15層の灰褐色土2という土壌化層が調査区全体ではほぼ水平に積み重なっているのを確認しえた。第13層の黒褐色土上面（図版37-1）では、第12層の黄色細砂を含む小さな穴が数多くみうけられた。

とりわけ注目されたのは、第13層の黒褐色土と第14層の赤褐色土のうちに橙色の小さなかたまりがいくつか目にとまった点で、南九州の鬼界アカホヤ火山灰（K-A h）にあたるのではないかと推測された。

そこで、そのあたりの土層を観察用の畔から筒状にサンプルとしてとりだし、株式会社京都フィッシュン・トラックに分析を依頼したところ、第13層と第14層にそれが多く混じっているのが判然となった。くわえて、第15層の灰褐色土2にかんしては、約7300年前の鬼界アカホヤ火山灰〔町田・新井2003〕の降下よりも古い土層であると指摘されるにいたっている。

なお、それより下は、第17層の灰白色砂4を確認して、掘削を終了した。

ちなみに、第13層から第15層にかけて慎重に掘り進めていった結果、第15層の灰褐色土2より土器の細片1点をみつけだすことができた。

(3) 遺 構

本調査区からは、中世と近世の遺構がみつかった。しかしながら、現代における攪乱によって、黒色土以上が残っていたところは、全体の2/5ほどの面積にすぎなかった。また、近世の遺構はピットが5つ確認されただけであった。したがって、ここでは中世の遺構にかんして説明をくわえていくことにする（図111）。

茶褐色土を掘削している過程で、集石S X 1を検出した（図版37-2）。その標高は61.2 mから61.5mのあいだにおさまる。集石のうちには拳大のものもみうけられたけれども、その大半はそれよりも小さなものであった。その上部からF₂類の土師器皿の破片（IV 5）がとりあげられているので、集石S X 1は15世紀以前にもうけられた蓋然性が高い。整地に関係するとも推測されるものの、それが作られた目的については不明とせざるをえない。

黒色土上面で検出された南北溝S D 1は、その南半が現代の攪乱によって破壊されていた。本調査区北西部の北壁を精査した結果、㉔のち㉔・㉔と2度の掘りなおしがおこなわれているのを把握しえた（図110の下）。深さはいずれも40cmほどで、もっとも低いところの標高が約60.5mをかぞえる。集石S X 1よりも前に造作されたことは明らかである

自家発電設備設置にかかわる発掘調査および立合調査

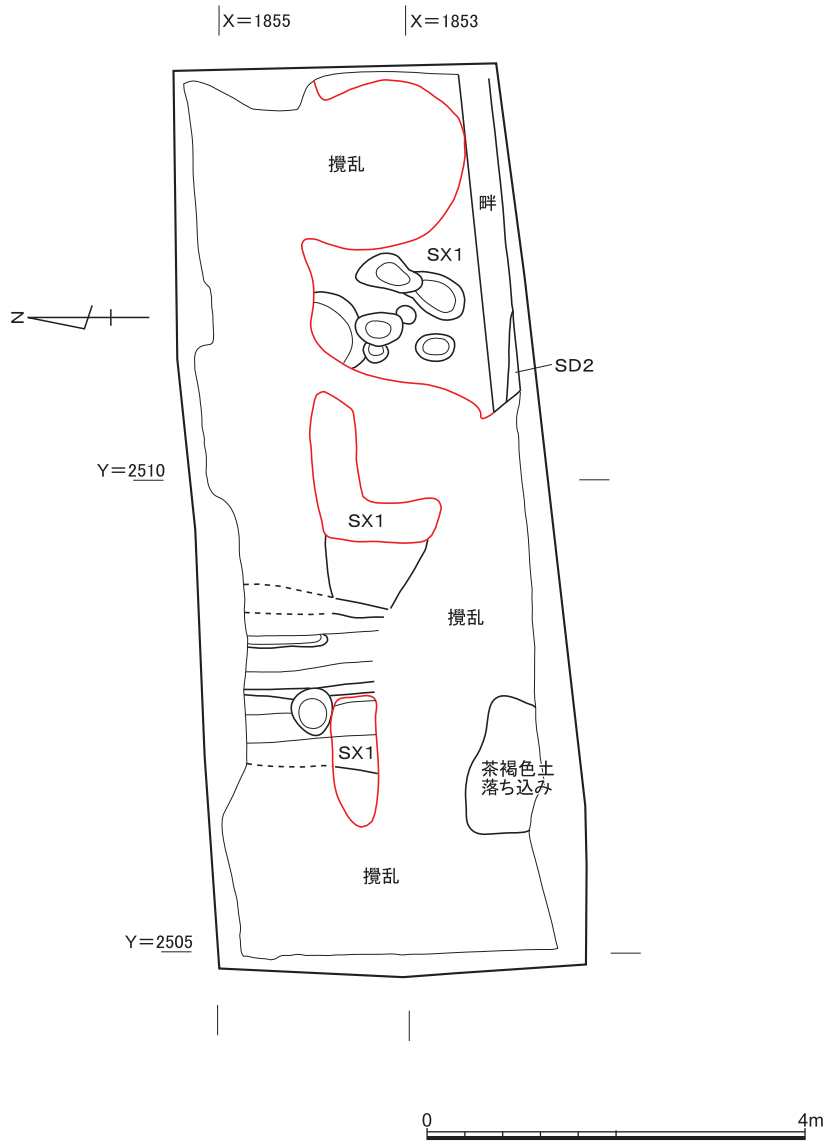


図111 中世の遺構 縮尺1/80

ものの、遺物がまったく出土しなかったがゆえに、その時期をしほり込んでいくことはかなわなかった。

なお、畔の部分、南壁際で集石SX1の下から東西溝SD2が検出された。そのもっとも深いところは調査区外に位置している。なお、本調査区南西部において茶褐色土が落ち

本部構内A Z30区の発掘調査

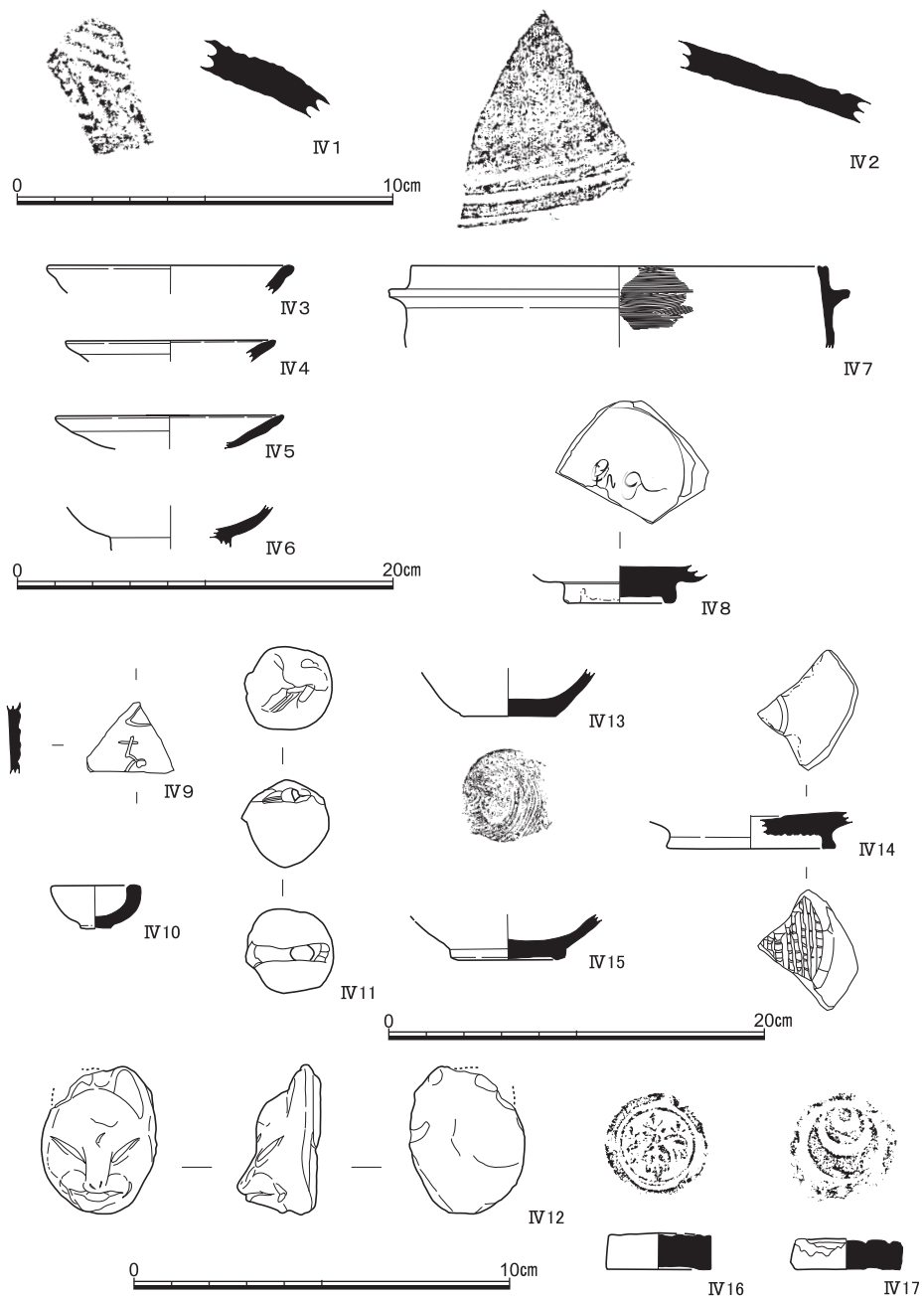


図112 黒色土出土遺物 (IV 1 縄文土器, IV 2 弥生土器), 茶褐色土出土遺物 (IV 3~IV 5 土師器, IV 6 須恵器), 茶褐色土落ち込み出土遺物 (IV 7 瓦器, IV 8 青磁), 灰褐色土出土遺物 (IV 9 陶器, IV 10 磁器, IV 11・IV 12 土製品), 表土・攪乱出土遺物 (IV 13・IV 14 古瀬戸, IV 15 白磁, IV 16・IV 17 泥面子) IV 1・IV 2・IV 9~IV 12・IV 16・IV 17縮尺1/2

込んでいるところがみつがっている。その底部の標高は59.8mくらいとなる。遺構である公算は大きいものの、まわりに攪乱がひろがっており、その性格についてつまびらかにすることができなかつた。しかるに、東西溝SD2のつづきである可能性も十分に残されており、今後この付近を発掘調査するに際しては留意が必要となろう。

(4) 遺物 (図112)

IV1は縄文土器。縄文を充填させている。IV2は弥生土器。下端に2本の沈線が認められる。胎土に石英などの小石が密に含まれている。以上は黒色土より出土。

IV3は2段撫で手法のC₂類の土師器皿。IV4・IV5は1段撫で手法のF₂類の土師器皿。IV6は古代の須恵器杯の底部片。以上は茶褐色土より出土。

IV7は瓦器羽釜。口縁部が直立し、端部断面が方形を呈する。IV8は青磁の底部片。高台は断面四角で、その内部はえぐりがいささか浅い。畳付およびその内側を露胎とする。底部内面に文様がかすかにみうけられる。以上は茶褐色土落ち込みより出土。

IV9は透明の釉がかかる白色の陶器の破片。外面にひらがなが刻まれているのが確認される。蓮月焼であろう。IV10は白色を呈する磁器の紅皿。IV11は土鈴。紐などを通すための孔があげられている。IV12は土製品。狐を象っている。以上は灰褐色土より出土。

IV13は古瀬戸の底部片。底部外面に回転糸切り痕が認められる。IV14は古瀬戸の底卸目皿。中期様式のものであろう。底部内面中央部分が円形にややくぼんでいる。IV15は白磁碗の底部片。高台は低く、外面を露胎とする。IV16・IV17は泥面子。前者の裏面には、えぐった痕跡がみうけられる。以上は表土・攪乱より出土。

(5) 小 結

特筆すべきは、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)の存在が確認された点である。

以前に、本調査区の北東、今出川通の中央部分で発掘調査が実施された結果、厚さ約10cmの黒色泥砂層Ⅲにおいて、それがブロック状に含まれているのが観察されている〔長戸ほか1997〕。黒色泥砂層Ⅲは標高60.1mの位置でほぼ水平に堆積していたということなので、本調査区ではそれよりも0.6~0.8mほど深いところで鬼界アカホヤ火山灰が認められたことになる。はたして、これが混じる土層はどのあたりにまでひろがっているのか、今後の発掘調査のおりには注意が必要となろう。

また、それよりも古い土層から1点の土器の細片が出土しており、縄文時代早期の遺物に相当する可能性が高い。こうした点をふまえれば、将来、その時期の多くの遺物、ひいては遺構の発見が期待できるのではないかと思われる。

2 医学部構内における調査

(1) はじめに

京都大学（南部）基幹・環境整備（自家発電設備）工事にともなう掘削は、医学部・病院構内においては、G 6～G 10（医学部構内）・G 12・G 13（病院西構内）の7地点で計画された（図113）。このうち、遺跡の遺存が予想され面積も広い医学部構内G 9地点（A O 20区）については発掘調査とし、それ以外は、既設建物や管路による破壊の可能性が見込まれたため、掘削時の立合調査とした。ただし、G 6・G 7地点については、隣接地点の発掘調査で重要な成果が得られている履歴を考慮し、遺構が遺存していた場合に備えて専属の作業員を配置し慎重な掘削と記録作業をおこなった。以下、G 9地点の発掘調査成果を中心に、立合調査の所見もあわせて報告する。

なお、本節に関連する調査はすべて伊藤淳史が担当し、内記理の助力を得た。出土遺物の整理・実測と報告作成については、新田和央・鶴来航介・佐々木夏妃の助力を得た。

(2) 医学部構内A O 20区（G 9地点）の発掘調査

概 要 調査地点は、医学部構内東辺に位置し、吉田橋町遺跡に含まれる（図113、図版1-400）。発掘は、土置き場を確保する都合上対象地を南北に2分して北半→南半の順で実施し、調査面積は合計173㎡、調査期間は2013年9月25日から10月16日。

周辺では、南方の134・248地点一帯、北方の74地点東半域では、遺跡地の基盤層である砂や粘土を採取した遺構とみられる不定形な掘り込みが多数見つかっており、中世～近世の遺物が多数出土している。一方で、東方の吉田南構内では、平安時代の鋳造遺構や中世の屋敷地関連の遺構・遺物が密度濃く確認されている。このように、土の採取される空間と居住・生産関連の領域との境界付近に位置し、今回の調査でもいずれかの成果が得られるものと期待された。

調査の結果、現地表面のアスファルト舗装直下で基盤の黄褐色粘質土層上面があらわれる状況であることがわかり、深い攪乱はほとんどなかったにもかかわらず、包含層の多くが削平されていた。しかしながら、北半では中世の井戸状遺構SE 1・SE 2など深い掘り込みの下部が遺存しており、それらを中心に整理用コンテナ5箱におよぶ遺物が出土した。土の採取エリアが調査地周辺に及んでいなかったことや、基盤層の標高が高いと判明した点は、遺跡地周辺の中世の土地利用や旧地形を復元していく上で、重要な知見が得られたものといえる。

自家発電設備設置にかかわる発掘調査および立合調査

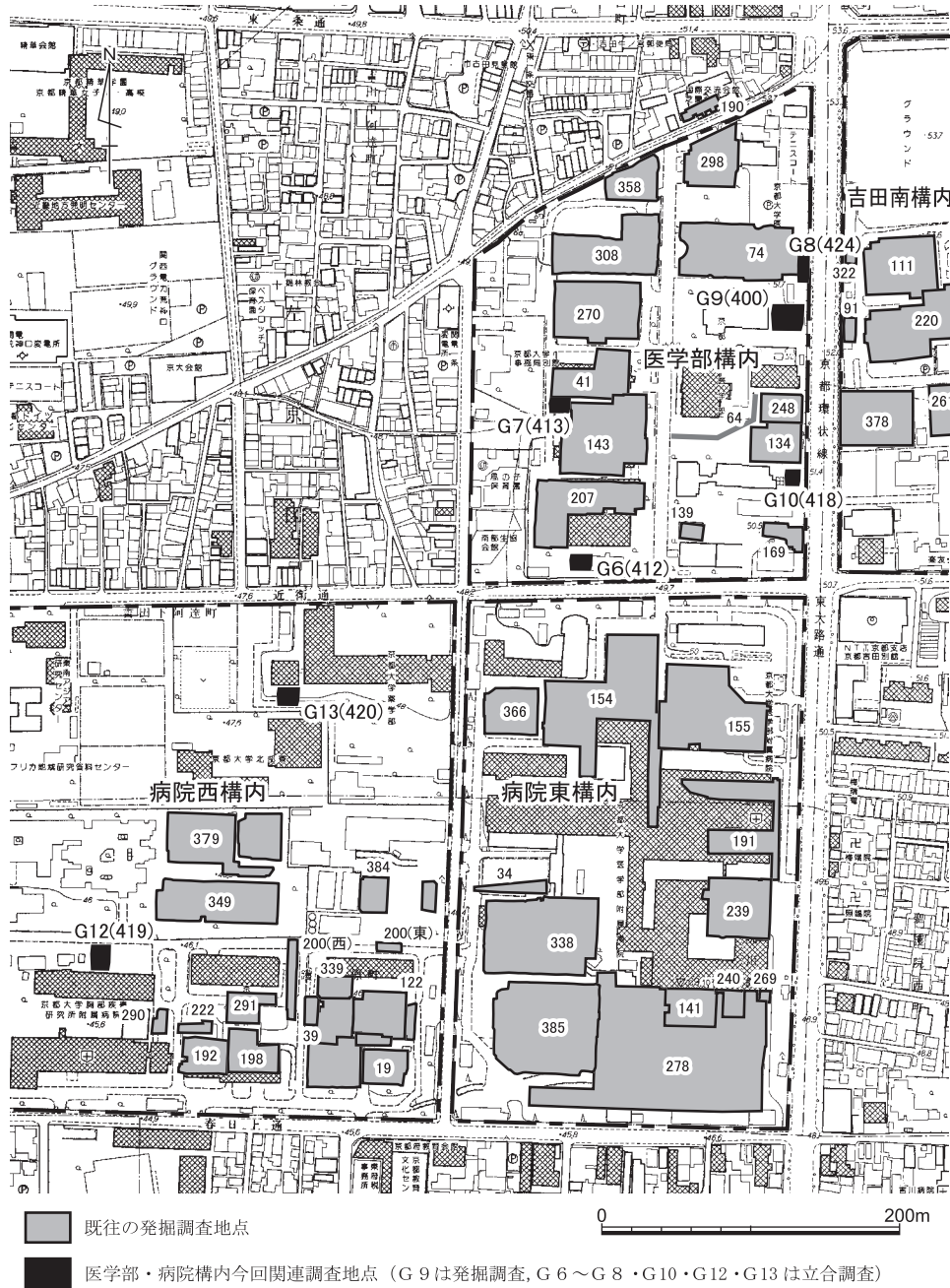


図113 医学部・病院構内関連調査地点の位置 縮尺1/5000

層位 比較的遺存が良好であった調査区北壁の層位を示す（図114）。上述したように、40～50cm程度の表土・攪乱層（第1層）を除去すると、遺構の埋土の部分以外は基盤の黄褐色粘質土層（第4層）があらわれてしまい、水平に堆積する遺物包含層は確認されなかった。黄褐色粘質土層の上面のレベルは最も高い値で51.4mをはかる。

一方、調査区の東半域を中心に、黄褐色粘質土層を切りこむように東西幅5m程度の白色粗砂層（第3層）の堆積が認められる。調査区の東縁部に向かっては漸位的に細砂からシルト質、そして粘土質の土壤へと移行しており、深さは不明である。黄褐色粘質土層の上位部分から縄文後期とみられる粗製土器（図116-IV21）が採集されていることを考慮すると、その時期以降に大規模な自然流路が生じていたものとみられる。SX1・SD1をはじめとした中世遺構の多くは、茶褐色の砂質土を埋土としており、この白色粗砂層のひろがる範囲を中心に確認されている。なお今回は、より東方の吉田南構内では鍵層として確認される、弥生前期末の土石流堆積である黄色砂層は確認されなかった。

遺構 調査区南半では上面の削平が著しかったため、調査区隅付近以外はまったく遺構は確認できなかった。北半では、井戸状の深い中世遺構SE1・SE2、集石SX1、土器溜SX2など、東半部に多く遺構がみつまっている。以下、個別に略述する。

SR1は、黄褐色粘質土層の上面が表土直下で露出する調査区北半西部ではっきりと検出され、白色の粗砂が埋積している小規模な流路。検出面で幅1m深さ50cm程度をはかる。調査区南半では上部が削平され底面付近のみが確認できた。縄文後期かとみられる土器片が出土しており（図116-IV18・IV19）、それ以降に埋積した先史時代の自然流路だろう。

SE1は、上部を攪乱で破壊されていたが、検出時で東西3.5m×南北2.5m程度をはかる隅丸長方形の土坑。埋土の上半を中心に14世紀代の土師器・陶磁器・瓦などが整理箱2箱分出土している。東辺は階段状に掘りこまれ、最終的に検出面から深さ約2mの標高49.2m前後で、2.5m×2m程度の底面に達する。この底面では、四隅に径・深さとも20cm程度の柱穴がはっきりと検出された（図版38-3）。層位で述べたように、調査区東半は白色粗砂の不安定な地盤に中世遺構が掘りこまれており、この遺構も壁面はかなり脆い。このため、崩落を防ぐために板材と組み合わせていた土留め杭の痕跡であった可能性も考えられる。平面の形状や規模から井戸と仮定して調査を進めたけれども、深度が浅く、また明瞭な水溜状施設の痕跡は確認できなかったため、断定するには至っていない。あるいは底面の痕跡などから、簡便な地下室状施設であった可能性もあろう。

SE2は、一辺2mあまりのほぼ正方形の土坑。調査区北半の表土直下で検出され、堅

自家発電設備設置にかかわる発掘調査および立合調査

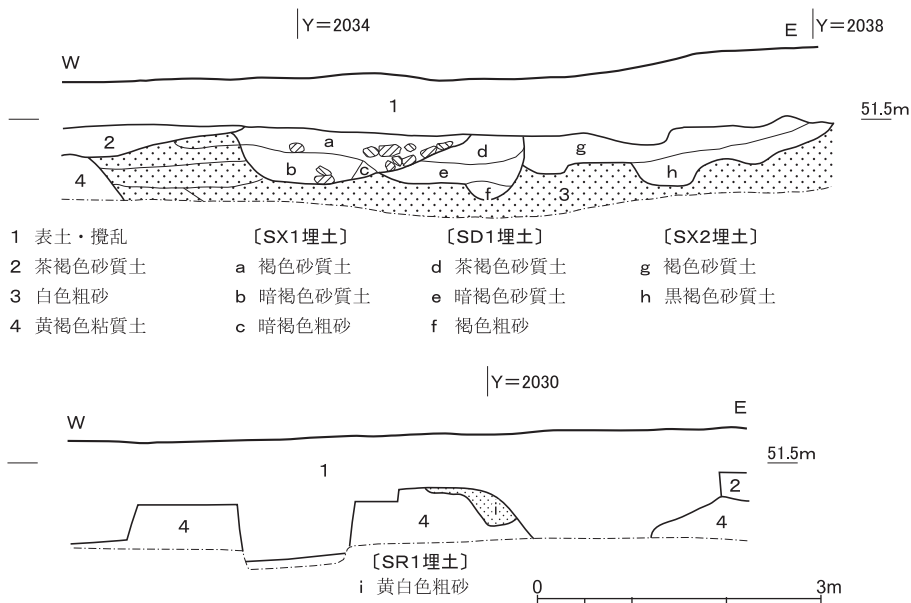


図114 G9地点北壁の層位 縮尺1/80

い黄褐色粘質土層を2m以上掘り抜いている(図版36-4)。土抗の中央やや南寄りに茶褐色土を埋土とする径70cm程度の円形の輪郭が検出でき、多量の14世紀代の遺物を包含している。その周囲は土混じりの黄褐色粘質土で強く締まり、遺物はほとんど含まない。井筒とその掘り形と理解するのが自然と思われる。この井筒かとみられる円形の掘り込みは、底まで2.5mあまりの深さがあり、最底部の標高は48.7m。底面付近は拳大の礫が40cm程度の厚さで密に埋積していた。このように、SE2はSE1に比べて井戸とみるべき特徴を多く備えているけれども、湧水を利用する井戸としてはやはり深度が浅く、また下部にそうした痕跡も確認できなかった。簡便な溜井状施設であった可能性もあろう。

SX1は、20cm程度大までの礫が密集して積み上げられた集石遺構。下部にある南北溝SD1埋積後に構築されている。北壁際で検出され、さらに調査区外へと続いていくため、規模は不明。中世後半期のものであろう。

SX2は、大型の常滑産陶器甕の破片が密集して積み重なっていた土器集積遺構。口縁部の破片などから最低2個体はあることがわかっている(図118-IV79・IV80)。この遺構も北壁際で検出され、さらに調査区外へと続いていくため、規模は不明である。甕の編年の位置からみて、14世紀代の遺構と判断される。

SD1は、調査区東半をやや西に振れる方位で南北にはしる溝。大部分が削平されてし

医学部構内における調査

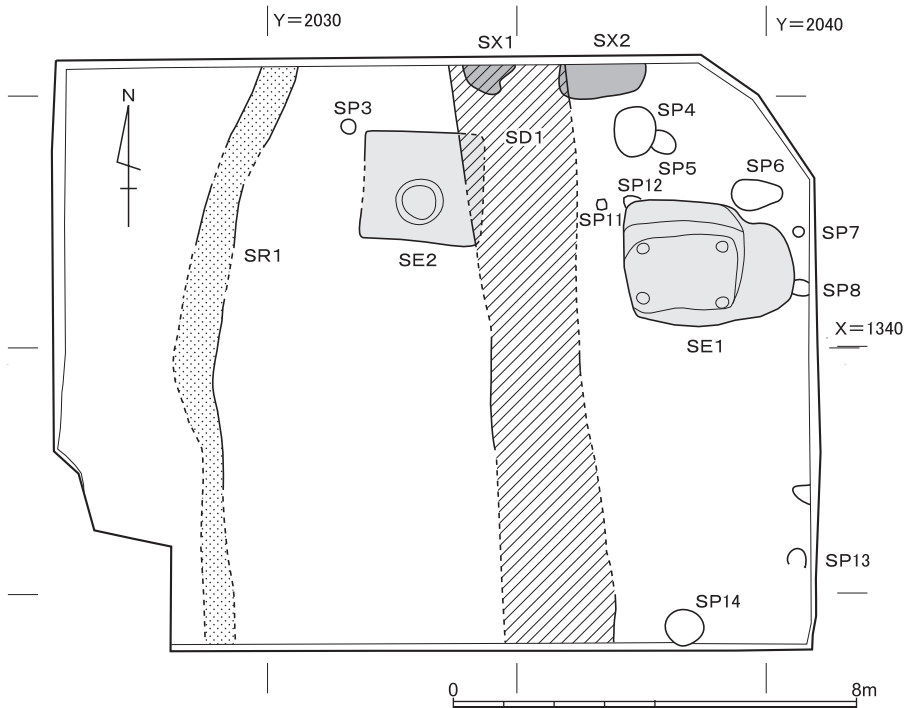


図115 調査区検出の遺構 縮尺1/150

まっているため本来の規模は復元しづらいが、幅2m深さは50cm以上ある断面逆台形のしっかりとした溝であったと想定される。上記のSX1やSX2はこの溝の埋積後に構築されており、一方でSE2の東縁はこの溝に切られている。こうした切り合い関係や、埋土から出土した土師器から、14世紀代に機能した遺構といえる。

以上のほか、削平を逃れた調査区北東域～東縁部にかけて、小規模なピットや浅い土坑SP3～SP14が検出できている。このうち、SP6は、完形に復元可能な13世紀前葉の土師器皿（IV77）が出土しており、中世前半期の遺構と判断しうる。またSP14からは、口頸部を欠いた奈良時代の須恵器壺が出土した（IV22）。古代の遺構であろう。それ以外は、出土した少量の土師器片から判断する限り、いずれも14世紀代以降の中世後半期の遺構であったとみなされる。

遺物（図116～119） 縄文時代～中世の遺物が整理箱5箱分出土している。大半は中世後半期の土器類であり、ほかに縄文および平安時代のものが微量ある。近世の遺物については、今回の調査区では包含層が完全に削平されていたこともあって、全く得られ

ていない。以下、時代・遺構別に説明する。

IV18～IV21は縄文時代の遺物。IV18・IV19はSR1，IV21はSR1東肩の黄褐色粘質土層の上部から，IV20はSE1への混入として出土した。IV18は粗製深鉢の頸部片で，一般に生駒西麓産とされる暗茶褐色で角尖石を多量に含む胎土である。外面は横位の撫で，内面は横位の削痕が認められる。IV21も粗製深鉢の底部で，厚手の器壁で暗褐色を呈する。やや摩滅気味であるが，内外面とも粗い撫で状の調整とみられる。IV19は無節の縄文施文がみられる破片。赤褐色を呈する厚手の器壁である。IV20は，櫛状施文具による斜線が交差する文様が認められる破片。厚手で，暗褐色を呈する。以上は，IV19については時期を特定しにくい，それ以外はおおむね縄文時代後期，北白川上層式期ごろに比定できるものであろう。

IV22～IV25は古代の遺物。IV22はSP13から単独出土した須恵器壺。胴部以下の1/2が残存する。肩部の張る小型の壺で，平城宮・京跡出土須恵器の分類で壺Lとされるものに相当する〔奈文研編2010〕。8世紀代でも後半の製品であろうか。IV23は「て」字状口縁をもつ土師器皿。やや厚手で，口径11cm。IV24は須恵器杯Bの底部。IV25は緑釉陶器。硬質焼成で，削り出しによる円盤状の底部をもつ。全面淡緑色の施釉がみられる。IV23～IV25は中世の遺構SE1やSE2に混入して出土したもので，平安中期，10世紀代ごろのものであろう。

IV26以下は中世の遺物。IV26～IV51はSE1出土遺物。IV26～IV34は赤褐色を呈する土師器で，一段撫で手法E₁類（IV26・IV30・IV31），E₂類（IV27・IV28・IV32・IV33），E₃類（IV29・IV34）がある。IV35～IV41は白色の椀で，大小の2種がある。小椀にはIV40・IV41のように凹み底のものが含まれる。IV42は一段撫で手法の皿だが，内外両面とも被熱にともない著しく黒変している。IV43は土師器ミニチュア椀で，口縁部は片口状になる。黄白色の精良な胎土である。IV44は土師器羽釜。口縁部は逆「く」字状に内折する器形で，端部は肥厚する。頸部には丈の低い鏝がめぐる。大和地域に特徴的とされる中世の土釜であり，搬入品だろう。IV45～IV47は瓦器。IV45は底部に退化した紐状の高台が付される椀。内面の暗文も退化してまばらとなっている。IV46も椀だが，外面から棒状具を押しつけることで六弁の輪花状に成形している。内面の暗文はまばらで，見込みに退化した花卉状のモチーフが描かれる。IV47は羽釜。IV48は灰釉系陶器で，古瀬戸の洗あるいは盤などとされる器形とみられる。内外両面に薄くまだらな灰釉が施釉され，口縁端部は凹線状に仕上げられる。IV49・IV50は白磁皿。IV49の口唇部は露胎している。IV51は剣頭文軒

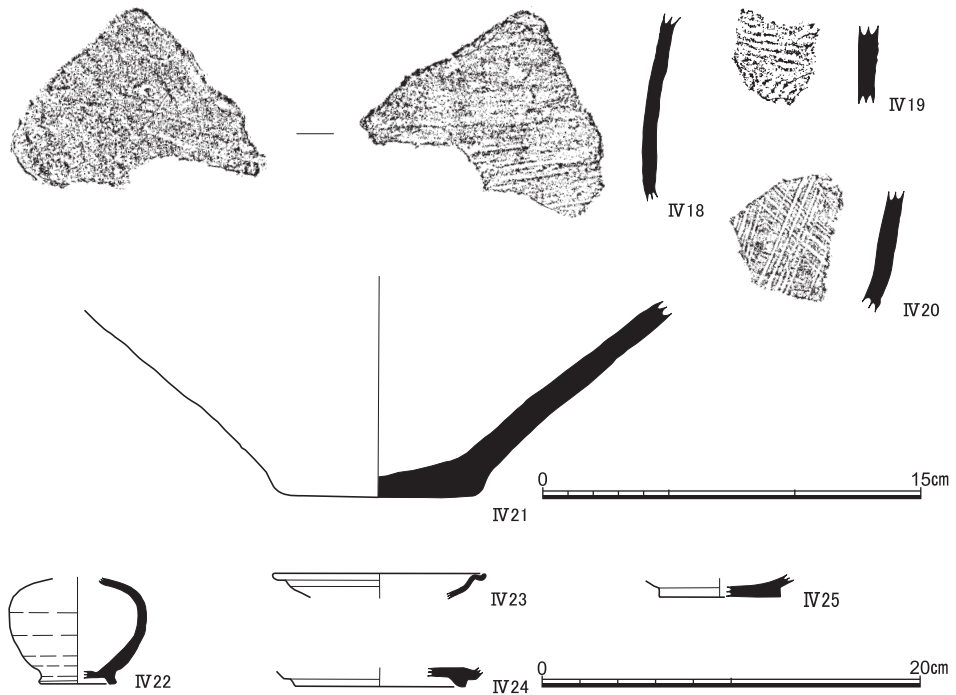


図116 縄文土器 (IV18・IV19：S R 1、IV21：黄褐色粘質土、IV20：S E 1 出土) 縮尺1/3、古代の土師器 (IV23：S E 2 出土)、古代の須恵器 (IV22：S P 13・IV24：S E 1 出土)、緑釉陶器 (IV25：S E 2 出土)

平瓦。剣頭内部の弁が三条の隆線であらわされる。以上の遺物は、土師器碗皿類の編年的位置づけを中心にみた場合、京都市域でのⅦ期中～新段階ごろ〔小森・上村1996〕、14世紀前半代の一群と評価できよう。

IV52～IV72はS E 2 出土遺物。IV52～IV54・IV56～IV58は赤褐色を呈する土師器皿で、IV52・IV56～IV58がE₁類、IV53・IV54がE₂類。IV55は白色を呈する土師器皿で、二段撫で手法C₃類。厚手の器壁で、他の皿と質感が異なる。IV59～IV65は白色を呈する大・小の碗。小碗のIV64・IV65は底部が凹む。IV66は土師器羽釜のミニチュア。黄白色の精良な胎土である。IV67は瓦質焼成の小碗。全面撫で調整で磨きはみられない。IV68は瓦器碗。椀葉型とみられ、厚手で内面のみに粗雑な磨きが施される。退化した紐状の高台をもつ。IV69は灰釉系陶器の小碗。全面横撫で調整で、底部は回転へら起こしの痕跡がそのまま残る。IV70・IV71は白磁。IV70は皿で、口唇部が露胎。IV71は碗の底部であろう。IV72は陶器すり鉢片。明灰色の堅緻な焼成で、8条の卸目を認める。備前産であろう。以上の土器

自家発電設備設置にかかわる発掘調査および立合調査

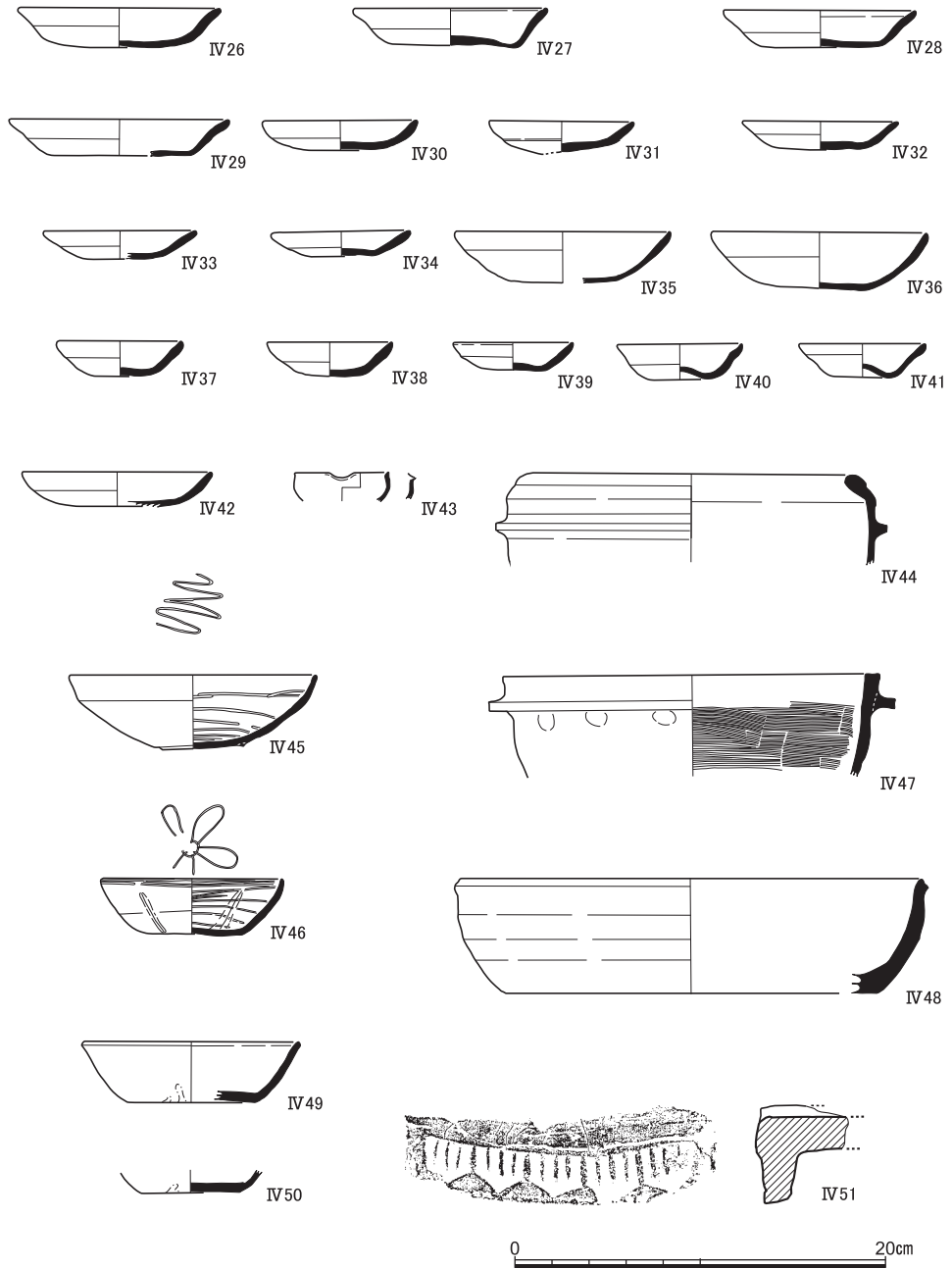


図117 S E 1 出土遺物 (IV26~IV44土師器、IV45~IV47瓦器、IV48灰釉系陶器、IV49・IV50白磁、IV51軒平瓦)

医学部構内における調査

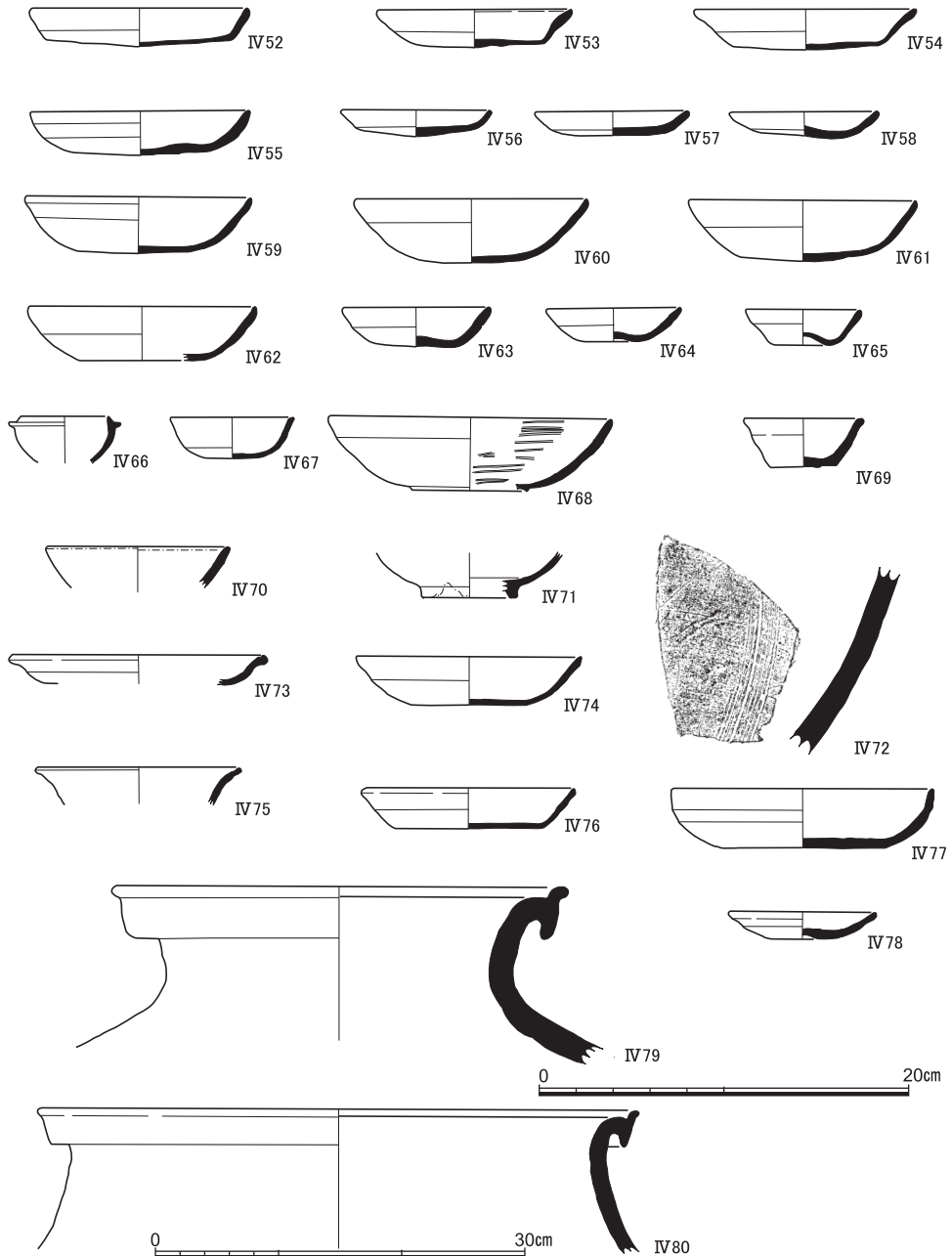


図118 SE 2 出土遺物 (IV52~IV66土師器、IV67・IV68瓦器、IV69灰釉系陶器、IV70・IV71白磁、IV72陶器)、SD 1 出土遺物 (IV73・IV74土師器、IV75白磁)、SP 4 出土遺物 (IV76土師器)、SP 6 出土遺物 (IV77土師器)、SX 2 出土遺物 (IV78土師器、IV79・IV80陶器) IV80のみ縮尺1/6

自家発電設備設置にかかわる発掘調査および立合調査

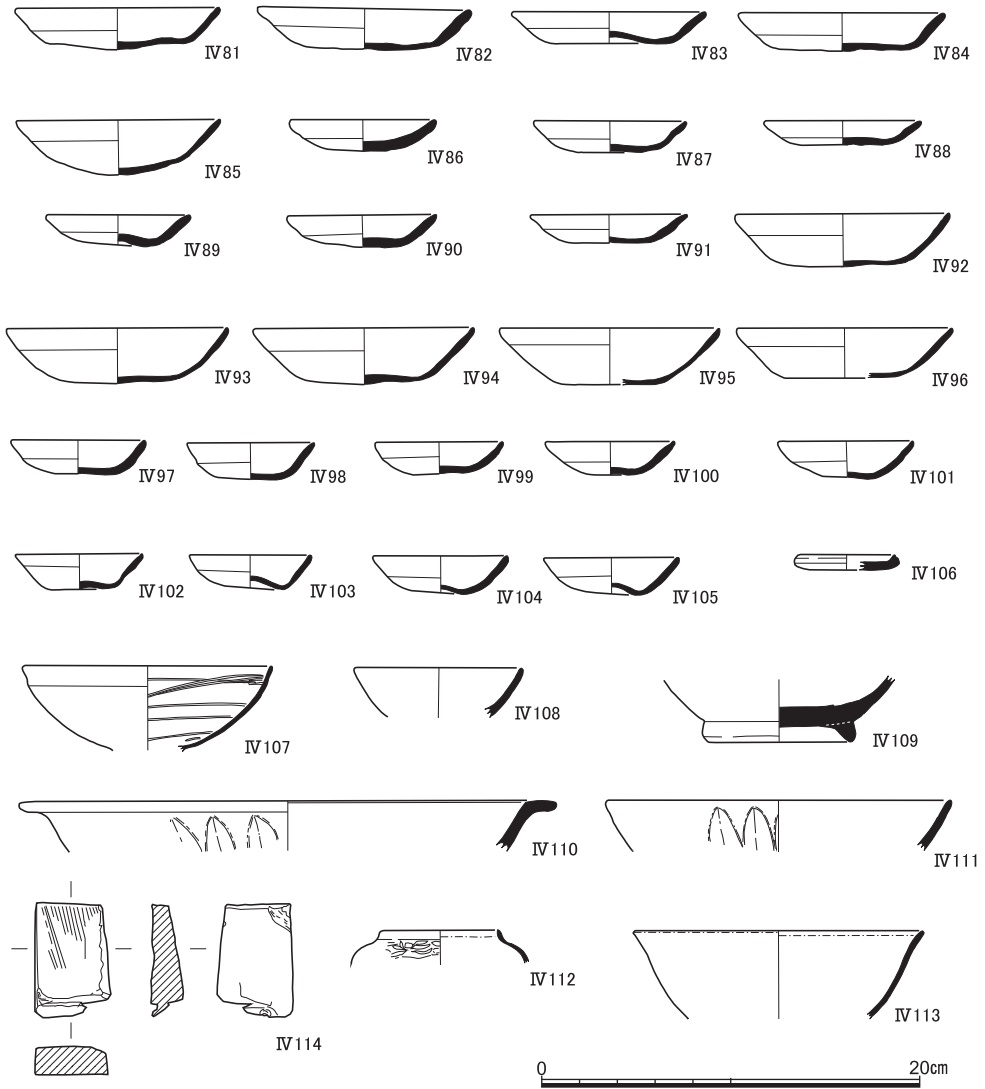


図119 茶褐色土出土遺物 (IV81~IV106土師器、IV107瓦器、IV108・IV109灰釉系陶器、IV110・IV111青磁、IV112・IV113白磁、IV114砥石)

群も、土師器の様相を中心にみるならば、SE1と同様な14世紀前半代のものと評価できる。

IV73～IV75はSD1出土遺物。IV73はE₂類の皿、IV74は白色の椀。IV75は白磁皿で、口唇部が露胎しているもの。IV76はSP4出土遺物で、E₁類の皿。IV77はSP6出土遺物で、二段撫で手法C₃類の皿。厚手でしっかりとした作りである。今回の調査で二段撫で手法の土師器皿の出土はきわめて少ない。IV78～IV80はSX2出土遺物。大小2個体の常滑産の陶器甕IV79とIV80の破片は互いに折り重なって密集しており、接合しない胴部破片は多数ある。これらの口縁部破片はともに上下におおきく肥厚するもので、14世紀代のものといえる。土師器皿E₁類の破片IV78がともに出土している。

IV81～IV114は茶褐色土出土遺物。IV81～IV106は土師器で、IV81～IV86はE₁類、IV87はE₂類、IV88～IV91はE₃類の皿、IV92～IV105は白色の椀。小型の椀の一部は凹み底となる。IV106は赤褐色を呈する受皿。IV107は瓦器椀で、内面にまばらに暗文風の横位ヘラ磨きがある。IV108・IV109は灰釉系陶器で、IV108は小椀、IV109はすり鉢の底部。内面は摩滅している。また底部外面の高台内側は、黒色に変質している。IV110・IV111は青磁で、洗と椀。外面に鎬蓮弁の装飾をもつ。IV112・IV113は白磁。IV112は小壺で、外面に浮き彫り風の装飾を認める。IV113は白磁椀。口唇部のみ露胎している。IV114は砥石。黄白色の軟質の石材である。両平面が使い込まれているほか、小口側は摩り切り後の折り取りを示す痕跡が明瞭に残される。以上の茶褐色土出土遺物は、おおむね13世紀後半～14世紀前半頃にかけてのものを中心としている。これら茶褐色土として取り上げた遺物の多くは攪拌・削平されたSD1の上面付近からの出土であり、本来はSD1の埋土中の遺物であった可能性が高い。

小 結 今回のAO20区(G9地点)の発掘調査は、小面積で攪乱範囲も広がったにもかかわらず、中世の井戸状遺構2基を確認できたほか、多数の遺物が出土した。土の採取エリアが調査地周辺には及んでいなかったことが判明した点は、遺跡地周辺の土地利用を考える上で重要な情報と言えよう。基盤の粘土層を採取した遺構は、南方に位置する248・138地点などでは隙間無く全面に及んでおり、北側の74地点では西半を中心に分布している。今回の成果を考慮すると、密度の濃い中世の土の採取は、調査地よりも南を対象の中心とするとみられ、248地点との間に重要な土地境界が存在している可能性が考えられる。今回調査地の基盤層は、粗砂の埋積する流路が介在するなど、精良さの点で品質が劣るようにも感じられることから、そうした土地条件も反映しているのかもしれない。

上述した基盤の粘質土層からは、縄文後期の土器が複数点採集されている。周辺一帯の地形形成過程を復元する上で貴重な情報となるだろう。また、少量ではあるが奈良・平安時代の資料も出土し、遺構の可能性あるピットが見つまっている点も、東に隣接する吉田南構内にひろがる当該時期の遺跡と関連を示すもので、注目すべき成果といえる。調査地においては、弥生前期末の土石流堆積層である黄色砂層や、その下層の縄文晩期～弥生前期の遺物包含層は確認されなかったものの、基盤層の標高が高い土地条件にあって、古代以前の比較的早い段階で西方の高野川から離水し安定をはじめていたと想定できる。今後医学部構内の東辺一帯においては、こうした古代以前の遺跡の遺存について、とくに吉田南構内に所在する遺跡との関連にも十分留意しつつ、調査を進めていく必要がある。

(3) その他の地点の調査

G 6 地点の調査 207地点の発掘調査においては中世各時期の遺跡と遺物がみつまっているため、慎重な掘り下げをおこなった。しかし調査区西半は基盤の砂礫層まで完全に破壊されており、遺跡は遺存していなかった。このため、包含層の残る調査区東半の北壁沿いと東壁沿いを人力で掘り下げるとともに、それぞれ壁面の地層図作成をおこなった。

調査の結果、現地表下80cm程度まで表土層があり、近世の耕土層である灰褐色土は一部にごく薄くしか堆積が確認されなかった。それ以下は、床土とみられる黄灰色土や暗灰褐色土が40cm程度、その下部に10cm程度の厚さで中世の土師器細片を含む茶褐色土が堆積し、基盤の砂礫層に達する。東壁においては、南側へと10cm程度下る近世の棚田状段差が把握できた。大学設置時の地積図によれば、調査区付近を東西方向にはしる田島の区画が認められる。南へと下る棚田状の景観であったのだろう。これ以外に顕著な遺構の存在は確認できず、中世・近世とも遺物出土は非常に少なかった。

G 7・G 8・G 10地点の調査 いずれも医学部構内で、掘削時の立合調査を実施したが、すべてが攪乱土で遺跡は確認できなかった。建物の隣接した位置であるため、それらの建設の際に掘削されてしまったものと思われる。

G 12・G 13地点の調査 病院西構内に位置する2カ所の調査。G 13地点は既設管路が密集した位置にあたり、攪乱土のみで包含層は確認できなかった。G 12地点では現地表下50cm程度で近世遺物を含む黒灰色土層が30cm程度堆積しているのが確認された。遺跡として登録されている範囲よりも西に外れた位置にあるけれども、349地点などで見つかるような近世遺跡がこの地点まで及んでいることがわかった。今後注意を要する知見であると言えよう。

3 北部構内B A28区の発掘調査

(1) 調査の概要

本調査区は北白川扇状地の末端近く、京都大学北部構内の西南隅に位置し、北白川追分町遺跡の西端にあたる（図版1-405，図120）。周辺地区の調査成果を勘案して、工事区域全域の発掘調査を実施した。調査期間は、2013年12月11日～2014年1月6日。工事区域が発電設備建屋部分とオイルタンク設置部分に分かれていたため、前者を東調査区、後者を西調査区として調査をおこなった。調査面積は、東調査区が31.5㎡、西調査区が19.2㎡、合計50.7㎡である。近世の土器・陶磁器を中心に、整理箱1箱分の遺物を得た。発掘調査と整理作業は千葉豊が担当し、長尾玲が補佐した。

本調査区の東80mに位置する6地点（1972年調査）は、本学構内における組織的な発掘調査の嚆矢となった地点である〔石田・中村・中村1972，伊藤1999b〕。この調査で弥生前期末中期初頭にこの地一帯が土石流堆積物で覆われたこと、2mに及ぶ厚い堆積物の下層に弥生時代前期以前の遺跡が含まれていることが明らかになった。本調査区の北に隣接する208地点の調査〔浜崎ほか1995〕では、6地点で検出した弥生前期の地表面が西側へと広がっていることを明らかにしたほか、弥生時代の地震痕跡、古代の埋納遺構、幕末の土佐藩邸の堀跡を検出するなど、先史時代から幕末に至る土地利用の変遷を明らかにする重要な情報を得ている。

今回の調査地点でも、上記したような先史時代以降の土地利用形態を明らかにすることを目的に調査をおこなったが、とりわけ本調査区が208地点の南端で見つかった土佐藩邸堀跡のすぐ南に位置し、現在の今出川通の北にあたるため、幕末期のこの地点がどのよう

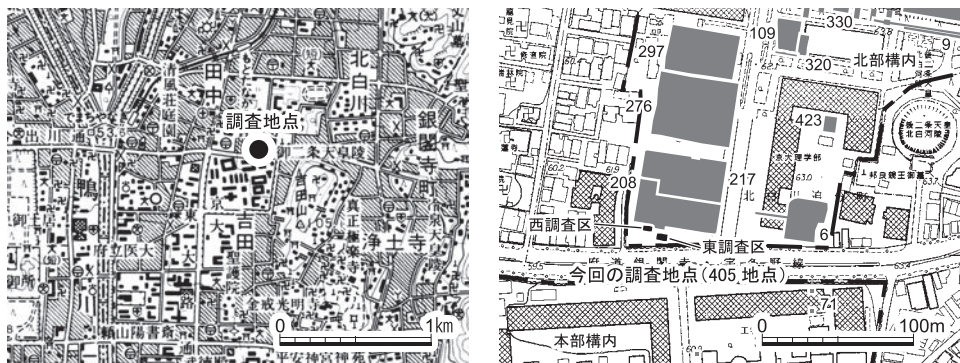


図120 調査区の位置 縮尺 左1/5万，右1/5000

な場所であったのかを解明することを第1の目的とした。

(2) 層 位

図121に、西調査区北壁の層位と東調査区東壁の柱状層位を示す。

基本層序は上から、表土（第1層）、灰褐色土（第2層）、灰赤褐色土（第3層）、茶褐色土（第4層）、黒褐色砂質土（第5層）、黄色砂（第6層）、黒褐色土（第7層）、暗褐色土（第8層）、褐色砂質土（第9層）、黄白色砂（第10層）となる。

第2層の灰褐色土は層厚20cm、第3層の灰赤褐色土は層厚15cm前後の耕作土で、近世から近代のほか、中世に遡る遺物が出土した。第4層の茶褐色土は層厚10～20cm前後で、古代～中世の遺物を包含する。第5層の黒褐色砂質土は層厚15cm前後で、東調査区のみで認められた。第6層との層界は不明瞭で、漸移的に移行している。遺物の包含は認められなかった。

第6層の黄色砂は、北部構内から本部構内、吉田南構内一帯に広く分布する弥生前期末の土石流堆積物。層厚190cmに及ぶ粗砂（6 a層）と、その下位に層厚5cm前後で堆積する微砂（6 b層）に細分できる。第7層の黒褐色土は、層厚10cm前後で腐植にとむ土壤。西調査区では、粘質である。弥生か縄文かの判別も困難な土器の小片が1点出土したのみ

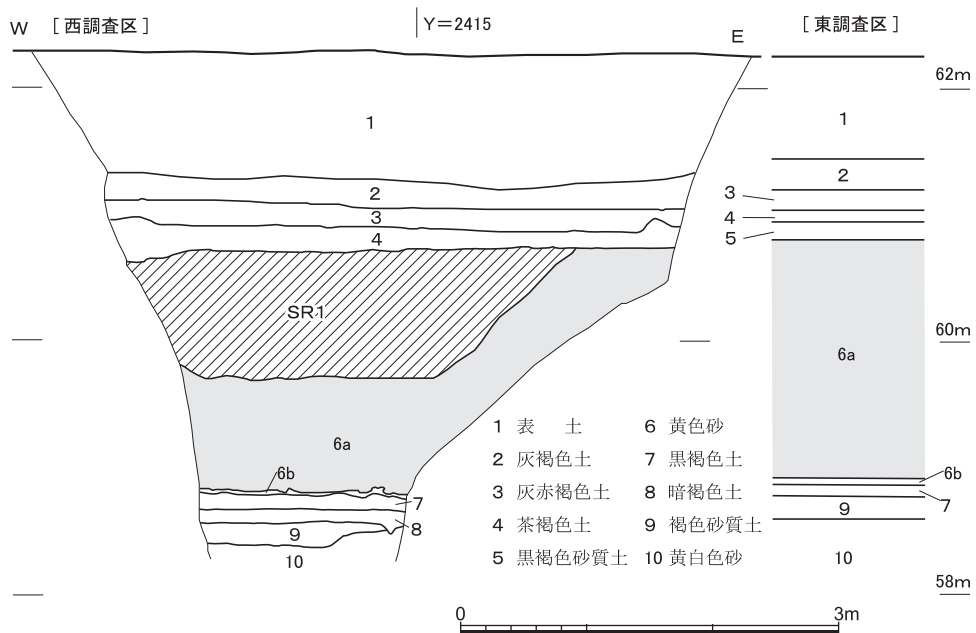


図121 層 位 縮尺1/60

である。第8層の暗褐色土は土壌化層で、第7層から漸移的に変化して第9層の褐色紗質土に漸移的に移行する。第10層は黄白色の砂。掘削深度が地表下4m近くに達したため、安全面を考慮してこの堆積物を確認したのちに調査を終了した。第8層～第10層からは遺物は出土しなかった。

(3) 検出遺構 (図版39, 図122)

図122左に、茶褐色土・灰赤褐色土上面で検出した遺構, 図122右に、黄色砂上面で検出した遺構を示す。

茶褐色土・灰赤褐色土上面検出遺構 東調査区・西調査区ともに、耕作に伴うとみられる円形ないし方形の小穴のみ。

前述したように、本調査区の北に隣接する208地点では、調査区南端で東西に延びる幕末の土佐藩邸堀跡が見つっている。今回の調査区は、この堀跡のすぐ南隣接地点にあっており、今出川通が今回の調査区の南側をはしっている。土佐藩邸の堀が当時の今出川通に接するように設置されたとすれば、旧・今出川通が見つかるのではないかという予測

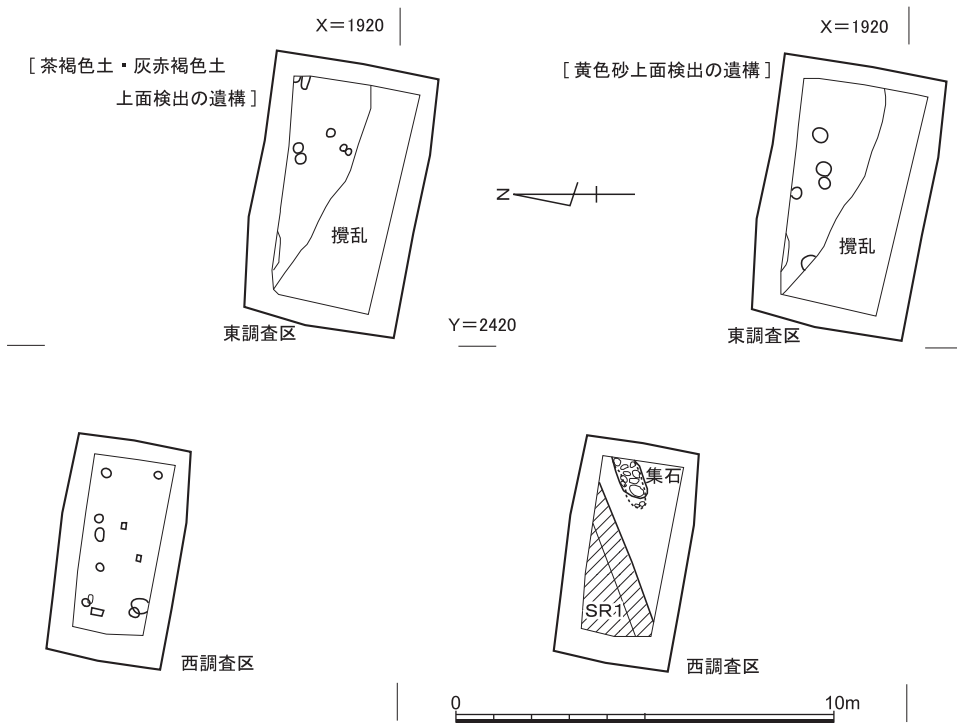


図122 検出遺構 縮尺1/200

のもとに調査を進めたが、道路は調査地区まで及んでいなかったことが判明した。

黄色砂上面検出遺構 東調査区では、直径30～40cm前後のピットが5基みつかった。柱穴の可能性が高いが、狭小な発掘区のため、並びなどの復原はできていない。西調査区では、茶褐色土を掘り下げる過程で、人頭大～小児頭大の礫が集中している部分が見つかった。北東－南西に細長い分布を示し、幅は60cm前後、長さは東端が調査区外へと続くが、確認長で1.5m前後である。掘り込みは確認できなかった。人工的な遺構と判断したが、次に述べるSR1と同一の方向をとるため、自然による集石の可能性も考慮しておく必要があるかもしれない。

茶褐色土を掘削後、黄色砂上面で掘り込んで、北東－南西にはしる自然流路SR1が見つかった。小礫を埋土とし、確認面からの深さ約1m。北側の立ち上がりは調査区外となるため幅は不明であるが、208地点で見つかった自然流路SR1（幅約2.5m、深さ約1m）の延長にあたるものとみてよいだろう。

(4) 出土遺物（図版39、図123）

東調査区出土遺物（IV115～IV123） IV115～IV117は茶褐色土出土遺物。IV115は2段撫でC₃類の土師器皿。IV116・IV117は黒色土器で、IV116は内面のみを黒色処理するA類で、椀の底部。断面三角形の高台がつく。IV117は、球胴の体部に外に開口縁部をもつ甕。内面は刷毛目調整で仕上げる。外面には、煤が厚く付着している。土師器は12世紀代、黒色土器は10～11世紀代のものであろう。

IV118～IV123は灰褐色土出土遺物。IV118は陶器土瓶の底部。IV119は磁器色絵の蓋。IV120は磁器染付の椀。口縁部は端反で口銹としている。IV121は白磁の椀。IV122は磁器染付の仏飯。IV123は蠟石製の石筆。現存長3.8cm。実測図上側から6mm下がった位置に、長軸に対して直交方向に切り込みを入れて頭部を作り出している。

西調査区出土遺物（IV124～IV140） IV124・IV125・IV128は、灰赤褐色土出土遺物。IV124・IV125は13世紀代の土師器皿。いずれも1段撫で素縁のD₃類である。IV128は近世後半の陶器蓋。

IV126・IV127・IV129～IV140は灰褐色土出土遺物。IV126は土師器炮烙。IV127は陶器小皿で、見込みに鉄絵で文様を描く。IV129は陶器蓋。IV130・IV131は陶器灯明皿、IV132は陶器灯明受皿である。IV133は見込みに型押しで竜文を描く珉平焼の皿。IV134は磁器色絵の椀。IV135～IV138は磁器染付の椀。IV135・IV136・IV138は型紙刷りで化学コバルトを用いている。IV139は磁器染付の段重。口縁部の釉を剥ぐ。IV140は、泥面子のうち芥子面

北部構内B A28区の発掘調査

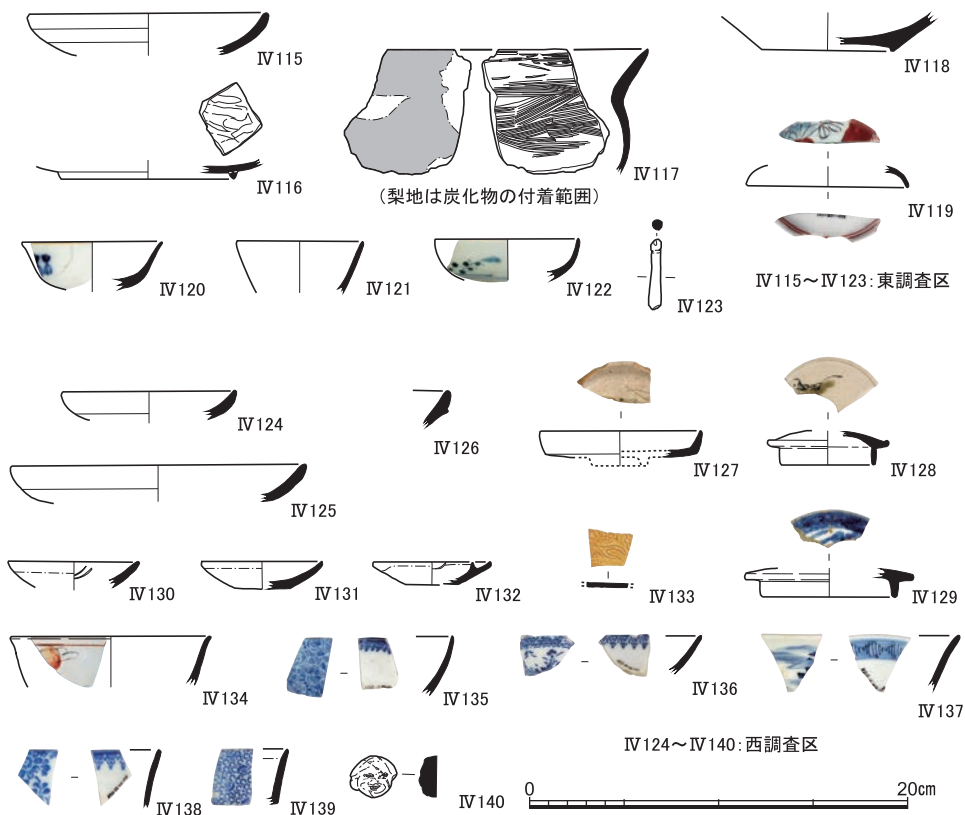


図123 出土遺物 (IV115~IV123東調査区出土, IV124~IV140西調査区出土)

と呼称されるもの。人物の顔を表現し、目・口に彩色を施している。

(5) 小 結

今回の調査で第1の目的とした幕末期の様相に関しては、耕土層の広がり認め、道路状遺構は今回の調査区までは及んでいないことを確認したことにより、土佐藩邸の南限を限る堀と今出川通のあいだには、調査区付近では少なくとも10m前後の空間があり、耕作地が広がっていたことが明らかになった。今出川通は、少なくとも本調査地点より南、現在の通りと重複している可能性が高まった。

また、208地点の調査で検出した平安時代以前に遡る流路の南延長を西調査区で検出することができた。さらに、約2mの厚みをはかる弥生前期末の土石流堆積物の下で、弥生前期の地表面を改めて確認するなど、先史時代以降の土地利用の変遷に関する新たな情報を得ることができた。

4 北部構内の立合調査

北部構内では、前節で報告した発掘調査のほか、自家発電施設設置に関わるものとして、発掘調査1件（図版1-402地点）、立合調査2件（図版1-422・423地点）を千葉豊を担当者として実施した。縄文時代の遺物がまとまって出土した402地点の調査成果については、次年度の報告を予定しているので、ここでは、立合調査2件の成果を報告する。

422地点は北部構内のほぼ中央に位置し、299地点〔富井2008〕の北西端の地点である。423地点は北部構内の南西辺、理学研究科1号館中庭の北端に位置する。両地点とも、管路などにより残存状況がよくなく、遺構検出はできなかったが、層位を記録することができたので、ここで解説しておきたい（図124）。

422地点は、表土の下位に、暗灰褐色土、淡灰褐色土、暗灰褐色土、灰褐色土、赤褐色土、黒褐色土と続き、その下位は砂取穴の埋土となっている。これは、299地点の北壁層位と整合しており、第2層～第7層は中世から近世に及ぶ耕作土と理解できる。

423地点は、既存管路などにより歴史時代の包含層は失われており、表土（第1層）の下位は、弥生前期末の洪水層である黄色砂（第9層）であった。この下位に、やや土壌化した灰褐色粘質土（第10層）が認められ、ここから弥生前期末土器の小片が出土した。

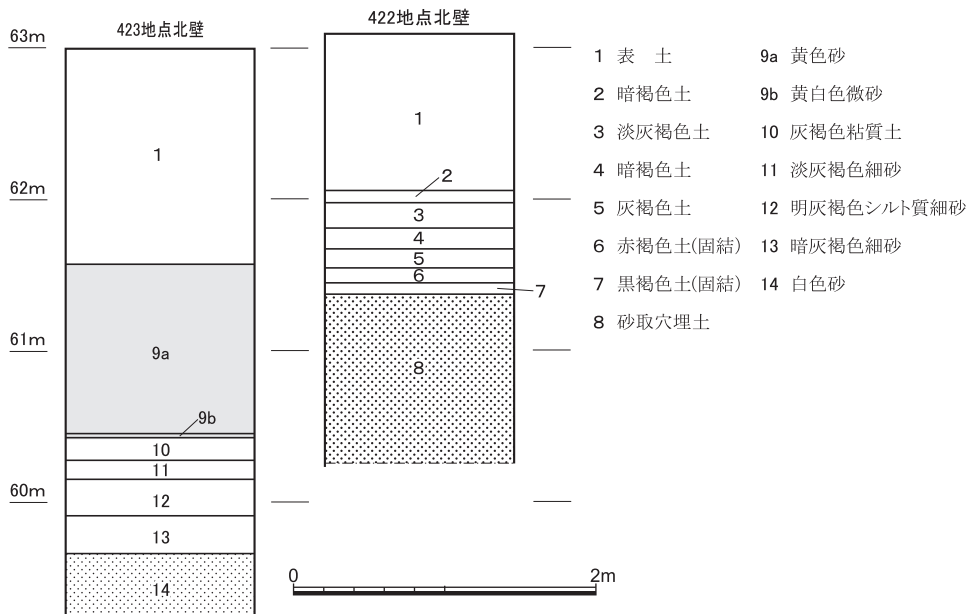


図124 422地点, 423地点の柱状層位 縮尺1/50

参考文献

- 愛知県史編さん委員会編 2012年 『愛知県史』別編 窯業3 中世・近世 常滑系
- 網伸也・東洋一 2013年 「京都大学病院構内A J 16区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2010年度』
- 石田志朗・中村徹也・中村友博 1972年 『京都大学理学部構内遺跡発掘調査の概要』
- 泉 拓良 1977年 「京都大学植物園内遺跡」『仏教芸術』115号
- 五十川伸矢 1988年 「鴨東白河の鋳物工房—京都大学構内の鋳造に関する遺跡—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和60年度』
- 五十川伸矢・浜崎一志・伊東隆夫 1989年 「京都大学病院構内A J 18・A J 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』
- 五十川伸矢・飛野博文 1984年 「京都大学教養部構内A P 22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』
- 伊藤淳史 1999年 a 「京都大学総合人間学部構内A O 22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1995年度』
- 1999年 b 「北白川追分町弥生時代遺跡の展開—北部構内B A 30区（追分地蔵地点）出土資料の紹介—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1995年度』
- 2008年 「京都大学医学部構内A P 18区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2003年度』
- 2010年 「鴨東の古代—古墳～奈良時代の遺跡調査成果からみた集団動態—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2007年度』
- 2014年 「京都大学病院構内A H 15区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2011・2012年度』
- 伊藤淳史・梶原義実・土屋みづほ 2006年 「京都大学吉田南構内A R 24区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2001年度』
- 内田好昭 1998年 「19 京都大学構内遺跡」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
- 宇野隆夫 1981年 「白川北殿北辺の土器・陶磁器」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ』
- 宇野隆志 2010年 「平安京下層・梅小路古墳出土遺物の検討」『立命館大学考古学論集』V
- 梅原末治 1923年 「京都帝国大学農学部敷地ノ石器時代遺跡」『京都府史蹟勝地調査會報告 第5冊』
- 1935年 「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告 第16冊』
- 1936年 「摂津阿武山古墓調査報告」『大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告 第7輯』
- 小野山節・都出比呂志 1973年 『高槻市安満遺跡の条里遺構』
- 小野山節・中村徹也 1976年 『京都大学教養部A 号館増築予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要』
- 梶川敏夫 1993年 「平安京右京八条二坊一二・一三町跡」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成4年度』
- 梶原義実 2003年 「13世紀における「中央官衙系」瓦工の編成と展開—京都大学医学部構内A O 18区の資料から—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1999年度』
- 京都大学広報委員会 1977年 『京都大学建築八十年のあゆみ』

参 考 文 献

- 京都大学総合博物館 2000年 「平成12年度特別企画展リーフレット 幕末の北白川」
- 京大調査会（京都大学農学部構内遺跡調査会・京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会）
1977年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』
- 京大埋文研（京都大学埋蔵文化財研究センター）
1978年 a 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』
1978年 b 『京都大学埋蔵文化財調査報告第1冊—京大農学部遺跡B G 36区—』
1979年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』
1980年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』
1981年 a 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ—白河北殿北辺の調査—』
1981年 b 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』
1983年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』
1984年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』
1985年 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ—北白川追分町縄文遺跡の調査—』
1986年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和58年度』
1987年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和59年度』
1988年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和60年度』
1989年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』
1990年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1987年度』
1991年 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ—京都大学病院構内遺跡の調査—』
1992年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1988年度』
1993年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1989～1991年度』
1995年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1992年度』
1997年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1993年度』
1998年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1994年度』
1999年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1995年度』
2000年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1996年度』
2002年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1997・1998年度』
2003年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1999年度』
2005年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2000年度』
2006年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2001年度』
2007年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2002年度』
2008年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2003年度』
- 京大文総研（京都大学文化財総合研究センター）
2009年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2004～2006年度』
2010年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2007年度』
2011年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2008年度』
2012年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2009年度』
- 京都市文化市民局 2007年 『京都市遺跡地図台帳【第8版】』
- 京都市編 1985年 『史料京都の歴史』 8
- 京都市埋文研（財）京都市埋蔵文化財研究所 2004年 a 『平安京左京北辺四坊—第1分冊（公家町形成前）—』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊）

参 考 文 献

- 京都市埋文研（(財)京都市埋蔵文化財研究所） 2004年 b 『平安京左京北辺四坊一第2分冊（公家町）—本文』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊）
- 楠元哲夫 1992年 「六文銭—古墳における須恵器祭式成立の意義とその背景—」『考古学と生活文化』（同志社考古学シリーズV）
- 桑山章子 2006年 「須恵器転用枕の研究」『近江の考古と地理』（滋賀県立大学）
- 小森俊寛・上村憲章 1996年 「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号（(財)京都市埋蔵文化財研究所）
- 滋賀県教育委員会 1984年 『服部遺跡発掘調査報告書V』
- 重根弘和 2005年 「中世備前焼に関する考察—製作技法から—」『古文化談叢』54
- 島田貞彦 1924年 「京都市北白川追分町発見の石器時代遺跡」『考古学雑誌』第14巻第5号
- 島田貞彦・水野清一・小川五郎・三宅宗悦
1929年 「摂津国高槻「摂津農場」石器時代遺跡調査報告」『人類学雑誌』第44巻第7号
- 高橋克壽 1996年 『埴輪の世紀』（歴史発掘9）講談社
- 高橋克壽 1998年 「古墳築造システムの展開—5世紀における古墳祭式の変革—」『中世古墳の展開と変革—5世紀における政治的・社会的変化の具体相（1）—』（第44回埋蔵文化財研究集会発表要旨集）
- 立石堅志 2007年 「奈良火鉢」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 補遺編』
- 田辺昭三 1981年 『須恵器大成』角川書店
- 千葉 豊 2006年 「考古資料としての連月焼」『京都大学構内遺跡調査研究年報2001年度』
2010年 「京都大学病院構内A F 14区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2007年度』
- 千葉豊・阪口英毅 2005年 「京都大学吉田南構内A N 22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2000年度』
- 千葉豊・富井眞 2011年 「京都大学病院構内A G 13区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2008年度』
- 千葉豊・富井眞・井上智弘 2007年 「京都大学病院構内A E 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2002年度』
- 千葉豊・長尾玲 2014年 「京都大学病院構内A H 12区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 20011・2012年度』
- 富井 眞 1998年 「北白川追分町遺跡出土の縄文土器—北白川C式の成立を考える—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1994年度』
2011年 『破片接合状況の観察による縄文時代の土器の破損原因の理解のための基礎データ集』（平成21～22年度科研費報告書）
- 富井眞・笹川尚紀 2010年 「京都大学病院構内A G 16区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2007年度』
- 長戸満男・電子正彦・尾藤徳行 1997年 「15 京都大学構内遺跡」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
- 中村徹也 1973年 『京都大学農学部総合館周辺埋蔵文化財発掘調査の概要』
1974年 a 『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要I』
1974年 b 『京都大学理学部ノートバイオトロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要II』

参 考 文 献

- 掘調査の概要』
- 1975年 『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅱ』
奈良国立文化財研究所編 2010年 『図説 平城京事典』
- 乗岡 実 2005年 「備前」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 資料集』
- 濱崎一志 1991年 a 「白河の条坊地割」『京都大学埋蔵文化財調査報告 IV』
1991年 b 「埋蔵文化財と地中レーダー探査」『京都大学埋蔵文化財ニュース』 1
- 浜崎一志・千葉豊・伊藤淳史・鎮西清高・伊東隆夫 1995年 「京都大学北部構内B A28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1992年度』
- 菱田哲郎 1996年 『須恵器の系譜』（歴史発掘10）講談社
- 福山敏男 1984年 「鶴岡八幡宮と吉田神社」福山敏男著作集4『神社建築の研究』中央公論美術出版
- 藤岡謙二郎 1973年 「北白川扇状地と教養部構内発見の遺物包含層並びにその先史地理学的意義」『人文』第19集（京都大学教養部）
- 藤澤良祐 2007年 「編年表」『愛知県史』別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系
- 深澤芳樹 1996年 a 「墓に土器を供えるという行為について（上）」『京都府埋蔵文化財情報』第61号
- 深澤芳樹 1996年 b 「墓に土器を供えるという行為について（下）」『京都府埋蔵文化財情報』第62号
- 堀内明博・吉崎神 1986年 「鳥羽離宮跡第106次調査」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
- 町田洋・新井房夫 2003年 『新編 火山灰アトラス—日本列島とその周辺』Ⅱ 第2章2. 1 [1]
東京大学出版会
- 森島康雄 2005年 「瓦器—編年と技術伝播—」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 発表要旨集』
- 山崎信二 2008年 『奈良文化財研究所学報第78冊 近世瓦の研究』奈良文化財研究所
- 山田俊輔 2014年 「須恵器を中心とする土器祭式の系譜」『古代』第133号
- 大和弥生文化の会編 2003年 『奈良県の弥生土器集成 本文編』
- 山本信夫 2000年 太宰府市の文化財 第49集『大宰府条坊跡X V—陶磁器分類編—』
- 横山浩一・佐原真 1960年 『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第1部日本先史時代
- 吉江 崇 2006年 「中世吉田地域の景観復原」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2001年度』
- 吉越昭久 2006年 「京都・鴨川の「寛文新堤」建設に伴う防災効果」『立命館文学』593
- 和田晴吾 1992年 「群集墳と終末期古墳」『新版 古代の日本』第5巻 近畿Ⅰ, 角川書店

京都大学構内遺跡調査要項 2013年度

京都大学文化財総合研究センター規程

- 第1条 この規程は、京都大学文化財総合研究センター（以下「文化財総合研究センター」という）の組織等に関し必要な事項を定めるものとする。
- 第2条 文化財総合研究センターは、文化財の調査・保存・活用に関する総合的教育研究を行うとともに、京都大学敷地内の埋蔵文化財についての調査研究及びその保存のため必要な業務を行う。
- 第3条 文化財総合研究センターに、センター長を置く。
- 2 センター長は、京都大学の専任の教授をもって充てる。
- 3 センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 4 センター長は、文化財総合研究センターの所務を掌理する。
- 5 センター長に事故があるときは、あらかじめセンター長が指名する者がその職務を代理する。
- 6 センター長が欠けたときは、あらかじめセンター長が指名する者がその職務を行う。
- 第4条 文化財総合研究センターに、その重要事項を審議するため、協議委員会を置く。
- 2 協議委員会の組織及び運営に関し必要な事項は、協議委員会が定める。
- 第5条 文化財総合研究センターに、学際的教育研究拠点の構築に係る関係機関等との連携に関する重要事項についてセンター長の諮問に応ずるため、連携協議会を置く。
- 2 連携協議会の組織及び運営に関し必要な事項は、連携協議会が定める。
- 第6条 文化財総合研究センターは、次に掲げる研究科の教育に協力するものとする。
- 文学研究科
工学研究科
- 第7条 文化財総合研究センターに置く事務組織については、京都大学事務組織規程（平成16年達示第60号）の定めるところによる。
- 第8条 この規程に定めるもののほか、文化財総合研究センターの内部組織については、センター長が定める。

センター長

上原 真人（文学研究科教授）

センター教員

千葉 豊

伊藤 淳史

協議委員会委員

上原 真人（文学研究科教授）

富井 眞

千葉 豊（センター准教授）（2013.11.1～）

笹川 尚紀

吉川 真司（文学研究科教授）

内記 理（2013.7.1～）

竹村 恵二（理学研究科教授）

センター教務補佐員

磯谷 敦子

山岸 常人（工学研究科教授）

長尾 玲

西山 良平（人間・環境学研究科教授）

柴垣理恵子

大野 照文（総合博物館教授）

センター事務室

片山 峰夫（文学研究科・事務室長）

菊地 倫世（事務補佐員）（～2014.3.31）

京都大学構内遺跡調査要項

表1 京都大学構内遺跡のおもな調査

(地点は図版1を参照, 文献中「埋」は京大埋文研, 「調」は京大調査会, 「文」は京大文総研をさす。)

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1923	農学部	1・2	濱田耕作	表探・試掘			縄文土器, 石器	梅原23, 鳥田24	
1924	農学部	不明	藤本理三郎				石棒	横山・佐原60	
1929	大阪府満		鳥田貞彦 水野清一 ほか	発掘			弥生土器	鳥田・水野ほか29	
1934	大阪府阿武山古墳		梅原末治	発掘			乾漆棺, 玉飾枕	梅原36	
1935	北白川町		梅原末治				縄文土器, 石器	梅原35	
1956	農学部	3	羽館易	採集			縄文土器		
1971	農学部	4	石田志朗	採集			弥生土器	埋79	
1972	農学部	5		採集			石棒		
1972	大阪府満		小野山節 都出比呂志	事前発掘	1500	条里の溝	弥生土器	小野山・都出73	建物をずらし条里の溝を保存
1972	追分地蔵	6	石田志朗 中村徹也	事前発掘	600		弥生土器	石田ほか72, 伊藤99b	
1972	教養部	7	藤岡謙二郎	工事中採集・実測			縄文土器	藤岡73	
1973	農学部	8	中村徹也	事前発掘	13	瓦溜	縄文土器, 瓦(平安)	埋78b	瓦溜埋戻し
1973	農学部	9	中村徹也	事前発掘	600		縄文土器, 土師器	中村73	
1973	植物園	11	中村徹也	事前発掘	400	縄文後期甕棺・配石遺構	縄文土器	中村74b, 泉77	甕棺・配石遺構の移築を決定
1974	農学部	12	中村徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村74a	
1974	農学部	13	中村徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村75	
1975	教養部	14	小野山節 中村徹也	事前発掘	750		土師器, 瓦, 陶磁器	小野山・中村76	
1976	農学部B E33区	16	泉拓良	事前発掘	900	縄文晩期土壙墓	縄文土器, 土師器, 瓦	調77	
1976	病院A E15区	19	岡田保良	事前発掘	2200	古代・中世溝, 池, 土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器	調77, 埋81a	
1976	植物園B D35区	29	吉野治雄	保存				調77	甕棺・配石の移築復元
1976	病院A H17区	34	泉拓良	事前発掘	200	近世溝, 井戸, 集石	土師器, 瓦	埋78a	
1976	教養部A S23区	35	吉野治雄	試掘	10	溝	縄文土器, 須恵器	埋77	
1976	北学部B J33区	36	宇野隆夫	試掘	10		縄文土器	埋77	
1976	和歌山県瀬		丹羽佑一	事前発掘	300	縄文時代土壙墓	縄文土器, 人骨	埋78a	
1977	病院A F14区	39	岡田保良 宇野隆夫	事前発掘	800	古代護岸, 溝, 井戸	土師器, 瓦, 陶磁器	埋78a, 埋81a	
1977	医学部A O18区	41	泉吉野 拓良治雄	事前発掘	1200	中世溝, 土器溜, 井戸	土師器, 瓦, 陶磁器	埋79, 梶原03	
1977	北気部電	43	吉野治雄 宇野隆夫	立合		溝, 土坑	須恵器, 土師器	埋78a	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1977	教養部 AQ23区 AN23区	48	宇野 隆夫	試掘	80	溝	弥生土器, 土師器, 瓦	埋79	
1977	白河北殿 比定地 AA18区	49	岡田 保良	試掘	40	溝	土師器, 瓦, 陶磁器	埋79	
1978	理学部 BE29区	54	岡田 保良 宇野 隆夫 吉野 治雄	事前発掘	500	弥生中期方形周溝墓, 中世火葬塚	弥生土器, 土師器, 瓦	埋79	火葬塚と方形周溝墓を現地保存
1978	農学部 BG32区	55	泉 拓良 宇野 隆夫	事前発掘	100	縄文土坑, 古代溝, 土坑	縄文土器, 土師器	埋79	
1978	北 部 BG31区	56	泉 拓良 宇野 隆夫	事前発掘	650	縄文晩期埋没林	縄文土器	埋80, 埋85	
1978	本 部 AW28区	57	岡田 保良 吉野 治雄	事前発掘	500	近世白川道	陶磁器, 土師器, 銭貨	埋80	
1978	本 部 AY22区	60	泉 拓良	立合		高野川旧河道		埋79	
1978	医学部 AN19区	64	吉野 治雄	立合		井戸, 溝	弥生土器	埋79, 埋80	
1979	北 部 BH37区	66	吉野 治雄	試掘	46	土坑	土師器, 須恵器	埋80	
1979	教養部 AM24区	69	岡田 保良 清水 芳裕	試掘	8		弥生土器, 土師器	埋80	
1979	本 部 AZ30区	71	西川 幸治 浜崎 一志	試掘	30	中世溝	土師器, 瓦, 瓦器	埋80	
1979	医学部 AP19区	74	清水 芳裕 五十川伸矢 吉野 治雄	事前発掘	2776	中世溝, 井戸, 土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器, 旧石器	埋81 b	
1979	本 部 AT27区	75	五十川伸矢	事前発掘	400	奈良後期堅穴住居, 中世土壙墓, 近世道路	土師器, 須恵器, 白磁	埋81 b	堅穴住居跡を現地保存
1979	北 部 BD32区	79	泉 拓良	立合			瓦(平安)	埋80	
1980	本 部 AT27区	89	泉 拓良	事前発掘	115	近世道路, 堀	土師器, 近世陶磁器	埋81 b	
1980	本 部 AX28区	90	泉 拓良 五十川伸矢 浜崎 一志	事前発掘	1120	近世白川道, 中世土器溜, 井戸, 建物	土師器, 瓦, 陶磁器, 銅鏃(弥生), 磨製石鏃	埋83	
1980	京 都 府 美 月		泉 拓良 清水 芳裕 五十川伸矢 浜崎 一志 吉野 治雄	事前発掘	1468	弥生中期・後期水路, 土坑, 中世土器溜	弥生土器, 打製石斧, 瓦器, 陶磁器	埋83	立合調査中に遺跡を発見, 工事を中断し発掘調査
1980	教養部 AO21区	91	吉野 治雄	事前発掘	112	中世井戸, 土壙墓	土師器, 瓦器, 陶磁器	埋83	
1980	教養部 AM22区	93	吉野 治雄	立合		火葬墓, 石列	瓦器, 陶器	埋81 b	
1980	本 部 実験排水	98	清水 芳裕	立合		流路, 中世土器溜	土師器, 丸瓦	埋83	遺構実測
1981	理学部 BD30区	109	泉 拓良 浜崎 一志	事前発掘	272	古代建物, 近世瓦溜	土師器, 瓦, 陶磁器	埋83	

京都大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1981	和歌山県瀬戸		泉拓良 清水芳裕 五十川伸矢 浜崎一志	事前発掘	1500	弥生土坑、弥生配石、古墳時代土坑	縄文土器、硬玉管玉、弥生土器、製塩土器	埋84	
1981	本部 AX28区	110	泉拓良 清水芳裕 五十川伸矢 浜崎一志	事前発掘	34	中世土器溜	土師器、瓦、陶磁器、硯	埋83	
1981	教養部 AP22区	111	五十川伸也 飛野博文	事前発掘	1716	古墳、古代梵鐘鑄造遺構、中世門・溝・墓	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、鑄型、溶解炉	埋84	梵鐘鑄造遺構を現地保存
1981	京都市山本			分布調査			縄文土器、緑釉陶器、灰釉陶器	埋83	
1982	京都府道中海道		泉拓良	試掘	20	中世土器溜	縄文土器、土師器	埋84	
1982	病院 AF15区	122	清水芳裕 浜崎一志	事前発掘	1028	中世井戸、溝、白磁	埋84		
1982	農学部 BF33区	123	清水芳裕 浜崎一志	事前発掘	787	縄文住居跡、中世土坑	縄文土器、土師器	埋84	
1982	和歌山県瀬戸		泉拓良	事前発掘	297	古代製塩炉	縄文土器、弥生土器、製塩土器	埋84	古代製塩炉を移築保存
1982	本部 AT29区	124	泉拓良 飛野博文	事前発掘	890	中世濠、建物	土師器、瓦器、陶磁器	埋86	
1982	農学部 BE33区	125	泉拓良 飛野博文	事前発掘	803	中世・近世水田、溝	土師器、瓦器、陶磁器	埋86	
1983	医学部 AN20区	134	泉拓良 五十川伸矢	事前発掘	863	中世井戸、土取り穴	須恵器、瓦器、土師器	埋86	
1983	北部 BF31区	135	清水芳裕 五十川伸矢	事前発掘	737	縄文埋没林、古代・中世溝	縄文土器、土師器、緑釉陶器	埋87、富井98	
1983	医学部 AM19区	139	泉拓良 浜崎一志	立合		中世土取り穴	土師器、瓦器、石鍋	埋86	
1984	病院 AF19区	141	清水芳裕 宮本一夫	事前発掘	863	近世池、井戸、野壺	縄文土器、蓮月器	埋87	
1984	病院 AJ19区	142	清水芳裕 浜崎一志	事前発掘	260	中世土坑、近世土取り穴	土師器、近世陶磁器	埋87	
1984	医学部 AN18区	143	五十川伸也 宮本一夫	事前発掘	1920	中世井戸、土取り穴、中世梵鐘鑄造遺構	土師器、瓦器、鑄型	埋88	
1985	北部 BJ31区	153	清水芳裕 宮本一夫	事前発掘	624	古代溝、建物跡、土坑、近世溝	弥生土器、土師器、須恵器	埋88	
1985	病院 AJ18区	154	清水芳裕 浜崎一志 菱田哲郎	事前発掘	4295	中世井戸、近世土取り穴	土師器、近世陶磁器	埋89	
1985	病院 AJ19区	155	五十川伸矢 宮本一夫	事前発掘	3000	中世井戸、近世土取り穴	土師器、近世陶磁器、鑄型	埋89	
1986	教養部 AP25区	167	清水芳裕 宮本一夫 難波洋三	事前発掘	599	中世・近世溝	土師器、近世陶磁器	埋89	
1986	本部 AX30区	168	清水芳裕 難波洋三	事前発掘	330	古代土坑、中世道	土師器、陶磁器	埋89	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1986	医学部 AL20区	169	浜崎一志 難波洋三	事前発掘	331	近世土取り 穴	土師器, 陶磁 器	埋90	
1986	教養部 AL23区	170	清水芳裕 五十川伸矢 浜崎一志	試掘	24	中世溝	土師器, 瓦器, 陶器	埋89	
1987	北部 BD33区	180	浜崎一志 千葉豊	事前発掘	618	土坑, 河川	縄文土器, 土 師器, 須恵器	埋90	
1987	本部 AW27区	181	五十川伸矢 千葉豊	事前発掘	1604	中世土坑, 近世道路	縄文土器, 土 師器, 陶磁器	埋92	
1987	北部 BH35区	182	清水芳裕	試掘	16	包含層	土師器, 須恵 器	埋90	
1987	北部 BD28区	183	清水芳裕	試掘	12	包含層	土師器, 須恵 器	埋92	
1987	本部 AT25区	188	清水芳裕	立合		近世尾張藩 邸堀		埋90	
1988	牛ノ宮町 AR19区	190	清水芳裕 森下章司	事前発掘	216	中世土坑, 近世道路	土師器, 瓦, 陶 磁器	埋92	
1988	病院 AH19区	191	浜崎一志 千葉豊 森下章司	事前発掘	2495	中世土坑, 溝	土師器, 瓦, 陶 磁器	埋93	
1988	病院 AE12区	192	千葉豊 森下章司 宮原恵美子	事前発掘	599	近世道路・ 溝・野壺・井 戸	土師器, 瓦, 陶 磁器	埋93	
1989	病院 AE13区	198	千葉豊 森下章司 宮原恵美子	事前発掘	805	近世井戸・ 野壺・柵列	土師器, 陶磁 器, 瓦	埋93	
1991	病院 AG14区	200	千葉豊 森下章司	事前発掘	394	近世井戸, 道路	土師器, 陶磁 器	埋95	
1991	教養部 AR21区	202	五十川伸矢 浜崎一志 森下章司	立合		中世土坑	土師器	埋93	
1992	医学部 AM17区	207	五十川伸矢 森下章司	事前発掘	1950	中世井戸, 土器溜	土師器, 陶磁 器	埋95	
1992	北部 BA28区	208	浜崎一志 千葉豊	事前発掘	1242	噴砂, 古代 埋納遺構, 近世堀	縄文土器, 土 師器, 陶磁器, 棧瓦	埋95	
1992	和歌山県 瀬戸	213	浜崎一志 伊藤淳史	立合		縄文包含層	縄文土器, 石 器	埋95	
1992	本部 AV30区	214	千葉豊 伊藤淳史	事前発掘	1480	中世砂取り 穴, 近世野 壺	土師器, 陶磁 器	埋97	
1993	北部 BB28区	217	清水芳裕 古賀秀策	事前発掘	1323	古代溝, 中 世土坑	土師器, 陶磁 器	埋97	
1993	本部 AW25区	218	千葉豊 吉井秀夫	事前発掘	929	中世井戸, 濠, 溝, 土坑	縄文土器, 石 器, 土師器, 陶 磁器	埋97	
1993	本部 AU30区	219	伊藤淳史 古賀秀策	事前発掘	1074	弥生流路, 古代溝, 中 世土器溜	弥生土器, 土 師器, 陶磁器	埋97	
1993	総合人間 学部 AO22区	220	五十川伸矢 伊藤淳史	事前発掘	4080	弥生水田, 古代梵鐘鑄 造遺構, 中 世井戸・溝	縄文土器, 弥 生土器, 土師 器, 陶磁器	埋99, 伊藤10	梵鐘鑄造遺 構を現地保 存
1993	北部 BF34区	221	千葉豊 吉田広	事前発掘	1228	古代土器溜 ・土坑, 中世 ・近世道路	土師器, 陶磁 器	埋98	

京都大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1993	病院 A F 12区	222	伊藤 淳史	試掘	113	近世道路	土師器, 陶磁器	埋97	
1994	北 部 B F 30区	229	千葉 豊 古賀 策 吉田 広	事前発掘	530	縄文貯蔵穴, 弥生方形周溝墓, 平安土壇墓	縄文土器, 弥生土器, 土師器	埋98	
1994	本 部 A X 25区	230	古賀 秀策 吉田 広	事前発掘	1314	古代溝, 土器溜	土師器, 陶磁器	埋99	
1995	総合人間学 部 A R 25区	238	伊藤 淳史 古賀 秀策	事前発掘	2092	弥生土器棺墓, 古代溝, 土坑, 中世溝	弥生土器, 土師器, 陶磁器, 瓦	埋00	
1995	病院 A G 20区	239	千葉 豊 吉田 広	事前発掘	2260	縄文流路, 弥生流路, 中世井戸, 近世大溝	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 蓮月焼	埋00	
1995	病院 A F 20区	240	千葉 豊 吉田 広	事前発掘	280	近世池, 土坑	土師器, 陶磁器	埋00	
1995	本 部 A X 26区	241	古賀 秀策 吉田 広	事前発掘	627	中世大溝, 近世柵列	土師器, 陶磁器	埋99	
1996	医学部 A N 20区	248	五十川 伸矢 古賀 秀策	事前発掘	510	縄文流路, 中世土取り穴, 近世井戸	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 陶磁器	埋00	
1996	総合人間学 部 A R 24区	249	伊藤 淳史 富井 眞	事前発掘	330	中世掘立柱建物, 土坑, 溝	弥生土器, 土師器, 陶磁器, 銭貨	埋02	
1997	総合人間学 部 A R 23区	254	伊藤 淳史	立合		中世瓦溜	弥生土器, 土師器, 陶磁器, 瓦	埋02	弥生~中世包含層
1998	総合人間学 部 A N 22区	261	千葉 豊 古賀 策 阪口 英毅	事前発掘	1800	縄文流路, 弥生方形周溝墓, 中世溝・土坑・土器溜・石室	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 陶磁器, 瓦	埋05	
1998	本 部 A U 28区	262	伊藤 淳史 富井 眞	事前発掘	543	中世土坑, 近世柱穴	土師器, 陶磁器, 瓦	埋02	
1998	総合人間学 部 A L 24区	264	古賀 秀策 千葉 豊	立合			弥生土器, 土師器, 陶磁器	埋02	弥生~近世包含層
1999	病院 A F 20区	269	千葉 豊 阪口 英毅	事前発掘	49	中世井戸, 土坑	縄文土器, 土師器, 陶磁器	埋03	
1999	医学部 A O 17区	270	伊藤 淳史 富井 眞	事前発掘	2028	中世井戸, 集石, 土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器	埋03	
1999	本 部 A W 26区	271	千葉 豊 阪口 英毅	事前発掘	1913	古墳時代溝, 中世井戸・瓦溜・溝, 近世溝	縄文土器, 須恵器, 土師器, 瓦, 陶磁器	埋03	
1999	本 部 A X 22区	272	富井 眞	立合		時期不明溝, 高野川系流路攻撃面		埋03	
2000	北 部 B C 28区	276	伊藤 淳史 富井 眞	事前発掘	2158	弥生水田, 中世溝, 近世井戸	縄文土器, 弥生土器, 石器, 陶磁器	埋05	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積 (㎡)	遺構	遺物	文献	備考
2000	本 部 A T 21区	277	千葉 豊 阪口 英毅	事前発掘	2654	終末期古墳 周濠, 中近 世白川道, 尾張藩邸水 路・堀	縄文土器, 土 師器, 陶磁器, 鉄鍋, 馬具, 銭 貨	埋06	
2000	病 院 A E 19区	278	千葉 豊 富井 眞	事前発掘	8000	縄文流路, 古代土坑, 中世井戸, 近世井戸・ 土坑・池	縄文土器, 土 師器, 近世陶 磁器, 瓦	埋07	
2000	病 院 A E 18区	279	阪口 英毅	試 掘	320	近世土坑	土師器, 陶磁 器	埋05	近世包含層
2001	吉 田 南 A R 24区	288	伊藤 淳史 梶原 義実	事前発掘	2375	奈良時代掘 立柱建物, 平安時代経 塚, 古代・中 世溝, 柵	縄文土器, 弥 生土器, 石器, 土師器, 陶磁 器, 青銅製経 筒, ガラス玉, 瓦	埋06	
2001	病 院 A F 12区	290	清水 芳裕 千葉 豊	立 合		近世柱穴	土師器	埋06	
2001	病 院 A F 13区	291	清水 芳裕 千葉 豊	立 合		近世柱穴	土師器, 陶磁 器	埋06	
2001	本 部 A T 25区	293	清水 芳裕 千葉 豊	立 合		近世尾張藩 邸堀		埋06	
2002	本 部 A U 25区	296	伊藤 淳史 梶原 義実	事前発掘	1070	古代埋甕, 中世白川道・ 井戸, 近世 集石	縄文土器, 土 師器, 近世陶 磁器・瓦	埋07	
2002	北 部 B D 28区	297	富井 眞 吉江 崇	事前発掘	1925	縄文堅果集 積・埋没林, 古代道路, 近世野壺	縄文土器, 弥 生土器, 石器, 陶磁器	埋07	
2002	医 学 部 A R 19区	298	千葉 豊 梶原 義実	事前発掘	1200	縄文流路, 中 世道路・井 戸, 近世土取 り穴・野壺	縄文土器, 土 師器, 陶磁器, 近世陶磁器	埋08	
2002	北 部 B F 32区	299	富井 眞 吉江 崇	事前発掘	1900	縄文建物跡・ 焼土・土坑, 中世砂取り 穴, 近世溝 石	縄文土器, 石 器, 土師器, 陶 磁器, 近世墓 石	埋08	
2002	吉 田 南 A R 25区	302	千葉 豊	立 合		古代・中世・ 近世溝	土師器, 陶磁 器, 中世瓦, 磁 器, 将棋駒	埋07	
2003	医 学 部 A P 18区	308	伊藤 淳史 吉江 崇	事前発掘	2125	中世道路・井 戸・溝・集石・ 土器溜・野壺 群, 近世井 戸・溝	土師器, 瓦器, 陶磁器, 瓦, 石 鍋, 近世陶磁 器	埋08	
2003	北 部 B D 33区	311	富井 眞	立 合		砂取り穴, 野壺		文09	中・近世包 含層
2004	北 部 B C 30区	320	千葉 豊	事前発掘	85.5	古代土坑・ 溝, 中世土 坑	縄文土器, 弥 生土器, 土師 器, 陶磁器, 須 恵器, 瓦器	文09	
2005	本 部 B A 22区	321	富井 眞 吉江 崇	事前発掘	98	近世溝・瓦 溜	縄文土器, 石 器, 磁器, 近世 陶磁器・瓦	文09	

京都大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
2005	吉田南 A P 21区	322	伊藤 淳史	事前発掘	48	古墳周溝, 古代土坑・ 溝, 中世土 坑・集石	縄文土器, 土 師器, 陶磁器, 須恵器, 瓦器, 鞆羽口	文09	
2004	美 山	323	清水 芳裕 伊藤 淳史	立 合				文09	
2004	北 部 B C 35区	325	吉江 崇	立 合		古代道路?		文09	297地点の 古代道路と つながるか
2005	本 部 A W 24区	329	伊藤 淳史	立 合		近世白川道, 近世遺物溜, 煉瓦積水路	近世陶磁器	文09	縄文包含層
2005	北 部 B D 30区	330	富井 眞	立 合			縄文土器	文09	中・近世包 含層
2005	本 部 A T 22区	331	千葉 豊	立 合		近世白川道	近世陶器	文09	中世包含層
2006	本 部 A T 26区	335	伊藤 淳史	立 合		近世尾張藩 邸堀	近世陶器	文09	
2006	本 部 A V 24区	336	伊藤 淳史	立 合		中世白川道, 近世遺物溜	土師器, 近世 陶磁器・瓦	文09	
2001 ~ 2004	桂	337	千葉 豊	分布 立合		石垣	埴, 瓦	文09	
2007	病 院 A G 16区	338	富井 眞 笹川 尚紀	事前発掘	3700	中世井戸, 近世井戸・集 石・石垣	縄文土器, 土 師器, 陶磁器, 瓦	文10	
2007	病 院 A F 14区	339	千葉 豊	事前発掘	713	中世道路・ 井戸・集石	縄文土器, 土 師器, 陶磁器	文10	
2007	和歌山県 瀬 戸	346	佐藤 純一	立 合		古代土坑	土師器	文10	古代包含層
2008	西 部 A W 20区	348	伊藤 淳史 笹川 尚紀	事前発掘	2081	中世建物, 玉石集積, 井戸, 瓦溜, 土器溜, 流路	土師器, 陶磁 器, 瓦, 玉石	文12	
2008	病 院 A G 13区	349	千葉 豊 富井 眞	事前発掘	2164	近世井戸・ 野壺・土坑・ 溝	近世陶磁器・ 土製品	文11	
2009	北 部 B H 31区	355	富井 眞 笹川 尚紀	事前発掘	800	縄文加工樹 幹, 弥生土 器片敷, 中 世砂取穴・ 溝, 近世溝	縄文土器, 弥 生土器, 石器, 土師器, 陶磁 器	文12	
2009	本 部 A Z 23区	356	千葉 豊	事前発掘	710	縄文住居, 古墳周溝, 中世土坑	縄文土器, 石 器, 須恵器, 土 師器	文12	
2009	北 部 B G 34区	357	千葉 豊 笹川 尚紀	事前発掘	1152	古代土坑, 中世砂取り 穴・道路・溝・ 野壺, 近世 野壺	縄文土器, 石 器, 土師器, 黒 色土器, 須恵 器, 緑釉陶器, 灰釉陶器, 陶 磁器, 瓦, 銭貨	文13	
2009	医 学 部 A Q 18区	358	伊藤 淳史	事前発掘	824	中世井戸・ 道路・集石・ 土坑・溝・柱 穴, 近世集 石・野壺・溝	土師器, 瓦器, 陶磁器	文13	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の 種類	面積 (㎡)	遺構	遺物	文献	備考
2010	病院 AJ16区	366	網東 伸也 洋一	事前発掘	1085	中世土坑・溝、近世畔野壺・柵・土坑・溝	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦、陶磁器	文13	
2010	吉田南 AL22区	367	笹川 尚紀	立合		中世溝		文13	中世包含層
2010	本部 AT25区	377	伊藤 淳史	立合		尾張藩邸堀	須恵器、陶器	文13	先史～近世包含層
2011	吉田南 AN21区	378	富井 眞 笹川 尚紀	事前発掘	1650	縄文土器破片集中部、弥生方形周溝墓、方形墳、中世溝・井戸・土坑・土器溜・陶器溜・埋甕・集石	縄文土器、弥生土器、古墳時代埴輪・須恵器・土師器・鉄器、中世土師器、瓦器、須恵器、陶磁器、銭貨、瓦、近世陶磁器	第2章	
2011	病院 AH12区	379	千葉 豊	事前発掘	1700	近世道路・水路・井戸・溝	近世陶磁器・土師器・土製品	文14	
2011	本部 AV27区	383	伊藤 淳史	立合		白川道・尾張藩邸堀		文14	
2012	病院 AH15区	384	伊藤 淳史	事前発掘	583	近世道路・水路・井戸	近世陶磁器・土師器、近代病院食器	文14	
2012	病院 AF17区	385	富井 眞	事前発掘	4100	近世段差・溝・井戸・小穴	近世陶磁器・瓦	第3章	
2012	北部 BH38区	391	笹川 尚紀	立合		溝ないしは土坑		文14	先史～中世包含層
2012	本部 AT23区	395	千葉 豊	立合		尾張藩邸堀	近世陶磁器	文14	
2013	本部 AZ30区	397	笹川 尚紀	事前発掘	43	中世集石・溝	縄文土器、弥生土器、土師器、瓦器、須恵器、陶磁器	第5章	
2013	病院 AH13区	398	千葉 豊	事前発掘	960	近世水路・道路・溝・小穴	近世陶磁器・土師器	第4章	
2013	吉田南 AM21区	399	伊藤 淳史 富井 眞 内記	事前発掘	923			整理中	
2013	医学部 AO20区	400	伊藤 淳史	事前発掘	173	縄文流路、中世溝・井戸・集石・土器溜	縄文土器、中世土師器・陶器	第5章	
2013	吉田南 AM21区	401	伊藤 淳史 富井 眞 内記	事前発掘	945			整理中	
2013	北部 BF32区	402	千葉 豊	事前発掘	90			整理中	
2013	本部 AT21区	403	笹川 尚紀	事前発掘	62			整理中	
2013	本部 AU28区	404	千葉 豊 笹川 尚紀	事前発掘	815			整理中	

京都大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
2013	北 部 B A 28区	405	千葉 豊	事前発掘	51	自然流路、 集石	近世陶磁器・ 土師器	第5章	
2013	本 部 A Z 30区	406	笹川 尚紀	立 合				第1章	先史～中世 包含層
2013	本 部 A V 27区	407	笹川 尚紀	立 合				第1章	
2013	本 部 A U 27区	408	笹川 尚紀	立 合				第1章	
2013	医学部 A P 20区	409	伊藤 淳史	立 合				第1章	中世包含層
2013	本 部 A Y 30区	410	千葉 豊 笹川 尚紀	立 合				第1章	
2013	医学部 A P 20区	411	伊藤 淳史	立 合				第1章	
2013	医学部 A L 17区	412	伊藤 淳史	立 合				第5章	中近世包含 層
2013	医学部 A N 17区	413	伊藤 淳史	立 合				第5章	
2013	北 部 B G 36区	414	千葉 豊	立 合				第1章	
2013	病院 A I 12区	415	千葉 豊	立 合				第1章	398地点の 近世道路・ 溝
2013	吉田南 A P 21区	416	伊藤 淳史	立 合		中世溝	中世土師器・ 陶器	第1章	先史～中世 包含層
2013	北 部 B K 30区	417	千葉 豊	立 合				第1章	
2013	医学部 A M 20区	418	伊藤 淳史	立 合				第5章	
2013	病院 A G 11区	419	伊藤 淳史	立 合				第5章	近世包含層
2013	病院 A J 14区	420	伊藤 淳史	立 合				第5章	
2013	医学部 A P 16区	421	伊藤 淳史	立 合			近世磁器	第1章	近世包含層
2013	北 部 B G 32区	422	千葉 豊	立 合				第5章	
2013	北 部 B B 30区	423	千葉 豊	立 合				第5章	
2013	医学部 A P 20区	424	伊藤 淳史	立 合				第5章	
2013	医学部 A P 17区	425	伊藤 淳史	立 合			中世瓦・土師 器	第1章	中世包含層
2013	本 部 A Z 30区	426	千葉 豊 長尾 玲	立 合				第1章	

報 告 書 抄 録

ふりがな	きょうとだいがくこうないせいせきちようさけんきゅうねんぼう2013ねんど							
書名	京都大学構内遺跡調査研究年報2013年度							
編著者名	吉川真司, 千葉豊, 伊藤淳史, 富井眞, 笹川尚紀, 内記理, 長尾玲							
編集機関	京都大学文化財総合研究センター							
所在地	〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町 TEL 075-753-7691							
発行年月日	2015年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査 期間	調査 面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よしだみなみこうない 吉田南構内 A N21区	きょうとふきやうとしせきちようく 京都府京都市左京区 よしだにほんまつちよう 吉田二本松町	26100	-	35° 01' 11"	135° 46' 55"	20110216) 20111116	1700	国際交流会館新営
びやういんこうない 病院構内 A F17区	きょうとふきやうとしせきちようく 京都府京都市左京区 しやうごいんかわらまち 聖護院川原町	26100	-	35° 0' 57"	135° 46' 45"	20120918) 20130906	4100	先端医療病棟新営
びやういんこうない 病院構内 A H13区	きょうとふきやうとしせきちようく 京都府京都市左京区 しやうごいんかわらまち 聖護院川原町	26100	-	35° 01' 01"	135° 46' 38"	20130530) 20130805	960	総合先端基盤研究棟
ほんぶこうない 本部構内 A Z30区	きょうとふきやうとしせきちようく 京都府京都市左京区 よしだほんまち 吉田本町	26100	-	35° 01' 30"	135° 47' 12"	20130507) 20130524	43	自家発電設備新営
いがくぶこうない 医学部構内 A O20区	きょうとふきやうとしせきちようく 京都府京都市左京区 よしだちばなちよう 吉田橋町	26100	-	35° 01' 13"	135° 46' 52"	20130925) 20131016	173	自家発電設備新営
ほくぶこうない 北部構内 B A28区	きょうとふきやうとしせきちようく 京都府京都市左京区 きたしらかわおいはちちよう 北白川追分町	26100	-	35° 01' 32"	135° 47' 07"	20131211) 20140106	51	自家発電設備新営
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
吉田南構内 A N21区	散布地	縄文～ 弥生前期			縄文土器・弥生土器		異形土器の出土	
	墓地	弥生時代 中期	方形周溝墓1		弥生中期土器		異系統の3個体が共伴	
	墓地	古墳時代	方形墳2		円筒埴輪, 形象埴輪, 須恵器, 土師器, 鉄器		人物, 馬形, 家形からなる 形象埴輪と, 朝顔形を 含む円筒埴輪の出土。鉄 製U字形刃先の出土。配 列された須恵器の出土。	
	邸宅跡	鎌倉～ 室町時代	井戸3, 埋甕1, 溝・ 土坑・土器溜・陶器溜 ・集石・柱穴多数		土師器, 瓦器, 須恵器, 陶磁器, 青銅製品, 石 製品, 銭貨, 瓦		石敷をともなう埋甕の検 出。墨書を有する華南三 彩盤・乙訓在地形土師器 の出土。大地震痕跡。	
	田畑	江戸時代	溝1, 野壺1, 杭穴多 数		陶磁器, 印			

病院構内 A F17区	田畑	江戸時代	井戸3, 土器溜1, 瓦溜5, 集石1, 胞衣壺3, 野壺1, 溝・土坑多数	陶磁器, 埴埴, 瓦, 砥石	中近世の氾濫ないし土石流。江戸時代の一分判の出土。
病院構内 A H13区	散布地	江戸時代	道路3, 水路1, 集石1, 井戸1, 野壺1, 溝多数	陶磁器, 土師器, 砥石, 硯, 土製品, 瓦	聖護院村と吉田村の村境を確認
本部構内 A Z30区	散布地	縄文～ 弥生時代		縄文土器・弥生土器	鬼界アカホヤ火山灰の確認
	散布地	中世	集石1, 溝2	土師器, 瓦器, 青磁	
	田畑	江戸時代		陶磁器, 土製品	
医学部構内 A O20区	散布地	縄文～ 室町時代	流路1, 井戸2, 溝1, 集石1, 土器溜1	縄文土器, 土師器, 瓦器, 陶磁器	基盤粘土層の土取りが及んでいないことを確認
北部構内 B A28区	散布地	弥生～ 江戸時代	流路1, 集石1, 小穴多数	陶磁器, 土師器, 黒色土器	平安時代以前の流路を確認

緯度・経度は日本測地系（第Ⅵ座標系）にもとづく

京都大学構内遺跡調査研究年報 2013年度

目 次

- 1 京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点
- 2～30 京都大学吉田南構内 A N 21 区の発掘調査
- 31～32 京都大学病院構内 A F 17 区の発掘調査
- 33～36 京都大学病院構内 A H 13 区の発掘調査
- 37 京都大学本部構内 A Z 30 区の発掘調査
- 38 京都大学医学部構内 A O 20 区の発掘調査
- 39 京都大学北部構内 B A 28 区の発掘調査

Y = 1500 (構内座標)
y = -20500 (国土座標)

Y = 2000
y = -20000

Y = 2500
y = -19500

Y = 3000
y = -19000

X = 2500
x = -107500
(構内座標)
(国土座標)

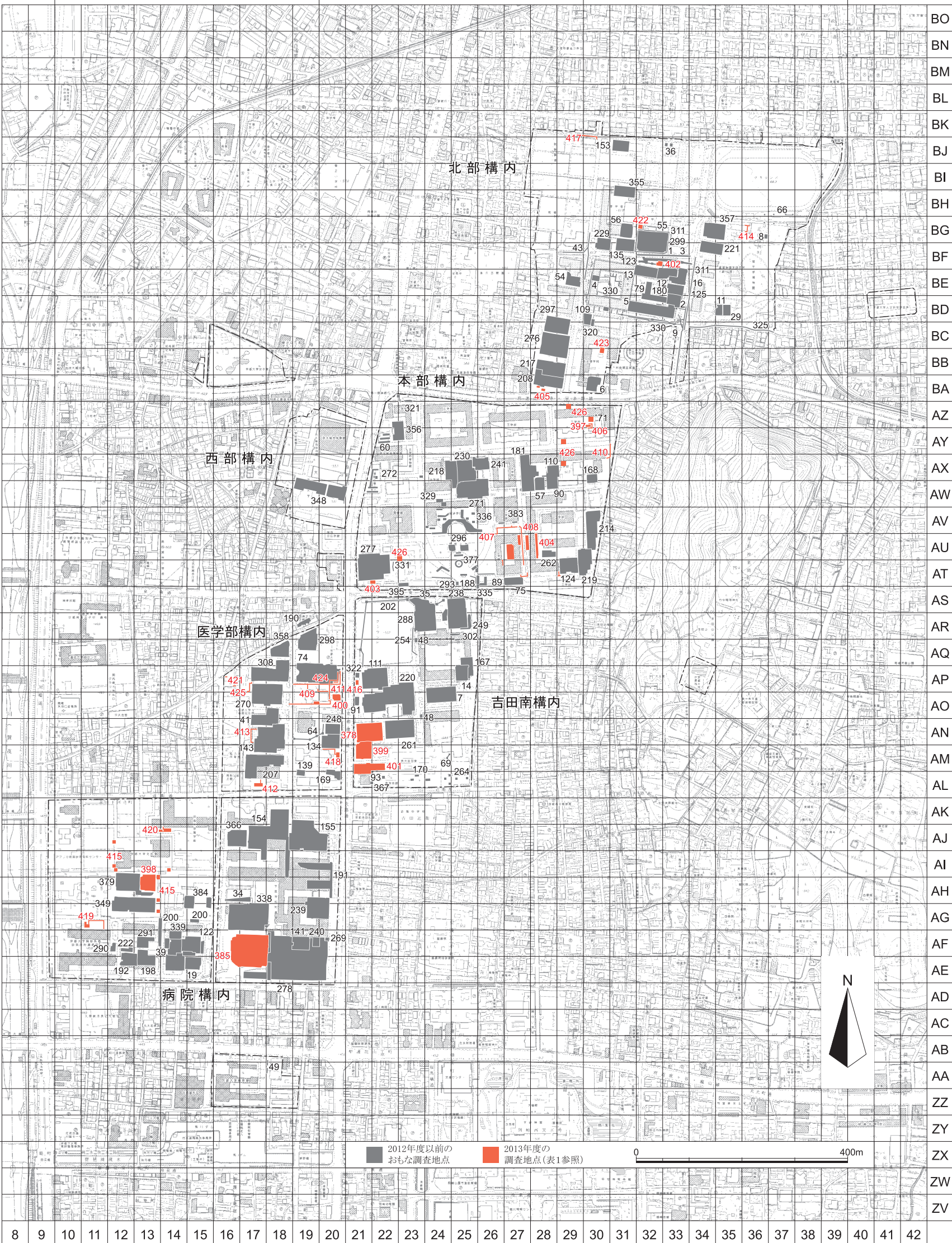
X = 2000
x = -108000

X = 1500
x = -108500

X = 1000
x = -109000

X = 500
x = -109500

BO
BN
BM
BL
BK
BJ
BI
BH
BG
BF
BE
BD
BC
BB
BA
AZ
AY
AX
AW
AV
AU
AT
AS
AR
AQ
AP
AO
AN
AM
AL
AK
AJ
AI
AH
AG
AF
AE
AD
AC
AB
AA
ZZ
ZY
ZX
ZW
ZV

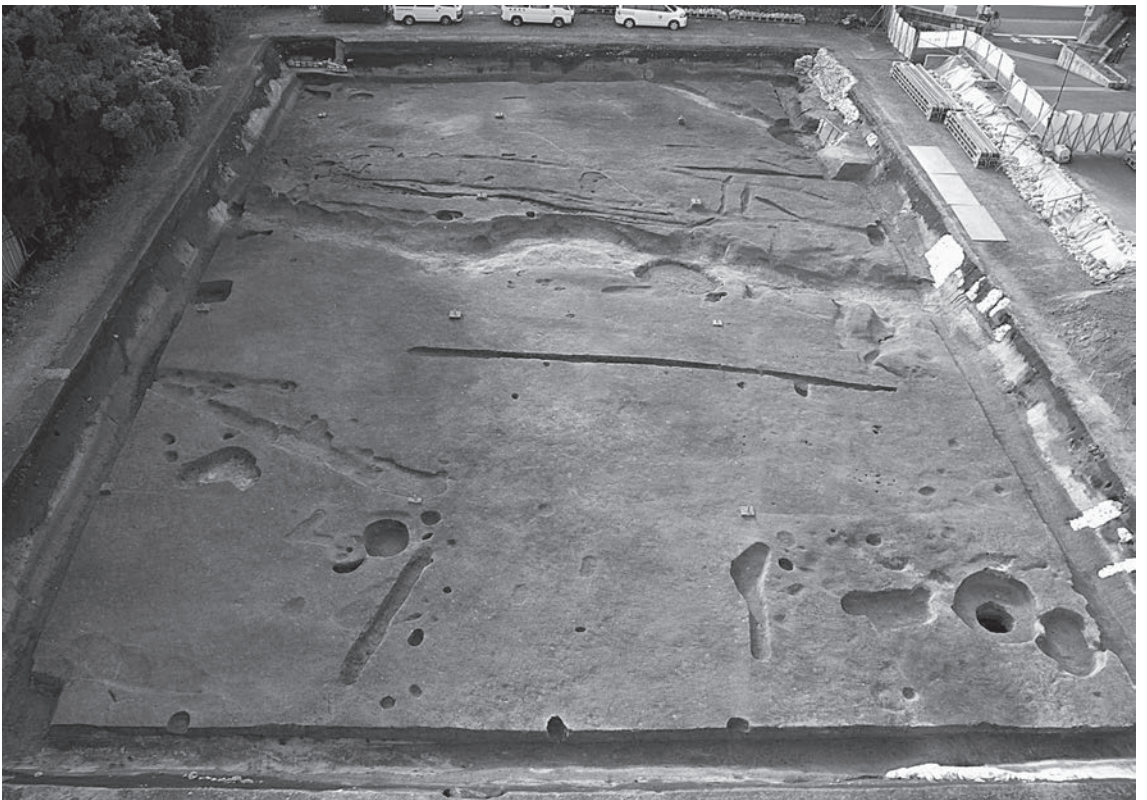


■ 2012年度以前のおもな調査地点
■ 2013年度の調査地点(表1参照)

0 400m



1 暗茶褐色砂質土掘削後の全景（東から）



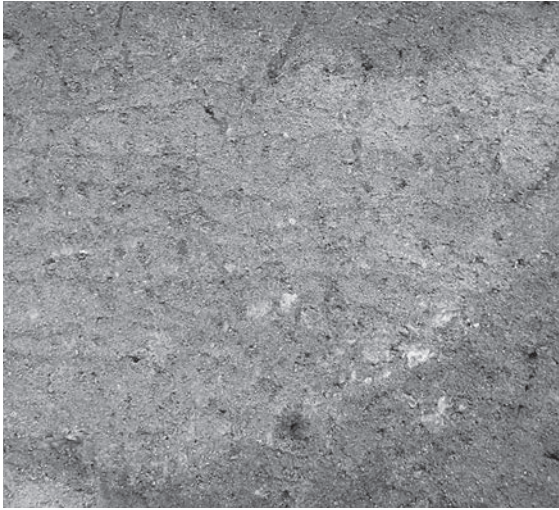
2 灰色粘質土掘削後の全景（東から）



1 黄色砂除去後の全景（東から）



2 茶褐色土掘削後の全景（北から）



1 中世遺構埋土の堆積層の乱れ（北から）



2 南壁東辺の地層変形（南から）



3 黄色砂下部の弥生土器出土状況（北から）



4 調査区西南辺の噴砂（南から）



5 調査区東南辺の噴砂と地層変形（東から）



6 調査区西壁の地層変形（東から）



1 SX48 (南から)



2 方形周溝墓の弥生土器出土状況 (南西から)



3 方形周溝墓の弥生土器出土状況 (北から)



4 方形周溝墓の弥生土器出土状況 (北から)



5 SD15の弥生土器出土状況 (南西から)



6 調査区東南隅の弥生土器出土状況 (北から)



1 8号墳の検出状況（東から）



2 8号墳東周溝の埴輪出土状況（北から）



3 8号墳南周溝の埴輪出土状況（東から）



1 8号墳東周溝の遺物出土状況（西から）



2 8号墳東周溝の遺物出土状況（北から）



3 8号墳東周溝の遺物出土状況（西から）



4 8号墳東周溝の遺物出土状況（北から）



5 8号墳南周溝の赤色顔料出土状況（西から）



6 8号墳南周溝の遺物出土状況（西から）



1 8号墳東周溝の断面（北から）



2 8号墳南周溝の家形埴輪出土状況（北から）



3 8号墳南周溝の家形埴輪出土状況（北から）



4 8号墳南周溝の円筒埴輪出土状況（北から）



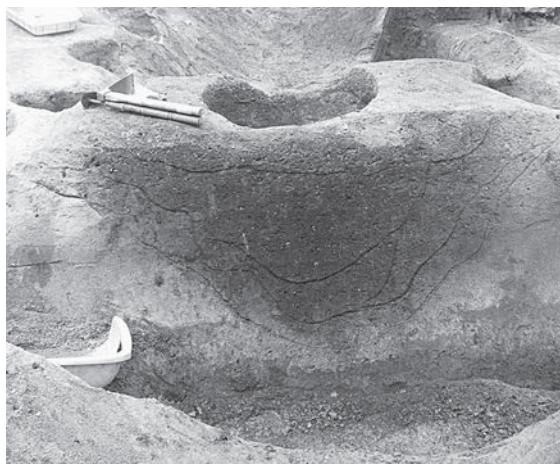
5 8号墳東周溝南辺の埴輪出土状況（南から）



6 8号墳東周溝の円筒埴輪出土状況（東から）



1 9号墳の検出状況（東から）



2 9号墳北周溝の層位（東から）



3 9号墳北周溝の遺物出土状況（南から）



4 9号墳北周溝の遺物出土状況（北から）



5 9号墳北周溝の遺物出土状況（南から）



6 9号墳北周溝の遺物出土状況（南から）



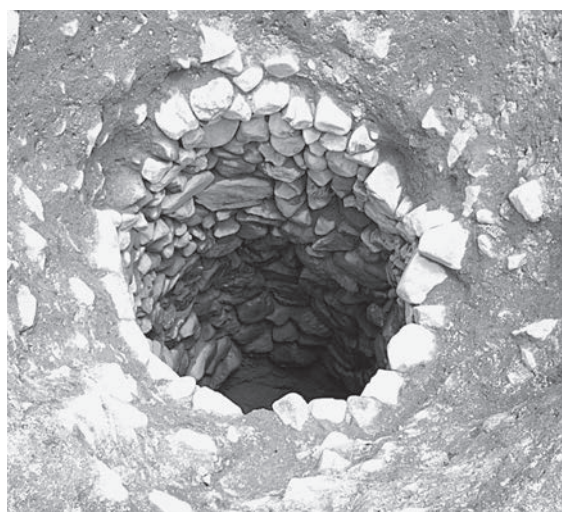
1 井戸SE11 (南西から)



2 土器溜SX46 (東から)



3 溝SD2 (北から)



4 井戸SE1 (西から)



5 井戸SE7 (東から)



6 土器溜SX1 (北から)



1 土器溜 S X 2 (南から)



2 土器溜 S X 11 (西から)



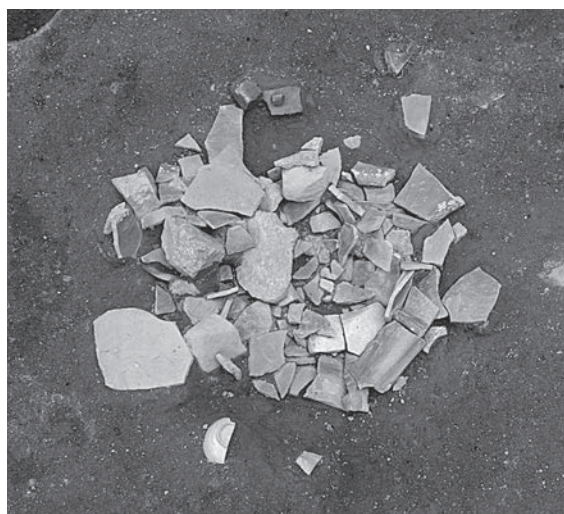
3 土器溜 S X 30 (西から)



4 土器溜 S X 36 (南から)

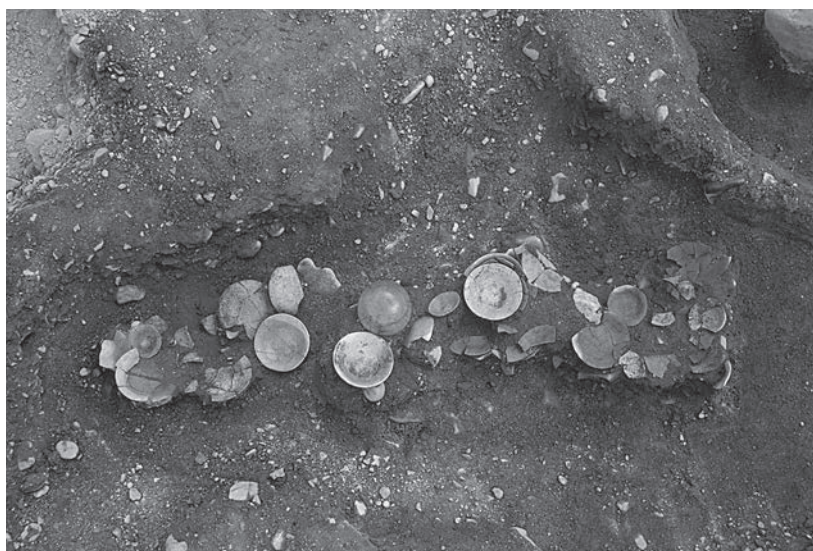


5 陶器溜 S X 17 (南から)



6 陶器溜 S X 20 (西から)

1 土器溜 S X28 (北から)

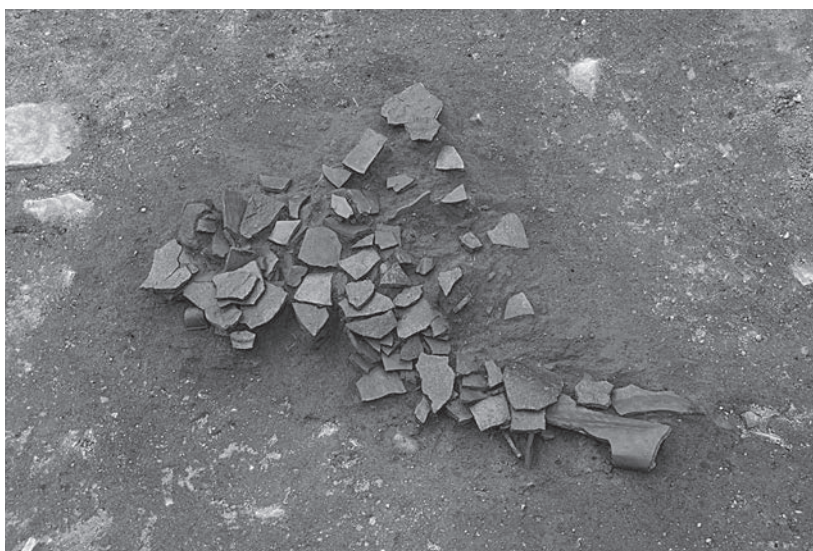


2 土器溜 S X34 (西から)



3 土器溜 S X41 (東から)





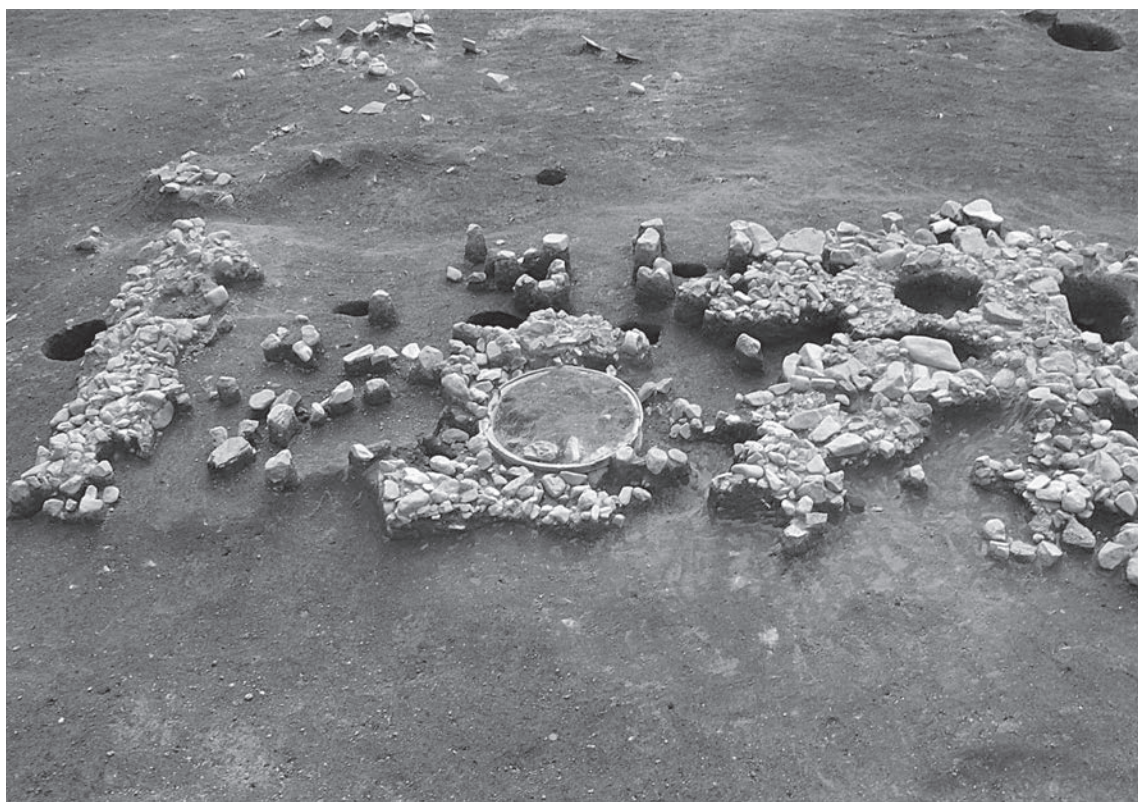
1 陶器溜 S X10 (南から)



2 S X13埋甕・土器溜
(南から)



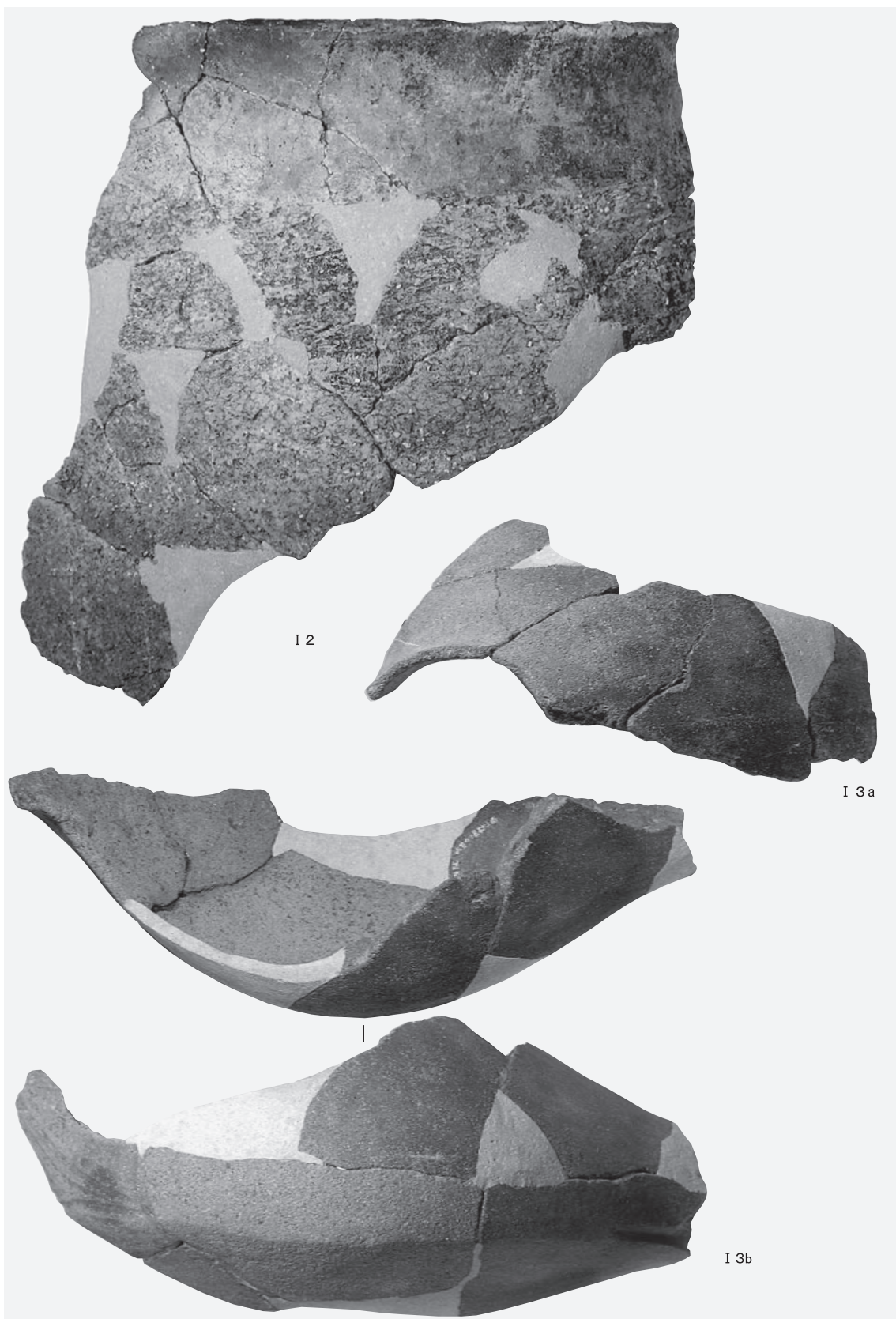
3 S X13埋甕 (東から)



1 S X13埋甕・石敷（東から）



2 集石S X21（西から）



縄文土器（I 2 晩期，I 3 後晩期）



弥生土器 (I 17前期, I 19~ I 21中期 (方形周溝墓出土), I 22中期 (S D 15出土))



8号墳出土土器(1)(I 25~I 35須恵器)



I 39

I 40

8号墳出土土器(2)(I39・I40土師器)



8号墳出土埴輪(1)(I 42人物埴輪)



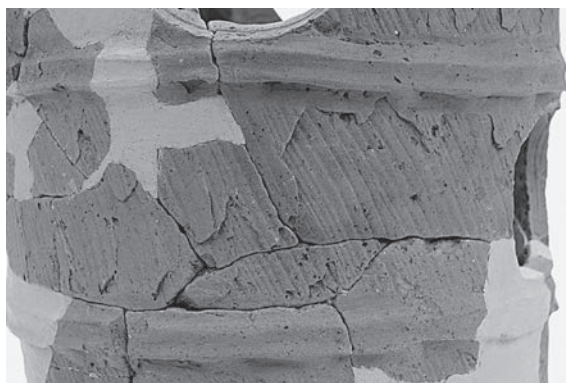
8号墳出土埴輪(2)(I44家形埴輪)



8号墳出土埴輪(3)(I43馬形埴輪)



8号墳出土埴輪(4)(I 45~I 47・円筒埴輪, I 50朝顔形埴輪)

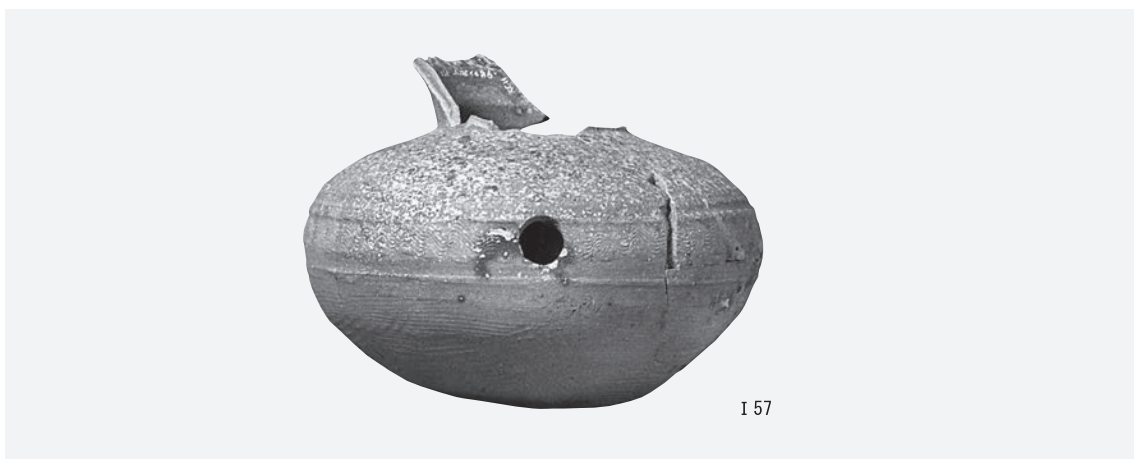


1 8号墳出土埴輪(5)(I 48・I 49・I 51 円筒埴輪)

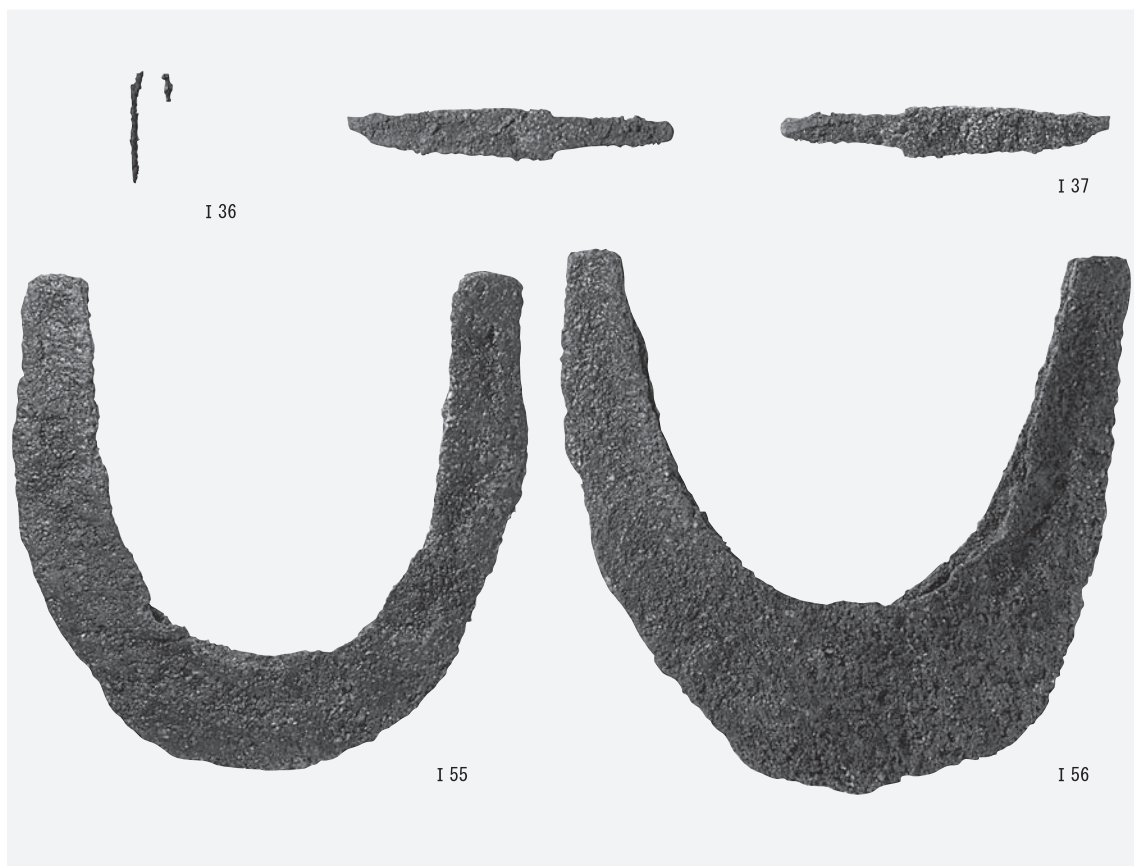
2 8号墳円筒埴輪細部(上: I 48最上段刻線, 下: I 51外面ハケメ 縮尺不同)



8号墳形象埴輪細部（1：I42人物頭部，2：I43馬左顔面，3：I43馬左側面障泥，4：I43馬右腹面，5：I43馬右側面鞍，6：I43馬右側面尻繫，7：I44家B面入母屋破風，8：I44家D面入母屋破風縮尺不同）



9号墳出土土器（I 52土師器，I 53・I 54・I 57須恵器）



8・9号墳出土鉄器（I 36針状鉄製品，I 37刀子，I 55・I 56U字形刃先）
上段：保存処理後 下段：X線写真



|

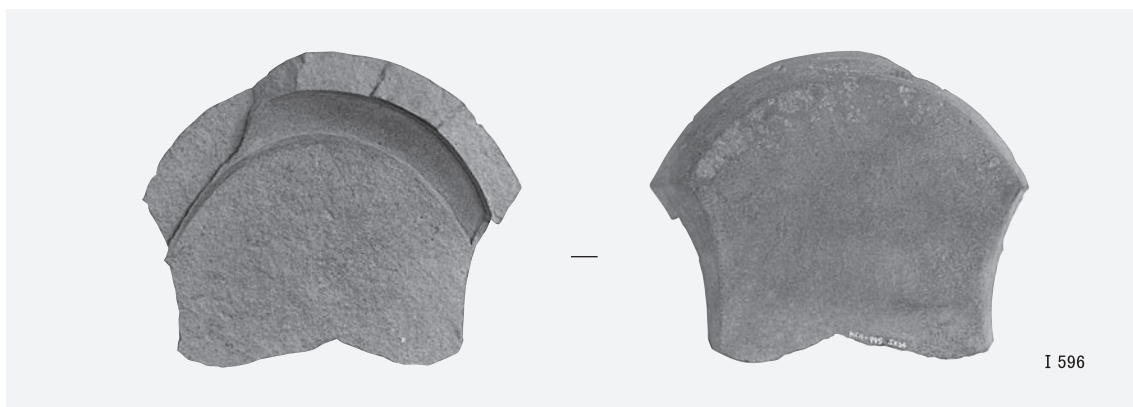


I 99



I 279

SE 9 出土遺物 (I 99 華南三彩), SE 7 出土遺物 (I 279 青磁)



S X24出土遺物（I 596石製品）縮尺1/3，茶褐色土落ち込み出土遺物（I 718・I 719青磁），茶褐色土出土遺物（I 744古瀬戸）



I 847



I 851



I 848



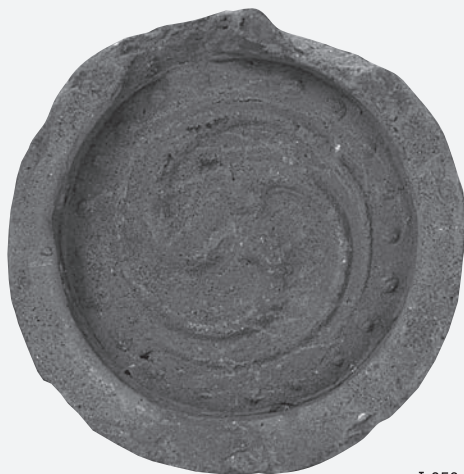
I 852



I 849



I 850



I 853



軒丸瓦 (I 854), 軒平瓦 (I 855~ I 859 · I 864 · I 867)



1 表土除去後全景 (北から)



2 X=870東西畔の層位(南から)



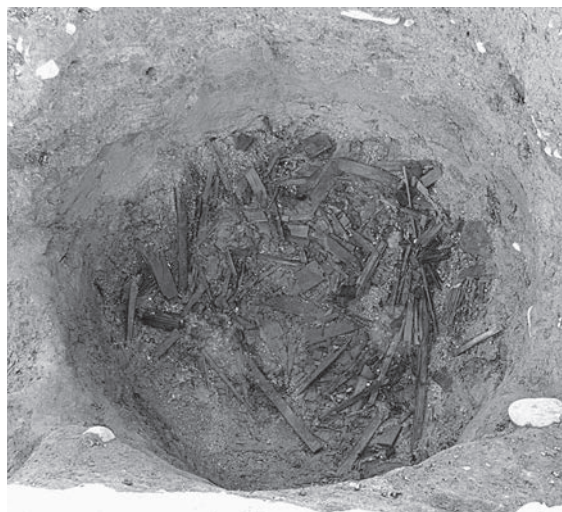
3 黒灰色土・黒灰色土II 掘削後全景 (北から)



4 溝 S D128 (西から)



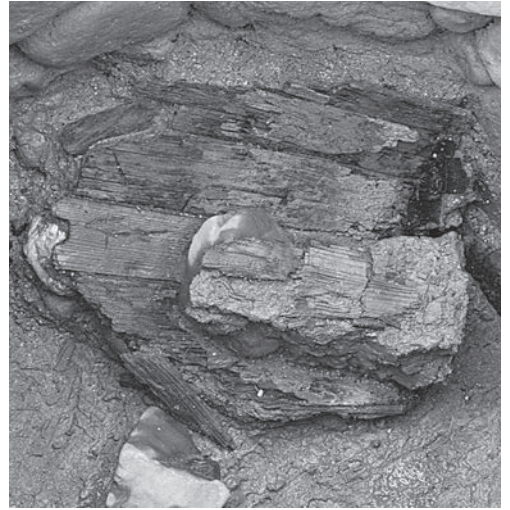
5 井戸 S E 1 (北から)



6 土坑 S E 2 (東から)



1 井戸SE3 (北から)



2 井戸SE3出土の木桶 (南から)



3 胞衣壺S X 3・4 (東から)



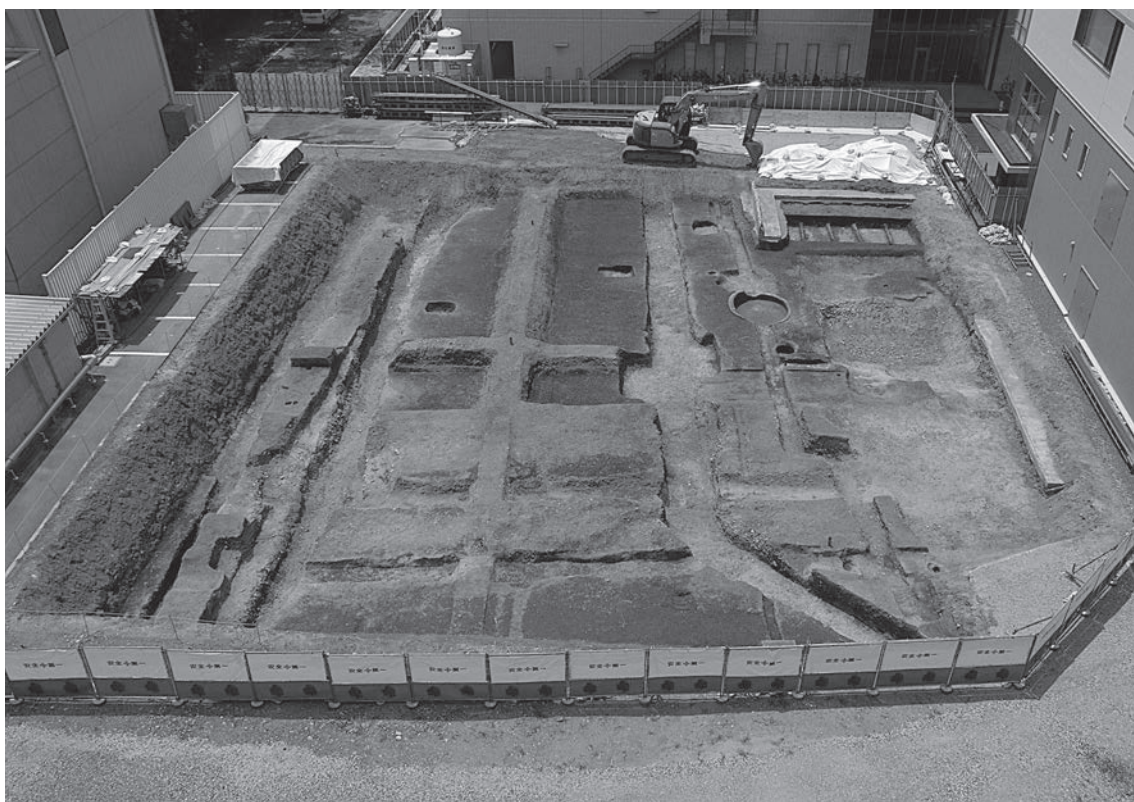
4 井戸SE8 (西から)



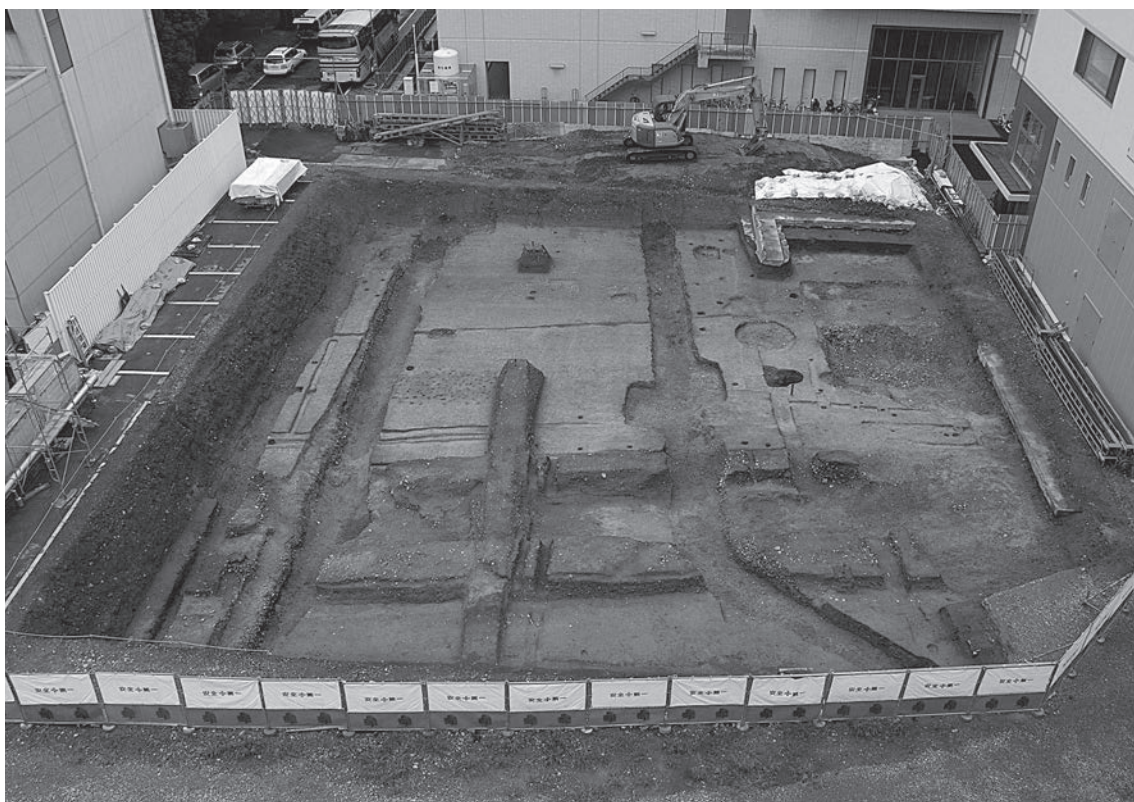
5 瓦溜S X 13 (東から)



6 土器溜S X 11 (北から)



1 灰褐色土上面，調査区全景（北から）



2 淡褐色土上面，調査区全景（北から）



1 SR1上層, SD3上層掘削後(東から)



2 SF2石列・SF3(東から)



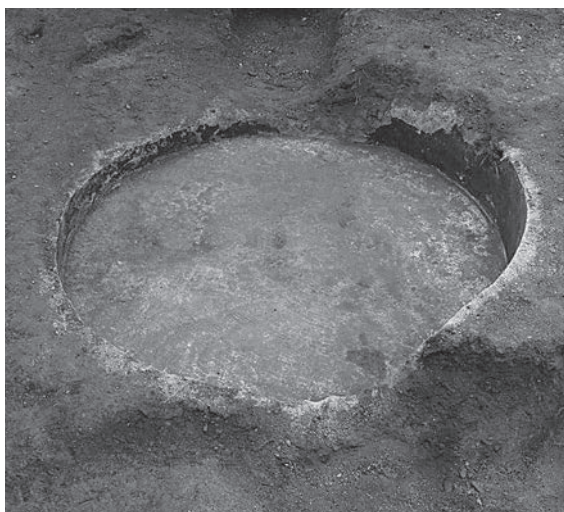
3 SD27検出状況(西から)



1 井戸SE1 (東から)



2 井戸SE1細部 (東から)



3 野壺SE2 (南から)



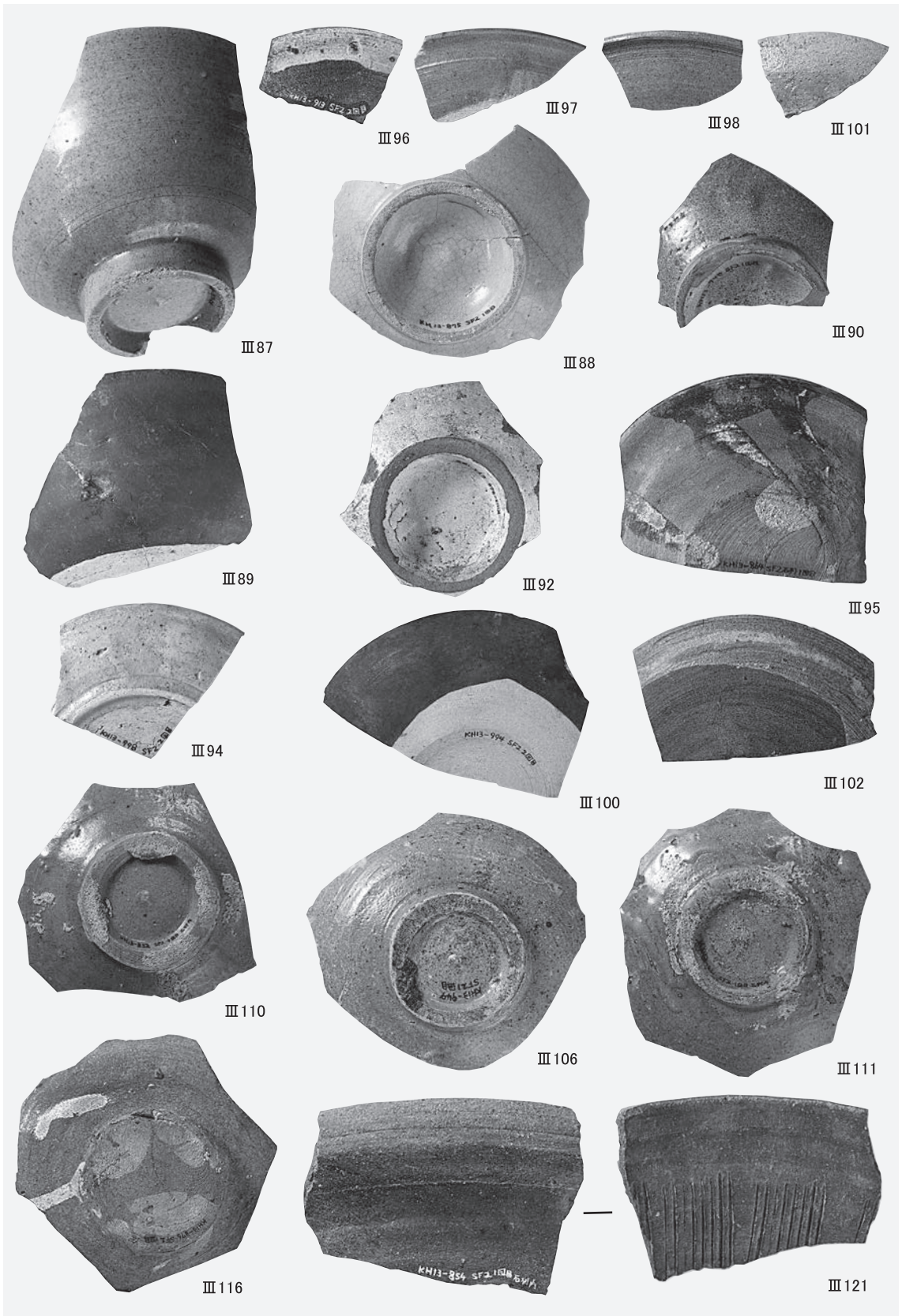
4 溝SD1・SD2 (南から)



5 溝SD5下層上面の集石



6 水路SR1南旧盛土基底部集石



道路S F 2 出土遺物 (Ⅲ87~90・Ⅲ92・Ⅲ94~Ⅲ98・Ⅲ100~Ⅲ102・Ⅲ106・Ⅲ110・Ⅲ111・Ⅲ116・Ⅲ121)



1 黒褐色土上面（東から）



2 集石S X 1（東から）



1 調査区北半掘りあげ後全景（西から）



2 調査区南半掘りあげ後全景（西から）



3 SE 1 底面柱穴検出状況（北から）



4 SE 2 井筒確認状況（北から）



5 調査区北壁集石S X 1（南から）



6 調査区北壁土器溜S X 2（南から）



1 東調査区, 表土掘削後全景 (西から)



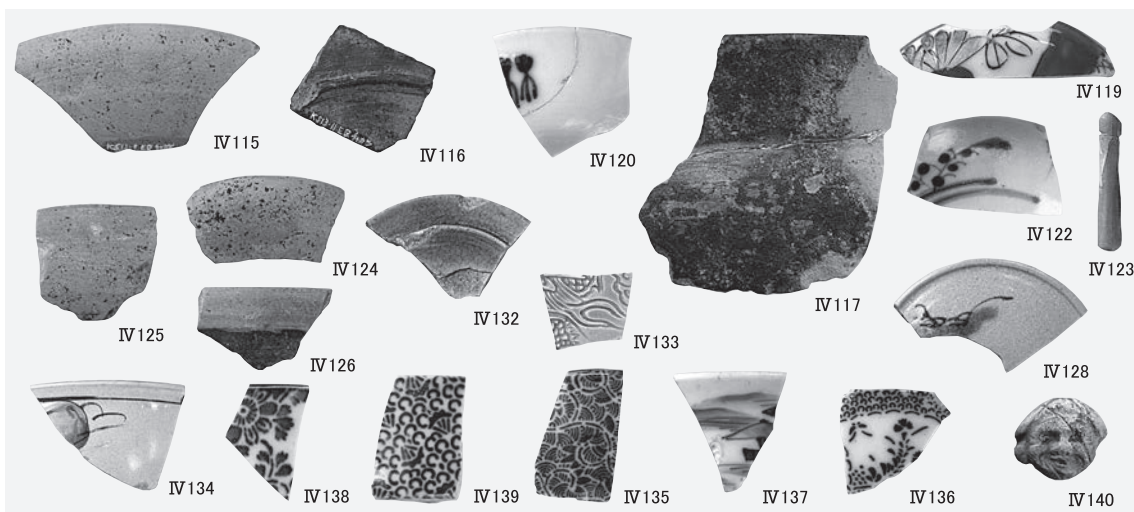
2 西調査区, 表土掘削後全景 (東から)



3 西調査区, 黄砂上面検出の集石 (西から)



4 西調査区, 黄砂掘削後全景 (東から)



5 東調査区出土遺物 (IV115~IV117土師器, IV119・IV120・IV122磁器, IV123石製品), 西調査区出土遺物 (IV124~IV126土師器, IV128・IV132・IV133陶器, IV134~IV139磁器, IV140土製品)

2015年3月31日 発行

京都大学構内遺跡調査研究年報
2013年度

編集 京都大学文化財総合研究センター
発行 京都市左京区吉田本町
印刷 三星商事印刷株式会社
製本 京都市中京区新町通竹屋町下ル弁財天町300

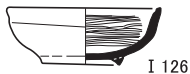
本文 190 頁 13 行目

(誤) III553 は陶器*燭 → (正) III553 は陶器乗燭

挿図 44 頁 図 20



67 頁 図 33



195 頁 図 103



52 頁 図 25

